

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

VI

1986年度大阪市長吉瓜破地区
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1993.3

財団法人 大阪市文化財協会

長原・瓜破遺跡発掘調査報告 VI

1993. 3

古墳時代中～後期の遺構として集落・古墳などがあり、集落内の井戸から須恵器製作に係わる当て具・叩き板といった木製工具類が出土したことは注目される。また、朝鮮半島からの渡来人の存在をうかがわせる算盤玉形をした土製紡錘車の出土もあった。長原古墳群で2例目の武人埴輪となる150号墳の埴輪は、甲冑に別作りの顔を取付けた特異な形態であった。飛鳥・奈良時代の水田畦畔や灌漑用水路についても新たな知見を得た。平安時代の屋敷地とそれを取巻く周囲の状況、土器埋納遺構の存在も知られた。鎌倉時代の屋敷地を取囲む一町四方の区画溝についても報告している。

遺構と遺物の検討では、当遺跡の古墳時代集落、近畿地方出土の算盤玉形紡錘車、飛鳥～平安時代の土器埋納遺構について考察した。

* 主要遺構一覧表……pp.10-12

* 索引[]……………巻末

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

VI

1986 年度大阪市長吉瓜破地区
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1993.3

財団法人 大阪市文化財協会



古墳時代の木製品（長原遺跡西地区SE01出土）

長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅵ 正誤表

頁	行	誤	正
iv (巻頭)	右段33	室町時代以降の遺構 (北から)	室町時代以降の遺構 (南東から)
23	7	厚さ <u>1.4</u> cm	厚さ 1.5cm
45	15～16の間	(文責欠落)	(京嶋)
114	26	仏飯器と思われる。	仏飯器と思われる。
140	28	I 区にある土壌である長原 4Bi 層内	I 区にある土壌である。長原 4Bi 層内
220	4	SD35は 4B - 1層下面	SD35は 4B - 2層下面
254	12	桁行 3 間が 9 棟	桁行 3 間が 10 棟
271	表18	協会1993 東南地区SK01 <u>95×60×80</u>	協会1993 東南地区SK01 48×30×40
図版33	上段キャプション	(欠落)	ナイフ形石器・翼状剥片

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

VI

1986年度大阪市長吉瓜破地区
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1993.3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

長原遺跡の発掘は1974年から本格的に開始された。土地区画整理事業に係わっては、1981年から調査が行われ、現在もお継続されている。例年、数千㎡にのぼる発掘調査がこの遺跡内で行われており、ひとつの遺跡において、毎年かなりの面積の調査が続けられていることに、発掘史上の一特色があるといえよう。

本書は86年度の同事業関連の調査報告である。興味深いものに、古墳時代の井戸から発見された須恵器製作に係わる木製工具があった。これまで、この時代の住まいや墓の調査は行われていたが、これは当時の居住者がどのような生産活動に関与していたのかを知る上で貴重な資料である。また、きわめて個性の強い武人埴輪が出土していることも、本年度の目新しい成果である。その他にも、飛鳥・奈良時代の水田、平安・鎌倉時代の屋敷地などに関して新たな知見を得ることができた。

昨今、考古学に対する一般市民の関心は、非常に高まってきている。そうした中で、これまでの調査の蓄積を、いかに整理し、活用していくかは重要な課題である。継続して発掘調査が実施されているという特性をいかし、こうした課題に取り組んで行きたい。

財団法人 大阪市文化財協会

理事長 佐治 敬三

例 言

一、本書は大阪市都市整備局長吉川敏雄氏面談事務所施行の大阪市平野区における1986年度土地区画整理事業に伴う発掘調査の報告書である。

一、発掘調査は財団法人大阪市文化財協会調査課課長永島暉臣氏の指揮のもとに、同課課長代理木原克司（現鳴門教育大学助教授）、同課調査員の藤田幸夫・積山洋・黒田慶一・高井健司・櫻井久之、嘱託調査員の山崎栄が行った。各調査の面積・期間などは、第1章第1節の一覧表（表1）に記した。

一、発掘調査と報告書作製の費用は、大阪市都市整備局および同市水道局・同市下水道局・日本電信電話株式会社・関西電力株式会社・大阪ガス株式会社が負担した。

一、本書は当協会調査課課長永島の指揮のもと、同課調査員京嶋覚・積山・黒田・伊藤幸司・櫻井・清水和明・松本百合子・田島富恵美・久保和士・細川富貴子が討議の上、分担して執筆した。執筆者名はそれぞれの担当箇所の末尾に記して文責を明らかにした。また、巻末の英文要旨の作成は同課調査員岡村勝行が行い、オーストラリア・クイーンズランド大学学生Robert Condon氏の協力を得た。本書の編集は、各執筆者の協力を得て、櫻井が行った。なお、以下の方々や諸機関から有益なご教示・資料提供のご高配を賜った。記して感謝する次第である（機関名・個人名はそれぞれ50音順、個人名は敬称略）。

大阪市立自然史博物館・大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会・財団法人大阪文化財センター・奈良国立文化財研究所・八尾市教育委員会

石井克巳・江浦洋・関戸哲紀・高正龍・十河良和・柳野博幸・辻本和美・吉田野乃・米田敏幸

一、遺物の写真撮影は徳永國治氏に委託した。遺構は当協会調査員・嘱託調査員が撮影したものである。

一、発掘調査で得られた出土遺物その他の資料は、当面、当協会が保管している。

一、本書の印刷に当り、本文・例言・目次等の版下作製は当協会で行い、その版下出力を有限会社正巧堂で行った。

一、発掘調査および資料整理・図表作成などには多くの補助員諸氏が参画した。深謝の意を表したい。

凡 例

- 一、遺構名の表記は、塙・掘 (SA)、掘立柱建物・堅穴住居 (SB)、溝 (SD)、井戸 (SE)、土塙 (SK)、ピット (SP)、畦畔 (SR) の記号の後に、本書独自に各調査地区ごとの通し番号を順に付した。ただし、古墳に関しては、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴに整理した番号を用いた。
- 一、地層名は、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲの第Ⅱ章に記した長原遺跡標準層序 (別表1) に対比したもので、長原Ⅰ層・・・と表記する。また、遺構検出面の認定・呼称は『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲに基づき、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲp.32の補足に従う。
- 一、本書で頻繁に用いた土器編年は次の通りである。煩雑さを避けるため、これら引用・参考文献をその都度本文中で提示することは割愛した。〔佐藤隆1992〕・〔鈴木秀典1982〕は長原遺跡の土器について検討したもので、その年代観は別表3・4に示す通りである。
 - ・弥生土器：〔佐原真1968〕
 - ・古墳時代の須恵器：〔田辺昭三1981〕
 - ・飛鳥・奈良時代の土器：〔奈良国立文化財研究所1976〕・〔西弘海1978〕・〔古代の土器研究会1992〕
 - ・平安時代の土器：〔佐藤隆1992〕
 - ・瓦器類：〔鈴木秀典1982〕
- 一、調査時の測量は大阪市都市整備局設置の基準点・水準点を用い、国土平面直角座標 (第Ⅵ系) の値に換算した。水準値はT.P.値 (東京湾平均海面値) を用いた (本文中では、標高またはTP±と略称)。
- 一、主要遺構の一覧表を本文pp.10-12に掲載した。
- 一、50音別索引、引用・参考文献を巻末に掲げた。

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 調査の経過と概要	1
第1節 調査の経過	1
1) 土地区画整理事業と発掘調査	櫻井・1
2) 調査の経過	京嶋・積山・黒田・櫻井・3
第2節 調査の概要	櫻井・10
1) 長原遺跡西地区	10
2) 長原遺跡中央地区	11
3) 長原遺跡南地区	11
4) 長原遺跡東南地区	12
第Ⅱ章 調査の結果	13
第1節 長原遺跡西地区の調査（NG85-80、NG86-8・41次調査）	13
1) 層序と各層の出土遺物	京嶋・松本・久保・櫻井・13
2) 古墳時代の遺構	京嶋・34
3) 古墳時代の遺物	京嶋・久保・伊藤・41
4) 鎌倉時代の遺構	櫻井・56
5) 小結	京嶋・57
第2節 長原遺跡中央地区の調査（NG86-36・60①・60②・90次調査）	59
1) 層序と各層の出土遺物	積山・櫻井・59
2) 弥生時代以前の遺構と遺物	清水・黒田・櫻井・66
3) 古墳時代の遺構と遺物	積山・黒田・久保・櫻井・74
4) 飛鳥・奈良時代の遺構と遺物	積山・黒田・櫻井・87

5) 平安時代の遺構と遺物	黒田・久保・櫻井	92
6) 鎌倉・室町時代の遺構	黒田・櫻井	107
7) 近世の遺構	積山	108
8) 小結	積山・櫻井	110
第3節 長原遺跡南地区の調査 (NG86-28・43①・43②、NG90-36次調査)		112
1) 層序と各層の出土遺物	田島・櫻井	112
2) 古墳時代の遺構と遺物	櫻井	121
3) 飛鳥・奈良時代の遺構	櫻井	128
4) 平安時代の遺構と遺物	櫻井	135
5) 鎌倉時代の遺構と遺物	櫻井	139
6) 室町時代以降の遺構	櫻井	141
7) 小結	櫻井	142
第4節 長原遺跡東南地区の調査 (NG86-54①・54②・58①・58②・70次調査)		145
1) 層序と各層の出土遺物	積山・久保・櫻井	145
2) 弥生時代以前の遺構と遺物	積山・清水・細川・櫻井	156
3) 古墳時代の遺構と遺物	積山・櫻井	164
4) 飛鳥時代の遺構と遺物	積山・櫻井	198
5) 奈良時代の遺構	積山・櫻井	204
6) 平安時代の遺構と遺物	積山・櫻井	209
7) 鎌倉時代の遺構と遺物	積山・櫻井	217
8) 室町時代の遺構	積山	234
9) 小結	積山・櫻井	234
第Ⅲ章 遺構と遺物の検討		241
第1節 5・6世紀の集落構成の復元とその特質	京嶋	241
1) 建築遺構と居住に関連する遺構		241
2) 5・6世紀の集落構成の変遷		249
3) 建築遺構の検討と用途		253
4) 集落構成の特質		255
第2節 古墳時代の算盤玉形紡錘車	櫻井	259
1) 既往の研究		259
2) 近畿の事例		260

3) 他地域の事例	263
4) 検討	264
5) まとめ	267
第3節 長原遺跡の土器埋納遺構	櫻井 268
1) 土器埋納遺構の捉え方	268
2) 各類型の内容	270
3) 各類型の分布状況	274
4) 埋納の目的	278
5) まとめ	284
別表	287
引用・参考文献	291

あとがき

索引

英文要旨

報告書抄録

原 色 図 版

1 長原西・東南地区の遺構

上：長原西地区 古墳時代集落（南から）
下：長原東南地区 150号墳（北から）

2 古墳時代の遺物

上：長原西地区 SE01出土須恵器
下：152号墳出土埴輪

図 版 目 次

1 長原西地区 古墳時代の遺構（一）

左上：Ⅱb区 古墳時代の遺構全景（北から）
右上：Ⅰ区 古墳時代の遺構全景（南から）
左下：Ⅰ区 SE01（南から）
右下：Ⅰ区 SK04（西から）

2 長原西地区 古墳時代の遺構（二）

上：Ⅰ区 SB07・08周辺（西から）
下：Ⅰ区 SB01～04周辺（西から）

3 長原中央地区 弥生・古墳時代の遺構

上：Ⅰ区 SK11～20（東から）
左下：Ⅲ区 SK01～08、SD02（北から）
右下：Ⅲ区 SK06（西から）

4 153号墳とSD13

左上：153号墳（東から）
右上：153号墳墳丘上遺物出土状況
下：153号墳墳丘東裾およびSD13断面（北から）

5 長原中央地区 古墳時代の遺構

上：Ⅳ区 SK21（北から）
中：Ⅳ区 SK23（南から）
下：Ⅳ区 西調査区の遺構（南から）

6 長原中央地区 Ⅱ区南壁断面・SD09周辺

上：Ⅱ区 南壁断面 東調査区西端から東へ8m付近
下：Ⅱ区 SD09周辺（東から）

7 長原中央地区 奈良時代の遺構

上：Ⅱ区西調査区 長原6Ai層上面水田（東から）

下：Ⅳ区西調査区 長原6Ai層上面検出遺構

8 長原中央地区 平安時代の遺構（一）

左上：Ⅳ区 SB05周辺（西から）
右上：Ⅲ区 SB01周辺（北から）
下：Ⅳ区 SE02（西から）

9 長原中央地区 平安時代の遺構（二）

上：Ⅳ区 SK27（北から）
中：Ⅲ区 土器埋納遺構1・2（西から）
下：Ⅳ区 SE01（南から）

10 143号墳とSD01・02

上：143号墳南周溝とSD01・02（東から）
下：143号墳墳丘（北から）

11 145・146号墳

左上：146号墳（南から）
右上：145号墳（北から）
下：146号墳墳丘とSX01（東から）

12 長原南地区 飛鳥・奈良時代の遺構

上：Ⅲ区 SD03・04（東から）
下：Ⅰ区 SD07（南から）

13 長原南地区 奈良時代の遺構

左上：Ⅳ区南半部 長原6Ai層上面水田（北から）
右上：Ⅲ区 長原6Ai層上面水田（東から）
下：Ⅳ区 SD13断面（東から）

14 長原南地区 平安時代以降の遺構

左上：Ⅳ区 SE01・SB03周辺（南から）
右上：Ⅳ区 SB01・02周辺（北から）
下：Ⅰ区 室町時代以降の遺構（北から）

- 15 長原東南地区 弥生・古墳時代の溝
上：Ⅳ区 SD01断面（北東から）
下：Ⅳ区 SD02・03断面（北西から）
- 16 長原東南地区 古墳時代の溝
上：Ⅲ区 SD03竈付朝顔形埴輪出土状況（東から）
中：Ⅲ区 SD03土師器出土状況（東から）
下：Ⅲ区 SD04遺物出土状況（南東から）
- 17 147・148号墳
上：147号墳（後方）と148号墳（南から）
下：147号墳（南から）
- 18 148・149号墳
上：148号墳（東から）
下：149号墳（西から）
- 19 150・151号墳
上：150号墳（手前）と151号墳（北から）
下：151号墳（南から）
- 20 150・152号墳
上：150号墳墳丘南辺遺物出土状況（北から）
下：152号墳北東周溝内遺物出土状況（北から）
- 21 160・162号墳 土器埋納ピット
上：160号墳西周溝（北から）
中：土器埋納ピットSP01（東から）
下：162号墳南周溝（南から）
- 22 163号墳
上：163号墳東周溝（南から）
中：163号墳西周溝（南から）
下：163号墳（南西から）
- 23 長原東南地区 飛鳥・奈良時代の遺構（一）
上：Ⅰ区 SD07断面（東から）
中：Ⅱ区 SD18断面（南から）
下：Ⅱ区 SD17（北西から）
- 24 長原東南地区 飛鳥・奈良時代の遺構（二）
左上：Ⅳ区 SR13～15・17・18（東から）
右上：Ⅳ区 SR32～34・39（東から）
下：Ⅰ区 SR03（北東から）
- 25 長原東南地区 平安時代の遺構（一）
左上：Ⅰ区 SB01・SE01・SD31（南から）
右上：Ⅲ区 SB04周辺（北から）
下：Ⅱ区 SB04北部（東から）
- 26 長原東南地区 平安時代の遺構（二）
上：Ⅱ区 土器埋納遺構SP19（東から）
中：Ⅰ区 SP07柱根（東から）
下：Ⅰ区 SE01井戸側検出状況（東から）
- 27 長原東南地区 鎌倉時代の遺構（一）
左上：Ⅳ区西半部 遺構検出状況（東から）
右上：Ⅳ区東半部 遺構検出状況（東から）
下：Ⅳ区 SD41断面（北から）
- 28 長原東南地区 鎌倉時代の遺構（二）
上：Ⅲ区 SD39（北東から）
下：Ⅲ区 SD39断面（東から）
- 29 長原東南地区 鎌倉時代の遺構（三）
上：Ⅳ区 SE04（西から）
中：Ⅳ区 SK03遺物出土状況（北西から）
下：Ⅲ区 SK06（東から）
- 30 長原東南地区 平安・鎌倉時代の遺構
左上：Ⅰ区南半部 SD30と4B-5層下面小溝群（北から）
右上：Ⅰ区南半部 4B-1層下面小溝群（南から）
左下：Ⅱ区西半部 4B-4層下面小溝群（西から）
右下：Ⅱ区西半部 4B-3層下面小溝群（西から）
- 31 長原西地区 各層出土遺物
長原4B層、長原7層
- 32 長原西地区 Ⅰ区石器遺物（一）
上：石鏃・クサビ・敲石
下：ナイフ形石器
- 33 長原西地区 Ⅰ区石器遺物（二）
上：ナイフ形石器・翼状剥片
下：石核
- 34 長原西地区 Ⅰ区石器遺物（三）
上：石核
下：調整剥片

- 35 長原西地区 I 区石器遺物 (四)
上:調整剥片・横長剥片
下:調整剥片・その他の剥片
- 36 長原西地区 I 区石器遺物 (五)
上:縦長剥片・その他の剥片
下:縦長剥片
- 37 長原西地区 II 区石器遺物 (一)
上:石鏃・石鏃・ナイフ形石器・クサビ・異状剥片・その他の剥片
下:横長剥片・その他の剥片
- 38 長原西地区 II 区石器遺物 (二)・動物遺体
上:石核
下:I 区SE01、II 区長原 4B 層、I 区SD01
- 39 長原西地区 古墳時代型穴住居・柱穴出土の遺物
SB01、SB03、柱穴
- 40 長原西地区 SE01 出土の遺物 (一)
土師器・須恵器
- 41 長原西地区 SE01 出土の遺物 (二)
須恵器・石製品・輪羽口
- 42 長原西地区 SE01 出土木製品 (一)
当て具・叩き板・木鏃・柄
- 43 長原西地区 SB01 出土木製品 (二)
横杵・その他
- 44 長原西地区 古墳時代土壇出土の遺物 (一)
SK01、SK02、SK03
- 45 長原西地区 古墳時代土壇出土の遺物 (二)
SK04、SK06
- 46 長原西地区 古墳時代溝出土の遺物
SD01、SD04、SD05、SD06、SD17
- 47 長原中央地区 各層出土遺物
長原 5 層、長原 6Bi 層、長原 9 層
- 48 長原中央地区 弥生・奈良・平安時代の遺物
長原 6Bi 層、SK04、SK06、SD13、土師埴
納遺構 1、土器埋納遺構 2
- 49 長原中央地区 石器遺物
上:ナイフ形石器・クサビに関連する剥片・横
長剥片・石鏃
下:二次加工のある剥片・その他の剥片
- 50 153号墳出土遺物 (一)
土師器・須恵器
- 51 153号墳出土遺物 (二)
上:須恵器甕
下:円筒埴輪
- 52 長原中央地区 古墳時代遺構出土の遺物 (一)
SK09、落込み 2
- 53 長原中央地区 古墳時代遺構出土の遺物 (二)
SK21、SK23、SD03、SD05
- 54 長原中央地区 平安時代遺構出土の遺物 (一)
SP29、SE01、SE02
- 55 長原中央地区 平安時代遺構出土の遺物 (二)
SK24、SK25、SK26、SK27、SD21
- 56 長原南地区 各層出土遺物 (一)
長原 2 層、長原 4A 層、長原 4B 層、長原 5 層
- 57 長原南地区 各層出土遺物 (二)・石器遺物 (一)
上:長原 4B 層、長原 5 層、長原 6A 層
下:石鏃・スクレイパー・クサビ・その他
- 58 長原南地区 石器遺物 (二)
上:クサビに関連する剥片・横長剥片
左下:石核・クサビ
右下:原礫・敲石
- 59 146号墳出土遺物
須恵器・円筒埴輪
- 60 長原東南地区 各層出土遺物 (一)
長原 2・3 層、長原 4B 層
- 61 長原東南地区 各層出土遺物 (二)
長原 5 層、長原 6Ai 層、長原 7A 層、
長原 7B 層、長原 8A 層
- 62 長原東南地区 各層出土遺物 (三)
上:長原 7A 層出土 横輪
下:長原 6Ai 層出土 下駄
- 63 長原東南地区 石器遺物 (一)
上:石鏃
下:石鏃・クサビ
- 64 長原東南地区 石器遺物 (二)
上:石斧
下:石核

- 65 長原東南地区 古墳時代溝出土の遺物 (一)
SD03、SD04
- 66 長原東南地区 古墳時代溝出土の遺物 (二)
上: SD03、SD04
下: SD03出土 埴付朝顔形埴輪
- 67 147・149号墳出土遺物
147号埴、149号埴
- 68 150号墳出土遺物 (一)
須恵器
- 69 150号墳出土遺物 (二)
土師器・須恵器
- 70 150号墳出土遺物 (三)
上: 円筒埴輪・朝顔形埴輪
下: 家形埴輪
- 71 150号墳出土遺物 (四)
円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪
- 72 150号墳出土遺物 (五)
上: 武人埴輪
下: 武人埴輪
- 73 152号墳出土遺物 (一)
土師器・須恵器
- 74 152号墳出土遺物 (二)
円筒埴輪
- 75 152号墳出土遺物 (三)
円筒埴輪・朝顔形埴輪
- 76 152号墳出土遺物 (四)
円筒埴輪・形象埴輪
- 77 160・161号墳出土遺物
上: 160号墳出土遺物
下: 161号墳出土遺物
- 78 160・161・162・163号墳出土遺物
160号埴、161号埴、162号埴、163号埴
- 79 148・149・151・161・162号墳出土遺物
148号埴、149号埴、151号埴、161号埴、162号埴
- 80 長原東南地区 平安時代遺構出土の遺物
SP10、SP19、SP29、SE02
- 81 長原東南地区 鎌倉時代遺構出土の遺物 (一)
SE04、SE05、SE08、SD41、SD42
- 82 長原東南地区 鎌倉時代遺構出土の遺物 (二)
SE04、SK06
- 83 長原東南地区 鎌倉時代遺構出土の遺物 (三)
SK06出土 土師器・瓦器・瓦質土器・磁器・石鍋
- 84 長原東南地区 鎌倉時代遺構出土の遺物 (四)
SK03、SK06、SK08、SK09

挿 図 目 次

- 図1 土地区画整理事業施行範囲と地区区分……………2
- 図2 長原遺跡西地区の調査位置図……………3
- 図3 長原遺跡中央地区の調査位置図……………4
- 図4 長原遺跡南地区の調査位置図……………5
- 図5 165号墳と周辺の古墳……………6
- 図6 NG86-30次調査の遺構……………6
- 図7 NG86-30・85次調査出土遺物……………7
- 図8 長原遺跡東南地区の調査位置図……………8
- 図9 西地区の調査区分……………13
- 図10 西地区Ⅰ区の層序……………14
- 図11 西地区Ⅱb区の層序……………15
- 図12 西地区各層の出土遺物……………16
- 図13 土製品・金属製品……………18
- 図14 石鏃・クサビ・蔽石……………19
- 図15 ナイフ形石器……………21
- 図16 翼状剥片・石核……………24
- 図17 石核……………25
- 図18 調整剥片……………27
- 図19 調整剥片・その他の剥片……………28
- 図20 縦長剥片……………29
- 図21 石鏃・石鏃・ナイフ形石器……………30
- 図22 クサビ・翼状剥片・その他の剥片……………31

図23 石核	33	図61 153・154号墳平・断面図	76
図24 I区検出土遺構	35	図62 153号墳出土遺物(1)	77
図25 SB01・03・04平・断面図	36	図63 153号墳出土遺物(2)	78
図26 SB02平・断面図	36	図64 I区古墳時代遺構	80
図27 SB05平・断面図	37	図65 SK09断面図	80
図28 SB06平・断面図	37	図66 SK10とその上層断面図	80
図29 SB07平・断面図	38	図67 SK11・12断面図	80
図30 SB08平・断面図	38	図68 SK09・落込み2出土遺物	81
図31 SB09平・断面図	38	図69 IV区古墳時代遺構	83
図32 SE01平・断面図	39	図70 SK23平・断面図	83
図33 II区古墳時代遺構	40	図71 SK21・22・23出土遺物	84
図34 竪穴住居出土遺物	42	図72 SD03・05出土遺物	86
図35 柱穴出土遺物	43	図73 SD07・08断面図	86
図36 SE01出土遺物	44	図74 I区长原6Bi層上面および下面検出土遺構	87
図37 SE01出土加工石	45	図75 SD09・13・14断面図	88
図38 SE01出土木製品(1)	47	図76 SD13出土土器	88
図39 SE01出土木製品(2)	48	図77 IV区西調査区奈良時代遺構	89
図40 土城出土遺物(1)	50	図78 SD15・17・18、SP01断面図	89
図41 土城出土遺物(2)	51	図79 I区长原6Ai層上面検出土遺構	90
図42 SK02出土ガラス玉	52	図80 II・IV区长原6Ai層上面検出土遺構	91
図43 SK01出土製塩土器	52	図81 III区长原6Bi・6Ai層上面検出土遺構	92
図44 SD17出土遺物	52	図82 中央地区奈良時代の遺構	93
図45 溝出土遺物	53	図83 中央地区平安～室町時代の遺構	94
図46 SD05出土滑石製有孔円板	54	図84 III区平安時代遺構	95
図47 IIb・III区水田遺構	56	図85 SB01平・断面図	96
図48 中央地区の調査区分	59	図86 SB02・03平・断面図	96
図49 中央地区I区の層序	60	図87 IV区平安時代遺構	97
図50 中央地区II・IV区の層序	61	図88 SB04平・断面図	97
図51 中央地区III区の層序	63	図89 SB05平・断面図	98
図52 中央地区各層の出土遺物	64	図90 SA01平・断面図	98
図53 III区出土 鉄器	65	図91 平安時代ビッド出土遺物	98
図54 IV区東調査区SD01・SK21平・断面図	66	図92 SE01・02出土遺物	100
図55 弥生時代群集土壌の分布	67	図93 SE01出土須恵器甕	101
図56 III区北端部土壌群と溝	68	図94 SE02平・断面図	102
図57 III区北端部土壌群およびSD02断面図	69	図95 SE03平・断面図	102
図58 SK04・06出土弥生土器	70	図96 SE03・SK24・25出土遺物	103
図59 中央地区の石器遺物	71	図97 SK26出土遺物	103
図60 中央地区古墳～奈良時代遺構	75	図98 SK27平・断面図	104

図99 SK27・28出土遺物	104	図137 東南地区の調査区分	145
図100 SD21断面図	105	図138 東南地区Ⅰ・Ⅱ区の層序	146
図101 SD21出土遺物	105	図139 東南地区Ⅲ・Ⅳ区の層序	148
図102 土器埋納遺構1・2出土遺物	107	図140 東南地区各層の出土遺物(1)	151
図103 Ⅱ区長原3層下面検出遺構	108	図141 東南地区各層の出土遺物(2)	153
図104 Ⅲ区長原4Biii層上面検出遺構	109	図142 東南地区各層の出土遺物(3)	154
図105 Ⅰ区長原2層下面検出遺構	109	図143 SD01の位置と方向	156
図106 南地区の調査区分	112	図144 SD01・02・03肩部断面図	157
図107 南地区Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ区の層序	113	図145 SK01出土土器	158
図108 南地区各層の出土遺物	115	図146 東南地区の石器遺物(1)	159
図109 南地区の石器遺物(1)	117	図147 東南地区の石器遺物(2)	161
図110 南地区の石器遺物(2)	119	図148 東南地区の石器遺物(3)	163
図111 南地区の古墳分布	122	図149 東南地区の石器遺物(4)	164
図112 Ⅰ・Ⅱ区古墳～奈良時代遺構	123	図150 東南地区古墳時代の遺構	165
図113 Ⅲ・Ⅳ区古墳～奈良時代遺構	123	図151 SD02・03断面図	166
図114 143号墳平・断面図	124	図152 SD03・04出土遺物	167
図115 145号墳平・断面図	125	図153 SD03出土土器付朝顔形埴輪	168
図116 146号墳平面図	126	図154 Ⅰ区弥生～飛鳥時代の遺構	169
図117 146号墳断面図	126	図155 147号墳平・断面図	170
図118 SK01平・断面図	126	図156 147号墳出土遺物	171
図119 146号墳出土遺物	127	図157 148号墳平・断面図	172
図120 飛鳥・奈良時代の南地区	129	図158 148号墳出土埴輪	172
図121 SD01・02断面図	130	図159 149号墳平・断面図	173
図122 SD01出土遺物	131	図160 149号墳周辺出土遺物	174
図123 SD03・04平・断面図	131	図161 150号墳平・断面図	175
図124 Ⅰ・Ⅱ区奈良時代遺構	132	図162 150号墳北周溝断面図	176
図125 SD07・09・10およびSR01断面図	133	図163 150号墳出土土師器	176
図126 Ⅲ・Ⅳ区奈良時代遺構	134	図164 150号墳出土須恵器	177
図127 Ⅳ区平安時代遺構	135	図165 150号墳出土円筒・朝顔形埴輪	178
図128 SB01・02平・断面図	136	図166 150号墳出土家形埴輪	179
図129 SB03平・断面図	137	図167 150号墳出土武人埴輪(1)	180
図130 柱穴およびSE01出土遺物	137	図168 150号墳出土武人埴輪(2)	181
図131 Ⅰ・Ⅱ区鎌倉時代遺構	138	図169 150号墳出土滑石製品	183
図132 SK01平・断面図	139	図170 151号墳北西周溝断面図	183
図133 SK01出土遺物	140	図171 151号墳平・断面図	184
図134 Ⅳ区鎌倉時代遺構	141	図172 151号墳出土遺物	185
図135 Ⅰ・Ⅱ区室町時代以降の遺構	142	図173 152号墳平・断面図	185
図136 7条4里32坪の状況	143	図174 152号墳出土土器	186

図175 152号墳出土円筒埴輪(1)	187	図211 SD39・40出土遺物	222
図176 152号墳出土円筒埴輪(2)	188	図212 SD41断面図	223
図177 152号墳出土円筒・朝顔形埴輪	189	図213 SD41出土遺物	223
図178 152号墳出土朝顔形埴輪	190	図214 SD42出土遺物	224
図179 152号墳出土家形・衣蓋形埴輪	191	図215 SK02出土瓦器	225
図180 V区古墳～奈良時代の遺構	193	図216 SK03～05出土遺物	226
図181 160号墳出土遺物	194	図217 SK06平・断面図	227
図182 161号墳出土遺物	195	図218 SK06出土土器(1)	228
図183 162号墳およびSP01出土遺物	197	図219 SK06出土土器(2)	229
図184 163号墳出土遺物	198	図220 SK06出土磁石	230
図185 164号墳出土埴輪	198	図221 SK06出土木鏝	230
図186 東南地区北部飛鳥・奈良時代の主要遺構	199	図222 SK07～09出土遺物	231
図187 SR01・SD07断面図	200	図223 II区鎌倉・室町時代の遺構	232
図188 I・II区飛鳥・奈良時代の遺構	202	図224 I区鎌倉・室町時代の遺構	233
図189 II・IV区飛鳥・奈良時代の遺構	203	図225 武人埴輪の比較	236
図190 東南地区北部平安時代の遺構	206	図226 製作方法の比較	236
図191 I・II区平安・鎌倉時代の遺構	207	図227 土師器羽釜の分類	239
図192 II・III・IV区平安・鎌倉時代の遺構	208	図228 各遺構の土師器羽釜の形態	239
図193 I区南部平安時代の遺構	209	図229 古墳時代の集落と長原古墳群	242
図194 SB01・02平・断面図	210	図230 D・H地点の建物群	247
図195 SB03平・断面図	210	図231 A地点の建物群	248
図196 SB04平・断面図	210	図232 集落と古墳群の変遷	251
図197 SB04・SP29出土遺物	211	図233 総柱建物と桁行3間以上の建物の割合	255
図198 SP19土器出土状況平面図	211	図234 長原遺跡周辺の算盤玉形紡錘車の出土状況	260
図199 ビット・溝出土遺物	211	図235 長原遺跡出土の算盤玉形紡錘車	261
図200 SE01平・断面図	213	図236 法量および重さの比較	266
図201 SE02・03平・断面図	213	図237 側面角度の状況	266
図202 SE02出土遺物	214	図238 類型別遺構規模の比較	269
図203 I区北端部平安・鎌倉時代の遺構	215	図239 土器埋納遺構の分類基準	272
図204 SD33の連続状況	216	図240 各類型の基本モデル	274
図205 SR40とその上層断面図	216	図241 飛鳥～奈良時代の土器埋納遺構	276
図206 東南地区平安・鎌倉時代の遺構	218	図242 平安時代I～III期の土器埋納遺構	277
図207 SE04出土遺物	219	図243 平安時代I～IV期の土器埋納遺構	278
図208 SE08平・断面図	219	図244 平安時代IV期の土器埋納遺構	278
図209 SE05～08出土遺物	220	図245 土器埋納遺構の変遷	280
図210 SD39・40平・断面図	222		

表 目 次

表 1 1986年度土地区画整理事業に伴う発掘調査一覧表	1	表10 東南地区出土遺物	150
表 2 長原遺跡西地区の主要遺構一覧	10	表11 東南地区石器遺物	160
表 3 長原遺跡中央地区の主要遺構一覧	10	表12 東南地区の古墳の時期	235
表 4 長原遺跡南地区の主要遺構一覧	11	表13 各遺構出土瓦器の時期	239
表 5 長原遺跡東南地区の主要遺構一覧	12	表14 古墳時代後半期土器の位置付け	250
表 6 古墳時代土曜出土の遺物	49	表15 古墳時代整穴住居一覧表	257
表 7 古墳時代溝出土の遺物	53	表16 古墳時代堀立柱建物一覧表	258
表 8 中央地区平安時代主要遺構の時期	111	表17 長原遺跡周辺出土の算盤玉形紡錘車	261
表 9 各遺物の出土層準	116	表18 長原遺跡の土器埋納遺構	271

写 真 目 次

写真 1 NG86-41次調査風景	3	写真10 SD05断面	85
写真 2 NG86-90次調査地	4	写真11 サメ類の脊椎骨	106
写真 3 NG86-28次調査地	5	写真12 鉄製鎌	152
写真 4 NG86-54①次調査地	9	写真13 土師器高杯の脚部裏面	152
写真 5 金属製品X線写真	18	写真14 SK01	157
写真 6 スラグ	45	写真15 SK01出土土器	158
写真 7 NG82-41次調査SE301ウマ出土状態	55	写真16 武人埴輪頭部	181
写真 8 SK09土師器変出土状況	82	写真17 SP10土器出土状況	212
写真 9 SK13断面	82	写真18 SP29土器出土状況	212

別 表

別表1 長原遺跡の標準層序1992	288	別表3 平安時代土器の羅年	290
別表2 石器計測表	289	別表4 瓦器輪の羅年	290

第 I 章 調査の経過と概要

第 1 節 調査の経過

1) 土地区画整理事業と発掘調査

大阪市の南東部に位置する長吉・瓜破地区において、土地区画整理事業に伴う発掘調査が開始されたのは1981年のことである。その後、継続的に調査が実施されてきており、本書はその86年度分の報告になる。同事業の対象範囲には、長原遺跡の北部および東部を除く区域が含まれ、また、長原遺跡に西接する瓜破遺跡の南東部も含んでいる。そこで報告書作製の当り、長原遺跡内を5つの地区に区分する方法をとってきた。それは図1に示すもので、西地区、西南地区、中央地区、南地区、東南地区と呼称している。

表1 1986年度土地区画整理事業に伴う発掘調査一覧表

発掘回数	面積	調査地番	担当者	調査期間
NG86-8次	91㎡	平野区長吉長原西2丁目	木原克司・山崎栄	1986年4月19日～1986年6月20日
NG86-28次	737㎡	同 長吉川辺2丁目	櫻井久之	1986年6月24日～1986年10月4日
NG86-30次	51㎡	同 長吉長原4丁目	木原克司	1986年6月27日～1986年7月28日
		同 長吉長原西2丁目		
NG86-36次	123㎡	同 長吉長原3丁目	横山洋	1986年7月28日～1986年9月1日
NG86-41次	528㎡	同 長吉長原西2丁目	藤田幸夫	1986年8月8日～1986年11月14日
NG86-43①次	20㎡	同 長吉長原4丁目	木原克司	1986年8月20日～1986年9月2日
NG86-43②次	147㎡	同 長吉長原4丁目	木原克司	1986年9月3日～1986年10月30日
NG86-54①次	486㎡	同 長吉長原東3丁目	横山洋	1986年10月2日～1986年12月26日
NG86-54②次	205㎡	同 長吉長原東3丁目	横山洋	1986年11月21日～1987年2月10日
NG86-58①次	680㎡	同 長吉長原3丁目	櫻井久之	1986年10月15日～1987年3月15日
NG86-58②次	245㎡	同 長吉長原3丁目	櫻井久之	1987年1月7日～1987年3月16日
NG86-60①次	274㎡	同 長吉長原3丁目	黒田慶一	1986年10月20日～1986年12月27日
NG86-60②次	550㎡	同 長吉長原3丁目	黒田慶一	1986年12月8日～1987年2月28日
NG86-67次	6㎡	同 長吉長原3丁目	木原克司	1986年11月7日～1986年11月8日
NG86-70次	138㎡	同 長吉川辺1丁目 同 長吉川辺3丁目 同 長吉長原西3丁目	木原克司	1986年11月26日～1986年12月25日
NG86-78次	12㎡	同 長吉川辺3丁目	高井健司	1986年12月15日～1986年12月23日
NG86-85次	77㎡	同 長吉長原4丁目	木原克司	1987年1月8日～1987年1月13日
NG86-90次	147㎡	同 長吉長原3丁目	木原克司・黒田慶一	1987年1月26日～1987年3月7日
NG86-105次	193㎡	同 長吉川辺1丁目	横山洋	1987年2月19日～1987年3月24日

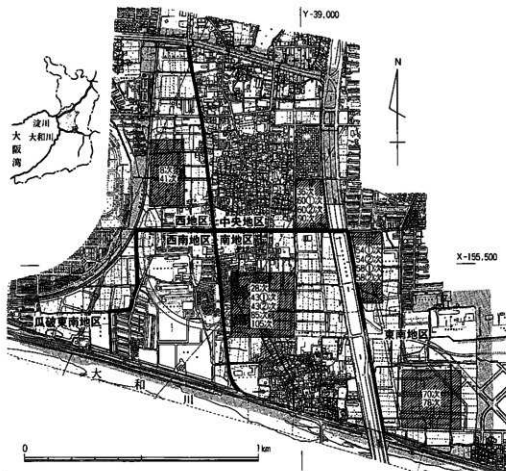


図1 土地区画整理事業施行範囲と地区区分

本年度の発掘調査は、表1に示す通り19次に分れており、1986年4月19日～1987年3月24日にかけて実施された。その中には、後述するように試掘調査も3件含まれている。全体の調査面積は4,700㎡余りに達し、複数の遺構面が存在する調査地においては何面もの調査を行っていることから、実際の調査実施面積はその数倍になる。本年度には瓜破遺跡内での調査は行われておらず、長原遺跡の範囲内だけであった。各地区ごとの調査面積は、西地区約650㎡、中央地区約1100㎡、南地区約1200㎡、東南地区約1750㎡で、西南地区については、川辺小学校の北西40mで1箇所試掘を行っているのみである(NG86-70次調査)。83～85年度には西地区の調査に重点が置かれていたが、本年度は東南地区の調査面積がもっとも多かった。

(櫻井)

2) 調査の経過

i) 長原遺跡西地区(NG86-8・41次調査)

8次調査地は西地区西辺に位置し、関西電力の鉄塔の移設に伴った前年度のNG85-80次調査と一連のものである。当年度は本鉄塔の脚部分4箇所をグリッド調査し、仮設鉄塔に係わる部分2箇所をトレンチ調査した。

41次調査は、西地区と中央地区を分ける南北道路(長吉2号線)の西130mにある道路予定地で行ったものである。幅4mのトレンチを設定したが、古墳時代の遺構の見つかった南半部では8mに拡幅して調査を実施した(写真1)。また、古墳時代の井戸SE01は検出面から2m以上の深さであったため、周囲を機械で掘下げたのち、井戸底までの調査を行った。

なお、41次調査地の北端に接する東西道路上では試掘調査(NG86-30次)が行われている。

(京嶋・櫻井)

ii) 長原遺跡中央地区(NG86-36・60①・60②・90次調査)

中央地区と南地区を分ける東西道路(瓜破長吉線)の拡幅に伴い、道路に面するガソリンスタンドが



図2 長原遺跡西地区の調査位置図
(斜かけ部分は現在までの既調査地)



写真1 NG86-41次調査風景



図3 長原遺跡中央地区の調査位置図
(網かけ部分は現在までの既調査地)

北側へ移転することとなった。36次調査はその貯油タンク部分で行ったものである。また、36次調査地の西隣を区画整理事業に関連して前年度に調査しており(NG85-77次調査)、本書ではその成果も合わせて報告する。

60①・60②次調査地は36次調査地の北西に位置し、十字に交差する道路上を、前者は東西に、後者は南北に調査したものである。トレンチの幅は2~3mで、調査の必要に応じて予定道路の範囲内で拡張を行った。60②次調査地では車両の通行を阻害しないよう、全体を3分割して調査を実施した。

90次調査は瓜破長吉線での下水管理設に伴うもので、道路北側にある工場などへの出入りを確保するため、東西に2分割して行った。幅2~3mのトレンチ調査であった(写真2)。

この90次調査地の西端では、ガス管理設工事に先立つ試掘調査(NG86-67次)も行っている。一部、幅1m、長さ6mでトレンチ調査し、長原6層層準の2面の水田址を確認している。

(積山・黒田・櫻井)

iii) 長原遺跡南地区(NG86-28・43①・43②・85・105次調査)

28次調査地は、大阪中央環状線から西に延びる出戸川辺線が集落内を縦貫する旧道と交差する手前に位置する。環状線からこの調査地の東約50mまでは、すでに81年度に調査され、古墳が多数検出されていた[大阪市文化財協会1989]。そのため、道路幅(約



写真2 NG86-90次調査地
(調査開始前の状況、西から)



図4 長原道跡南地区の調査位置図（網かけ部分は現在までの既調査地）

20m)で調査区を設定したが、道路予定地内に工場が残っており、その部分を残して調査した(写真3)。その未調査部分はNG90-36次で調査し、その成果も本書に報告している。

43①次調査は、後述するNG86-30次調査の試掘の結果、下水管の埋設によって123号墳の墳丘が削平されると判断されたため行われたもので、幅2m、長さ10mの小規模調査である。同墳に関する報告はすでに[大阪市文化財協会1992b]に行っている。

43②次調査地は南地区中央を南北に走る長吉3号線の西約50mを並走する道路上にある。道路の北



写真3 NG86-28次調査地
(調査開始前の状況、東から)

第I章 調査の経過と概要

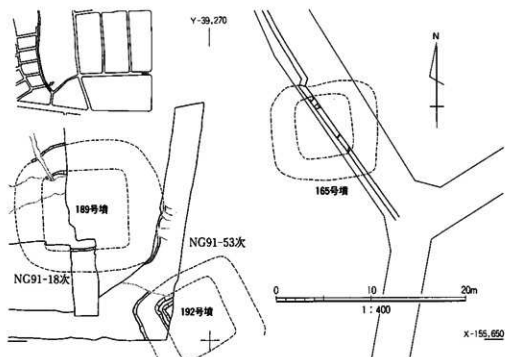


図5 165号墳と周辺の古墳

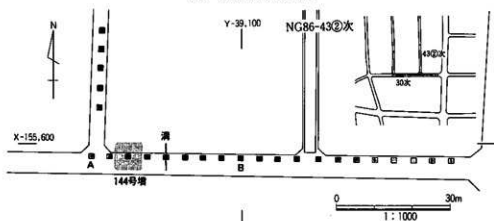


図6 NG86-30次調査の遺構（■印は試掘坑）

半部はNG85-70次で調査されている[大阪市文化財協会1993]。調査地は全長約65m、幅2.0～2.5mで、周辺農地との関係から調査地を南北に2分割して行った。古墳が検出された部分については東西に拡張を行っている。調査地南半部については、下水管の埋設数が浅くなるため、古墳検出部分を除き、管底よりも深い長原6A層以下の調査は行っていない。

水道管埋設に伴う工事立会がNG86-85次調査で行われた。場所は同地区西部で、NG91

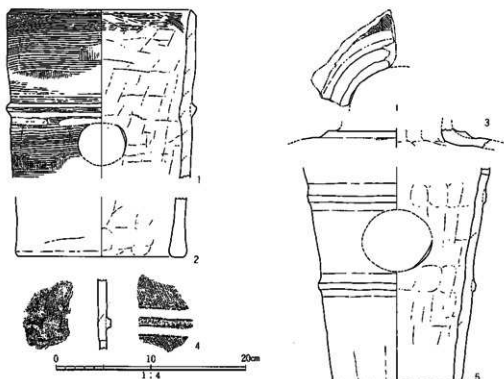


図7 NG86-30・85次調査出土遺物

—18・53次調査地の東側道路である。全長154m、幅0.5mというトレンチ調査であったが、南端付近で165号墳を確認することができた(図5)。墳丘は、方墳と仮定すれば一辺6.5mで、0.4mの高さが遺存していた。出土遺物には円筒埴輪1・2のほか衣蓋形埴輪3があった(図7)。1は口径約20cm、断面三角形のケガをもち、外面調整に二次調整のヨコハケが施されている。焼成は須恵質である。2は底部の破片である。3は笠部の破片で、外面に突帯と1条の線刻が認められる。2・3は土師質に焼成されている。

105次調査地は出戸川辺線上にあり、前述の28次調査地の西約100mに位置する。83号墳の埋葬施設を確認するなどの成果は、すでに[大阪市文化財協会1990]に報告済みである。

その他、NG86-30次調査で同地区内3路線を試掘調査している。43①次調査地のある東西道路では、新たに古墳を1基発見し(144号墳)、その東には長原6層層準の溝を確認している(図6)。図6のA地点で5、B地点で4の円筒埴輪が出土している(図7)。NG86-70次調査では川辺小学校の北50mの2地点で試掘を行っている。

(櫻井)

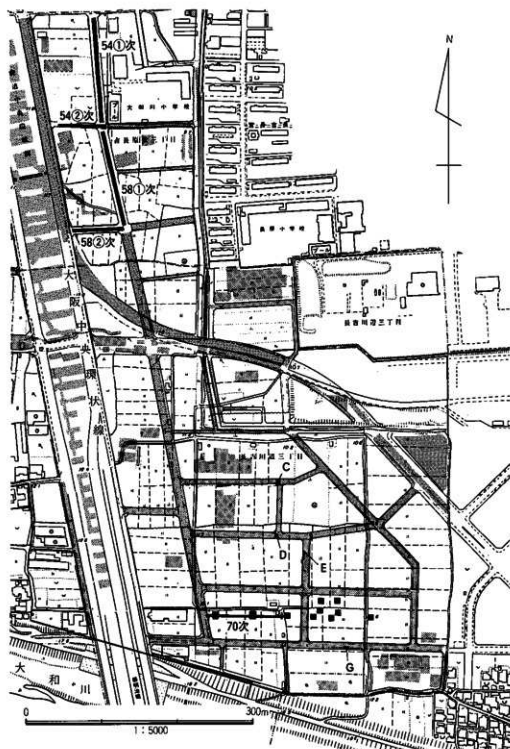


図8 長原遺跡東南地区の調査位置図（網かけ部分は現在までの既調査地）

iv) 長原遺跡東南地区の調査
(NG86-54①・54②・58①・58②・
70・78次調査)

同地区内の調査は大阪中央環状線の東側に位置する。

54①次調査地は旧大和川小学校に西接する南北道路で(写真4)、54②次調査地は54①次の南端から西に延びる道路上に当る。トレンチの幅はいずれも2~3mで、必要に応じて予定道路の範囲内で拡張



写真4 NG86-54①次調査地
(調査開始前の状況、北から)

を行った。長原7B層から風化の進んだサヌカイト細片が出土したため、旧石器時代の地層である長原13層を慎重に掘下げてみたが、確実な旧石器は出土しなかった。54①次調査の後半は54②次調査と並行して実施した。

58①次調査は54①次調査地の南に続く全長130m区間で行った。当初、幅4mで調査を進めたが、遺構の状況を把握するため道路幅までの拡張を行った部分もある。

58②次調査地は58①次調査地の南端と中央環状線を結ぶ東西道路上にある。全長60m、幅4mの調査を行った。58①次調査と同時に並行で調査を実施した。

70次調査は擁壁工事に先立つもので、図8下部にある■印地点を試掘した。その結果、一部に古墳が確認され、古墳の検出された部分で、東西約100m、幅0.5mのトレンチ調査を行った。周溝が見つかった場所では1~2mの拡張を行った。長原8層の直上が基礎底となるため、それ以深は調査していない。

78次調査は川辺3丁目内の仮設排水管理設に先立って実施したものである。埋設はA~Gの7地点(図8)であったが、A・B・F地点では、すでに予定掘削深度まで攪乱されていた。C地点では長原3・4層下面に溝やピットを検出した。D地点では南北方向の溝を検出し、12~13世紀のものと考えられる瓦器皿が出土した。また、D地点では含粗~中粒砂黒褐色粘土を埋土とする溝も見つかっている。長原13層から旧石器が1点出土するという成果もあった。この周辺の道路予定地の調査が次年度以降に行われており、詳細は必要に応じて続巻でふれることになろう。

(積山・櫻井)

第2節 調査の概要

1) 長原遺跡西地区(表2)

同地区の調査のうち、41次調査地をⅠ区、8次調査地をⅡ区、NG85-80次調査地をⅢ区とする。Ⅰ区には古墳時代の多数の遺構があり、巻首図版の木製品が出土した井戸SE01のほか、堅穴住居SB01-05、掘立柱建物SB06-09などが見つかっている。SE01からは須恵器製作に係わる当て具や叩き板といった木製工具類のほか、輪羽口、ウマの歯なども出土している。Ⅱ・Ⅲ区では鎌倉時代の水田が見つかった。

表2 長原遺跡西地区の主要遺構一覧（イタリックはページ番号）

時代	Ⅰ区	Ⅱ・Ⅲ区
古墳	建物 SB01-05 34-36 (堅穴住居) 建物 SB06-09 36-37 (掘立柱建物) 井戸 SE01 38 溝 SD01-07・09-16 39-41 土壇 SK01-07 38-39	溝 SD17 41
鎌倉	溝 SD18・19 56	畦畔 SR01-05 56

表3 長原遺跡中央地区の主要遺構一覧（イタリックはページ番号）

時代	Ⅰ区	Ⅱ区	Ⅲ区	Ⅳ区
縄文				溝 SD01 66
弥生			土壇 SK01-08 66-68	
古墳	土壇 SK09-20 79-82 溝 SD03-06 85-86	153号墳 74-79 154号墳 79	溝 SD02 85	土壇 SK21-23 82-84 溝 SD07・08 86
飛鳥		溝 SD09 87		
奈良	溝 SD10-12 88 畦畔 SR03-06 89-90	溝 SD13・14 88-89 畦畔 SR07-14 90-91	畦畔 SR15-25 91	溝 SD15-17 89 畦畔 SR26-29 91
平安			建物 SB01-03 95-96 井戸 SE03 100-101 溝 SD21 105-106 土壇 SK24-26 101-103 土器埋納遺構 106-107 畦畔 SR30-39 108	建物 SB04・05 96-98 井戸 SE01・02 99-100 溝 SD22-29 106 土壇 SK27 103-104
鎌倉				
室町		小溝群 107-108		
江戸	小溝群 108			

2) 長原遺跡中央地区(表3)

36次調査地をⅠ区、60①次調査地をⅡ区、60②次調査地をⅢ区、90次調査地をⅣ区とする。Ⅲ区北端には粘土採掘坑とみられる弥生時代後期の土壌群SK01～08が検出された。Ⅱ区には古墳2基、Ⅰ区には古墳時代の集落を取囲む溝と推定されるものがあった(SD03)。2基の古墳のうち153号墳は長原古墳群でもっとも新しい一群に属する。各調査区に奈良時代の水田畦畔が確認されており、Ⅱ・Ⅳ区には、両調査区に連続すると思われる灌漑用水路SD14・15も見つかっている。Ⅲ・Ⅳ区に平安時代の掘立柱建物などを検出し、Ⅲ区に土器埋納遺構、Ⅳ区に土師器甕を蔵骨器とした当時の火葬墓SK27もみられた。

3) 長原遺跡南地区(表4)

28次調査地をⅠ区、NG90-36次調査地をⅡ区、43①次調査地をⅢ区、43②次調査地をⅣ区とする。各調査区に小方墳を確認した。そのうち、Ⅳ区にある146号墳には主体部の痕跡とみられるものがあった。飛鳥・奈良時代にはSD01・02・07などの灌漑用水路がみられた。Ⅳ区には平安時代の建物や井戸も検出され、一町四方の区画を南北に二分割する屋敷地の存在が推定された。Ⅰ・Ⅳ区で見つかった鎌倉時代の水田畦畔は、正方位に配置されており、特にⅣ区のSR17は復元条里の坪内を東西に半折する位置にあった。

表4 長原遺跡南地区の主要遺構一覧(イタリックはページ番号)

地区	Ⅰ・Ⅱ区	Ⅲ区	Ⅳ区	その他
古墳	143号墳 123	123号墳 122	145号墳 125 146号墳 125-128	144号墳 ? 165号墳 ?
飛鳥	溝 SD01 131-132	溝 SD03・04 132	溝 SD05 132-133	
奈良	溝 SD02・06～11 132-133 畦畔 SR01～05 134-135	畦畔 SR06・07 135	溝 SD12～14 133-134 畦畔 SR08～12 135	
平安			建物 SR01～03 136-138 井戸 SE01 138 溝 SD15～18 139	
鎌倉	畦畔 SR13～16 141 溝 SD19～22 140 土壌 SK01～03 140-141		畦畔 SR17 141	
室町	溝 SD23・24 141			
江戸	溝 SD25～29 141-142 畦畔 SR18～20 142		島倉 141-142	

4) 長原遺跡東南地区(表5)

54①次調査地をⅠ区、54②次調査地をⅡ区、58①次調査地をⅢ区、58②次調査地をⅣ区、70次調査地をⅤ区とする。Ⅲ・Ⅳ区には弥生時代中期の流路SD01・02があった。そのSD02を掘直して、古墳時代前期末頃にSD03が造られている。これは長原古墳群の造墓の開始と軌を一にするものであったと思われる。また、古墳時代中～後期の方墳も11基確認した。そのうちの150号墳からは、甲冑に別作りの顔を取付けた特異な形態の武人埴輪が出土している。飛鳥・奈良時代の遺構には多数の水田畦畔や溝、平安時代には建物や井戸のほか、土器埋納遺構や坪境の大畦畔SR40などがあった。鎌倉時代の遺構としては一町四方の屋敷地を取囲む区画溝SD39・41があった。この溝は防衛的な堀の機能をもっていたと思われるが、それ以外に貯水という役割も担っていたことを検証することができた。Ⅰ区には室町時代の島島も検出している。

(櫻井)

表5 長原遺跡東南地区の主要遺構一覧(イタリックはページ番号)

時代	Ⅰ区	Ⅱ区	Ⅲ・Ⅳ区	Ⅴ区
弥生	土壇 SK01 157-158		溝 SD01・02 156-157	
古墳	147号墳 170-171 148号墳 172	149号墳 172-174	溝 SD03・04 166-169 150号墳 174-183 151号墳 183-184 152号墳 185-192	160～164号墳 192-198 土器埋納遺構 SP01 196-197
飛鳥	畦畔 SR01～03 200 溝 SD06～16 201	畦畔 SR04 200 溝 SD17・18 201-204	畦畔 SR05～18 200-201	溝 SD19・20 204
奈良	畦畔 SR19・20 204	畦畔 SR21～24 204-205 溝 SD21～23 205	畦畔 SR25～39 205 溝 SD24 205	溝 SD25～28 206
平安	建物 SB01・02 209-210 井戸 SE01 213 溝 SD29～32 215-216 畦畔 SR40 216-217 土器埋納遺構 SP10 211-212	建物 SB03 210-211 溝 SD33 216 土器埋納遺構 SP19 212	建物 SB04 211 井戸 SE02・03 213-215 土器埋納遺構 SP29 212	
鎌倉		溝 SD34～37 220-221 畦畔 SR41 234	井戸 SE04～08 217-219 溝 SD38～46 221-225 土壇 SK03～09 225-234	
室町	島島 234			

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 長原遺跡西地区の調査(NG85-80、NG86-8・41次調査)

1) 層序と各層の出土遺物

今回報告する当地区の調査は3件で、それを次のように呼ぶ。NG86-41次調査地はⅠ区、NG86-8次調査地はⅡa区(グリッド調査地)・Ⅱb区(トレンチ調査地)、NG85-80次調査地はⅢ区である(図9)。

i) Ⅰ区の層序(図10)

Ⅰ区ではおおむね標高9.4mで地山相当層が検出されるが、北端部はNG85-16次調査Ⅲ区で確認された小埋没谷の南肩部に当たり、南端は「馬池谷」[大阪市文化財協会1992a]の東肩に近いため、それぞれの地山相当層上面の標高は8.7m、8.4mと低くなっている。

この付近は長原4B層が厚くなっており、また、この地区全体には、長原3A層に相当すると考えられる水成層が分布している。また、南端部には長原4A層に相当すると思われる水成層で埋没する東西方向の坪境溝が検出されており、この周囲にはその水成層が良好に分布する。以下にⅠ区の層序を上から記述する(註1)。

沖積層上部層Ⅰ

長原0層：Ⅰ区全体に存在する現代の客土層で、層厚は20～50cmである。

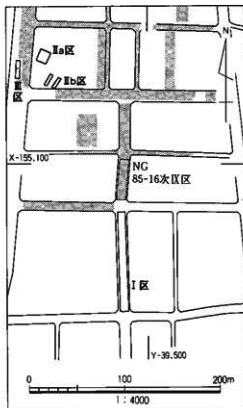


図9 西地区の調査区分

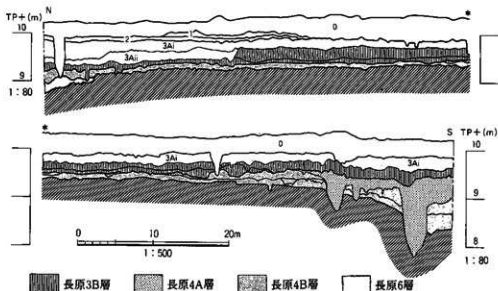


図10 西地区Ⅰ区の層序

長原1層：Ⅰ区北部の一部に遺存する作土層である。現代の水田耕土で、大半は整地工事の際に削平されている。上面の標高はおよそ10mである。本層下面で耕作による小溝群が検出され、江戸時代以後の染付磁器片が出土した。

長原2層：含細礫淡茶褐色シルトである。約10cmの層厚で、Ⅰ区の北半部に分布する。

長原3A層：Ⅰ区北半部で2層直下に堆積する上部の含粗粒砂茶褐色シルトおよび下部の黄褐色砂礫である。上部は3Ai層、下部は3Aii層と考えられる。下部の水成層からV期の瓦器碗が出土した。層厚は全体が20～50cmあり、下部の水成層は厚いところで30cmである。

長原3B層：灰色粘土の作土層である。上面で畦畔が検出され、長原3A層により被覆される。上面は標高9.4～9.7mである。層厚は10～30cmあり、厚いところでは上下2層に分けられる。本層上面の畦畔は北側のNG85-16次調査Ⅵ・Ⅶ区でも報告している[大阪市文化財協会1993]。本層基底面で溝が検出され、瓦器片が出土した。

長原4A層：黄褐色砂礫である。南端で検出された東西方向の溝SD18・19を埋めており、その周辺にも分布する。時期を示す遺物はないが、長原3B層と考えられる地層の下位にあることから、本層準とする。

長原4B層：灰色または黄灰色シルト質粘土で、層厚10～40cmである。4Bi層と4Biii層に分けられ、部分的に4Bii層に相当する薄い水成層が挟在する。

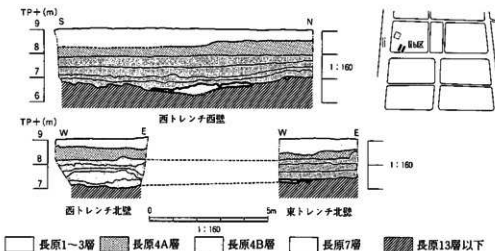


図11 西地区 Db 区の層序

長原6層：北端部のみに遺存する灰色粘土である。本層を覆う長原5層はみられない。

沖積層下部層

長原13層：灰白色ないし黄白色の粘土である。

(京嶋)

ii) II・III区の層序(図11)

II区では長原13層までの調査を行ったが、III区では長原4B層までの調査となっている。4B層層準までの状況はII・III区ともほぼ同様である。また、長原0～2層までについては、前述のI区と共通している。I区では長原3層内に水成層が確認され、同層内が細分されていたが、II・III区ではそれに当る水成層はみられない。

沖積層上部層 I

長原3層：含粗粒砂灰黄褐色シルトで、層厚約20cmである。

長原4A層：灰白色～明黄褐色中～粗粒砂で、層厚は20～60cmである。13世紀後半から14世紀初頭の間に起った洪水によるものである。

長原4B層：灰色シルト質粘土で、本層上面に水田遺構が検出される。後述する瓦器碗7が出土しているが、古墳時代の遺物も多く含まれる。上面の標高はII区で8.0m前後、III区で7.6m前後である。層厚は80～140cmに達する。

長原7層：オリブ灰色粘土質シルトで、主として溝の埋土となっている。標準的な長原7B層に比べ暗色が弱いため、長原7A層の可能性が高いが、包含する遺物は古墳時代の土師器・須恵器ばかりである。

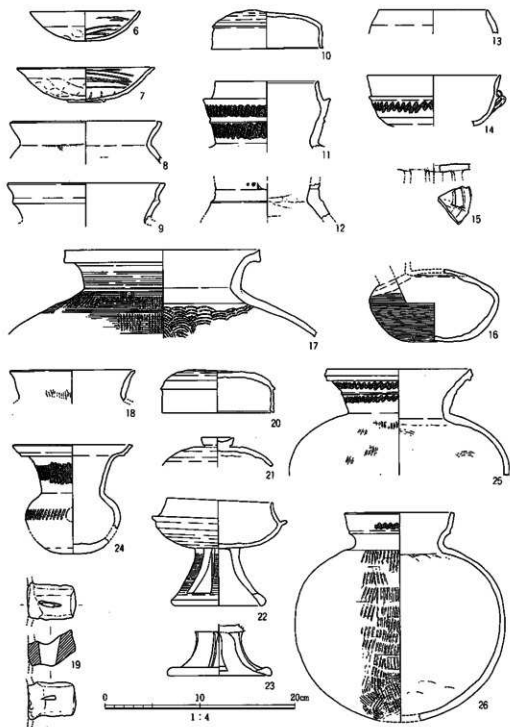


図12 西地区各町の出土遺物
長原3A層 (6)、長原4B層 (7~17)、長原7層 (18~26)

沖積層下部層

長原13層：明黄灰色シルト～粘土質シルト。Ⅱ区で標高6.3～7.5mにある。

(櫻井)

iii) 各層の出土遺物

長原3A層出土土器(図12)

6はⅠ区の長原3A層から出土した瓦器碗である。口径11.6cmで、外底面の高台はない。外面に暗文はみられない。瓦器碗のⅤ期である。

長原4B層出土土器(図12、図版31)

7は瓦器碗で、口径14.6cm、器高3.6cmである。外底面に低い高台を貼付けている。内面のみに疎に暗文が施され、内底面には平行暗文がある。8・9は土師器甕の口縁部である。8は口縁端部の内面を肥厚させ、布留式土器に近い形態を示す。9は二重口縁で、端部はやはりやや肥厚する。いずれもⅡ区から出土したものである。

10は須恵器杯蓋である。口径11.8cmで、天井部外面のほぼ全体をヘラケズリする。口縁端部はやや凹んだ面をなす。11は蓋の付く壺の口頸部片である。杯身と同形態の口縁部で、受部と立上がりがある。口縁端部は内傾する面を作る。受部以下の外面には1本の稜線を介して2帯の波状文を施している。12は須恵器筒形器台の脚台部上端の破片である。13は内傾する口縁部をもつ碗または鉢である。14は無蓋高杯の杯部片である。やや深い体部から稜線を介して口縁部となり、端部は尖って終る。稜線の下位に波状文を施す。波状文の位置に小さな把手が1個付き、その上に直径6mmほどの球形の粘土塊が付く。15は須恵器高杯の杯底部片である。平底の杯部で、脚部に5～6個のスカシ孔があったと推定される。16は須恵器平瓶の体部である。外面をカキメ調整する。17は須恵器甕の上半部である。短い口縁部で、端部に面を作る。口縁部外面はカキメ調整、体部は縦方向の平行タタキのち、カキメ調整で仕上げる。12・17はⅠ区、その他はⅡ区出土である。

Ⅱ区の4B層内からウマ(*Equus caballus* Linnaeus)前肢の基節骨が出土した(図版38下段2)。最大長は7.9cmで、これより林田氏らの作成した公式Ⅲ[林田重幸・山内忠平1957]から体高を推定すると、約125cmとなった。いわゆる「中形馬」の大きさに相当する(註2)。

長原7層出土土器(図12、図版31)

18はⅡ区出土の土師器甕の口縁部である。端部は丸くおさめる。19は土師器甕または鍋の把手である。先端をヘラで削って、面を作る棒状のもので、上方からヘラで切込みを入れ、下まで貫通させている。軟質に焼成されている。Ⅰ区の遺物である。

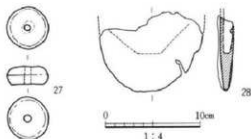


図13 土製品・金属製品

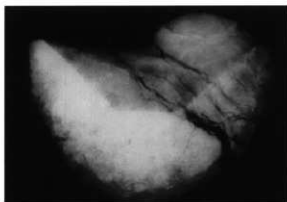


写真5 金属製品X線写真

20は口径11.7cmの須恵器杯蓋である。天井部は平坦で、外面の広い範囲をヘラケズリする。稜線を介して垂直に延びる口縁部の端部は内傾する面をなす。TK208 型式である。

21は須恵器高杯蓋である。天井部の破片で、その中心に中央の凹んだつまみが付く。22は有蓋高杯である。

口縁部の立上がりは長く、端部は丸く終る。脚部は長方形のスカシ孔が3方に開けられており、脚端部は丸く仕上げられている。脚部外面はカキメ調整で仕上げる。23は須恵器高杯の脚部で、長方形のスカシ孔を4方に開けている。脚端部は丸く仕上げる。24は須恵器匙である。頸部が

太く、やや長く延びる口縁部が付く。頸部外面には波状文が施され、体部の最大径付近の外面には櫛状工具による列点文が巡らされている。25は須恵器甕の上半部で、口縁端部は面を作り、その直下に稜線を作る。その下位には稜線を間に挟んで2帯の波状文が施される。体部外面は平行タタキ、内面は同心円文の当て具痕をナデ調整して消している。26は二重口縁の須恵器壺である。口縁部外面に波状文を施す。体部外面は縦方向の平行タタキで、内面はナデ調整でいいに仕上げている。いずれもⅡ区のものである。

土製品・金属製品(図13・写真5、図版31)

27は算盤玉形の土製紡錘車である。直径4.4cm、厚さ1.9cmで、直径8mmの円孔が開けられている。軟質に焼成されている。Ⅰ区の長原4B層から出土した。

28は鉄製の刃先である。幅は約11cmで、袋状になっている。鉄製の犁先と思われる。Ⅰ区の長原4B層から出土した。

(京嶋・久保)

Ⅰ区出土の石器遺物(図14～20、別表2、図版32～36)

本調査区からはサヌカイト製の石器遺物が112点出土した。種類は石鏃・クサビ・ナイ

フ形石器・石核・翼状剥片に関するもの・火砕礫などさまざまであるが、すべてが古墳時代以降の地層・遺構に含まれる遊離資料であるために確実な時代等は不明である。ここではその中で留意されるものについて取上げ、製作技法などから時代が推定できるものは文中に記した。

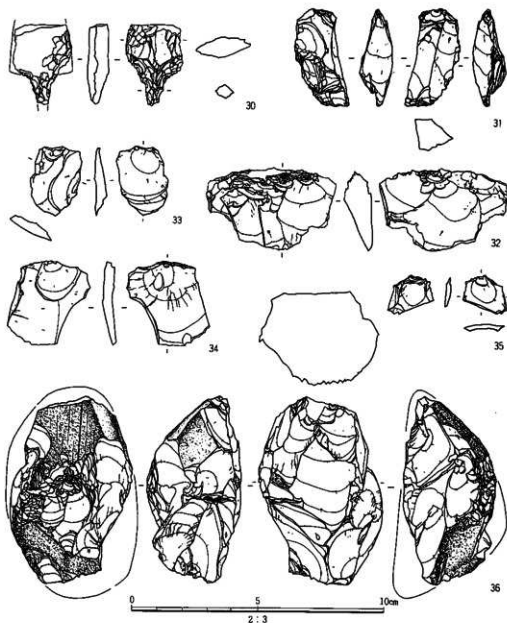


図14 石鉄・クサビ・敲石

30は短い茎をもつ凸基式石鏃である。ほぼ全周にわたって欠損しているが、主剥離面側の左刃縁部には比較的ていねいな押圧剥離が並び、細部調整も認められる。全体的に厚く、刃部・基部ともに横断面は菱形を呈する。弥生時代のものと考えられる。

31は上下縁の対向する位置の両面に細かい剥離面が並んでおり、左右の垂直方向の折れ面のようにすから、クサビ本体として使用されたものとわかる。さらに背面側の左辺には真横からの強い加撃によって垂直方向に亀裂が入込んだ剥離面が並んでいることから、最初はこの方向でクサビとして使用したのち、なんらかの理由で90°回転させて再びクサビとして加撃し、2度の垂直割れによって最終的に横断面が台形で平面が長方形のクサビ本体となったと考えられる。

32は下部が新欠によって失われているが、上縁に垂直に亀裂が入込む細かい剥離面が並んでいることから、クサビに関係する剥片と考えられる。剥片自体は大きめだが、剥離がおもに背面側にみられ、主剥離面が垂直割れを起していることから、クサビ本体から剥落したものと考えられる。

33は打面がなく、末端のリングが発達した縦長の剥片である。垂直割れを起していることから、クサビ本体から剥落したものと考えられる。

34・35も明確な打面をもたず、垂直割れによって剥離した剥片である。

36は突出した部分に敲打痕があり、そこから入込んだ亀裂によって剥離面が複雑に入り組んでいる。上下からも垂直割れに近い剥離面が認められるが、クサビのように対向する方向から剥離しているとはいいがたい。さらに、各面に自然面が遺存し、もとは全長約8cmで側面が三角形に近い楕円形の礫であったと推定できることから敲打石と考えられる。

37はやや片寄った翼状剥片を素材とした1側縁加工のナイフ形石器である。ブランティングはすべて主剥離面の打面側を打面とし、大ぶりで急角度に5回以上施したのち、各々が接する張出しを細かく打欠き、背部を直線的に仕上げている。尖頭部と基部は新しい折れによって失われているが、刃部の中央に古い欠損部分がある。刃角は40°～50°である。

38はやや片寄った翼状剥片を素材とした2側縁加工のナイフ形石器である。ブランティングは主剥離面の打面側と末端の下部にみられ、すべて主剥離面を打面として施している。打面側のブランティングは最初に大きな剥離を施したのち、張出した部分を細かく打欠いている。基部は新しい折れによって失われているが、刃部の小さな剥離面は使用痕の可能性がある。主剥離面側の右下に、打面調整の剥離面が遺存する。刃角は30°～35°である。

39は横長の剥片を素材とした2側縁加工のナイフ形石器である。背部のブランティング

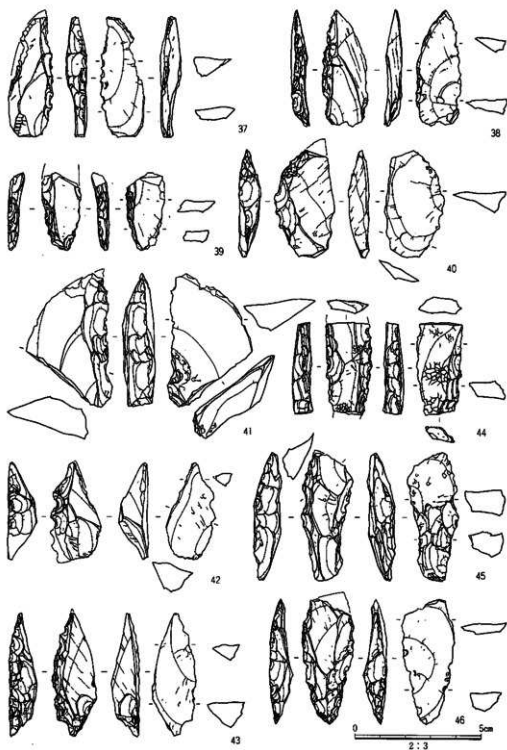


図15 ナイフ形石器

は背面の先行する横長の剥片を取った剥離面を打面としているが、基部は主剥離面側からも加撃している。刃縁部のブランティングは主剥離面を打面として底面のほとんどを打欠いて基部を作り出しているが先端部には及んでいないと考えられる。尖頭部は新しい折れによって欠損している。

40は横長の剥片を素材とした1側縁加工のナイフ形石器である。背部は比較的大きなブランティングによって平面形が弧状に作り出されている。背面側には底面に当る大きな広がりをもつポジティブな面がみられ、主剥離面とで直線的な刃部を構成している。尖頭部・基部はともにブランティングのあとに折れている。刃角は25°である。

41は翼状剥片を素材とした、現状では大型の切出し形ナイフ形石器である。背部は主剥離面を打面とした大きなブランティングによって直線的に整えられている。しかし、主剥離面の下部に素材となった翼状剥片の打面が一部残っていることから、もとの打面調整面をすべて取去るにはいたっていない。下半部は最後の段階で折れているため、本来はさらに大きいナイフ形石器を作ろうとしていた可能性もある。刃角は35°である。

42は翼状剥片を素材とした1側縁加工のナイフ形石器である。素材の背面側は、底面と先行する横長の剥片を取った剥離面を切る大きなネガティブな面からなる。打面側は大きなブランティングによって取り除かれているが、突出した部分はそのまま残している。刃角は50°～55°である。

43はやや片寄った翼状剥片を素材とした2側縁加工のナイフ形石器である。背部のブランティングはすべて主剥離面を打面として加撃し、剥離の末端が底面に及ぶほど、先行する横長の剥片を取った剥離面のほとんどを取去っている。基部は刃縁下部のブランティングによって尖頭状に作られている。刃角は45°である。

44は横長剥片を素材とした2側縁加工のナイフ形石器である。主剥離面側の右側縁には打面調整面が認められる。素材の打面側のブランティングは、打面調整剥離面の頂点を加撃したのち、それによって生じた背面側の頂点からも加撃して突出した部分を取り除いている。刃縁部のブランティングはすべて主剥離面側から加撃している。尖頭部と基部は最終段階の古い折れによって欠損している。火中している。

45は横長の剥片を素材とした2側縁加工のナイフ形石器である。素材の背面側は、ポジティブな底面とそれを切る横長のネガティブな剥離面が3枚並んでいる。ブランティングは両側縁とも主剥離面を打面として急角度に行ったのち、突出した部分を打点として主剥離面の表面を薄く剥いていく。さらに主剥離面を打面とした細部調整が上半部に行われ、

素材の打面側には打痕が残っている。底面はほとんど取去られており、刃部は主剥離面と背面のネガティブな面で構成されており幅が狭い。刃角は35°である。

46は横長の剥片を素材とした2側縁加工のナイフ形石器である。ブランディングはすべて主剥離面を打面として施され、細部調整も認められる。刃部は主剥離面と背面のネガティブな面で構成された部分で幅が狭い。刃角は25°で、尖頭部は新しい折れによって欠損しており、基部先端には自然面が残る。

47は厚さ1.4cmで、末端に自然面をもつ盤状剥片を用いた翼状剥片の石核である。盤状剥片の主剥離面側に打面調整を行い、その頂点を打点として平らな背面に向けて加撃して翼状剥片を取っている。そのあとで上半部が折れたためこの石核は廃棄されたと考えられる。

48は厚さ1.0cmの盤状剥片を用いた翼状剥片の石核である。盤状剥片の背面側に打面調整を行い、その頂点を打点として数回加撃して翼状剥片を取っている。あとは石核の幅が狭くなったために廃棄されたのであろう。

49は厚さ1.6cmの剥片を用いた翼状剥片の石核である。背面側には大きなネガティブな面とそれを切る打面調整剥離面が認められる。その頂点を打点として主剥離面側に向けて加撃して翼状剥片が取れているが、剥離が傷に入込んで末端はうまく抜けなかったと考えられる。そのためにこの石核は廃棄されたのであろう。

50は背面がほとんど自然面の盤状剥片を用いた翼状剥片の石核である。翼状剥片を取ったあとに自然面に向けて打面調整を行っているが、次の剥片は取られずに廃棄されている。

51は背面がほとんど自然面の盤状剥片を用いた横長剥片の石核である。自然面側に打面調整は現状では認められないが翼状剥片を取った可能性がある。

52は打面調整された打点が残る翼状剥片である。しかし底面に当る部分は大きな広がりをもつポジティブな面とそれを切るネガティブな面とで構成されており、典型的な翼状剥片とはいえない。

53は打面調整された打点をもつ横長の剥片である。これも背面側の剥離面が変則的であることと剥離が片寄っていることから典型的な翼状剥片とはいえない。

54は主剥離面の左辺に自然面をもつ横長の剥片である。打点の左側にわずかに残る2枚の剥離面が打面調整で、背面側の下辺に残るのが底面とすれば、この剥片は翼状剥片とも考えられる。

55・56・57は背面側に大きな広がりをもつポジティブな面をもつ横長の剥片である。

58は素材となった盤状剥片の主剥離面を下部に残す石核である。主剥離面の左辺と上辺

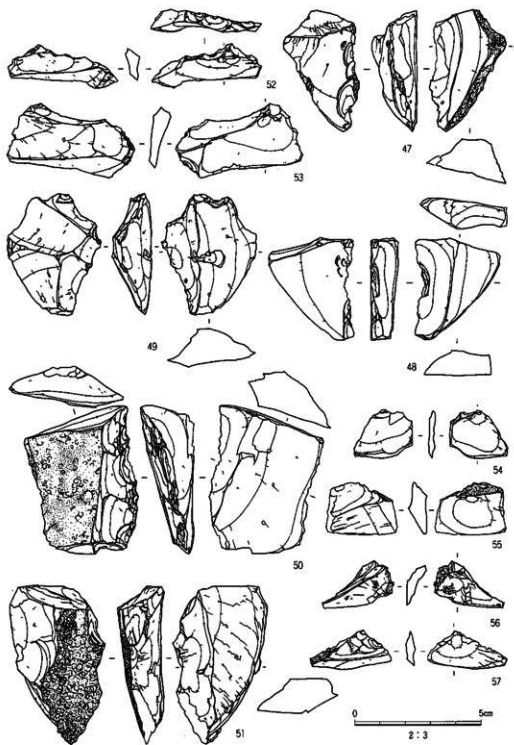


図16 翼状剥片・石核

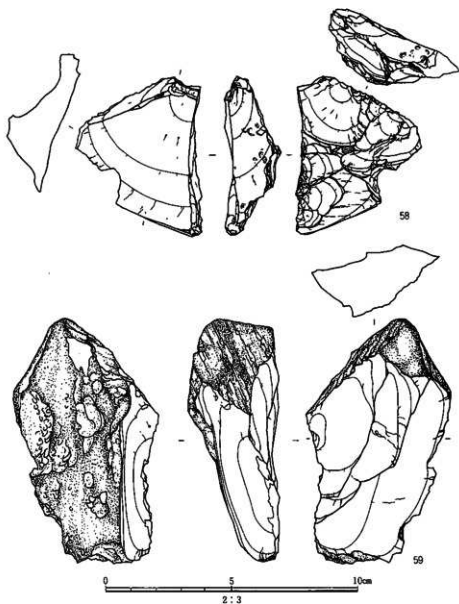


図17 石核

は対向する縦方向の加撃によってまっすぐに裁断されており、それによってできた平らな面を打面としてすべて主剥離面側に剥片を取っている。取れた剥片は最大で長さ2.5cm、幅3.1cmほどの小さなもので、その他は縦長で不定形なものばかりであろう。それでもさらに剥片を取ろうとしたらしく、裁断面に数回敲いた痕跡が認められる。

59は長さ10.0cm、厚さ3.6cmほどの礫を用いた横長剥片の石核である。右図の主剥離面に当る大きな剥離面はネガティブである。まず、そのネガティブな面の打点付近から背面側に当る自然面を大きく除去し、できた剥離面を打面として2度、横長の剥片を取っている。

60～68は横長の調整剥片である。このうち60・61・63・65・66は、ネガティブな面を打面とし、背面側に主剥離面と同じ方向の剥離面が並んでいることから、打面調整剥片の可能性はある。68は火中している。

69～73は縦長の調整剥片である。70の打面は上部の折れによって失われている。

74～76・78は背面側に自然面をもたない調整剥片である。

77・87は自然面と剥離が接する部分を打面とした片流れの横長剥片である。77の背面は大きな広がりをもつネガティブな面で、火中している。

79・80は自然面を打面とする調整剥片である。79の末端には小さな剥離面が並ぶ。

81はポジティブな面を打面とする横長の剥片である。打点の面積が広がったためか、バルブは抜がって明瞭ではない。

82はポジティブな面を打面とする剥片である。背面は主剥離面と同方向のネガティブな面と、それに先行する横方向の剥離面からなる。剥片の下半部は主剥離面側から折れて欠損している。

83は平面が三角形の薄い剥片である。主剥離面の打点部は右上方にあったようだが、背面にみえる左上方からの折れによって失われている。

84はネガティブな剥離面の盛り上がったリングの部分の打点とした縦長の剥片である。背面は、最下部の四角い面がもっとも広い面で、それを切る4枚の剥離面で構成される。

85はネガティブな面を打面とする横長の剥片である。背面には3枚のネガティブな剥離面と、それらに切られる底面状のポジティブな広い面がみられる。

86はネガティブな剥離面の頂点を打点とする横長の剥片である。背面には、主剥離面と打面部によってできた頂点を加撃した二次調整が認められる。火中している。

88は背面に自然面を残す二次加工のある剥片である。主剥離面の打面部は主剥離面を加撃した二次的な加工によって取去られており、左右の周縁部も主剥離面を打面として背面側の自然面を取ろうとしている。これらの二次加工を次の剥片を取るために打面を準備する意図で行ったものとするれば、翼状剥片の石核の可能性もある。下半部が折れて小さくなったために放棄されたのであろうか。

89はネガティブな剥離面を打面とする厚い縦長の剥片である。主剥離面はリングが発達

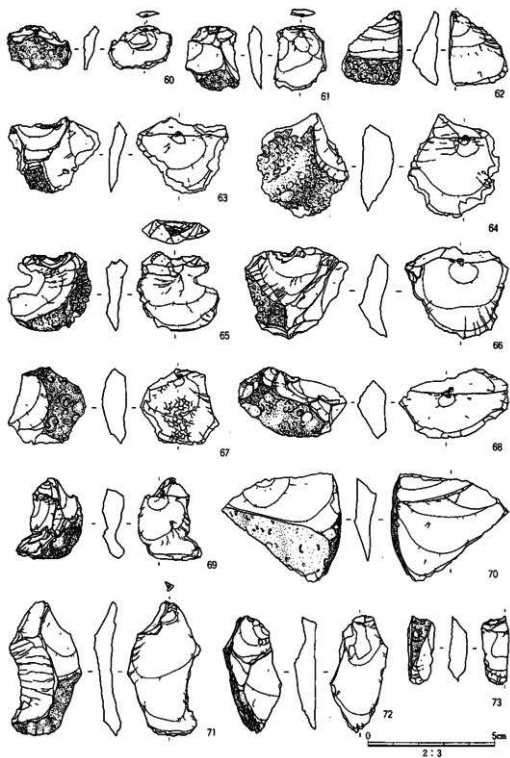


図18 調整剥片

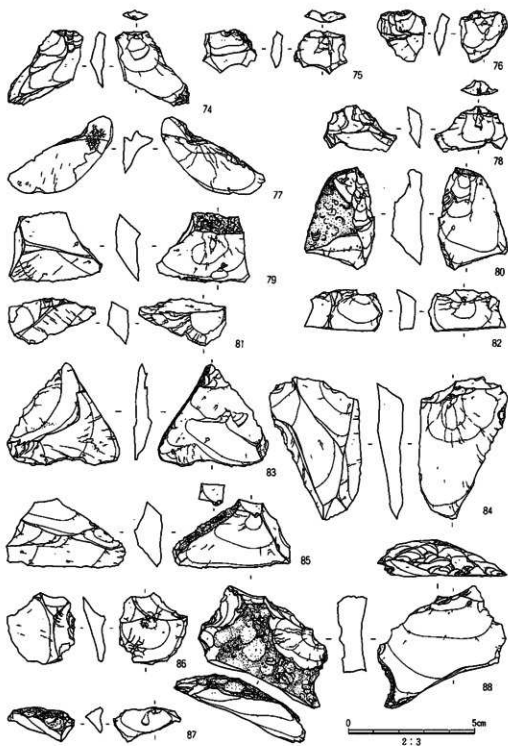


図19 調整剥片・その他の剥片

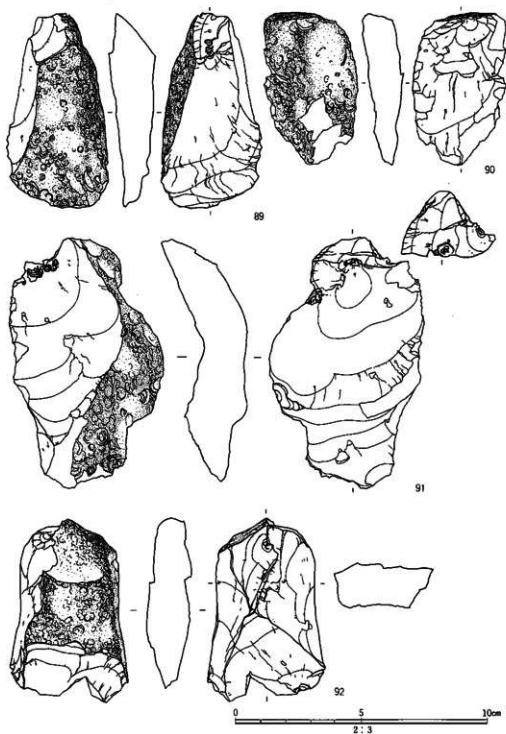


図20 縦長剥片

して末端がヒンジフラクチャーぎみに波打っている。背面は打面・主剥離面に先行する2枚の剥離面と自然面からなる。

90は自然面を打面とした縦長の剥片である。原礫から素材となる剥片を取る際に、最初に取った角の部分と考えられる。

91はネガティブな面を打面とする盤状の縦長の剥片である。主剥離面の末端はリングが発達し、大きく波打っている。背面にも自然面とそれを切る縦方向のネガティブな剥離面がみられ、その上部を何度か加撃してこの剥片の打面を作っている。

92は背面がほとんど自然面の縦長の剥片である。主剥離面側は数面の剥離面によって構成されているが、二次的な衝撃がひびに沿って進んでいることから剥離のようすは不規則で明瞭ではない。

II区出土の石器遺物(図21~23、別表2、図版37・38)

本調査区からはサヌカイト製の石器遺物が17点出土した。しかし、すべてが古墳時代以降の地層に含まれる遊離資料であるため、確実な時代等は不明である。ここではその中で留意されるものについて取上げ、製作技法などから時代が推定できるものは文中に記した。

93は平面形が三角形で板状の剥片を利用した錐である。素材となった剥片の打面側の縁は細かい両面剥離によって直線的に整えられている。先端は丸く磨滅しており、側面には回転穿孔によって挟られた部分が2箇所認められる。それによると開けられた孔は直径3.8mmと10.0mmだったことがわかる。弥生時代のものと考えられる。

94は尖頭部と基部が欠損しているが凸基式石鏃と考えられる。両面とも細かな押圧剥離を中央まで及ぼして全体を薄く成形し、鋭い刃縁を作る。縄文時代のものと考えられる。

95は翼状剥片を素材とした1側縁加工のナイフ形石器である。ブランディングはほとんどが主剥離面を打面として背面側に鋭角に打欠いているが、尖頭部付近には背面側から打

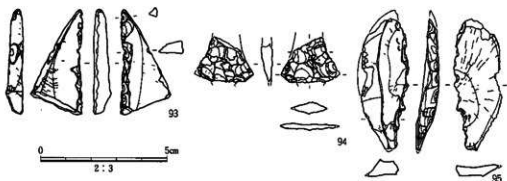


図21 石鏃・石鏃・ナイフ形石器

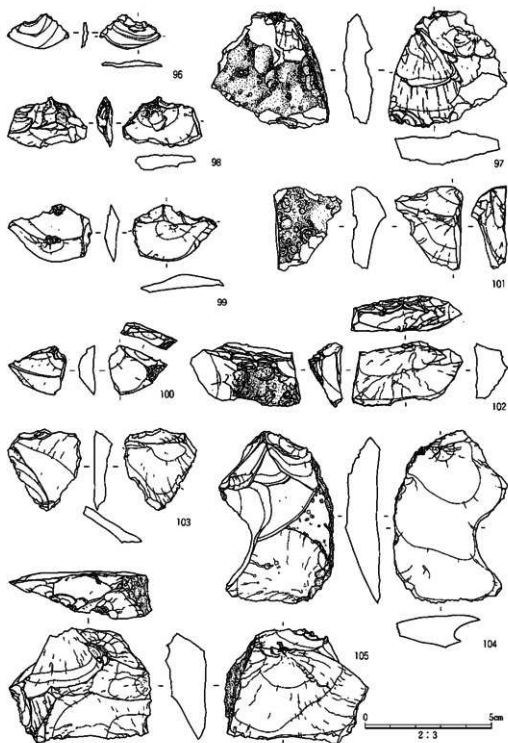


図22 クサビ・翼状剥片・その他の剥片

面調整剥離面を取去ろうと試みた数回の打痕とブランディングが1面認められる。刃角は35°～45°で、尖頭部と刃部を欠損している。

96は打面がない横長の剥片である。主剥離面はリングが発達し、バルバースカーも末端がステップで止まっていることから、垂直割れに近い状態で剥離したものと考えられる。クサビ本体から剥落した剥片の可能性がある。

97は周縁の多くを欠損しているが、上下に細かな剥離面と大きな垂直方向の剥離面が対向して並んでいることから、クサビ本体と考えられる。背面に自然面をもつ。

98は二次調整をもつ横長剥片である。背面には大きく広がるネガティブな面を切る剥離面が3枚以上並んでいる。二次調整は素材の主剥離面と背面の両側を打面として加撃したもので、上縁部に数面みられる。これがブランディングといえるならば、小型のナイフ形石器の未製品の可能性もある。主剥離面の右側は古い折れによって欠損している。

99は盤状剥片から最初に剥離された翼状剥片である。背面の上端に残る大きな打痕は一つ前の盤状剥片を取る際の加撃によるもので、その下にある打痕がこの剥片の元となった盤状剥片を取った際に残ったものである。背面の右側にある折れ面はこれらの面を切っている。次に上方の打痕付近から盤状剥片の背面側に打面調整を行い、できた頂点を狙って加撃し、この剥片を取っている。

100はポジティブな面を底面にもつ剥片である。主剥離面側の上部に打面調整らしき剥離面があるが、この剥片を取った際の縦方向の折れによって、打点部と半分が欠損しており、翼状剥片かどうかは明らかでない。

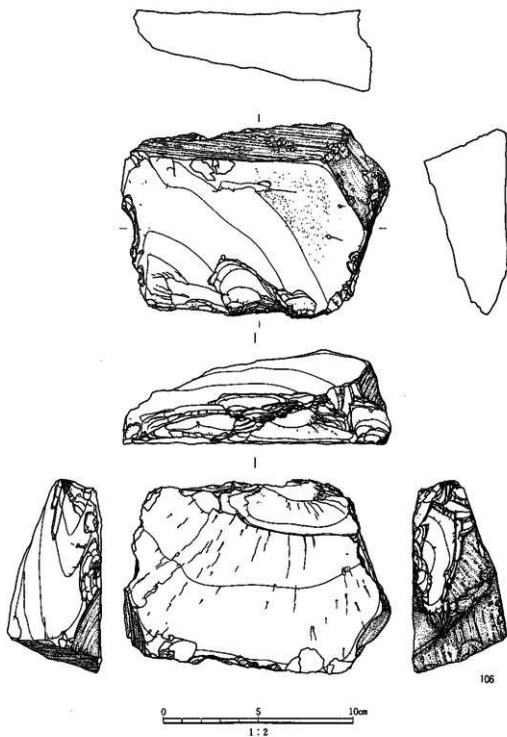
101は背面に自然面をもち、ポジティブな面を打面とする剥片である。自然面の傷から折れている。

102は背面に自然面をもつ横長剥片である。打面には自然面から加撃された細かな剥離面が並んでいるが、剥離の角度が適当でなく、末端はステップで終っている。また、主剥離面との先後関係は不明である。

103は打点の幅が広がったため、バルバースカーが不明瞭となった縦長の剥片である。背面には大きく広がるネガティブな面とそれを斜め下から切る剥離面がある。上端は欠損している。

104は背面に自然面をもつ縦長の剥片である。ポジティブな面を打面とし、末端はヒンジフラクチャーぎみに剥離している。背面には上方と左側からくる剥離面がある。

105はネガティブな面を打面とする横長の剥片である。背面側には4方からくる剥離面が



106

図23 石核

認められるが主剥離面を切る剥離面がないことから、すべてこの剥片を取る前の剥離面の可能性がある。

106は四角い板状の剥片を利用した横長剥片の石核である。原礫はもともと四角く、3辺に残る自然面の葉理のようすから板状に割れやすいものだったと考えられる。まず、素材の主剥離面を打面として加撃し、背面側に幅7.5cmの横長の剥片を取ったのち、さらに何度か加撃して打面を整え、できた頂点を打点として主剥離面側に加撃している。何度も同じところを敲いたようすがうかがえるが、主剥離面で大きな剥片は取れていない。次に、背面の右縁辺を加撃して自然面を取去ろうとしているが、末端がステップとなり途中で止っている。左縁辺も数回加撃しているが大きな剥片は取れていない。以上のようにこの石核では思うように剥片は取れなかったと考えられる。ただし、主剥離面の剥離の末端のもっとも厚い部分に1~2mmの擦痕が扇状に分布していることから、この石核は台石として使用された可能性がある。

(松本)

2) 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構はⅠ区の長原4B層基底面およびⅡ区の長原7層下面で検出された。以下に種類ごとに報告する(図24・33、原色図版1、図版1)。

i) 竪穴住居

SB01(図25、図版2)

Ⅰ区南部で検出された方形の竪穴住居である。少なくとも3回以上建替えており、SB01はもっとも新しい時期のものである。床面は南北5.8m、東西3.5m以上、深さは最大で25cmである。主柱穴は検出することができなかった。周壁溝は幅25~30cm、床面からの深さ3cmである。北壁際には周壁溝は認められず、壁面に沿って床面から5cm高い幅0.5mほどのテラスとなっている。床面上に炉や竈の痕跡はなかった。建物の方向は正方位である。覆土中からTK208型式の時期の土器が出土した。

SB02(図26、図版2)

Ⅰ区南部のSB01に切られる方形の竪穴住居である。南北4.1m、東西4.0m以上、床面までの深さ0.1mである。周壁溝は幅0.2m、床面からの深さ5~8cmである。主柱穴と思われる直径0.3mの4個の柱穴を検出した。主柱穴の深さは0.3~0.4mで、柱間は南北2.1m、東西1.9mである。北壁際に焼土面が認められた。建物の方向はN75°Eである。

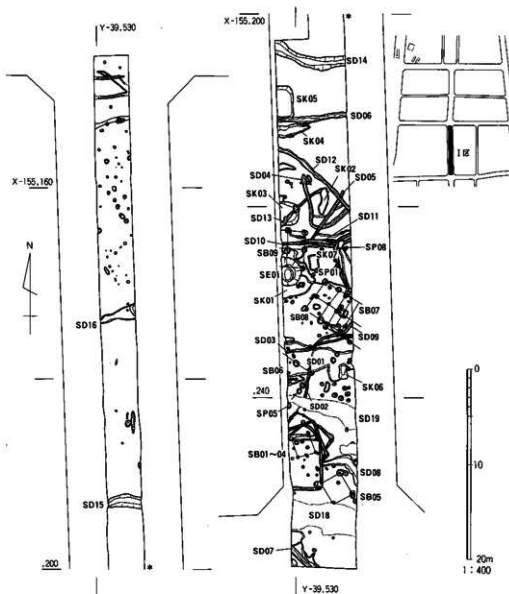


図24 I区検出遺構

SB03・04(図25、図版2)

I区南部のSB02に切られる方形の竪穴住居である。SB03は東西4.3m、南北2m以上、SB04は東西4.9m、南北2m以上の規模で、いずれも支柱穴は確認できなかった。建物の方向はSB03がN50°E、SB04がN35°Eである。前者が後者を切る。SB03の周壁溝内からTK208型式の須恵器が出土した。

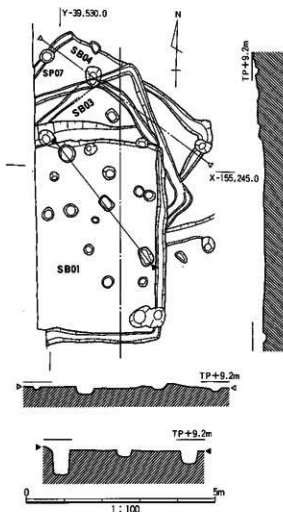


図25 SB01・03・04平・断面図

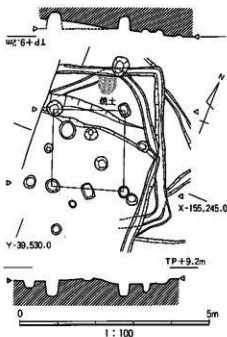


図26 SB02平・断面図

SB05(図27)

SB01に切られる方形の竪穴住居である。建替えの行われたSB01～04とはやや位置を異にしている。切合いは主柱穴と思われる柱穴がSB01の周壁溝を切っていたことから、SB01よりも新しいと思われる。

主柱穴は0.5～0.7mの大型で、北側の柱穴は2個が切合っており、建替えられた可能性がある。柱間は東西2.3m、南北2.7mである。周壁溝の幅は狭いところは0.4mであるが、おおむね1mほどになっている。主柱穴と周壁溝との間隔から推定して、床面の東西幅は約6mである。建物の方向はN30°Wである。

ii) 掘立柱建物

SB06(図28)

I区南部に位置する南北1間以上、東西1間以上の建物である。内部の柱通りに小柱穴があり、床束をもつ建物と思われる。柱穴は直径0.5mで、柱間は1.6～2.0mである。建物の

方向は $N37^{\circ}E$ で、後述のSB08とほぼ同じである。

SB07(図29、図版2)

I区南部に位置する南北2間、東西2間以上の建物である。SB08と重複する。柱穴は一辺0.4mの方形竅みで、深さは0.3～0.5mである。南北の柱間は2.0m、東西は1.6mである。内部には1個の小柱穴があり、床束をもつ建物と思われる。柱間からみて、南北が梁行で、東西が桁行となる桁行3間以上の建物と推定できる。建物の方向は $N30^{\circ}E$ である。

SB08(図30、図版2)

I区南部に位置する2間×2間の建物である。SB07とは重複する位置にあ

る。柱穴は一辺0.6～0.7mの方形ないしは長方形を呈し、柱間寸法は梁桁とも1.9mの等間である。深さは0.3～0.5mである。建物中央と西側柱列の内側に0.3mほどの小柱穴が見つっており、外周の通し柱とは独立した床構造を支持する柱の柱穴と思われる。建物の方向は $N34^{\circ}E$ である。

SB09(図31)

I区南部に位置する南北2間、東西1間以上の建物で、東南隅の柱穴がSE01によって切られている。柱穴は一辺0.5～0.6mの方形を呈し、深さは0.5～0.6mである。南北の柱間は1.7～1.9m、東西は1.8mである。建物内部に1個の柱穴があるが、規模は側柱と同じであり、通し柱の可能性がある。東側柱列の南に柱筋の通る柱穴があるが、柱穴の形状や深さが異なり、この建物と関連するとみても、主要な柱であるとは考えられない。建物の方向は $N1^{\circ}E$ である。

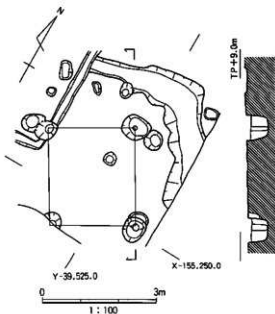


図27 SB05平・断面図

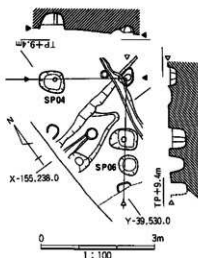


図28 SB06平・断面図

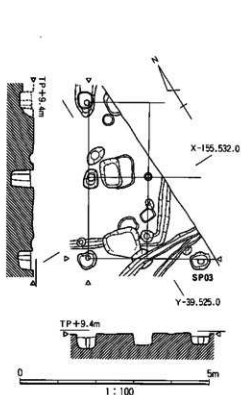


図29 SB07平・断面図

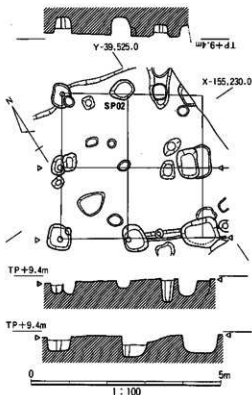


図30 SB08平・断面図

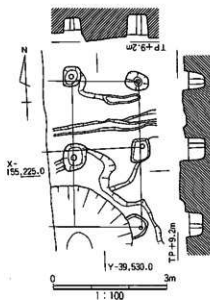


図31 SB09平・断面図

iii) 井戸

SE01(図32、図版1)

I区南部で検出された。SB09の柱穴を切る浅い土壌SK01をさらに掘込んでいる。最上部で南北3.0m、東西2.1m以上の規模である。埋土中位から多数の土器とともに木製品や韃羽口、ウマの歯などが出土した。

iv) 土壌(図24)

SK01

SE01に切られる浅い土壌である。南北4.8m、深さ0.1~0.2mで、平面形は不整形である。須恵器蓋杯・短頸壺・把手付碗のほか土鍾や製塩土

器が出土した。

SK02

南北2.6m、東西0.8m、深さ0.1mの土壌である。須恵器蓋杯やガラス小玉が出土した。

SK03

南北2.4m、東西2.0m以上、深さ0.2mの方形ぎみの土壌である。須恵器蓋杯・無蓋高杯・高杯蓋などが出土した。

SK04(図版1)

幅1.2m、長さ3.4m以上、深さ0.2mの溝状の土壌である。東端は浅く細くなる。SD06の南側に平行するように位置する。須恵器蓋杯・無蓋高杯・匙・提瓶・甕のほか、ウマの歯が出土した。

SK05

南北3.2m、東西1.8m以上、深さ0.2mの方形を呈すると推定される土壌である。SD06の北に接するように位置する。須恵器杯蓋・無蓋高杯が出土した。

SK06

SD01の南肩を切る南北1.7m、東西0.9mの隅丸長方形の土壌である。深さは約0.5mで、須恵器杯蓋が2点出土した。

SK07

SE01・SB09の東に隣接しており、南北1.7m、東西1.0mの長方形の土壌である。深さ7cm程度の浅いものである。

v)溝(図24・33)

SD01

SB07・08の南側に位置する東西方向の浅い溝状の落込みである。幅1.5~3.5m、深さ0.1mである。須恵器蓋杯やウマの歯が出土した。

SD02・03

SB06・07の柱穴を切る溝である。いずれも幅0.2~0.3m、深さ0.1~0.2mで、一部重複す

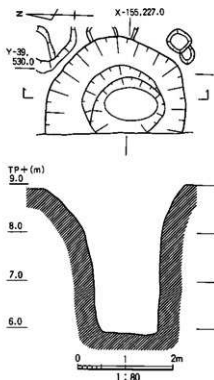


図32 SE01平・断面図

るが、途中でSD02は南に、SD03は西に曲がる。SD02から須恵器蓋杯などが出土した。

SD04

北東から南西に延び、SB09の手前で北に大きく屈曲して、5mほどで終る溝である。幅0.4m、深さ0.1mである。須恵器杯身(高杯)・碗が出土した。

SD05

南西から北東に直線的に延びる溝で、SD04を切る。幅0.3～0.4m、深さ0.1～0.2mである。須恵器蓋杯・碗、滑石製有孔円板が出土した。

SD06

SD12の北で、SK04・05に挟まれる位置に東西に延びる溝である。幅0.6m、深さ0.4mである。土師器小型甕や須恵器蓋杯が出土した。

SD07

I区の南端にある。南東から北西に直線的に延び、幅0.6m、深さ0.1mである。

SD09

SB07・08と重なる位置にあり、SB08の柱穴によって切られている。幅25cm、深さ0.1～

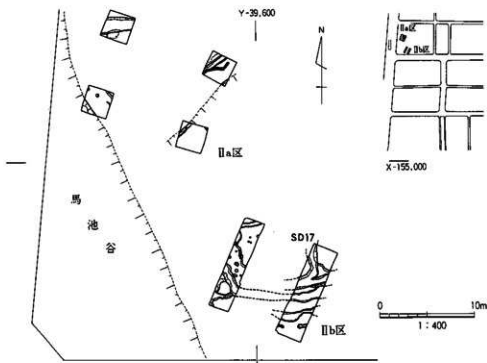


図33 II区古墳時代遺構

0.2mで、直角に折れ曲がるコーナーをもつことから、堅穴住居の周壁溝の可能性もある。

SD10～13

これらの溝は建物群が多く存在する範囲の北端にある。幅0.1～0.5m前後、深さ0.1m前後の小溝で、方向は一定していない。建物に付属する排水溝と考えられる。SD12から土師器高杯が出土している。

SD14～16

これらの溝は建物群の範囲から北に離れており、一様に東西方向をとっている。規模は幅0.4～1.6m、深さ0.1m前後である。建物群を面する溝であろう。

SD17(図版1)

IⅡb区東トレンチの北部にある溝である。北から南に3.5m延びてから、西方に折れる。幅約1m、深さ5～20cmである。土師器甕や須恵器甕が出土している。

3) 古墳時代の遺物

i) 堅穴住居・掘立柱建物・柱穴出土遺物(図34・35、図版39)

107～110はSB01の覆土から出土した土師器である。107は小型甕の上半部である。体部内外面の調整は不明である。108は直立ぎみの口縁部で、端部をヨコナデにより外反させる高杯杯部である。109は鍋上半部で、片口をもつ。体部外面はハケ調整、内面は不明である。把手は体部のやや下位に付いていたと推定されるが、遺存していない。110は甔の上半部である。直立する体部から、長さ3cmほどの口縁部がやや外傾して延びる。端部は丸くおさめる。体部には、やや上方に屈曲し、先端が丸い棒状の把手が付く。体部外面は縦方向のハケ調整で、内面は上半部がハケ調整ないしはナデ調整、下半部は上方に向うヘラケズリである。

111・112・115・116はSB01から出土した須恵器である。111は丸く高い天井部から明瞭な段をなして垂直に口縁部が延びる杯蓋である。天井部は器壁が厚く、口縁端部はやや凹んでいる。天井部外面のヘラケズリはあまり下方まで及んでいない。112は口縁端部にやや凹んだ面を作る杯身である。115は無蓋高杯の杯部で、外面の2本の稜線の下位に波状文を施す。116は壺の口縁部である。丸くおさめる口縁端部から、やや下方に1本の稜線を作り、その下方に波状文を施して、さらに2本の稜線を作って、以下をカキメ調整する。

114はSB01に切られるSB03の周壁溝から出土した無蓋高杯の杯部である。2本の稜線の間に波状文を施し、下位の稜線の下方はヘラケズリのままである。外底面に残る脚部の痕

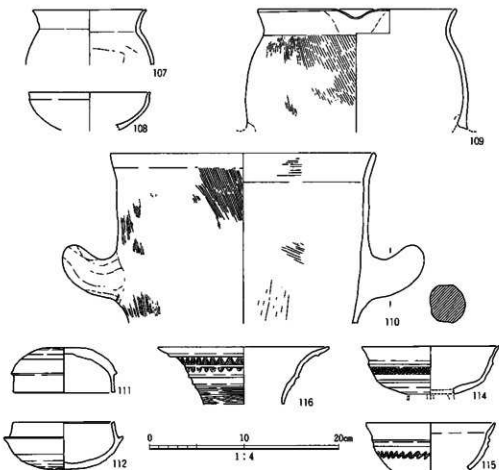


図34 竪穴住居出土遺物
SB01 (107～112・115・116)、SB03 (114)

跡から4方にスカシ孔を開けていたことがわかる。以上のSB01・03から出土した須恵器は112がTK23 型式まで下る可能性があるが、他はTK208 型式までのものと考えられる。

117～124は掘立柱建物・柱穴から出土した遺物である。117はSP01(図24)から出土した土師器高杯の杯部で、口縁部は内湾ぎみになる。118はSP07(図25)から出土した土師器高杯の脚部である。柱状部は中実で、内面上部に焼土が付着している。竈内に支脚として置かれていた可能性がある。119はSB07の柱穴(SP03)から出土した土師器の小型甕である。内外面ともナデ調整と思われる。120はSP06(図28)より出土した算盤玉形の土製紡錘車である。直径3.8cm、厚さ2.0cmの大きさで、中央に直径8mmの円孔が開けられている。軟質である。121は天井部を欠く須恵器杯蓋である。口縁部は内傾する面を作る。SP05(図24)から出土した。122は幅の狭いヘラケズリを施した天井部に短い口縁部が付き、口縁端部に面

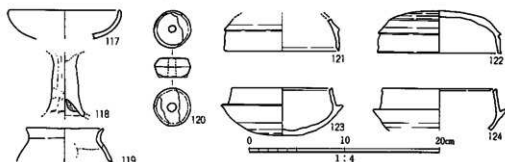


図35 柱穴出土遺物

SP01 (117)、SP02 (122)、SP03 (119)、SP04 (123)、SP05 (121)、SP06 (120)、SP07 (118)、SP08 (124)

を作る杯蓋である。SB08の柱穴(SP02)から出土した。123は丸みのある体部からやや内傾ぎみに延びる口縁部が付く杯身である。口縁端部は内側に凹線がめぐる。SB06の柱穴(SP04)から出土した。124は底部を欠く杯身で、口縁端部は内傾する面を作る。SP08(図24)から出土した。

以上の柱穴から出土した須恵器は、122がTK208型式、124がTK23型式、121・123はMT15型式に属するものと思われる。

ii) SE01出土遺物

土器(図36、図版40・41)

125は土師器の中型甕である。126はその下半部と思われる。体部はやや長胴になり、口縁部は直線的に延びて、端部はわずかに上方につまみ上げる。外面調整は口縁部から頸部にかけてヨコナデ調整、体部は縦または斜め方向の細かいハケ調整を施したのち、底部は一定方向のハケ調整を施す。内面調整は、口縁部が横方向のハケ調整で、頸部からやや下方までユビオサエしているが、それ以下は上方に向うヘラケズリで器壁を薄く仕上げていく。体部外面には煤が付着している。

127は平底の杯部をもつ土師器高杯である。口縁部および脚部は欠損している。128は土師器高杯の脚部である。下に向ってやや開きぎみの柱状部から、大きく拡がる裾部となる。柱状部の内面には絞り痕が明瞭に残り、裾部内面はユビナデによる粗雑な仕上げである。

129～136は須恵器蓋杯である。杯蓋は口径14～16cmで、天井部と口縁部の間の稜線が不明瞭である。口縁端部はやや内傾し、浅い凹線が巡るものがある。天井部内面の中央部は一定方向に仕上げのナデ調整が行われるが、130には同心円文の当て具痕が残る。杯身は口径12～14cmで、立上がりは短い。口縁端部にはわずかに内傾する面を残すものとまったく

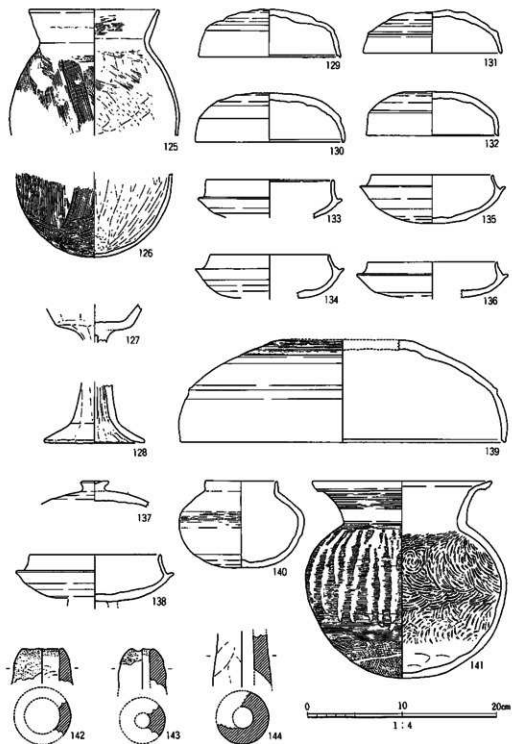


図36 SE01出土遺物

ないものがある。135の内底面中央には同心円文の当て具痕が残る。

137は須恵器高杯蓋で、天井部につまみをもつ。口縁部を欠損する。138は有蓋高杯の杯部である。口縁端部は丸く終る。脚部の接合部にはカキメを入れる。139は須恵器の大型の蓋である。杯蓋を大型にした形態で、口縁端部はやや凹

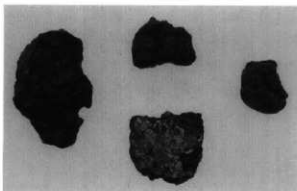


写真6 スラグ(2:3)

み、内傾する面をなす。天井部外面にカキメが施されている。140は須恵器短頸壺である。やや扁平な体部に直立する短い口縁部が付く。141は須恵器広口壺である(原色図版2)。球形の体部に外反する口縁部が付く形態で、口縁端部は外側に面を作り、その直下に稜をもつ。口縁部外面はカキメ調整、体部は格子タタキののちカキメ調整するが、底部には及んでいない。内面に同心円文の当て具痕が顕著に残る。焼台の付着痕が底部外面にある。

以上の土器のうち、須恵器に関してはおおむねTK10型式に属するものといえよう。

轆羽口(図36、図版41)

144は基部の、142・143は先端部の破片で、3点ともいわゆる手捏ねの羽口である。形

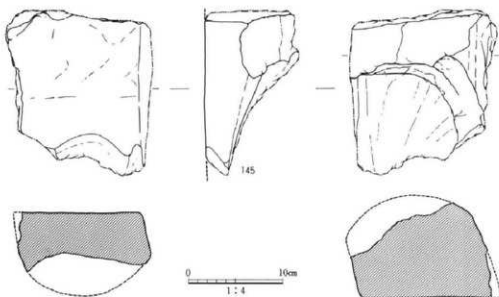


図37 SE01出土加工石

状は小片であるため断定はできないが、144は基部が外反する(掘広がり)形のもので、他の2点も144と同形のものと思われる。胎土は全点とも緻密で、含まれている砂礫は粒径が1mm前後のものが主で、5mmほどのものも点在する。また、モミヤスガが混ぜ込まれている。142・143は強く火を受けており、外表面は灰～黒灰色に変色し、特に先端部分は溶融して一部ガラス化している。なお、SE01からは写真6のようなスラグの小塊も出土している。

(伊藤)

加工石(図37、図版41)

145は加工による平坦な面をもつ石で、用途は不明である。花崗閃緑岩製である。

木製品(図38・39、図版42・43)

146は須恵器の製作に使用された当て具である。当て部は長軸10.5cm、短軸9.2cmの楕円形を呈し、素材となるマツの年輪を利用して同心円の文様を彫り込んでいる。柄は当て部に対して斜めに削り出したもので、途中で折れており、長さは16.8cm以上、太さは直径3.0cmである。当て部の大きさや柄の長さからみて、大型の甕の製作に使用されたものであろう。

147は叩き板である。長さ11.0cm、幅5.4cm、厚さ1.0cmの叩き部から、一辺が1.2cmの方形を呈する断面形の柄を作り出すもので、現在の羽子板に近い形態である。叩き面に溝などは彫られていない。小型の土器製作に使用されたものと思われる。材質はヒノキである。

148は直径6.0cm、長さ16.6cmほどの丸太材の両端を丸く加工し、中央部を削って細くした木錘で、広葉樹を使用している。

149は鉄製の鑿または刀子の柄と思われる。断面が直径3cmほどになるように粗く削った長さ11.5cmの柄で、わずかに反りがある。上端では9mm×5mmの長方形で、下方で細くなる深さ2.2cmの基穴がある。この穴の周囲は焼けて炭化しており、焼いた基を差込んで固定したのであろう。

150は幅5.2cm、厚さ2.1cmの板材で、両端は折れている。151は直径6cmほどの丸太材を半裁し、断面を削り抜いた舟形となる可能性のあるもので、両端は折れている。

152は直径5.5cmの丸太材で、図の下端部は工具で加工されている。上半分は半裁されており、上端は折れている。

153は鉄斧の柄である。鉄斧の装着部は欠損しているが、その遺存する下部は断面形が5.5cm×3.0cmの長方形に加工されている。それ以下の柄の部分は直径3.5cmほどの丸い断面形をなす。柄は途中で折れており、下端は丸く加工されている。材質はクスギである。

154・155は横杵である。154は直径8.9cm、長さ40cmの杵である。杵の長辺の中心から片

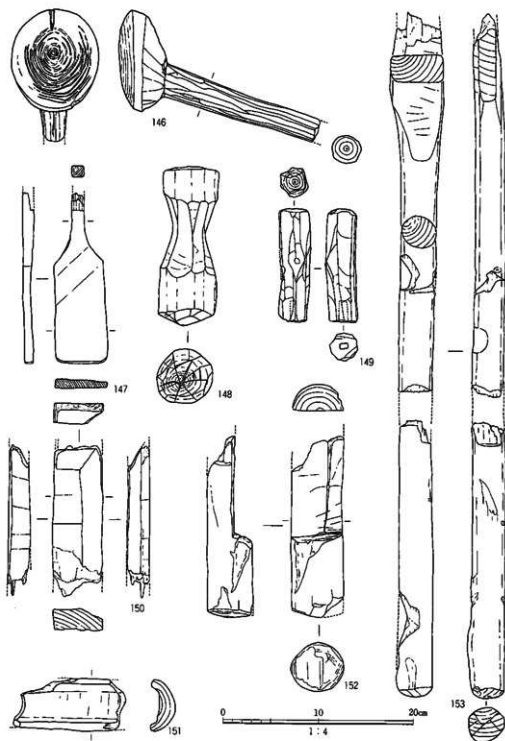


図38 SE01出土木製品 (1)

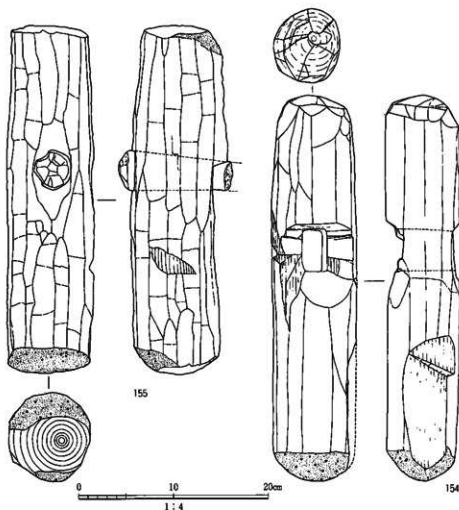


図39 SE01出土木製品（2）

方に寄った位置に長方形の孔が開けられ、その周囲は上下ともに挟り込まれている。杵の長い方の端面には打痕が明瞭に残り、丸くなっているが、そこには砂粒が顕著に食い込んでいる。材質は落葉樹のコナラ属である。155は直径10cm、長さ35.9cmの丸太材に直径3～4cmの柄を、杵の長辺中央から数cm寄った位置に付けたものである。柄を挿入するための孔は丸く、挿入されたままになっている柄の頭部は他の部分より太くしてある。杵の挿入孔の部分は挟り込まれ、柄が受ける力を支持しやすく加工されている。杵の長い方の端面には加工痕が一部残るが、敲打による打痕が明瞭に残っている。打痕の顕著な部分には少量の砂粒が食い込んでいる。もう一方の端は平坦に加工されているだけである。杵の材質は

コウヤマキ、柄はカシである。

以上の木製品のうち、注目されるのは須恵器の製作に使用された叩き板・当て具と2点の横杵であろう。脱穀に用いられる杵は古代・中世を通じてほとんど堅杵であるが、弥生時代から古墳時代の横杵もいくつか知られている[奈良国立文化財研究所1993]。しかし、これらはいずれも一木式のもので、長原例とは異なる。今回報告した資料に対しては、形態上は横杵だが、堅杵のように携き臼とセットになるものではなく、「田畑を整地したり、土塊を細かく砕いたりする農具で、時には脱穀にも使用したかもしれない」とされ、また、「土塊を砕く槌は窯業でも必要とする」と付け加えられている[上原真人1993 p.105]。叩き板や当て具が共存していること、上述のように横杵の使用された面には多くの砂粒が食い込んでいることから、東南アジアやアフリカの民族例(註3)にもみられるような、陶土としての乾燥した粘土塊の粉砕や粘土の混練などの作業に使用された可能性が高い(註4)。

(京嶋)

iii) 土壌出土遺物(表6)

土器(図40・41、図版44・45)

156~161・164・172~179は須恵器杯蓋である。156~161は口径12~13cmで、天井部はいずれも丸く、口縁端部は161の下端部がやや凹む面を作るほかは、内傾する面を作る。157の外面の稜線は特に退化している。164は口縁部を意図的に割欠いて、円板状にしている可能性がある。161はTK208型式、156~160はTK23型式であろう。172~179は口径15~16cmの大型である。いずれも外面の稜線が不明瞭になっている。口縁端部は172・173が丸くおさめるほかは、内傾する面を作る。172の天井部内面に同心円文の当て具痕が残し、173の内面には炭化物が厚く付着している。172・173はTK10型式、ほかはMT15型式である。162・163は須恵器杯身である。口径は約11cmで、口縁端部はいずれも内傾する面を作る。165は須恵器の高杯蓋である。口径12cmで、口縁端部の内側に凹線を施している。166・167・180は須恵器の無蓋高杯である。166・167は杯部のみで、166は外面に2本の平行する稜線を作るが、文様は施さない。4方にスカシ孔がある。167は外面に1本の稜線を作り、その下位に波状文を施す。180は杯蓋を逆にした形態の杯部で、口縁端部は丸くおさめる。底部外面はヘラ

表6 古墳時代土壌出土の遺物

遺情	遺物番号
SK01	161・168・169・171・185~190
SK02	156~158・162・184
SK03	163~166・170
SK04	174~183
SK05	159・160・167
SK06	172・173

ケズリのままである。脚部は長方形のスカシ孔が3方に開けられている。168は須恵器把手付碗である。把手は欠損している。外方に屈曲させ、内湾ぎみに作る口縁部で、体部外面の2本の稜線の間にヘラ先で波状文を施す。底部は平底で、「×」のヘラ記号がある。169は須恵器短頸壺の上半部である。高さ2cmの直立する口縁部があり、端部は丸くおさめる。外面肩部に浅い凹線を施す。181は須恵器甕の口頸部で、長く大きく広がる形態である。外面にカキメ調整を施す。182は提瓶の体部片で、下方に折り曲げた短い耳が付く。170は須恵器甕の口縁部である。口縁端部は上方につまみ上げて丸くおさめ、外面直下に1本の稜線を作る。それ以下の外面はカキメ調整を施す。183は短い口縁部の須恵器甕で、端部外面はヨコナデにより面を作る。口縁部外面はカキメ調整、体部は平行タタキののちカキメ調整で仕上げる。内面に同心円文の当て具痕が顕著に残る。口径約17cm、器高約32cmである。

製塩土器(図43、図版44)

185~190はSK01から出土した製塩土器である。いずれも底部を欠くが、薄手丸底のA

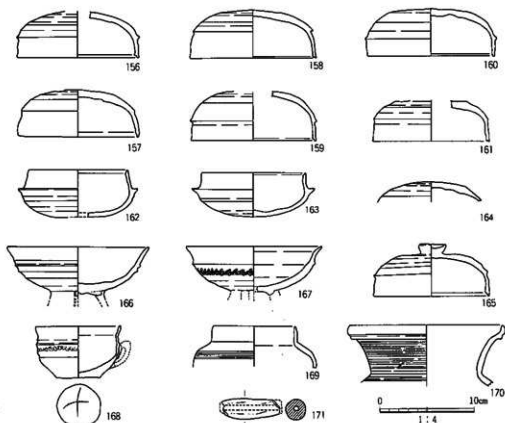


図40 土壇出土遺物(1)

類で、外面に平行タタキを施す手法によるものである。内面は縦方向にナデ調整する。胎土は長石・石英を多く含む(註5)。この遺構からは、ほかにも数片出土しているが、すべて手法によるものである。

土鍾(図40、図版44)

171はSK01から出土した管状土鍾である。長さは現状で6.5cm、直径は最大2.2cmで、孔径は5mmである。両端が細くなるものと思われるが、両端とも欠けており、本来の長さは不明である。重量は29.9gである。形態・法量がこれとほぼ同じものが、200m北に位置する

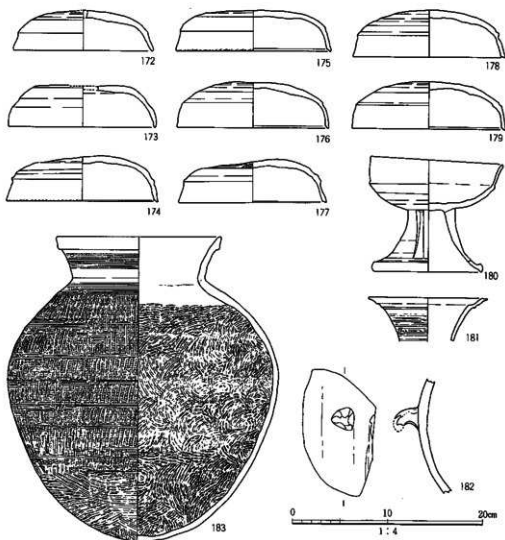


図41 土壙出土遺物(2)

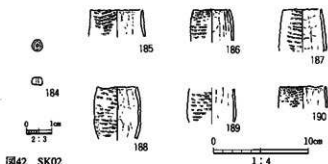


図42 SK02
出土ガラス玉

図43 SK01出土製塩土器

NG84-25次調査地の古墳時代の集落遺構から出土している。

ガラス玉(図42)

SK02から184が1点出土した。直径3.7mm、厚さ2.7mmで、穿孔部の直径は1.0mmである。

iv) 溝出土遺物(表7)

土器(図44・45、図版46)

191・194・196は土師器甕である。191は口縁部から肩部にかけての破片で、体部は内外面ともにハケ調整であるが、口縁部は内面が横方向のハケ調整、外面はヨコナデ調整である。復元口径は17.0cm、体部の外面に煤が付着する。194・196は小型甕である。196は球形の体部から「く」字形に屈曲する口縁部をもつ。端部は丸く終る。体部外面は縦方向のハケ調整であり、内面もハケ調整している。194は上半部の破片で、196と同様の形態と思われるが、口縁端部は面を作る。体部外面はユビナデ、内面もナデ調整である。195は土師器の高杯脚部である。柱状部から大きく広がる裾部となり、脚端部は丸く終る。柱状部内面に紋じ痕が顕著に残り、裾部内面はナデ調整されている。

197~200は須恵器杯壺である。197は天井部が高く丸い。口径12.8cmで、口縁端部は内傾する面を作る。198は口径15.8cmの大型である。199・200は天井部のみの破片で、口縁部を意識的に割欠いて、円板状にした可能性がある。197はSD05、その他はSD01から出土

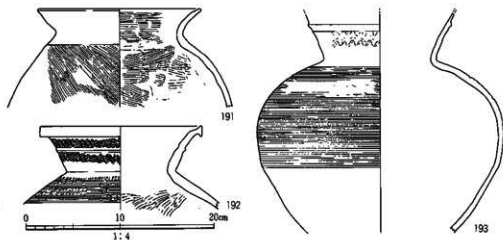


図44 SD17出土遺物

している。201・202は口径10cmほどの須恵器杯身である。いずれも底部を欠き、口縁端部は内傾する。203～206は口径12～13cmの杯身である。205は口縁端部を丸くおさめるが、他は内側に面を作る。206は体部外面にカキメ調整が施されており、高杯である可能性もある。206がTK208型式までさかのぼる可能性があるが、197～205はMT15型式またはTK10型式である。207～209は須恵器の碗である。いずれも把手は欠損しているものと思われ、平底である。

207・208は体部外面に2本の稜線を作り、207にはその間に波状文が施されている。209は

表7 古墳時代溝出土の遺物

遺構	遺物番号
SD01	198～200・202・203
SD02	194・201
SD04	206～208
SD05	197・205・209・210
SD06	196・204
SD12	195
SD17	191～193

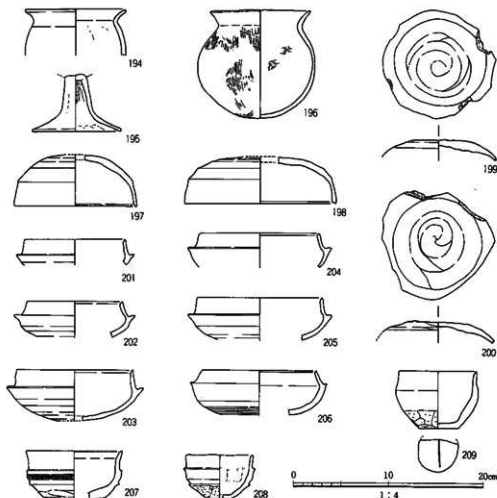


図45 溝出土遺物



図46 SD05出土
滑石製有孔円板

稜線はなく無文である。すべて体部外面の下半部はヘラケズリしている。209の外底面に1本線のヘラ記号がある。192・193は須恵器中型甕である。192は口縁部から肩部が残り、体部外面に平行タタキメとカキメがみられる。口縁部の中位に断面三角形の稜線があり、その上下に波状文を施す。端部を上下につまみ出して幅広の垂直な面を作っている。復元口径は17.0cmである。193は口縁部と下半を欠く。体部の外面にはカキメがみられる。口縁部は斜上方に直線的に延び、中位に稜線がある。稜線の下方には波状文がみられる。体部最大径は26.0cmである。全体に橙色ないし灰白色を呈し、焼成

はあまい。

滑石製品(図46、図版46)

210はSD05から出土した滑石製有孔円板である。長軸2.4cm、短軸1.8cm、厚さ0.4cmで、楕円形を呈する。中央に直径2mmの孔が5mmの間隔をあけて2個開けられている。

(京嶋)

v) 動物遺体

動物遺体は3件の遺構から出土している。TK47型式からTK10型式の須恵器と共伴しており、5世紀末から6世紀中葉のものと考えられる。同定の結果、すべてウマ(*Equus caballus* Linnaeus)の歯および顎骨であることが判明した。以下、遺構ごとに記載する。

Ⅰ区SK04

臼歯の破片である。細片となっているため、詳細は不明である。

Ⅰ区SD01

左下顎の第3前臼歯P₃から第3後臼歯M₃の5本が、列をなして頰側を上面にして出土した(図版38下段3)。しかし、正確な出土位置は不明である。これらは、本来下顎骨に植立していたものと考えられる。M₃の遠心側が欠損しており、また歯根部にも欠損がめだつが、歯根は形成のごく初期のもので、頰側の歯冠高は、P₃で約60mm、M₁で65mmを上回る。以上から、およそ5才前後と推定される(註6)。参考までに計測可能な歯冠長を記すと、P₃が28mm、P₄が27mm、M₁が26mm、M₂が24mmである。

Ⅰ区SE01

多量の土器や須恵器製作と関連する木製品、鍛冶に関連する輪羽口とともに、右上顎の第2前臼歯P²から第3後臼歯M³の6本が出土した(図版38下段1)。正確な出土状態は不明

である。また、遺構は完掘されておらず、他にも歯や骨が埋存していた可能性もあるが、出土部位のみからみれば、少なくとも1個体分の右上顎歯が揃っている。しかし、 P^2 から M^2 と M^3 では、ビビアナイトの付着状態や色調、そして、歯根の形成の状況といった諸点において、異なった特徴を有する。前者は、ビビアナイトを多く析出し、暗緑灰色を呈する。歯根が形成され咬耗も進行し、その段階も揃っているので同一個体に由来するものと考えられる。年齢は10才弱と推定される。 M^2 の頰側の歯冠高は約45mmである。しかし、本来これらが顎骨に植立していたか否かは、出土状態が明らかでないので現段階では不明といわざるをえない。一方、後者の M^3 にはビビアナイトの析出がほとんど無く乳灰色を呈する。歯根は未形成で、頰側の歯冠高は61mmである。表面の状況は微妙な埋没状況に原因するとしても、歯根や咬耗の状況は、 M^3 の萌出が遅れることを考慮しても、両者の差異は少なからず、別個体の可能性もあろう。

長原遺跡の古墳時代の遺構からは、今までにも多数のウマ遺体が出土しており、特に西地区に多い。本報告に記載した資料にも同様な傾向が認められた。これらは、古墳時代の長原遺跡および古墳時代の馬の利用を考える上で貴重な資料といえよう。ここでは、井戸SE01出土のウマについて簡単に触れておきたい。当遺跡の古墳時代の井戸からウマが出土した例は、今回報告したほかに、東南地区のNG82-41次調査SE301(5世紀中葉、井戸埋土の中層に多量の土器群・木製品が投棄され、その上から滑石製有孔円板とともに歯が植立した上顎骨や四肢骨などが出土、写真7)、西地区のNG93-26次調査SE01(5世紀末、井戸埋土下層から橈骨の体部から遠位端が出土)がある。大阪府下では、四條畷市中野遺跡の1987年度調査区SE01(5世紀後半、井戸埋土の中層から1個体の顎骨に植立した状態の歯が板材の上ののって出土)[西尾宏1988](註7)、寝屋川市讃良郡条里遺跡の2区東半部井戸13(6世紀末、須恵器・土師器・滑石製白玉・斎串・ウサギ頭骨などとともに上顎歯が1点出土)[西口陽一1989]などがある。井戸出土のウマ遺体の性格については、水確保の儀礼の犠牲馬とする説[土肥孝1983]、「歯や骨そのもののもつ呪



写真7 NG82-41次調査SE301ウマ出土状態

力に期待して、歯や骨を投入する呪術的祭祀的行為のあらわれ」とする説[桜井秀雄1992]がある。両者とも祭祀に関連付けていることは共通するが、その際に馬を殺したかどうかという点が焦点となっている。殺馬の有無を考古学的資料で断定することは困難と考えるが、それを推測するためには、まず出土状態の検討とそれを行いうる資料の蓄積が必要不可欠であろう。その意味で今回報告したSE01出土のウマの資料的制約は免れることができず、動物遺体の調査記録法を充実させた上で、今後の類例の出土を待って検討したい。

(久保)

4) 鎌倉時代の遺構

i) 水田遺構(図47)

長原4B層上面の遺構として検出され、直上を覆う長原4A層の遺物から13世紀後半から14世紀初頭の間に埋没したとみられる。今回はⅡb区およびⅢ区に確認したが、周辺では[大阪市文化財協会1992a]にも報告例がある。

Ⅱb区ではSR01が南北方向に見つかった。直線的に13m以上続く畦畔である。また、Ⅲ区には畦畔SR02～05が検出された。SR02・03は南北方向をとるが、「馬池谷」の東肩の描く曲線に沿って北で西に傾いている。SR04・05はそれらと直交し、SR04とSR02との交点には水口が設けられていた。水田面は西側にある「馬池谷」の中心に向かって低く、また、南よりも北側が低い。

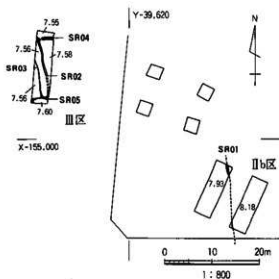


図47 Ⅱb・Ⅲ区水田遺構(数値は水田面の標高m)

ii) 溝(図24)

上記水田遺構と同様に長原4A層によって埋没する溝が2条ある。場所はⅠ区の南端で、東西方向に走るこの溝の位置は復元条里の坪境線上に当たる。これを南からSD18・19とする。両者は9mほどの間隔を置いて並走し、SD18は幅2.3～3.1m、深さ1.2m、SD19は幅0.8～2.5m、深さ0.6mを測る。灌漑用水路としても使用されていたであろう。

(櫻井)

5) 小結

i) 古墳時代遺構の時期

今年度に発掘した古墳時代の遺構のうち、おもな遺構の時期を出土遺物から検討してみたい。竪穴住居はSB01・03からTK208 型式期までの土器が出土しており、長原遺跡の古墳時代後半期の土器における2期(註8)の時期に相当するものである。切合い関係からもっとも新しいと思われるSB05の時期は出土遺物がなく不明だが、3期まで下る可能性もあるだろう。一方、掘立柱建物については図示していない遺物も含めて検討すると、SB08・09が2期に属する可能性があるものの、その他の建物は3・4期と考えられる。

井戸SE01は4期に廃絶したことが明らかで、土壌はSK04・06が4期、それ以外は3期と思われる。また、溝はSD01・05・06が4期に埋没したと思われるほか、SD02・17は3期、SD04は2期にさかのぼる可能性がある。

ii) 検出遺構の特徴

掘立柱建物・竪穴住居

2～3期の段階に、ほぼ同じ場所で竪穴住居が3回建替えられている。このように同じ場所で複数回の建替えを行う例は、1985年度調査のⅥ・Ⅷ区や中央地区1989年度の調査例に認められるが、これらもまた2期および3期の古い時期の例である。この竪穴住居と同時期の掘立柱建物としてSB08(建替えてSB07)・09があるが、方位はそれぞれ竪穴住居SB04・01と同じである。また、SB09の北と南に位置するSK01・03は、いずれも2～3期の遺物を出土し、2期に掘られ、3期に埋没すると考えられることから、この建物と関連する可能性がある。以上のことから、3回の建替えを行った1棟の竪穴住居(SB01～04)と浅い土壌(SK01・03)などを伴い、やはり建替えられたと思われる総柱建物(SB07～09)が集落の構成単位の一部とみることができる。

掘立柱建物はSB08が2間×2間であるほかは、全体の構造は不明である。この建物は側柱の内側に、その掘形を切って小さな柱穴があり、中央にも小さな柱穴がある。これらは側柱構造とは別に独立した床構造をなすものと考えられ、1983年度調査SB31[大阪市文化財協会1992a]にもみられた特徴である。

井戸

長原遺跡西地区の集落では、今回のSE01を含めてこれまでに7基が検出されている。井戸は須恵器におけるTK216 型式またはTK208 型式の時期のものが2基、TK23 型式からMT15 型式の時期のものが3基である。今回のSE01はMT15 型式からTK10 型式の時期と

考えられ、当遺跡の古墳時代の井戸としてはもっとも新しい時期に比定できる。

この井戸は、出土遺物にもこれまでの井戸とは異なる要素を見い出すことができる。その一つは、木製品に須恵器製作に係わる叩き板や当て具があり、また、窯業に関連する可能性をもつ横杵がある点である。これは、この井戸を使用した集団が須恵器の生産に当たっていたことを示しており、「馬池谷」または、その支谷斜面を利用した須恵器窯の存在を示唆するものといえよう。

次に、3点の鑢の羽口片が出土したことである。これまで、長原遺跡内の5・6世紀の集落遺構の調査では鑢の羽口や鉾澤などの鍛冶関係の遺物は出土していなかった。今回の資料のみで当地区における鍛冶の実体を想定することはできないが、これまでその痕跡すらみられなかった資料が出土した点に意義がある。

今回のSE01は、土器生産と鍛冶という手工業生産に係わる資料が出土したことが大きな特徴といえるが、これを、この地域の6世紀中葉における情勢の反映とみるか、この地点に居住した集団の特質とみるかは、周辺における今後の発掘成果に負うところが大きい。

(京嶋)

註)

- (1) 地層の表記は長原遺跡標準層序[趙智済・京嶋寛・高井健司1992a]に従う。
- (2) 林田氏は、日本の在来馬を、木曾馬(体高124~142cm)や御崎馬(体高125~140cm、平均132cm)に代表される「中形馬」と、トカラ馬(体高108~121cm、平均115cm)に代表される「小形馬」の二つに分類している[林田重幸1974]。
- (3) 宇野文男1974、「バシー文化圏における土器づくり」：『季刊人類学』5-1、pp126-148
周達生1979、「中国タイ族の土器づくり」：『季刊民族学』8号
江口一久1979、「モバ族の土の器」：『季刊民族学』9号
青柳洋治、岡崎完樹1981、「土器の露天焼き」：『季刊民族学』15号
森淳1992、『アフリカの陶工たち』中公新書
- (4) これらの資料の一部は[奈良国立文化財研究所1993]に掲載されており[146(17117)、147(17112)、148(09426)、149(01009)、154(09008)、155(09007)]、木器の名称はこれに従った。樹種の同定は奈良国立文化財研究所光谷拓実氏にお願いした。
- (5) 製塩土器の分類などは[京嶋寛1992]に従う。
- (6) 本書中のウマ白衛からの大まかな年齢推定は[Goody, P.C. 1983]によった。
- (7) 報告書では、出土状態を検討し、さらに遺跡の立地を加味し、井戸出土のウマを旱害時の祈雨祭祀または豊穰農耕儀礼に伴う犠牲と関連付けている。
- (8) 古墳時代後半期の土器の時期は[京嶋寛1993]に従う。

第2節 長原遺跡中央地区の調査(NG86-36・60①・60②・90次調査)

1) 層序と各層の出土遺物

本地区では4次に分けて調査が行われている。以下、各調査地を次のように呼称することとする。36次がⅠ区、60①次がⅡ区、60②次がⅢ区、90次がⅣ区である。Ⅱ・Ⅳ区では東西に分れて調査区が設けられているため、それを東調査区・西調査区と呼び分ける。各調査地の位置は図48に示す通りである。なお、Ⅰ区の西隣をNG85-77次で調査しており、その成果も合わせて報告する。

i) Ⅰ区の層序(図49)

沖積層上部層

長原1層：現代の作土層で、平均層厚は20cm弱である。

長原2層：江戸時代の含砂灰オリーブ色シルトである。作土層が2枚に細分されるが、下位の2b層が主体である。2a・2b両層の下面で耕作に伴う溝群が検出されている。

長原3層：本層は当調査地では確認されていない。

長原4層：含砂礫黄褐色シルトで、少し粘性を帯びる。層厚10～15cm程度である。

長原5層：オリーブ褐色の水成砂礫層で、層厚5～20cm程度残存していた。

長原6A層：奈良時代の作土層で、暗灰黄色粘土質シルトである。上面を長原5層で被覆されていたため、水田畦畔が残っていた。本層下位には砂礫が混入しており、水成の長原6Aii層が耕作によって失われたようである。

長原6B層：褐灰色～灰黄色粘土質シルトの作土層である。本層の上面は6A層に破壊されているため畦畔の有無は不明であるが、本層から掘込まれた溝が検出された。なお、ごく部分的に本層の上下で下位層のブロックを含む淘汰不良の薄い地層や灰黄褐色あるいは

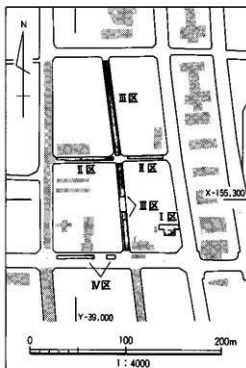


図48 中央地区の調査区分

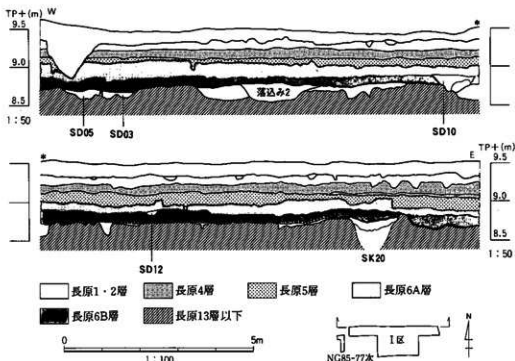


図49 中央地区Ⅰ区の層序

褐灰色の粘土質シルト層が認められた。本層の基底面で古墳時代の遺構が検出された。

沖積層下部層

長原 13 層：いわゆる長原地山層で、黄灰色の粘土質シルトである。

(横山)

ii) Ⅱ～Ⅳ区の層序 (図50・51、図版6)

沖積層上部層Ⅰ

長原 1 層：現代の作土層である。

長原 2・3 層：含砂礫灰黄～オリーブ褐色シルトで、島島間の凹みに厚く堆積する。

長原 4A 層：Ⅱ区西調査区、Ⅲ区中央部にみられる。にぶい黄色粗粒砂の水成層で、層厚 15cm 前後である。

長原 4Bi 層：褐色粘土質シルトである。

長原 4Bii 層：褐灰色シルト～中粒砂で、ラミナが良好に観察される水成層である。層厚 10～40cm である。

長原 4Biii 層：灰色シルト～粘土で、Ⅲ区では上面に水田址が見つかっている。水田面

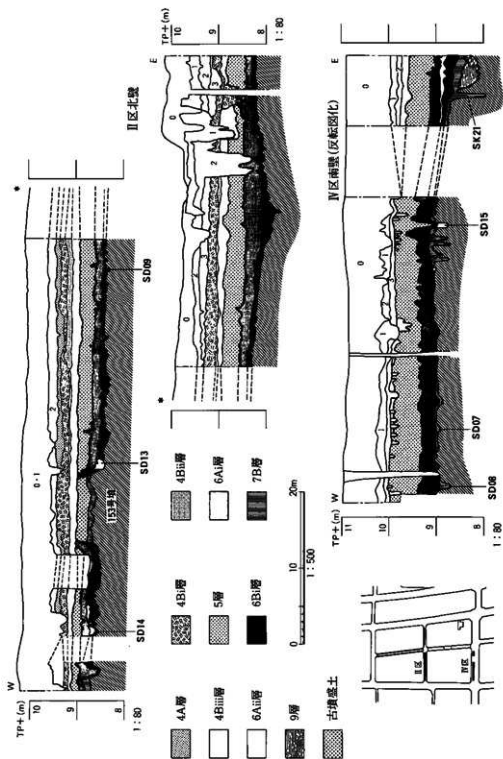


図50 中央地区Ⅱ・Ⅳ区の層序

は標高8.78～9.21mにある。Ⅲ区北端付近には幅約30m、深さ約0.4mの窪地があり、平安時代の黒色土器などが出土している。この窪地からは飛鳥時代の土器もやや多く出土した。

長原 5 層：灰黄色シルト～粗粒砂の水成層。

長原 6Ai 層：オリーブ黒色粘土質シルトで、上面に水田趾が検出されている。Ⅲ区北端では標高8.32mであるが、同区の北に位置するNG86-109次調査地[大阪市文化財協会1992c]では標高8.5～8.6mに同層上面の水田が見つかった。

長原 6Aii 層：灰オリーブ色細砂の水成層で、ラミナをよく残す。SD13などの埋土ともなっている。この溝からは、後述するように平城宮Ⅱの土器が出土しており注目される。NG86-109次調査地[大阪市文化財協会1992c]では本層を掘込む北区SK012から飛鳥Ⅳ～飛鳥Ⅴと考えられる土器片が出土していることから、当層の下限については飛鳥Ⅳとみられていたが、当層の年代については再考の余地ができたことになる。

長原 6Bi 層：暗オリーブ灰～オリーブ黒色シルト質粘土である。Ⅱ区東調査区に谷状の地形があり、本層が厚く堆積する。下部については長原 7A 層に含まれるかもしれない。

沖積層上部層Ⅱ～沖積層下部層

長原 7B 層：黒色シルトで、主としてⅣ区にみられる。

長原 9 層：褐灰色細粒砂～中粒砂で、後述するSD01の埋土となっている。

長原 12/13 層漸移帯：シルト質粘土～粘土で、淡いピンク色を呈する。火山灰を多く含む。153・154号墳の墳丘下などにみられる。

長原 13 層：明オリーブ灰色シルトである。

(櫻井)

iii) 各層の出土遺物(図52・53、図版47・48)

長原 4B 層出土遺物

215・216はⅢ区の北端部で出土した須恵器杯である。底部の1/4ほどが遺存しており、飛鳥Ⅳから平城宮Ⅰに当ると考えられる。この土器の出土地点では4B層の直下に長原 6Aii 層の水成層が厚く堆積しており、そのためこうした時期の遺物が当層に含まれることになったのであろう。これらの須恵器とともに平安時代の黒色土器も出土している。

長原 5 層出土遺物

213・214の土器は甕と甔のミニチュアである。ともにⅢ区の南端で出土し、大きさをみて、セット関係にあったことも考えられる。213は口径9.2cm、器高4.6cm、214は口径9.7cm、器高6.2cmである。214の底部は焼成前に内側から穿孔されている。217はⅢ区北半

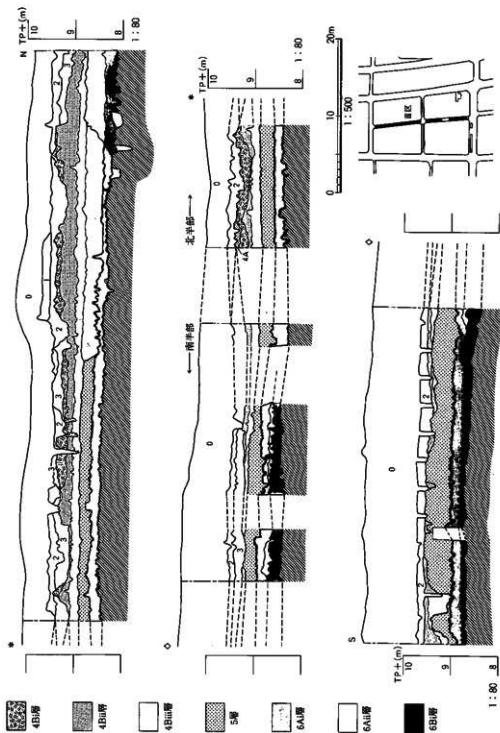


図51 中央地区Ⅲ区の層序

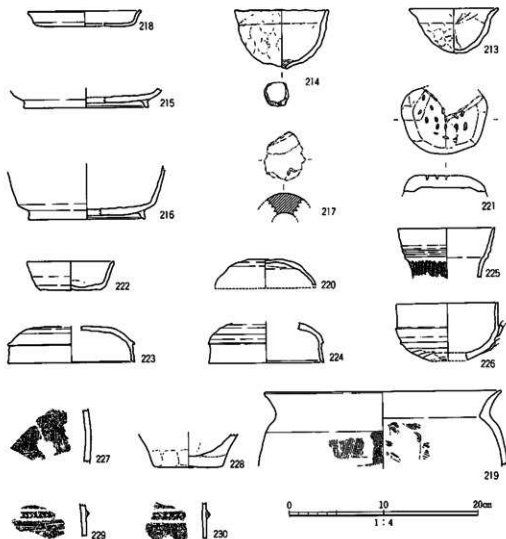


図52 中央地区各層の出土遺物

長原4B層 (215・216)、長原5層 (213・214・217)、長原6Ai層 (218・220)、長原6Aii層 (219)、
長原6Bi層 (221～229)、長原9層 (230)

部で出土した轆羽口で、その先端に近い部分の破片である。外側面は緑白色から濃緑色、
先端面は褐色のガラス質の被膜で覆われている。胎土は緻密で、含まれている砂礫は粒径
が1mm前後が主で、7mmのものが少量入っている。また、モミヤスサが混ぜ込まれている。

長原6Ai層出土遺物

218はI区出土の土師器皿である。口径11.8cm、器高1.6cmで、平坦な底部と外反する口縁
部をもつ。平城宮Vに当ると思われ、同層内に包含される遺物の中ではもっとも新しい様

式に属する。220はⅢ区北部で出土した須恵器杯蓋である。天井部と口縁部を分ける凹線や稜はない。飛鳥Ⅱに該当するものであろう。

長原 6Aii 層出土遺物

後述するSD13出土遺物は同層内のものであり、その他にも土師器甕219がある。219は口径約25cmを測り、体部に把手の付く形態と思われる。Ⅱ区西調査区で出土した。

長原 6Bi 層出土遺物

221～226はⅠ区で出土したものである。221は円板状の土師質の製品で、裏面には剥離した痕跡がある。表面には刀子状の工具による刺突が不規則に施されている。馬形埴輪の鞍褥の可能性がある。222は飛鳥Ⅲと考えられる須恵器杯である。口径9.0cm、器高3.0cmである。223・224はTK23型式とみられる須恵器杯蓋である。本層基底面に検出されている遺構群に係属するものであろう。225は須恵器直口壺の口縁部で、断面三角形の突帯を2本巡らし、その下部に櫛掻波状文を入れる。TK23型式に当るだろう。226は把手付碗で、口径10.7cmを測る。体部中央に断面三角形の稜が立ち、その下部を手持ちヘラケズリしている。これもTK23型式の時期のものと推定される。231は鉄鏃で、Ⅲ区北半部から見つかったものである。鏃身は側縁の直線的な柳葉形で、関は刃部に対してほぼ直角になる。頸部の長さは不明だが、長い頸部をもつものであったことが推測される。また、莖被は刺状に張出している。基部は長さ5.1cmを測る。

以下の3点は当層の年代から大きくさかのぼるものであるが、その時期の遺構の存在を推測させる点で注意される。227は弥生中期の壺の破片とみられ、表面に竹管で斜格子状の文様を描いている。228・229は縄文晩期の土器で、228は底部、229は突帯の付く体部の破片である。227はⅢ区、228はⅡ区西調査区、229はⅣ区西調査区から出土した。

これらのほかに、Ⅱ区東調査区からウマ左下顎骨の関節突起が1点出土している。

長原 9 層出土遺物

230は縄文晩期の鉢の破片である。4cm四方の大きさで、突帯をもち、その上にO字形のキザミを入れる。Ⅳ区東調査区に検出したSD01内から出土した。



図53 Ⅲ区出土鉄鏃

(櫻井)

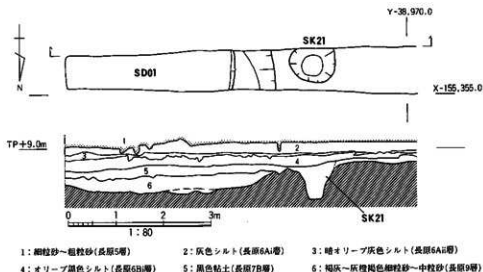


図54 IV区東調査区SD01・SK21平・断面図

2) 弥生時代以前の遺構と遺物

i) 溝(図54)

SD01

IV区東調査区にある自然流路である。幅4.4m以上、深さは約0.5mある。この付近の微地形からみて、南から北に向かって流れていたと推測される。長原9層の褐灰色細粒砂～中粒砂によって埋没している。前項で述べた鉢230が出土している。縄文時代晩期～弥生時代前期に属する流路であろう。

ii) 土壌(図55～57、図版3)

Ⅲ区北端部で弥生時代後期のものと考えられる土壌SK01～08がまとめて検出されている。これらはNG4次・NG87～35次調査地、そして[大阪文化財センター1986]に報告される調査地に分布する土壌群と同様の性格のものと思われ、この付近一帯に数百基にのぼる土壌の密集する状況が認められる。

これらの群集土壌の性格と意義については、[京嶋覚1991]にすでに検討されている。それによると、平面形には楕円形と円形に近いものがあり、埋土は、上層に均質なシルト層、下層にブロック土を多く含むA類と、均質な黒褐色粘土のB類に大別されるという。また、断面形は三角形(1類)、袋状(2類)、浅い皿状(3類)に分類できるという。土壌の立地や分布傾向、他遺跡の類例についての検討の結果、この群集土壌については粘土探掘坑である可能性が高いと考えられている。

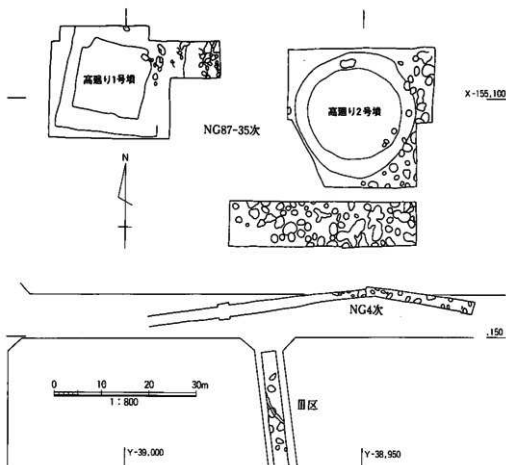


図55 弥生時代群集土坑の分布

SK01

平面形は不整な楕円形で、北端がやや狭まっている。長軸長1.8m、短軸長1.0mである。断面形は2類、埋土は黒～黄灰色の粘土で、B類に含まれよう。深さは0.3mである。

SK02

やや不整な円形で、1.7m×1.4mを測る。断面形は2類、埋土下部にブロック土を含み、A類といえる。深さは約0.4mである。

SK03

2.1m×1.8mのやや不整な円形を呈する。断面形は1類あるいは2類であり、南半部が1段深くなっている。埋土は下部にブロック土を含むA類で、埋土を切ってSD02が掘削されている。深さは約0.5mである。

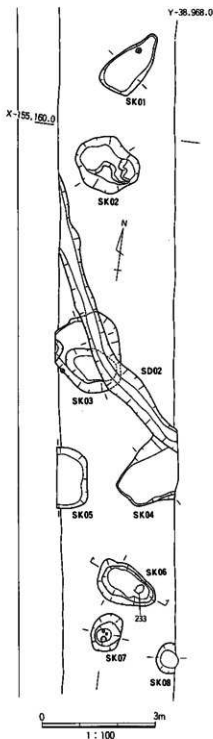


図56 III区北端部土坑群と溝

SK04

後述するSD02によって肩が壊されているが、平面形は隅丸方形といえる。長辺1.8m以上、短辺0.8mである。断面形は低い逆台形で、3類、埋土の状況はA類に属するであろう。深さは35cm、弥生土器甕232が出土している。

SK05

調査区西壁内に遺構が延びているが、隅丸方形の平面プランが推定される。南北1.6m、東西0.8m以上、深さ約0.2mという規模である。断面形は3類、埋土の状況はA類。

SK06

平面形は不整な楕円形を呈し、東側がややすぼまっている。長軸長1.7m、短軸長1.1m、深さは約0.5mを測る。断面形は2類、埋土の状況はA類に分類される。掘形の東端近くから完形の弥生土器甕233が出土した。この土器は土壌の底に、掘形長軸と直交する向きで見つかったことから、意図的に埋納されたものと思われる。[京嶋覚1991]は、今回の調査地に近いNG87-35次調査地の南部(南V区)に甕の完形品が多くなることを指摘しており、なんらかの目的をもって埋納されたことが考えられる。

SK07・08

両者はともに平面円形の土坑で、SK07は直径約1.0m、深さ55cm、SK08は直径約0.8m、深さ35cmである。断面形が2類、埋土の状況がA類であることも共通する。両者は約1mの間隔をおいて東西に並ぶ。

(黒田・櫻井)

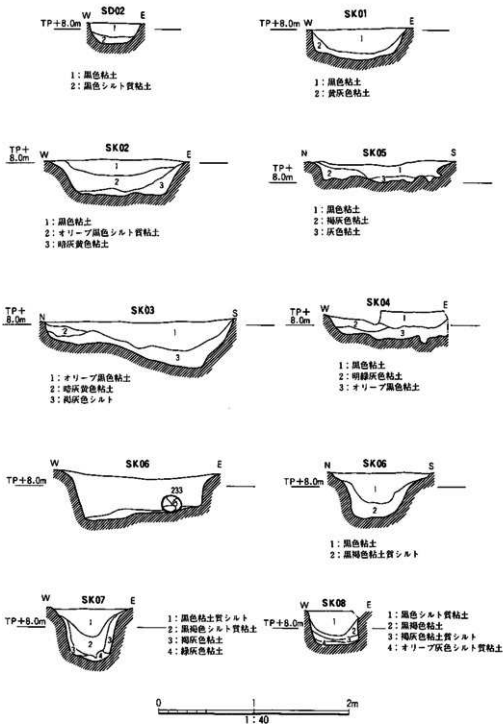


図57 Ⅲ区北端部土壌群およびSD02断面図

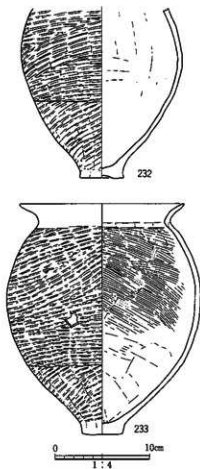


図58 SK04・06出土弥生土器

iii) 土壌出土遺物(図58、図版48)

232・233は弥生時代後期後半の甕で、前者はSK04、後者はSK06から出土した。232は口頸部を欠くが、胴部は全周の2/3が残る。最大径位置は胴部中位にあり、その下方に明瞭な接合痕がみられる。この接合痕を境に外面調整のタタキメの方向が変化している。内面の調整は風化のため明らかでないが、ユビナデあるいはハケメである。底部外面が中央で浅く凹んでおり、成形段階に輪台を作っていたことがわかる。233は完形で、口径17.3cm、器高24.0cmである。胴部中位に最大径があり、232よりも張りがある。また、胴部下位に明瞭な接合痕がみられ、この接合痕の上下で外面調整のタタキメの方向が変化する。内面には細かなハケメ調整がみられる。底部外面は平坦である。口縁部は斜め上方に外反ぎみに延び、やや鋭い端部となっている。胴部中央に直径1cmの小孔があるが、意図的なものかは不明である。また、内面には直径15cmほどの範囲に茶褐色の付着物がある。

(櫻井)

iv) 石器遺物(図59、図版49、別表2)

I区からは2点、Ⅲ区からは5点、Ⅳ区では5点の石器および石器遺物が出土した。すべてサヌカイト製で遊離資料である。内訳はナイフ形石器1点、石鏃3点、クサビの剥片2点、二次加工のある剥片1点とその他の剥片である。

ナイフ形石器

234は先端と基部が欠損したナイフ形石器で、素材剥片とその加工の特徴から瀬戸内技法によるものと認められる。広く平坦な底面をもつ盤状剥片を素材としている。背面側には1面の横長の剥離面があり、主剥離面もそれと併行する横長の剥離面で構成されている。主剥離面の打点側は、主剥離面から施された細部調整によって背部が作り出されている。刃部にも、基部側では背面から施されたやや大きめの細部調整が認められる。基部の調整

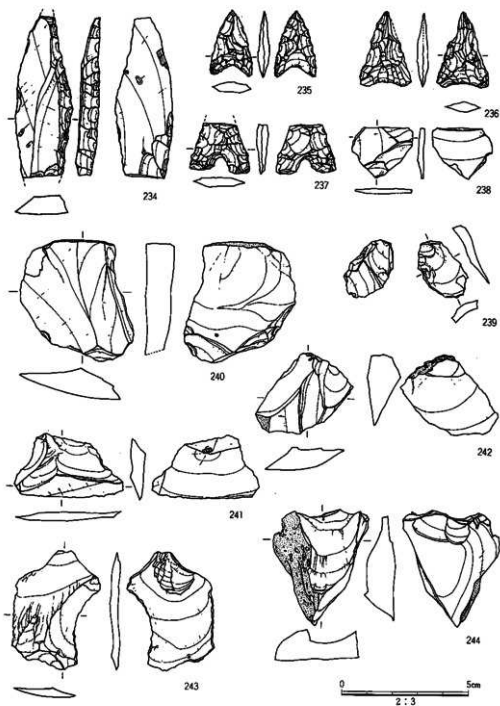


図59 中央地区の石器遺物

は欠損のため不明であるが、その欠損してできた面を打面として背面側に小さな剥離面が認められる。また、先端の欠損部よりも新しい背部の細部調整があることなどから、調整の作業中に欠損が起り、その後若干の加工を試みて廃棄されたものと考えられる。

石鏃

235は刃部の先端がやや内湾する二等辺三角形の凹基鏃である。素材となった剥片の主剥離面側と思われる右図では、刃部は左右の側縁から中央に及ぶ大きさの揃った細部調整によって作り出され、先端に向けて緩く内湾させている。裏面の刃部の調整は不揃いで、素材の剥片の背面の一部と考えられる小さな剥離面が基部付近に残存している。基部は、主剥離面側では1回、背面側では数回の剥離で抉り出し、腸袂の末端のみ小さな調整を加えて尖らせている。形態から縄文時代前半のものと考えられる。

236は二等辺三角形の凹基鏃である。表裏面ともに細部調整によって素材の剥離面はすべて失われている。刃部は全体に直線的だが、先端では細かい調整によって角度を変えて内傾させている。側縁の中央付近で大きな調整を施し、それ以外では細かい傾向がある。刃部の先端付近に古い欠損があるが、後世のものであろう。また、末端にも新しい欠損がみられる。基部は、幅が狭く鏃の中央付近に達する細部調整を並列して、緩く内湾させたものである。形態から縄文時代前半のものと考えられる。

237は幅の広い腸袂をもつ凹基鏃である。先端側の半分近くが古く折れて欠損している。細部調整によって素材の剥離面は現存しない。細部調整は基部から始まって刃部に移行している。基部では大きめの剥離を施してから、細かく数度に分けて細部調整を行うことによって抉りを深くしている。脚部でも細かい調整を行っているが、刃部ではやや大きな調整となり、直線的に作り出している。なお、左図上部の、上方からの剥離面の一部は欠損時の折れ面から広がっている。形態から縄文時代前半のものと考えられる。

クサビに関連する剥片

238はクサビの本体からはじけた剥片と考えられるものである。剥片の打点側は中央から折れて欠損している。背面の剥離面はいずれも平坦なものであるが、下端の下方からの加撃による2つの剥離面は末端がステップとなり、特に左側のものは、打点にごく近い部分も残っている。主剥離面は上方から加撃されたもので、対向する加撃によって形成された剥片であると考えられる。

239はクサビの本体からはじけた剥片と考えられるものである。背面には主剥離面と同じ打面から加撃された剥離面があり、末端でフィッシャーが発達し、ステップとなっている。

その末端に接して、反対側から加撃された剥離面があり、対向する打撃が加えられたと考えられる。主剥離面は素材の中の割れに影響されて、面が湾曲し、フィッシャーが発達している。末端は新しい欠損で損なわれている。主剥離面の左側縁には、二次的に加撃した痕跡がある。また、右側は折れて欠損している。

二次加工のある剥片

240は二次加工のある剥片である。背面は比較的広い剥離面で構成され、左図の右側縁は左側の剥離面の折れ面である。主剥離面は右図上部の自然面を打面とし、打面に対して垂直に加撃されたものである。その末端から側縁を、まず背面側から加撃し、その後、主剥離面側からも加撃して加工している。なんらかの刃部を形成しようとした可能性も考えられるが、整ったものではなく、加工の目的は不明である。

その他の剥片

241は広く平坦な打面と底面をもつ横長剥片である。背面は、同じ打面から底面に向けてヒンジフラクチャーを起す横長の剥離面と、それに切られた剥離面で構成される。右図の主剥離面の左に小さな剥離面が残存しているが、素材の石核を構成した比較的広い面であろう。盤状の剥片を素材とし、その側縁を取込む剥片と考えられ、瀬戸内技法の作業と関連させて考えることも可能である。

242は横長剥片である。素材となる礫の自然面を側縁にもつ剥離面を打面とし、打痕、打瘤が不明瞭でフィッシャーの集束しない主剥離面が形成されている。背面は自然面を打面とする末端が大きくステップした剥離面や、主剥離面と同じ打面による剥離面などで構成されている。さらに、背面の末端にも自然面が取込まれている。こうしたことから、素材とする礫の端部を加撃して、平坦な剥離面を作り出す作業の過程で生じた調整剥片と考えられる。

243は薄い縦長剥片である。主剥離面の打点部はフィッシャーが発達し、そこからバルブスカーが生じて打瘤はへこんでいる。打点の左側にみられる細長い剥離面は主剥離面が折れたものである。打点の右側にみられる細長い剥離面は主剥離面の形成以前のもので、主剥離面の打面につながる面と考えられ、加撃の角度は直角に近い。背面にはこの打面から、やはり直角に近い角度で加撃された剥離面がある。その後、左側に、主剥離面とはほぼ同じ位置に打点をもつ縦長の大きな剥離面が形成され、末端はフィッシャーの発達が著しい。これらの剥離面の末端側に位置する剥離面は右方向から加撃されたものである。この剥離面を除き、背面にみられる加撃の状況と主剥離面の状態から、この剥片が打面に対し

て垂直に加撃する作業の中で生じたことが推測される。

244は側縁に自然面をもつ剥片を素材としたものである。素材の主剥離面は右図の大きい平坦な面で、打点側は折れて失われている。左図では、縦長の剥離面がみられるが、上方からの強い加撃によって打点部付近は折れ、リングやフィッシャーの状況からも垂直に割られたものと推測される。右図の上部にも同じ方向からの薄い剥離面がみられ、同時に加撃によって形成された可能性がある。原礫の端部を割取って広い面を作り出そうとしたファーストフレイクの主剥離面の末端を、主剥離面と併行する方向で加撃したものと考えられる。

(清水)

3) 古墳時代の遺構と遺物

中央地区は古墳が密集してみられる南地区の北に位置するが、古墳の分布はまばらになるようである。しかし、長原古墳群では注目されるいくつかの古墳があり、当時の集落遺構も確認されている。

まず、同地区の中ほどにある高廻り1・2号墳(169・170号墳)の存在があげられる。両古墳は長原古墳群では古相に属し、2号墳が4世紀末～5世紀初頭、1号墳が5世紀前半と考えられている[大阪市文化財協会1991]。また、船形埴輪をはじめとする秀逸な形象埴輪が出土し、これらは1992年、国の重要文化財指定を受けた。同地区南部には七ノ坪古墳(130号墳)や南口古墳(181号墳)が見つかった。この両古墳は6世紀前半～中頃のもので、長原古墳群では新相に属するが、長原では2例のみの前方後円墳である。七ノ坪古墳では横穴式石室が確認され、金銅製馬具などの副葬品が出土している[高井健司1986]。一方、南口古墳でも馬形埴輪・人物埴輪などの出土が注目される[木原克司1989]。後述する153号墳はこの時期の小方墳である。5世紀中頃～6世紀初頭にかけては小方墳が数基知られるが、集落関係の遺構もみられる。NG89-25次調査では掘立柱建物4棟、竪穴住居3棟を検出しており[佐藤隆1989]、今回報告するⅠ・Ⅳ区でも土壇・溝・ピットなどの遺構が見つかった。また、南口古墳が築かれた場所も、それ以前には居住地として利用されていたことが明らかにされている。

i) 153号墳(図61～63、図版4・50・51)

遺構

Ⅱ区西調査区の中央にあり、一辺約10mの方墳と推定される。調査では墳丘の東・西辺

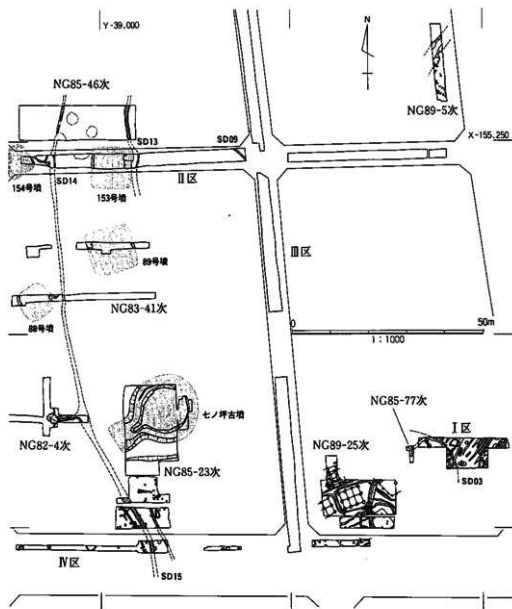


図60 中央地区古墳～奈良時代遺構

を検出したが、いずれも本来の形状を残してはいない。東辺は奈良時代の水路であるSD13によって侵食されており、西辺も幅約5mの溝状の掘込みによって変形している。西辺の掘込みは長原6B層段階のものと思われ、その埋土として白色粘土質シルトや灰白色粘土がブロック状をなしていた。墳丘盛土は黒色シルト質粘土の長原7B層(上面の標高は8.8m)の上

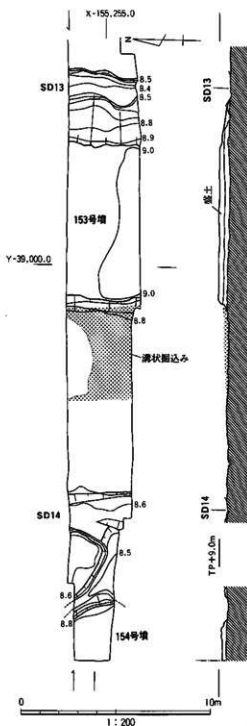


図61 153・154号墳平・断面図

部に約20cmの厚さをもっている。遺物は墳丘東部からSD13の西肩にかけてまとまって出土しており、土師器・須恵器・円筒埴輪がある。

遺物

245は土師器高杯の脚部である。外面はナデ調整されており、内面にはユビオサエ、シボリメが明瞭に残る。246は土師器壺で、ややひしゃげた球形の体部と直線的に開く口縁部に特徴がある。体部外面は下部にヘラケズリ、上部にヘラミガキが施されている。体部内面は板ナデ、口縁部はヨコナデされている。口径12.2cm、器高12.6cmである。247は小型の土師器甕で、平坦に近い底部をもち、韓式系土器の平底鉢に類似している。外面調整は口縁部がハケ調整後にヨコナデ、体部が粗いハケメ、内面は口縁部が横方向のハケメ、体部が板ナデである。口径11.0cm、器高12.2cmを測る。

248～250は須恵器杯蓋である。そのうち248・249はほぼ同形・同大で、口径11cm強、半球形の天井部をもつ。天井部のヘラケズリの方向も、ともに右回りである。TK47型式に当る。250は口径14.5cmで、天井部と口縁部の境が凹線によって分けられていることから、TK10型式に該当しよう。天井部のヘラケズリは右回り、天井部内面には同心円文が残る。251は須恵器長頸壺で、やや肩の張った球形の体部に、湾曲しながら上方に延びる口縁部をもつ。体部下

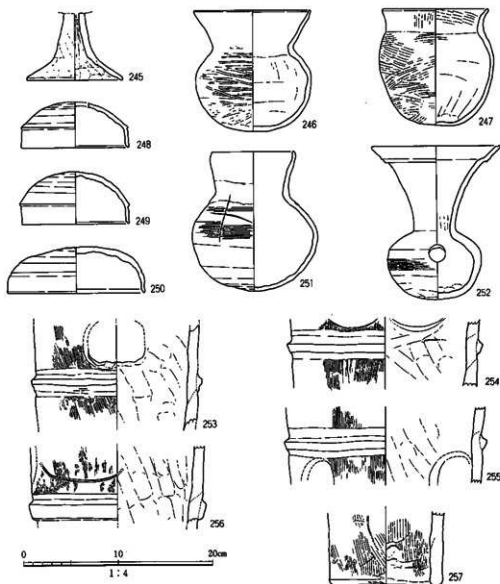


図62 153号墳出土遺物(1)

半は左回りのヘラケズリ、上半はカキメが施される。口縁部はヨコナデ調整されている。肩部に十字形のヘラ記号がある。口径8.6cm、器高14.5cmである。252は須恵器甕で、ラッパ状に開く口頸部を有する。体部下半は手持ちヘラケズリによって半球形に整えられ、体部中位にはカキメも施されている。体部中位上方に直径1.8cmの穿孔がある。口径13.6cm、器高16.1cmを測り、これらの特徴からTK10型式の甕と考える。258は須恵器中型甕であ

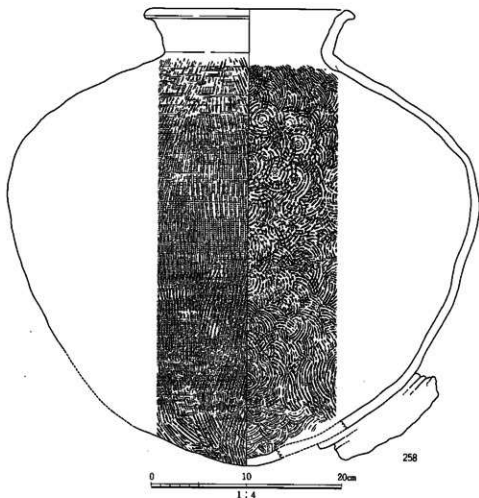


図63 153号墳出土遺物（2）

る。イチジク形の体部と斜め外方に延びる短い口頸部をもつ。口縁端部は断面三角形に作られている。体部外面には平行タタキメがみられ、底部以外にはカキメ調整も行われている。内面には同心円文が全体に残る。そのタタキメや同心円文の状況から、いったん体部を成形したのちに丸底を叩き出していることがわかる。底部には、焼台として利用された杯蓋が付着したままになっている。付着する杯蓋がMT15型式なので、この甕はMT15型式またはTK10型式に当るであろう。肩から底部にかけて釉が多量に掛かる部分がある。口径20.5cm、器高47.3cmである。

253～257は土師質無黒斑の円筒埴輪で、外面調整が一次調整のタテハケのものである。253～256は胴部の破片で、円形のスカシ孔とタガをもつ。タガには2形態あり、253～255

は断面三角形に近いが、256は外端面の幅の広い台形である。253のスカシ孔の下縁にはユビで握られた痕跡があり、埴輪がまだ柔らかい時に、このスカシ孔に手を掛け、倒立状態で移動させたことが推測される。256には上開きの円弧を描くへう記号がある。257は基底部の破片であり、復元直径が12cm強と、小型である。また、底部調整を行っていない点もこの時期の円筒埴輪としては異例であり、形象埴輪の基底部の可能性もある。

ここで出土遺物の内容を整理しておく。まず、須恵器はTK47型式～TK10型式のものである。円筒埴輪は外面調整がタテハケ一次調整のみで、タガは低く、器壁のやや厚いものであった。古墳の造営時期についてはTK47型式の時期を考えることも一案であるが、埴輪の特徴が南口古墳(TK10型式段階)のものと類似しており、少し遅らせて、MT15型式ないしTK10型式の時期を推定する。須恵器甕258の焼台は須恵器杯蓋を数枚重ねたもので、それを甕底部の2個所に、口縁部を甕側に向けて用いていた。杯蓋はすでに焼け歪んで扁平に潰れており、杯蓋の断面にも軸が掛かることから、転用する際に整形していたことが推測される。焼台には窯体の一部も付着しており、窖窯の床の状況や床に対して土器がどのように置かれていたかを知ることができる。

ii) 154号墳(図61)

Ⅱ区西端に墳丘の一部を検出した。前述の153号墳の西約15mにある。墳形や規模は不明である。墳丘は長原7B層の黒色粘土(標高8.9m)の直上に盛土して築かれていたと思われるが、盛土は残っていなかった。7B層下には、火山ガラスを多く含んだ淡いピンク色のシルト質粘土がみられる。部分的に確認される東周溝の底から墳丘最高所までは35cmである。この古墳に伴う遺物は出土していない。

(黒田・櫻井)

iii) 土壇・落込み

SK09(図64・65・68、写真8、図版52)

I区の南西隅に位置しており、長原6B層の基底面で検出した。残存幅約0.8m、長さ約1.5m、深さ0.1m余りの土壇で、底面は緩やかな斜面をなしていた。黒褐色粘土質シルトの埋土から須恵器262～264・266～268、土師器259～261のほか、馬歯などが出土した。

259・260は土師器高杯で、杯部のみが遺存する。ともに碗形の杯部をもち、口縁部が内湾ぎみに立上がるものである。口径は13cm前後である。259の杯部内面には正放射状の暗文がある。261は土師器甕の口縁部から肩部である。体部外面はハケ調整、口縁部はヨコナデされ、大きく外反する。復元口径19.6cm。

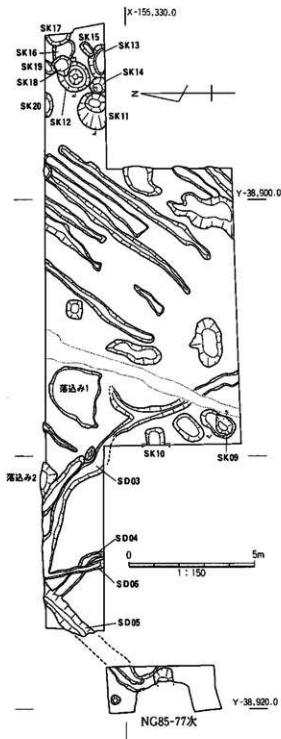


図64 I区古墳時代遺構

262・263は須恵器杯身である。
262は復元口径13.0cmで、口縁部に内傾する面をもつ。263は口径9.6cmと小型で、口縁端部は丸くおさまられている。底部のヘラケズリはともに右回りである。262はTK

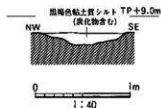


図65 SK09断面図

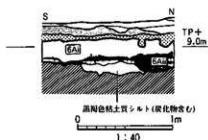
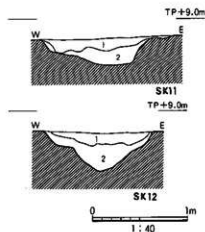


図66 SK10とその上層断面図



- 1: 黒褐色13層のブロックと黒褐色粘土質シルト
- 2: 黒褐色粘土質シルト、少量の黒褐色13層のブロック含む

図67 SK11・12断面図

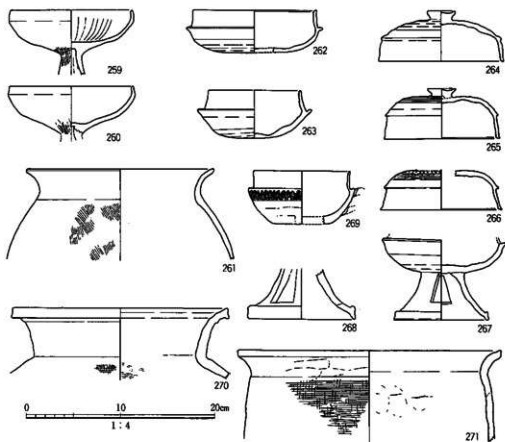


図68 SK09・落込み2出土遺物
SK09 (259~264・266~268)、落込み2 (265・269~271)

23 型式、263はTK47 型式と考えられる。なお、262の底部には火だすきふうの痕跡がある。264・266は高杯蓋である。264は口径13.1cm、天井部と口縁部の境にややあまい稜をもつ。266は口径12.7cm、天井部の末端に鋭い稜をもち、天井部のカキメ調整後に御搦点文が施されている。TK23 型式に該当するものと思われる。267・268は有蓋高杯である。267は対向する2方向にスカシ孔をもち、脚底径9.8cmである。268は3方にスカシ孔をもち、脚端部に幅の広い直立する面を作る。ともにTK23 型式と考えられる。

SK09からはウマ左上顎・下顎の臼歯が各1点出土している。出土状態は不明であるが、TK23 型式およびTK47 型式の須恵器と伴出したことは注目される。上顎・下顎歯のいずれの歯根も形成されており、年齢は5才以上と推定される。古墳時代にさかのぼるウマの出土例は、長原遺跡中央地区においてはこれが初例である。

(積山・久保・櫻井)

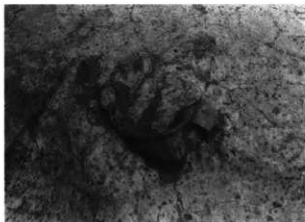


写真8 SK09土師器壺出土状況



写真9 SK13断面（北から）

SK10(図64・66)

SK09の北約1.5mに位置し、西半が調査区外に続く土壌である。長原6B層の基底面で検出している。残存幅が約1.2m、深さは0.1m余りであった。底面にはやや凹凸が認められた。埋土はSK09と同様で、須恵器・土師器などが出土したが、その時期もSK09とほぼ同時期とみられる。

SK11～20(図64・67、写真9、図版3)

I区の東端で10基の土壌を検出した。平面形は円形に近いものが多いが、長方形に近いものもある。深さは、0.1m程度のもの(SK17)から0.5mのもの(SK13)までである。埋土は長原7層と13層のブロックからなり、人為的に埋められたものである。また、すべ

ての土壌の下層(埋戻しの当初)には長原7層が、程度の差はあれ、堆積していることが共通点である。したがってこれらの土壌は、本来、7層内の遺構かと推測される。切合い関係からみると、SK12・13・16がもっとも古く、SK12から埴輪・土師器・製埴土器など古墳時代の遺物が出土し、SK13からも土師器が出土しており、上記の推測と矛盾しない。

SK21(図69・71、図版5・53)

IV区東調査区にある長原7B層内の遺構である。平面形は直径約1mの円形で、平坦な底面をもつ。埋土は黒色粘土で、長原13層の白色粘土ブロックを含んでいる。埋土中位から土師器壺272・須恵器杯身276が出土した。

土師器壺272はやや下彫れの体部をもつ小型品である。ほぼ完存するが、口縁部の一部が欠損する。口縁部はヨコナデ調整、体部にはユビナデ、ユビオサエがみられる。底部付近

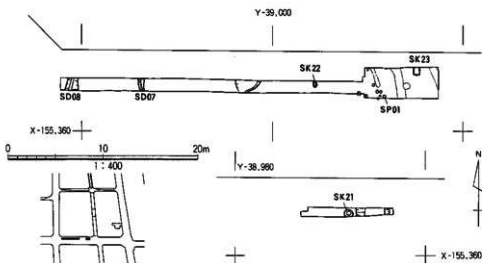


図69 IV区古墳時代遺構

のみハケ調整されている。口径9.2cm、器高11.1cmである。須恵器杯身276も口縁部のごく一部を欠く以外はほぼ完存する。口縁部内面に浅い凹線が巡り、底部のヘラケズリは右回りである。口径10.8cm、器高5.5cmである。TK23 型式のものであろう。

SK22(図69・71)

IV区西調査区にある長原 7B 層内の遺構である。平面楕円形で、長径0.7m、短径0.4m、深さ5cmの規模である。製塩土器277・278が出土している。

277は親指大の破片であるが、外面に横方向の平行タキ、内面にナデ調整を行っていることがわかる。278は口縁部の1/2が残るが、277とは異なり、外面ユビナデ調整で、タキを用いていない。口径は4.4cmである。両者とも胎土に若干の砂粒を含み、色調は灰白色である。

SK23(図69～71、図版5・53)

IV区西調査区にあり、SK22の10mほど東に位置する長原 7B 層内の遺構である。遺構の北端が調査区北壁内に入るため全体はわからないが、検出した範囲からは長方形の平面形態が推測される。東西75cm、南北80cm以上である。肩の検出面から底までは10cmほどの深さであるが、遺物が肩のレベルよりも高い位置で出土していることから、本来の深さはその倍以上であった

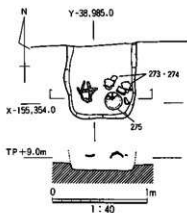


図70 SK23平・断面図

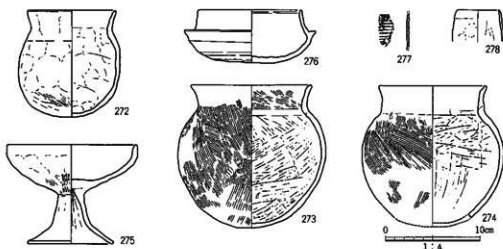


図71 SK21・22・23出土遺物

と考えられる。底は平坦に掘られており、南東隅から土師器甕273・274、土師器高杯275が出土し、その西側から炭化した木片が見つかった。埋土は黒色シルトで、炭が多く含まれていた。

土師器甕273・274はほぼ同大の小型甕である。ともに体部外面はハケ調整、内面はヘラケズリされている。273の口縁部が緩やかに外反するのに対して、274では垂直に立上ったのち、先端付近で外方に開く。273は口径12.6cm、器高14.8cm、274は口径11.2cm、復元高14.5cmである。土師器高杯275はほぼ完形に復元できた。口径13.3cm、器高10.4cmである。杯部は碗形を呈し、口縁部を内湾させ、端部を丸くおさめている。脚部はラッパ状に開き、内外面をナデ調整する。柱状部内面にはシボリメ、杯部と脚部との接合部には棒状工具による刺突痕がある。

落込み1・2 (図64・68、図版52)

I区中央付近の数箇所まで深さ5cm以下の地山の落込み1ほかを検出している。一応、遺構と思われるが、自然地形の凹凸や上層からの影響による可能性も否定できない。いずれも須恵器・土師器の細片が出土している。落込み2は北半が調査地外に続くもので、残存する東西幅約1.4m、深さは0.2m余りである。後述のSD03から枝別れした溝を切っていた。須恵器265・269～271、土師器・埴輪片などが出土している。

265は須恵器高杯甕で、カキメの施された丸みのある天井部を有する。口径12.1cm、つまみを含めた高さは5.2cmである。269は把手付碗で、口縁部と体部の境に幅の広い段があり、蓋を受けるためのものかと思われる。また、その直下に櫛描波状文がみられ、体部下半は

手持ちヘラケズリされている。復元口径10.1cm、器高5.5cmである。270は中型甕の口頸部である。口縁端部は上下につまみ出して幅広の面を作り、その直下に断面三角形の突帯が1本巡る。復元口径22.6cmである。271は須恵器甕の口縁部から体部にかけての破片である。口縁部は外反し、先端を上方につまみ出している。体部外面に平行タタキメとカキメがみられる。復元口径27.6cmである。これらの須恵器はおおむねTK23型式に属するであろう。

(横山・櫻井)

iv) 溝

SD02(図56・57、図版3)

Ⅲ区北端で検出した長原6Bi層基底面の遺構である。弥生時代後期の土壌SK03・04を切って掘られており、埋土の状況などから古墳時代の溝と思われる。幅0.5～0.7m、深さ約0.2mで、南から北に向って湾曲しながら延びる。埋土は2層に分れ、上部が黒色粘土、下部が黒色シルト質粘土である。

SD03・06(図64・72、図版53)

ともにⅠ区の遺構である。SD03は調査区西半を南東から北西にかけて弧状に走る溝である。幅は平均して0.5m前後、深さは南部では数cmしか残っていないが、北部では10cm以上であった。途中2箇所で二股に分れており、またSD06とは同一埋土と見受けられた。SD06は幅25cm、深さ10cmである。なお、北壁の南で二股に枝別れるSD03は、その北側の溝が落込み2に切られている。SD03から須恵器279・土師器・製塩土器などが出土し、SD06からも須恵器・土師器などが出土している。

279は須恵器高杯蓋で、天井部と口縁部の境に鋭い稜をもち、外方に大きくつまみ出された端部が特徴的である。やや丸みのある天井部のヘラケズリは右回りである。口径13.5cm、つまみを含めた器高は5.1cmで、TK23型式かと思われる。

SD04・05(図64・72、図版53)

ともにⅠ区の遺構である。SD05は西端で検出した溝で、NG85-77次調査で検出した溝と一連のものである。南西から北東



写真10 SD05断面(北東から)

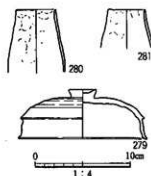


図72 SD03・05出土遺物

へ向っており、幅約0.7m、深さは0.2mであった(写真10)。土師器片、製塩土器280・281が出土した。SD04は幅0.4m、深さ3cmで、須恵器・土師器・製塩土器などが出土した。両溝の切合い関係は不明である。

製塩土器280・281は口縁部全周のうち1/3が残る破片である。口径4cm前後、外面調整はユビオサエによる。胎土は精良である。

SD07・08(図69・73)

いずれもⅣ区西端付近にある南北方向の溝である。SD07は長原7B層基底面検出遺構で、幅45cm、深さ5cm、SD08は7B層下面遺構で、幅1.1m、深さ20cm、検出長はともに1.3mであった。埋土はSD07が灰オリーブ色シルト、SD08が黒色シルトである。

溝群(図64)

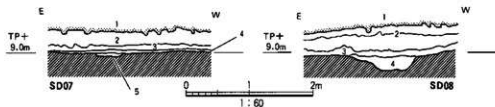
Ⅰ区東半部で検出した平行する直線的な溝群で、方向は南西から北東である。幅は0.3～0.5m程度で、深さは数cm以下しか残っていなかった。鋤溝あるいは畑の畝など、耕作に関連するものとみられる。南東隅の2条、北西部の1条を含めて計10条検出したが、そのうち2条から土師器などが出土している。

(積山・櫻井)

v) ビット(図69、図版5)

Ⅳ区のSK22とSK23の間には9基のビットが見つかった。長原6Bi層の基底面で検出されたが、本来は長原7B層内の遺構であろう。直径20～35cmの円形のものが多く、中には隅丸方形のものもある。深さは10～40cmである。図78に調査区の南壁にかかったSP01と周囲の地層の状況を示した。

(櫻井)



1: 細粒砂～粗粒砂(長原5層) 3: オリーブ黒色シルト(長原6Bi層) 5: 灰オリーブ色シルト
2: 灰色シルト(長原6Ai層) 4: 黒色シルト(長原7B層)

図73 SD07・08断面図

4) 飛鳥・奈良時代の遺構と遺物(図60・82)

本地区ではNG86-109次・NG87-35次調査において飛鳥～奈良時代にわたる4面の水田遺構が検出されており、その成果が[大阪市文化財協会1992c]に報告されている。その第1・第2水田は長原7Aii・7Ai層をそれぞれ作土とするもので、前者の時期については明らかでないが、後者は飛鳥Ⅲに埋没する水田と考えられている[趙哲済・京嶋覚・高井健司1992a]。第3水田は長原6Bi層上面の遺構で、長原6Aii層によって埋没する。6Aii層の時期については、これまで飛鳥Ⅳと推定していたが、本項で述べるSD13出土の遺物から平城宮Ⅱまで下る可能性が出てきた。第4水田は長原6Ai層上面の遺構で、奈良時代末の洪水層である長原5層によって覆われるものである。今回の報告ではその第3・第4水田の時期の遺構が主としてみられる。

i) 長原6Bi層下面検出遺構

溝(図60・75、図版6)

SD09 II区西調査区東端にある溝で、南東から北西に掘られている。幅約0.4m、深さ15cmほどで、約5m分を検出した。埋土は黒色粘土である。

落込み(図74)

I区東端で、東への落込みを検出している。トレンチ内での深さは15cmである。長原6Bi層自体の落込みであるが、直上の長原6Ai層の畦畔がこれに沿って位置していることから、自然地形と関係するとみられる。

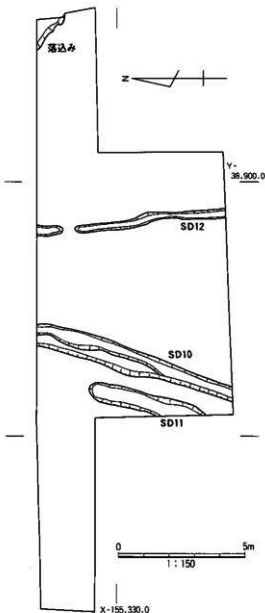


図74 I区長原6Bi層上面および下面検出遺構



図75 SD09・13・14断面図

ii) 長原 6Bi 層上面検出遺構

溝

SD10・11 両者とも I 区の遺構である(図74)。SD10は幅0.6～0.9m、深さ15～20cmの溝で、方向は北で東に20°程度振れている。下層には水成の砂が堆積していた。長原 6Aii 層より古い水成層の可能性もある。須恵器・土師器片などが出土している。SD11はSD10の西隣に位置しており、同じ方向をとる溝で、幅0.7m前後、深さ5cm程度であったが、途中で失われていた。上層からの削平のため確実ではないが、この2条の溝に挟まれた幅0.6m前後の部分は、元は畦畔であった可能性がある。

SD12 I 区にあり、幅約30cm、深さ5cm余りで、南北方向の溝である(図74)。直上の長原 6Ai 層の畦畔と同位置で検出した。上層の畦畔の水口に当る位置では失われていた。須恵器・土師器・埴輪などの破片が出土している。

SD13 II 区西調査区の中央にあり、153号墳の墳丘東側を掘込んで造られている(図61・75、図版4)。幅2m弱、深さ0.2m程度の南北溝である。埋土は水成のシルト～細粒砂で、長原 6Aii 層と推定されるものである。溝底から土師器杯282・283が出土した(図76、図版48)。

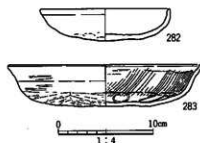


図76 SD13出土土師器

土師器杯282・283のうち、前者は完形、後者も全体の1/3を残すものである。282は内湾ぎみの口縁部をもち、口径13.6cm、器高3.3cmである。283は口縁部を外反させたのち、端部で内側に丸め込むもので、内面には連弧状および斜放射状1段の暗文をもつ。底部外面はヘラケズリされるが、木葉痕を残す。口径20.3cm、器高4.4cmである。これらは平城宮 II に編年される。

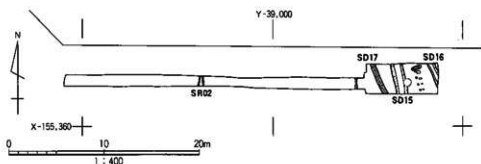


図77 IV区西調査区奈良時代遺構

SD14 II区西調査区の西寄りにある南北溝である(図61・75)。検出時の規模は幅1.2m、深さ15cmである。埋土はSD13と同様である。

SD15～17 いずれもIV区にある南北溝で、8mほどの区間に3条が並走し、北で西に傾いている(図77・78)。埋土は暗オリーブ灰色シルト～細粒砂で、長原6Aii層に相当する。SD15は幅1.2m、深さ0.7m、SD16は幅0.8m、深さ0.4m、SD17は幅0.5m、深さ0.3mである。SD15はII区SD14に連続すると推測され、七ノ坪古墳を迂回するかたちで設けられた水路であろう(図60)。SD16からは平城宮Iと考えられる須恵器杯蓋が出土している。

畦畔

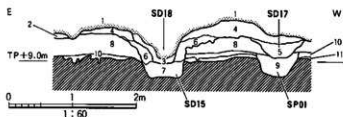
SR01 III区北端にある南北方向の畦畔で、1.5m分を検出した(図81)。下幅0.4m、高さ0.1mである。

SR02 IV区西調査区にある南北方向の畦畔である(図77)。下幅0.5m前後あるが、高さは数cmが残るのみである。

iii) 長原6Ai層上面 検出遺構

畦畔

SR03～06 これらはI区に見つかった水田畦畔で、いずれも下幅0.4m前後、高さ0.1m前後の規模で、8世紀末～9世紀初頭の洪水層である長原



- | | |
|-------------------|------------------------|
| 1: 細粒砂～粗粒砂(長原5層) | 6: 暗オリーブ灰色細粒砂(長原6Aii層) |
| 2: 灰色シルト(長原6Ai層) | 7: 暗オリーブ灰色シルト |
| 3: オリーブ灰色シルト | 8: オリーブ黒色シルト(長原6B層) |
| 4: 褐色シルト～細粒砂(盛土) | 9: 黒色粘土質シルト |
| 5: 暗オリーブ灰色シルト～細粒砂 | 10: 黒色シルト(長原7B層) |
| | 11: 灰オリーブ色シルト |

図78 SD15・17・18、SP01断面図

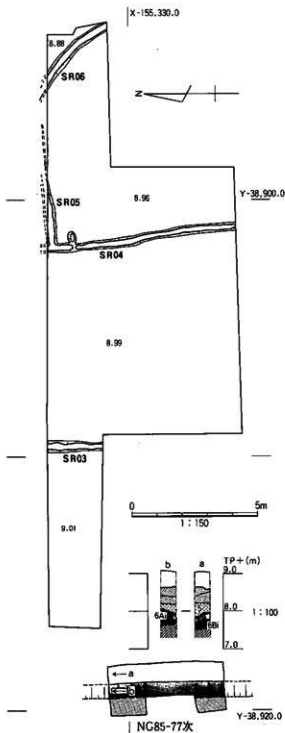


図79 I区長原 6Ai 層上面検出遺構
(数値は水田面の標高m)

5層に覆われていた(図79)。SR03・04は南北方向をとるが、04はやや西に振れている。両者の間隔は北端で7.6mである。SR04では北の部分で水口が検出された。SR05は調査区北端でSR04から東へ派生する畦畔で、SR06と交わるものと推測される。SR06は6Bi層下面遺構で述べた東端の落込みに沿って位置しており、水田面の高さは東側が0.1mほど低い。

なお、西隣のNG85-77次調査では、西へ向って6Ai層の立上がりが高高低差16cm以上認められており、この位置は復元条里の坪境に当たっていることから、大畦畔の一部であろうとみられる。その東側には溝が沿っていたらしい。

SR07~14 これらはⅡ区に見つかった水田畦畔である(図80、図版7)。規模は下幅0.2~0.3m、高さ5~15cmで、ほぼ正方位方向に造られている。東西方向のSR07・08は153号墳の西と東にそれぞれ取付き、SR07はさらに154号墳にまで延びている。南北方向のSR09~12は西調査区にあり、そのうちSR09はⅡ区に北接するNG85-46次調査地に連続している。SR13・14は東調査区にある南北畦畔で、10mほどの間隔を取って並走しているが、SR14の東側では20m以上に

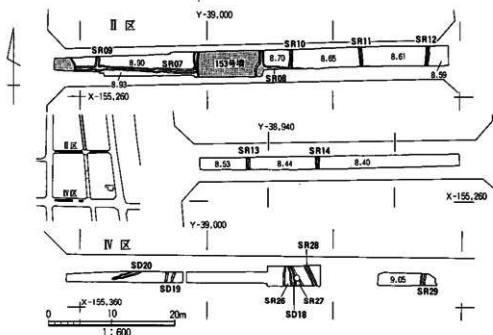


図80 II・IV区長原6A層上面検出遺構
(数値は水田面の標高m)

わたって南北畦畔が見つからない。水田面の標高は8.40～8.93mで、西から東に向かって傾斜している。

SR15～25 これらはIII区の水田畦畔で、下幅20～50cmである(図81)。下幅50cmを測るSR15はその他の畦畔の高さが10cm前後であるのに対し、20cmの高さをもつ。SR15～23は東西方向、SR24・25は南北方向をとる。ほとんどの畦畔が正東西あるいは正南北であるが、SR25は北で東に約10°振っている。東西方向をとるものを9本検出しているが、それらの間隔は一定ではない。水田面の標高は8.32～8.66mで、南から北に向かって低くなる。

SR26～29 いずれもIV区の遺構である(図80、図版7)。SR26・27は後述するSD18の両肩に設けられた堤状の遺構で、下幅30～90cm、高さ10～20cmである。SR28はSD18の東側3mを並走する畦畔である。下幅65cm、高さ13cmを測る。SR29はIV区東端にある南北方向の畦畔である。下幅70cm、高さ15cmである。

溝

SD18～20 IV区にある遺構である(図80、図版7)。SD18はSD15の位置を踏襲する南北方向の水路である(図78)。上幅0.4～0.8m、下幅0.2～0.4m、深さ0.4mで、長原5層の細粒砂～粗粒砂で埋没するが、下部には灰オリーブ色シルトが堆積していた。溝の肩には堤状に

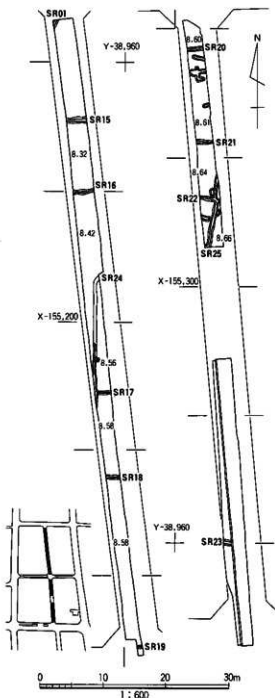


図81 Ⅲ区長原 6Bi・6Ai 層上面検出遺構
(数値は水田面の標高m)

SR26・27が造られている。この溝は NG85-23次調査地でも確認されている。SD19は幅が1.1~1.3mであるが、深さは数cmである。SD20も幅0.2~0.5m、深さ5cmという浅いものである。埋土はどちらも含細粒砂灰オリブ色シルトである。

(積山・黒田・櫻井)

5) 平安時代の遺構と遺物(図83)

この時代の遺構は長原 4B層の下面または同層内に存在する。また、土器編年作業も進められており、平安時代Ⅰ期~Ⅳ期に区分されている〔佐藤隆 1992〕。

NG87-35次調査地〔大阪市文化財協会1992c〕には、平安Ⅰ期の遺構として南Ⅱ区SD007があり、その出土遺物には底部に「〇」の墨書が認められる土師器皿が数点含まれていた。同様の墨書をもつものが今回報告のⅣ区SE01からも2点出土しており、200m以上離れた地点で出土が確認されたことは注目されよう。

Ⅳ区の北隣に位置するNG85-23次調査地では掘立柱建物や溝などが多数確認されている。Ⅳ区およびⅢ区南端部には、これに関連すると思われる遺構が広がっている。その中には火葬墓・土器埋納遺構などもみられた。

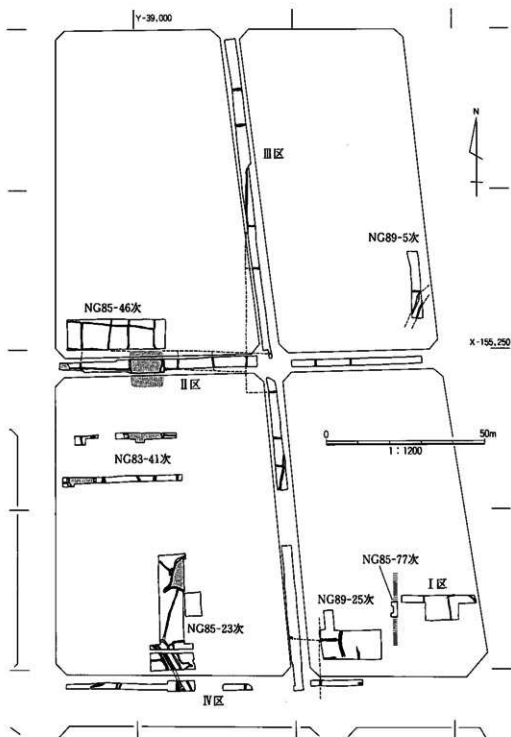


図82 中央地区奈良時代の遺構

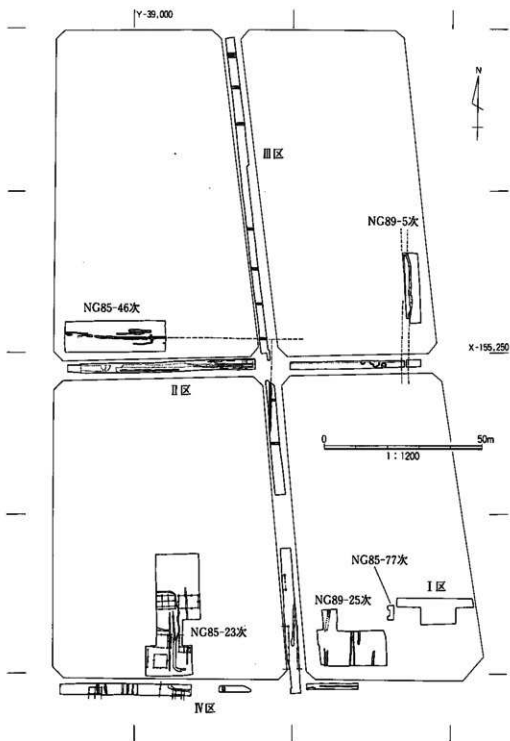


図83 中央地区平安～室町時代の遺構

i) 掘立柱建物・櫓・ピット

SB01(図84・85、図版8)

Ⅲ区南半部にある掘立柱建物である。柱穴は南北2間分が見つかっているが、東西方向の規模は明らかでない。北端のSP02は長径75cm、短径55cmの楕円形、南端のSP04は直径55cmの円形で、深さはいずれも45cmであった。しかし、中央のSP03は直径30cm、深さ10cmと小型である。柱間寸法は北から2.15m、2.30mとなっている。柱痕跡の直径は約15cmであった。この建物は調査区の西に延びる東西棟と推測される。

SB02(図84・86)

Ⅲ区南端付近に位置する掘立柱建物である。5基の柱穴が南北に並び、その柱間寸法は北から2.15m、4.35m、2.15m、1.80mとなっている。柱間がその他よりも倍以上ある、SP06とSP07の間にはもう1基の柱穴の存在が推定される。確認された柱穴は平面楕円形や隅丸方形で、長軸長30～50cmを測るが、深さは10～25cmと浅い。本項で述べる遺構は平安時代の包含層である長原4B層を除去し、長原5層の上部で検出しているため、本来の掘込み面はさらに上方と考えられる。したがって、柱穴の深さはより深かったと思われ、浅い柱穴にいたっては検出しえなかったものもあったであろう。この建物については、調査区西側に何間分かの拡がりをもつ南北5間の南北棟建物と推定される。SP07から黒色土器碗の破片288・289が出土している(図91)。

288は黒色土器碗Bの口縁部で、復元口径は14cm強である。内外面に稠密な暗文が施され、口縁部の内側に凹線状に凹む。289は黒色土器碗Aの底部で、高台径は6.4cmである。平安Ⅲ期に該当しよう。

SB03(図84・86)

Ⅲ区南端付近にあり、前述のSB02の東2.7mに平行して建てられている。4基の柱穴を確認したが、組み合う柱穴が調査区外に拡がると考えられる。検出された柱穴は円形または楕円形で、直径22～35cm、遺存する深さは10cm強である。柱間寸法は北から1.95m、1.80m、2.20mとなっている。恐らく、SB02と同規模の南北棟建物で、両者の南北両端の柱

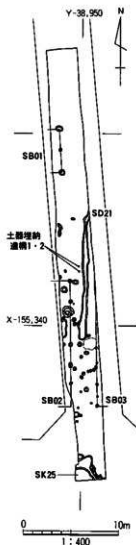


図84 Ⅲ区平安時代遺構

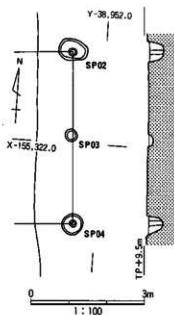


図85 SB01平・断面図

列も揃うように建てられているのではないと思われる。SP13から土師器小皿285が出土した(図91)。

土師器小皿285は、全体の1/2を残し、口径8.9cm、器高1.3cmである。小皿Cに属するが、口縁端部の折り返しがややあまい。平安Ⅲ期の新段階のものであろう。

SB04(図87・88)

Ⅳ区に検出した掘立柱建物である。東西1間(約1.8m)、

南北1間(約1.5m)以上の母屋の東西に庇の付く南北棟建物と推測される。庇は約0.9m出ている。柱穴は一辺が30~40cmの不整な方形で、もっとも深いもので23cmである。柱痕跡の直径は10~12cmを測る。北側の柱列はSD22によって上部が侵食されている。建物中央に

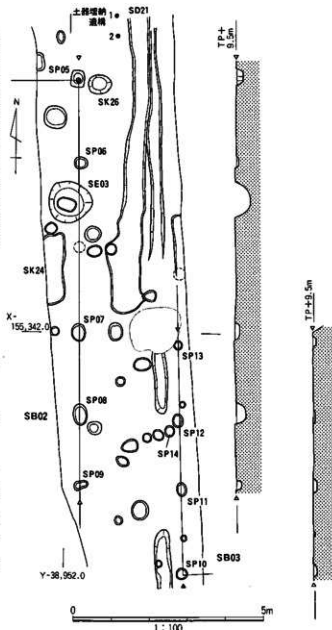


図86 SB02・03平・断面図

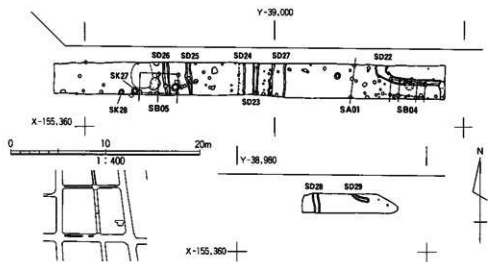


図87 IV区平安時代遺構

SP21という柱穴があるが、規模はその他よりも小さく、床束と考えられる。柱穴の埋土は黒褐色シルトで、土師器皿・黒色土器碗などが出土している。

SB05(図87・89、図版8)

IV区にある掘立柱建物で、前述のSB04の西22mにあつて東西に並ぶ位置にある。東西2間、南北1間以上の南北棟の総柱建物である。柱間寸法は梁行・桁行とも約2.0mである。掘形の形状は直径35～50cmの円形または隅丸方形で、もっとも深いもので20cm、柱痕跡の直径は12～15cmである。SP26を切つて同時期の火葬墓と考えられるSK27が存在する。柱穴の埋土は黒褐色シルトで、SP25から黒色土器碗287、SP27から土師器皿286が出土している(図91)。

黒色土器B類碗287は口径14.6cm、高台径6.8cm、器高5.9cmである。口縁端部は丸くおさめられる。土師器皿

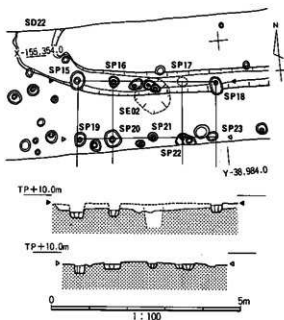


図88 SB04平・断面図

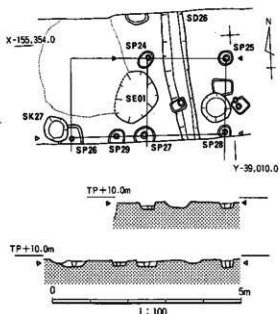


図89 SB05平・断面図

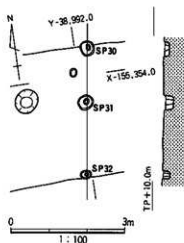


図90 SA01平・断面図

286は口径14.0cm、器高2.1cmである。口縁部は強いヨコナデによって外反し、丸い端部となっている。これらは平安Ⅲ期に属する。

SA01(図87・90)

Ⅳ区にあり、SB04の西4mに平行して造られた櫓である。2間分を検出したに留まるが、柱間寸法は北から1.5m、1.8mを測る。掘形の形状は直径30～40cmの円形または楕円形で、残存する深さは15～25cmである。柱痕跡の直径は10cm前後である。柱穴の埋土は黒褐色シルトである。この遺構の東にはピットがまとまってみられるが、西側での分布は粗である。

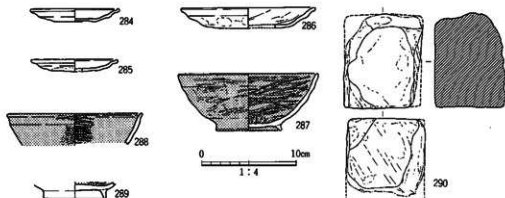


図91 平安時代ピット出土遺物

SP07 (288・289)、SP13 (285)、SP14 (284)、SP25 (287)、SP27 (286)、SP29 (290)

SP14・29

SP14はⅢ区のSB03の柱穴SP12の南西にあるビットで(図86)、直径30cm弱の円形を呈し、残存する深さ約5cmである。土師器小皿284が出土した(図91)。

SP29はⅣ区のSB05の柱穴SP27の西隣にある円形の柱穴で(図89)、直径約40cm、残存する深さは15cmである。凝灰岩切石290が出土している(図91、図版54)。

凝灰岩切石290は縦8cm、横8cm以上、高さ9.8cmの直方体である。一部には斜方向の削痕がみられ、焼け焦げた部分もある。[大阪市文化財協会1992c]には平安時代の凝灰岩切石が5例報告されている。いずれも破片で、全体のわかるものはないが、今回のものと同様に直方体であったと思われる。

(黒田・櫻井)

ii) 井戸・土坑

SE01(図89・92・93、図版9・54)

Ⅳ区西調査区の西半部にあり、SB05と重複する位置にある。掘形は長径1.2mの楕円形で、残存する深さは0.5mであった。掘形いっぱいにはほぼ納まる須恵器大甕296を横位に埋設し、その胴部中央に直径18cmの円窓を穿って、井戸として用いていたようである。須恵器大甕は古墳時代のものを転用している。また、埋土内から墨書のある土師器皿292・293も出土している。埋土は暗褐色シルトであった。

土師器皿292・293はともに底部外面中央に「○」の墨書をもち、胎土もよく似ている。292は口径16.2cm、器高2.8cmで、口縁端部に浅く凹んだ面をもつ。293は口径14.8cm、器高3.2cmで、口縁部は外反したのちに、その端部で上方につまみあげられている。これらは平安Ⅰ期に属する。須恵器大甕296はイチジク形の体部と鋭角的に屈曲する頸部が特徴的である。底部は丸底で、平行タタキののち、同心円状にヨコナデ調整されている。胴部には擬格子状のタタキが行われている。内面には同心円文がよく残り、横方向または縦方向のナデによって部分的に消されている。残存する口縁部の先端には下向きに鋭い稜が作られている。底部から胴部に移行する部分に焼台の痕跡がみられ、その場所が浅く凹んでいる。凹みの大きさから杯蓋程度のものが使用されていたと考えられる。また、その部分の甕の表面には植物繊維の圧痕があり、土器と焼台との間にこうした植物繊維が噛まされていたと思われる。TK10型式からTK43型式に当るものとする。

SE02(図88・92・94、図版8・54)

Ⅳ区西調査区の東端付近にあり、SB04と重複する場所に位置する。掘形平面は不整な円

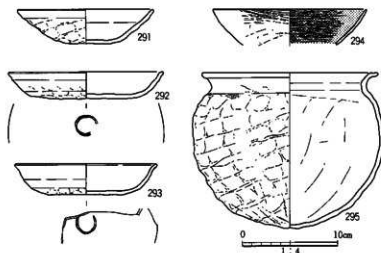


図92 SE01・02出土遺物

形をしており、直径約0.8mである。断面は段掘り状になり、検出面からの深さは0.9mであった。この遺構は長原5層の直上で捉えられるべきものであったが、明確に確認できたのは長原6A層上面まで掘り下げてか

らであった。したがって、この遺構の本来の深さは長原5層の層厚を加えた1.5m以上と考えられる。井戸側として曲物が用いられ、それには直径30数cm、高さ20～27cmのものが4、5段分積み重ねられていた。井戸埋土の上部は黒色粘土のブロックを含む暗褐色粘土で、下部は暗青灰色シルトが主体となっていた。井戸底から15cm上方で、完形の土師器碗291が正位で出土した。その上部には完形の土師器甕295が横位になっていた。これらの土器はなんらかの目的をもって井戸内に埋納されたものと思われる。その他、黒色土器碗294が出土した。裏込めからは丸瓦の破片が見つかった。

土師器碗291は碗Aに分類されるものである。口径14.2cm、器高3.6cmである。体部から底部にかけての外面には5本の指で行ったオサエがみられる。黒色土器碗294はA類で、復元口径は16cmである。全周の1/6の破片であるため、土器の傾きは不確定である。非常に薄手の作りで、内外面に稠密な暗文が施されており、金属的な印象を与える。土師器甕295は球形の体部に短い口縁部をもつ。口縁部は水平に近いところまで折り曲げられる。体部外面にはユビオサエが顕著に残り、それは291と同様の指全体を使ったオサエである。口径18.4cm、器高16.1cmである。これらの遺物は平安Ⅱ期に該当する。

SE03(図86・95・96)

Ⅲ区南端部、SB02と重複する位置にある。平面は直径1.2mの円形で、揺鉢形に掘られ、残存する深さは0.7mである。井戸側として曲物が使われており、長径50cm、短径25cm、高さ6cmほどのものが3段重ねられている。埋土から黒色土器碗300が出土している。

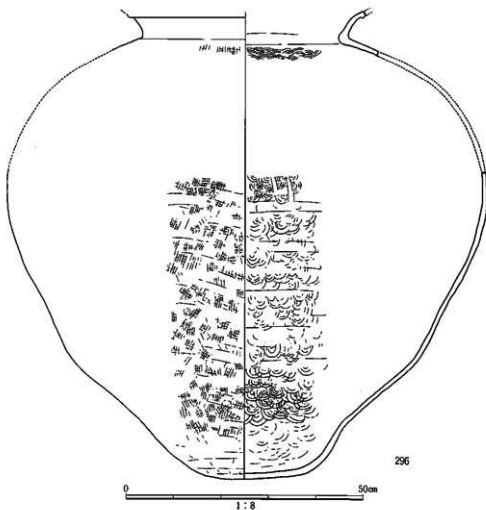


図93 SB01出土須恵器甕

黒色土器碗300はB類で、直線的な口縁部をもち、端部に浅く凹面を作る。復元口径は16cmで、平安Ⅱ期に当る。

SK24～26(図84・86・96・97、図版55)

これらはⅢ区南端付近の土壌である。

SK24は南北方向に長い長方形をとるものと思われる。南北長1.8m、東西長0.6m以上、深さ0.1mを測る。埋土は灰色シルトであった。SB02の内部にあり、長軸方向もそれと平行している。土師器皿297・黒色土器碗301・瓦器碗302が出土している。

土師器皿297は全体の1/2が残り、口径15.8cm、器高3.6cmである。黒色土器碗301はA

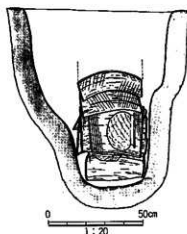
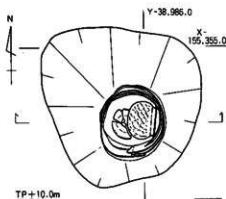


図94 SE02平・断面図

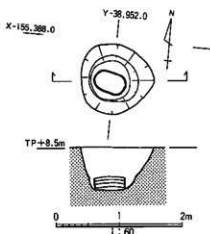


図95 SE03平・断面図

類で、全周の1/3の破片で、口径14.0cm、器高5.6cmに復元される。体部はやや小ぶりだが、直径6.0cm、高さ1.0cmのしっかりとした高台をもっている。瓦器碗302は全体の2/3を残し、口径16.2cm、高台径6.6cm、器高6.1cmである。体部内外面に稠密な暗文がみられ、それは底部外面にも及んでいる。体部外面には暗文に先行してヘラケズリが行われている。これらの遺物は平安Ⅳ期の古段階に位置づけられる。

SK25は調査区の南西コーナーにある落込み状の土壌である。深さは0.4m以上である。土師器皿298・299、砥石303が出土している。

土師器皿298は2/3が残り、口径15.1cm、器高3.8cmである。底部外面にユビオサエがみられ、内面には底部と体部の境に直線的に残る何かの圧痕がある。土師器皿299は1/3が残存し、口径14.8cm、器高3.6cmに復元される。底部のユビオサエ痕は298ほど明瞭でない。これらは平安Ⅲ期新段階のものと思われる。砂岩製の砥石303は直方体をしており図の右側面および裏面がよく使用されている。右側面は断面がわずかに丸みをもつが、非常に滑らかである。

SK26はSB02の北東隅に当たる場所にある。直径0.6mの円形で、深さは0.3mである。灰色シルトを埋土とする。土師器304～308・黒色土器309～311が出土している。完形の土師器小皿を3点含んでおり、遺構の位置からも地鎮に係わる土壌であることも考えられる。

土師器304～307は小皿であるが、それぞれ形態が異なる。304は「て」字状口縁と呼ばれる

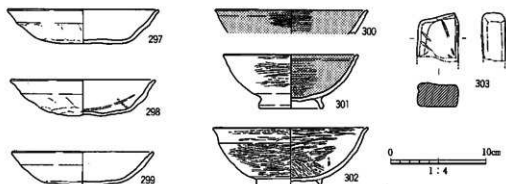


図96 SE03、SK24・25出土遺物

SE03 (300)、SK24 (297・301・302)、SK25 (298・299・303)

もので、口径9.6cm、完形である。305も口縁形態は304と同じであるが高台をもっており、口径10.0cmである。306は口縁部に水平な面を作るもので、口径8.6cm、完形である。307は碗形を呈し、口縁端部が肥厚する。口径9.0cmで、完形品である。308は口径15.8cm、器高3.9cmの皿で、体部外面に指の付け根までを使ったオサエがみられる。309は黒色土器B類の小皿で内外面に稠密な暗文が残る。見込み部分は平行暗文となっている。口径10.9cm、器高2.2cmである。310・311は黒色土器B類の碗である。310は内外面に稠密な暗文があり、体部外面には、暗文に先行するヘラケズリも行われている。口径は16.4cmである。311はやや厚手で、内面に螺旋状の暗文がみられる。口径14.8cmである。これらの遺物は平安Ⅲ期の古段階に属する要素が強い。

SK27(図87・89・98・99、図版9・55)

Ⅳ区西調査区の西半部に検出した直径約0.6mの不整円形の土坑で、残存する深さは25cmである。掘形の南東に片寄って土師器甕319が逆位に置かれ、その口縁部は土師器皿312を入れ子に使った蓋と粘土によって塞がれていた。また、甕の内部には土師器皿5枚313～

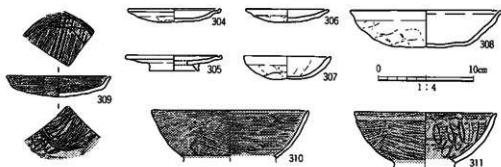


図97 SK26出土遺物

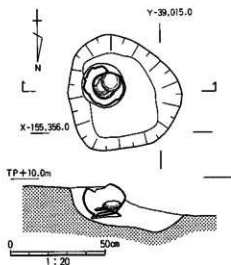


図98 SK27平・断面図

312と同形態の小皿で口径10cm前後、器高1.5cm前後である。314には口縁部内面に灯明芯の痕が残る。また、314・316の内面には白色の付着物がある。土師器甕319は球形の体部に短い口縁部をもつ。底部の中心から少しずれた場所に直径2cmほどの穿孔があり、外側から開けられていたことがわかる。口径15.4cm、器高20.2cmを測る。内面の底部には褐色の付着物、口縁部から肩部にかけては白色の付着物がある。小皿の形態などから平安Ⅲ期古段階と推定する。

SK28(図87・99)

Ⅳ区西調査区の西半部にある。直径約0.5mの円形の土壇である。深さは30cm弱である。

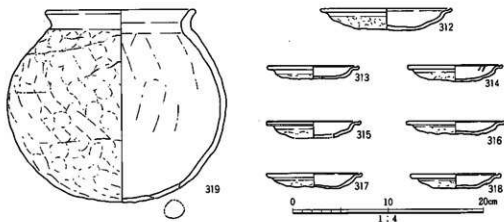


図99 SK27・28出土遺物

317が納められていた。掘形の埋土は黒褐色シルトであった。壺内から土師器皿以外のものは見つかっていないが、同一形態の遺構が南住吉遺跡(MN86-40次調査)で発見されており、そこでは骨片が見つまっていることから、この遺構についても火葬墓である可能性が高い。SB05の柱穴SP26の一部を切って造られている。

土師器皿312は口縁部を水平方向に折り曲げたのち、端部で上方につまみ上げるものである。口径13.8cm、器高2.4cmである。内面の所々に白色の付着物がある。313~317は

SK27の西0.8mに位置し、埋土も共通している。土師器小皿318が1点出土している。この遺構と類似するものが、さらに西方向に向って数基確認されている。

土師器小皿318は全体の1/4ほどの破片で、口径9.2cmに復元される。SK27に出土している小皿と同形態で、ほぼ同時期のものと思われる。

(黒田・櫻井)

iii) 溝

SD21(図84・86・100・101、図版55)

Ⅲ区南端部、SB02・03に挟まれた場所にある南北溝である。長さ約13mを検出したが、溝の北端はやや東に傾きながら調査区東壁内に続いている。幅0.3~0.9m、残存する深さは8cm、埋土は褐色シルトである。2棟の建物の中央に位置し、同一方向をとることから、同時期に存在した可能性がある。出土遺物の時期もそれと矛盾しない。遺物には土師器320・321、黒色土器322・323、灰釉陶器324がある。

320は土師器小皿である。復元口径9.2cm、器高1.4cmを測る。321は土師器碗の底部で、高台の外側にさらに高台状の張出しが付く。高台径6.1cm、器壁が薄く、焼成堅緻である。322は黒色土器A類の碗で、復元口径は15.2cmである。323は黒色土器B類の碗である。口径14.2cm、高台径6.6cm、器高6.0cmを測り、底部にやや丸みをもつ。324は灰釉陶器の段皿である。全周の1/3を残し、口径10.8cmに復元される。これらの遺物は平安Ⅲ期のもので、323は同期新段階とみられる。

(黒田・櫻井)

SD21から、軟骨魚綱サメ類の脊椎骨が1点出土している(写真11)。椎体は横径20.6mm、縦径20.0mm、長さ9.2mmの円筒形で、その表面は平滑である。神経弓門・血道弓門が脱落して隅丸方形の孔となっている。形態的特徴から、ネズミザメ目(Lamniformes)の一種と考えられる。本遺跡での魚類遺体の出土は、NG16次調査で5世紀後半の溝SD04および土坑SK06で認められるのみである。前者からはナマズ科の一種の歯骨が、後者からはサメ類の一種の脊椎骨

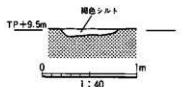


図100 SD21断面図

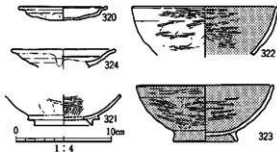


図101 SD21出土遺物

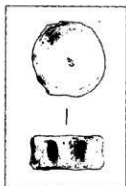


写真11 サメ類の脊椎骨
(実物大)

が出土している。いずれの骨も焼けている。サメ類が2件の調査で出土したことは、時期が異なるとはいえ、それぞれの時期に海産魚のサメ類が内陸に持ち込まれていたことを示す資料として重要であろう。特に加工痕がないので食用にされたと考えられるが、脊椎骨自体に装飾などの意味を見い出していた可能性も残る。周辺遺跡での出土例や文献などから、当時の利用法を調査する必要がある。

(久保)

SD22～27(図87)

これらはⅣ区の西調査区で検出したものである。SD22～26は黒褐色シルトを埋土とし、SD27は暗灰黄色シルトを埋土とする。屋敷地内を区画するための溝、または排水用の溝と思われる。

SD22はSB04の北側柱列を切る東西方向の溝で、西端で北に向って屈折する。幅0.5～1.1m、深さ6～20cmである。

SD23・24は西調査区の中央にある南北溝である。SD23は幅0.4～0.6m、深さ7～10cmを測る小溝で、平瓦・土師器甕が出土している。SD24は西屑を水道管敷設時に破壊されているため幅は明らかでない。深さは約10cmであった。

SD25・26は西調査区の中央からやや西寄りにある南北溝である。両者とも北でやや西に振っている。SD25は幅0.2～0.7m、深さ10～14cmで、黒色土器碗が出土している。SD26は幅0.4～0.6m、深さ8～16cmで、土師器小皿・甕、須恵器甕の破片が出土した。SD26はSB05と重なる位置にあり、同時期に存在した可能性は低い。

SD27は西調査区の中央部にある南北溝である。幅1.3～1.7m、深さ10～15cmを測る。横断面形が低い逆台形となる。土師器皿・甕、須恵器甕が出土した。

SD28・29(図87)

どちらの溝もⅣ区東調査区で見つかったものである。SD28は南北溝で、幅0.5m、深さ5cm前後である。SD29はほぼ東西に掘られた溝であるが、西端で北方向に緩やかに湾曲している。検出した長さは2.1m、幅0.4m、深さ5cm前後である。

(黒田・櫻井)

iv) 土器埋納遺構(図84・86・102、図版9・48)

Ⅳ区南端付近に土器埋納遺構1・2を検出した。SD21の西屑部から西へ30cmの所にあ

り、両者は50cmの間隔を
 おいて南北に並ぶ。SB02
 の北東隅柱であるSP05か
 らも1.2~1.6mの距離にあ
 る。土器埋納遺構1は北
 側にあるもので、土師器
 碗326を身として用い、土
 師器小皿325を逆位に使っ
 て蓋とする。一方、南の

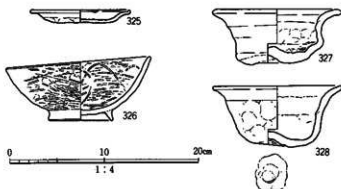


図102 土器埋納遺構1・2出土遺物

土器埋納遺構2は2つの土師器鉢327・328を合口に使って密閉された容器状にしている。土器の合わせ目には土師器小皿1枚が逆位で差込まれていた。掘形の輪郭は明らかにできなかったが、埋納された土器がようやく納まる程度のものでなかったかと推測する。土器の内容物については不明である。

土師器小皿325は水平に折り曲げた口縁部の端を上方につまみ上げるもので、口径10.4cm、器高1.4cmである。口縁部内面に灯明芯の痕がみられる。土師器碗326は体部外面をヘラケズリ後、暗文が施されている。底部外面はやや丸みをもつ。口径15.1cm、高台径6.6cm、器高6.6cmである。土師器鉢327・328は碗形の体部に、大きく外方に開いた口縁部をもつ。口縁部はヨコナデによって整えられているが、体部はユビオサエ痕を明瞭に残している。底からみると、底部中央に大きな凹みがあり、口縁部をヨコナデする際にここに指を入れて回転の軸とした時のものと思われる。器壁も厚く、手捏ねに近い。これらの遺物は平安Ⅲ期に当たると考えられる。

(黒田・櫻井)

6) 鎌倉・室町時代の遺構

鎌倉時代の遺構は長原4B層内または同層上面に検出される(図83)。今回の報告では、Ⅲ区の中央部から北端部にかけて、4B iii 層上面遺構として水田畦畔が見つかっている。この水田に関連する遺構はNG85-46次調査地にも確認されている。NG89-5次調査地では南北方向をとる坪境溝SD1が検出されているが、その延長方向に当たるⅡ区東調査区では平面的にその遺構を確認することはできなかった。

室町時代の遺構は長原3層に係わるものである。Ⅱ区では3層下面の遺構として東西方

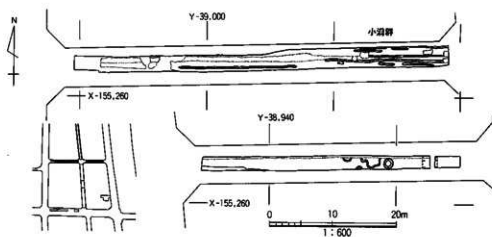


図103 Ⅱ区長原3層下面検出遺構

向の小溝群や多数の踏込みを検出した(図103)。

畦畔(図104)

Ⅲ区の長原4Biii層上面でSR30～39を検出した。SR30～38の9本は東西の畦畔で、SR39のみが南北方向のものである。東西畦畔の間隔はSR32とSR33の間が32.3mと広いが、その他は10.5～13.4mの間隔で造られている。水田面は南から北に向って低くなり、水田面を検出した約140mの区間で、その高低差は43cmであった。

(黒田・櫻井)

7) 近世の遺構

長原2層の遺構である。NG86-109次調査地[大阪市文化財協会1992c]をはじめ広範囲に烏島が存在が確認されている。

溝群(図105)

I区では長原2層は2枚に細分されるが、その各々の下面で平行する多数の溝群を検出した。いわゆる鋤溝など、耕作に伴うものとみられる。2b層下面の溝群は東西方向で、2a層下面の溝群は南北方向である。いずれも10cm前後の浅いものである。なお、2b層下面の溝は埋土が2b層とは一致せず、直下の長原4層より新しいが、それ以上、年代を限定することはできない。

(積山)

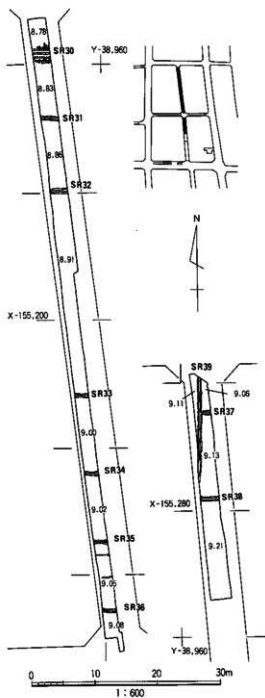


図104 Ⅱ区長原4Biii層上面検出遺構
(数値は水田面の標高m)

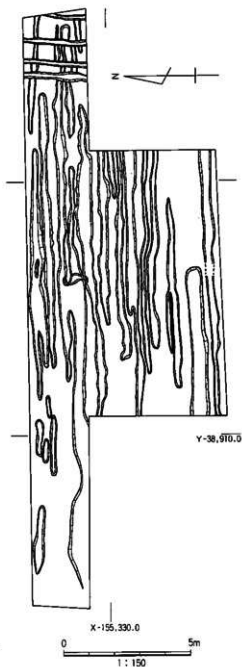


図105 Ⅰ区長原2層下面検出遺構

8) 小結

弥生時代土壌

Ⅲ区北端部で、弥生時代後期の土壌を8基確認した。これらはNG87-35次調査地に群集した状況で見つかった土壌群の南限を示すものである。土壌群の性格については[京嶋覚1991]に検討されたように、粘土探掘坑の可能性が高いと思われる。今回の調査でも完形の甕を埋納するものがあり、こうした行為の目的にも関心がもたれる。

153号墳について

Ⅱ区西端寄りに見つかったこの古墳は、長原古墳群内の新相の一群に属するものとして注目される。現在確認されている新相の古墳は、この古墳のほか七ノ坪古墳・南口古墳だけである。また、七ノ坪・南口の両墳は前方後円墳であるが、この古墳は方墳と推定されるものであった。七ノ坪古墳はこの古墳の南50mに位置している。

古墳時代集落

今回の調査地では集落の内容を直接示す建物・井戸などの遺構は確認できなかったが、Ⅰ・Ⅳ区の土壌に完形に近い土器を出土するものがあった。その須恵器はTK23型式のもので中心で、建物群などの見つかったNG89-25次調査地の遺構[佐藤隆1989]と関連をもつものといえる。

NG89-25次調査地は今回報告したⅠ区の南西に位置しており、約20m四方の範囲に掘立柱建物4棟・竪穴住居3棟が検出されている(図60)。そして、その南方には小型方墳群が展開している。古墳群の形成と重なる時期の集落は本遺跡では西地区で集中的に検出されている[京嶋覚1986、大阪市文化財協会1992a]が、中でもNG84-25次調査では東西約60m、南北約50mにわたって16棟の掘立柱建物や竪穴式方形建物・井戸などが、弧状を呈する溝に囲まれて見つかった[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1985]。この例を参考にすると、Ⅰ区で検出した弧状の溝SD03などは小規模ながらNG89-25次調査の建物群を区画するものであった可能性があり、その外側(東)の直線的に平行する溝群は耕作地であったとみることができる。ただ、Ⅲ区南部においては調査が古墳時代にまで及んでおらず、また、Ⅳ区の北、NG85-23次調査地で古墳時代かとみられる建物が1棟だけ見つかったものの、集落の西限は不明である。いずれにせよ、本遺跡中央地区で古墳・集落・耕作地が一体となった景観が復元されたことは、重要な成果であった。

奈良時代水田址

長原6Bi層上面遺構としてⅡ区にSD13・14を検出した。SD13を埋める水成層(6Aii層

と推定)からは平城宮Ⅱの土器が出土し、従来考えられていた地層の実年代に再考を促す資料として注視される。SD14はⅣ区に見つかったSD15と一連の遺構の可能性があり、古墳の墳丘の台間をぬって掘られた灌溉用の水路と考えられる(図60)。

長原 6Ai 層上面には各区で水田畦畔が確認された。6Ai 層上面の坪境である大畦畔については、現行の復元条里と一致して検出されたものと、その位置では検出されなかったばあいとがある。Ⅰ区の西隣、NG85-77次調査では南北方向の大畦畔が確認され、またNG89-25次調査でも、層位は新しいが、南北方向の溝と推定される西から東への落込みが東端壁面で認められている。古代以来、この位置は一貫して坪境であったと見られる。一方、今回報告のⅡ区ではSR14の東方、上記した大畦畔を北へ延長した位置でそれが検出されていない。また、Ⅱ区SR07・08は東西大畦畔の想定位置にはほぼ一致するものの、ちょうど古墳に取付いていることもあってやや乱れており、規模もさほど大きいとはいえない。

平安時代集落

表8 中央地区平安時代主要遺構の時期

時期	掘立柱建物		井戸	土塙・溝
Ⅰ			SE01	
Ⅱ			SE02・03	
Ⅲ	古	SB05	SB02	SK26・27・28
	新	SB03	(SB04)	SK25、SD21
Ⅳ	古			SK24

Ⅲ区南端とⅣ区にこの時代の遺構が見つかった。出土遺物から遺構の時期を細かくみるならば、平安Ⅰ期からⅣ期古段階のものが確認されている(表8)。平安Ⅰ・Ⅱ期の遺構は井戸のみであるが、SE01からは「〇」の墨書のある土師器が

出土しており、そこから200m以上離れたNG87-35次調査地[大阪市文化財協会1992c]においても同様な墨書土器が数点見つかったことは注意される。遺構の数が増えるのは平安Ⅲ期で、建物もこの時期のものが確認されている。Ⅳ区の北に接するNG85-23次調査地では多数の建物が見つかっており、これらとともにひとつの建物群を形成していたものと考えられる。その他に火葬墓とみられるSK27、土器埋納遺構1・2が検出された。

(積山・櫻井)

第3節 長原遺跡南地区の調査(NG86-28・43①・43②、NG90-36次調査)

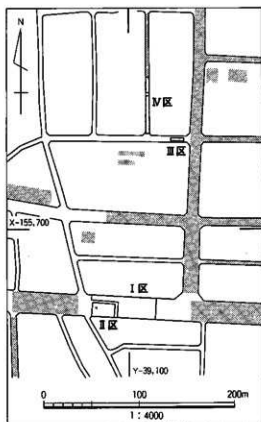


図106 南地区の調査区分

この年度のおもな調査は3件であった。そのひとつ、28次調査地の隣接地を1990年度に調査しており(NG90-36次調査)、ここではその成果も合わせて報告する。以下、28次調査地をI区、90-36次調査地をII区、43①次調査地をIII区、43②次調査地をIV区と呼称する(図106)。

1) 層序と各層の出土遺物

i) 層序(図107)

各区が距離的に近いこともあって、それぞれの地層の状況は似通っているのでI～IV区をまとめて記述する。

長原遺跡の標準層序(別表1)からみると、沖積層上部層Iの範囲については各層とも良好に遺存しているが、上部層IIから中部層にかけての地層は残りが悪く、識別しがたい。全体として、南西から北東に

向って低くなる傾向があり、I・II区は、そこから200mほど北に位置するIII・IV区に比べ、各層の標高が1m前後高くなっている。

沖積層上部層I

長原0層：現代の客土層である。

長原1層：現代の作土層である。

長原2層：含粗砂灰黄色～灰黄褐色シルトで、島畠間にある幅広の溝の埋土として厚く堆積する。

長原3層：灰白色細砂～粗砂であるが、島畠間の水田作土となっている場所ではオリブ褐色シルトである。

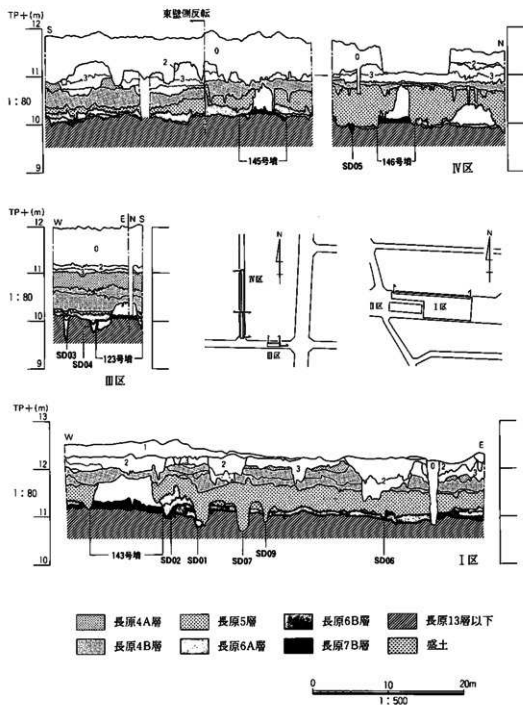


図107 南地区Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ区の層序

長原 4A層：灰白色～オリーブ灰色細砂～中粒砂である。上層からの侵食によって、部分的に確認されただけの調査区が多いが、Ⅲ区では最大40cmの層厚をもつ。13世紀後半から14世紀初頭にこの地を襲った洪水による地層である。

長原 4B層：含砂灰色～灰黄色シルトで、Ⅰ・Ⅳ区において当層上面に水田遺構を検出した。水田面の標高はⅠ区で12.0m前後、Ⅳ区で10.8m程度である。また、当層内の遺構として、Ⅳ区に10世紀末から11世紀中葉の掘立柱建物や井戸などが見つかった。本層の下部は下位層の長原 5層の影響で砂礫が多い。層厚は20～50cmである。

長原 5層：黄色ないし灰色を呈し、極細粒砂～小礫からなる水成層である。Ⅲ区を除く各調査区で50cm以上の層厚をもつ。8世紀末から9世紀初頭の洪水層である。

長原 6Ai層：暗オリーブ灰色シルト質粘土の水田作土層である。当層上面にて水田畦畔や灌溉水路が検出されている。層厚は10cm程度である。水田面の標高は、Ⅰ・Ⅱ区で11.1～11.4m程度、Ⅲ・Ⅳ区で10.2m前後である。

長原 6Aii層：緑灰色極細粒砂～小礫の水成層で、Ⅰ・Ⅱ区において溝の埋土として遺存する。8世紀前葉の時期が考えられる。

長原 6B層：黒褐色～灰色シルトまたは粘土である。長原 7層を母材とする作土層で、層厚は10cm前後である。下層の長原 7A層は本層中に取込まれている。

沖積層上部層Ⅱ

長原 7B層：黒色粘土で、古墳の墳丘盛土下に遺存する。層厚は5～10cmである。

沖積層下部層

長原 13層：灰白色の粘土または粘土質シルトである。後期旧石器時代から縄文時代前期までの地層と推定される。Ⅰ・Ⅱ区で標高10.9～11.2m、Ⅲ・Ⅳ区で9.9～10.1mである。

ii) 各層の出土遺物

陶磁器・土器・埴輪(図108、表9、図版56・57)

329は青花の皿で、体部外面に三角形の連続文様がある。底部を欠くが、基底部となる器形の皿と推測される。16世紀後半のものである。330は菱形文様のある染付で、17世紀前半のものである。仏飯器と思われる。331は唐津焼碗と思われるが、口縁部を欠いている。削り出し高台をもち、体部の内外面にオリーブ色の釉が掛かる。胎土に石英を含んでいる。332は唐津焼の溝縁皿で、全周の1/3が残る。高台を削り出しによって作るが、その接地面に糸切り痕を残す。見込みに砂目痕がある。331・332は17世紀前半のものと思われる(註1)。

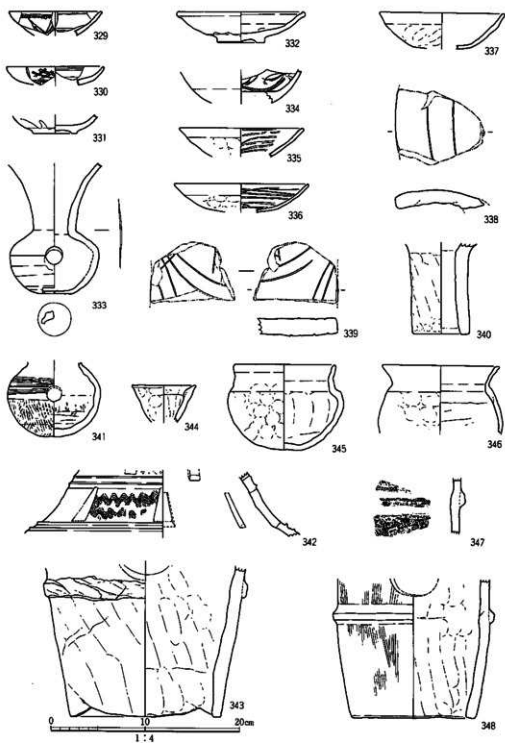


図108 南地区各層の出土遺物

表9 各遺物の出土層

地区	地層	出土遺物
Ⅰ区	長原 2層	329～332
	長原 4B層	334～338
	長原 5層	339・340・342～344・346
	長原 6A層	348
Ⅱ区	長原 4A層	333
	長原 5層	345
Ⅲ区	長原 5層	347
Ⅳ区	長原 5層	341

334は青磁碗で、釉はオリーブ黄色、内面に草花文がある。口縁部および底部を欠く。

335・336は瓦器碗、337は土師器碗である。いずれも体部外面をユビオサエし、口縁部を強くヨコナデしている。瓦器碗の内面には粗い暗文がある。瓦器碗は13世紀中頃、土師器碗は9～10世紀のものである。344～346は土師器甕であるが、344はミニチュア製品である。

344・345は8世紀末頃のものであろう。346は口縁端部に水平にちかい面をもち、体部外面にユビオサエ痕を顕著に残し、内面を板状の工具でナデ調整する。[大阪市文化財協会1992b]の瓜破遺跡東南地区SE01出土の甕Bの系譜を引くものである。

333・341は須恵器甕である。333は張出した肩と、平坦な底部をもつ。円孔部と反対側の頸部に縦方向のヘラ記号があり、底部には焼成後の穿孔がみられる。341は球形の体部をもち、肩部にカキメ、底部から体部下半にタタキメがある。どちらもTK10型式と考えられる。342は須恵器器台の脚部である。全周の約1/8が残り、2本一組になった稜線を上下に配し、その間に櫛描波状文とスカシ孔を入れる。稜線は鋭く張出しており、上記の甕よりも古く、TK23型式と考えられる。

338～340は形象埴輪の破片である。338は弧を描く端部と、それに平行する2条の線刻をもつ。側面も緩やかに湾曲しており、甲冑形埴輪の肩甲部分と推定される。339・340は衣蓋形埴輪の立飾りで、339は飾り板、340は軸部とみられる。5世紀後半から6世紀初めのものである。343・347・348は円筒埴輪である。みな窯窓焼成によるもので、外面の調整は347・348がタテハケ、343がユビナデである。また、343のタガには断続ナデ技法がみられ、底部調整も施されている。こうした特徴から、347・348が5世紀後半以降、343が6世紀以降のものと思われる。

(櫻井)

石器遺物(図109・110、図版57・58)

本調査地からは石器遺物として石鏃3点のほか、クサビの使用に関する資料や、未製品、石核、剥片が出土した。内訳はⅠ区14点、Ⅱ区27点、Ⅲ区1点の計42点で、ほとんど

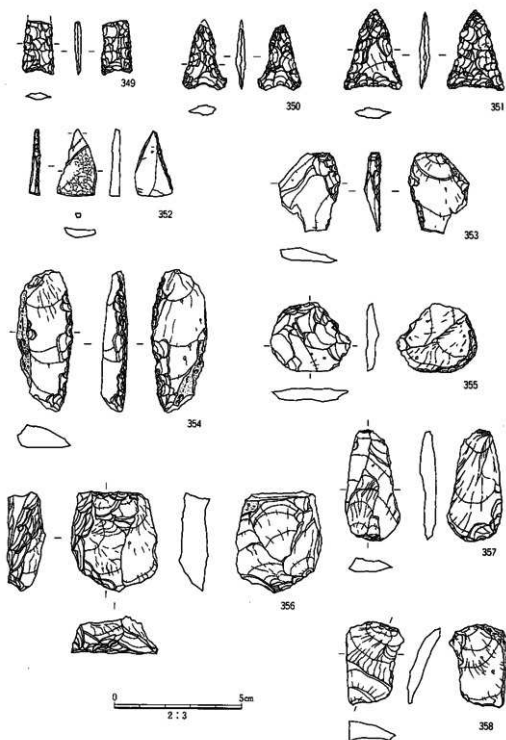


図109 南地区の石器遺物 (1)

がサヌカイト製である。これらのうち16点を図示し、敲石の可能性のある球形の石英珪岩772、サヌカイト原礫773については図版58に掲載した。以上の資料は奈良～江戸時代の遺構または包含層中から出土した遊離資料である。またこれらが属する時代も旧石器～弥生時代にわたっている。このように、出土層位から遺物の年代について考察することは困難であるが、形態や製作技術によって年代を推測したものについては文中に記した。なお遺物の計測値は別表2に記している。

349～351は凹基無茎式石鏃である。349は薄身で、上半部を折れのために失う。両面ともに右側辺に細部調整が顕著で、これによって鋭い刃部を作っている。縄文時代後期のものであろう。350の側辺の一方は細かい剥離によって抉られたようになっている。これが意図的なものか使用の際に欠けたものかは判断できない。先端と一方の脚は折れている。縄文時代晩期のものであろう。351は349・350よりも大型で、左図下半に広く残る面は素材となった剥片の主剥離面側に当たると思われる。右図中央の横方向の剥離面も素材の面と考えられる。細部調整はいいねいに行く。縄文時代後半から弥生時代のものである。

352は打点部分を折れで失った横長剥片を素材として、主剥離面の末端に二次的な加工を施したものである。加工は背面側から連続的に加えられており、これを道具として用いるために行ったのであろう。しかしこの加工によって特に先端は鋭くなっておらず、擦痕も認められないことから、錐として使用した可能性は低いと思われる。なお、左図下半の面は焼けている可能性がある。353は薄い縦長剥片の主剥離面と背面との作る薄い側辺の一方に、両面から押圧剥離を施している。主として背面側に大きな剥離がみられ、主剥離面側は細かい剥離のみである。石鏃などの未製品と考えられる。354は断面三角形の縦長剥片を素材として、主剥離面と背面との作る鋭い縁に、両面からいいねい押圧剥離を加えている。背面には自然面を残す。なんらかの未製品またはスクレイパーと考えられる。355は薄い横長の剥片を素材とし、その側辺に二次的な加工を施している。右図右側のフィッシャーの激しい面が素材の主剥離面と考えられる。背面側の加工はこの剥片を剥離する前に行った可能性が高く、確実に二次的な加工といえるのは主剥離面の末端にみられる一連の細かな剥離である。このことからスクレイパーとして使用した可能性が考えられる。

356はクサビ本体である。主として図の上方を打縁、下方を刃縁として上下方向に使用したと思われるが、横方向にも使用のために潰れた剥離面が並んでいる。右図上端の面は折れ面である。この折れののちに左図上方の剥離を行っていることから、素材が折れたのちにも使用しているといえよう。なお、最終的に素材から剥落した面は左図右端の剥離面と

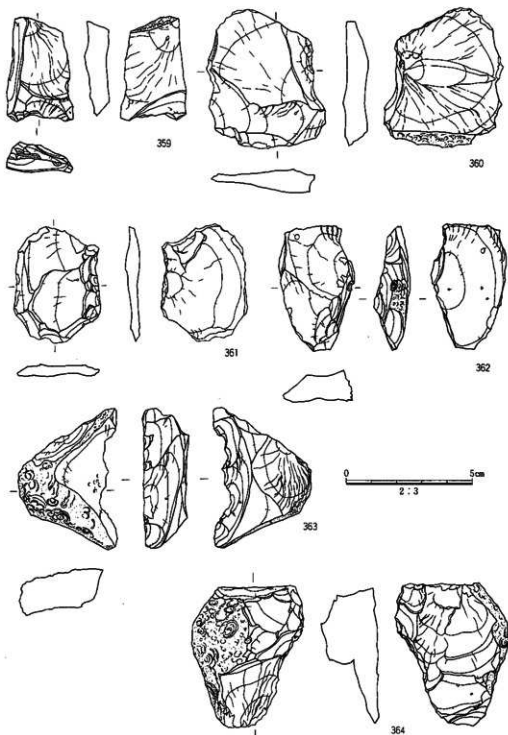


図110 南地区の石器遺物(2)

思われ、これによって素材が変形したために使用を終えたと思われる。右図左上端は自然面で、その横の剥離面は素材の面である可能性が高い。357の背面側では上下方向からの剥離面がみられる。下方からの剥離は末端で段を作ることから、垂直割れによると思われる。また左図左端の面は上下方向から同時に割れが進んだ裁断面である。主剥離面側をみるとこれも垂直方向の力が加わっており、フィッシャーが大きく歪んでいる。さらに右図右上端の細かな剥離と主剥離面は同時に割れた可能性が高く、下端の剥離面も背面側の剥離と同時の可能性がある。このことから357はクサビ本体から使用によって剥落した剥片といえよう。なお左図右側の大きく平らな剥離面はクサビ本体に残っていた素材の面と考えられる。358の背面側には上下方向からの2枚の剥離面がある。これらの剥離は末端で段を作っていることから、垂直割れによるものと考えられる。また背面側上方の剥離と、この剥片の主剥離面は同じ打点から生じたものである。両者の打点部分では少なくとも2度の打撃の痕跡がみられ、この剥片が1度の打撃によって生じたものではないことがわかる。このことから358は一部に自然面をもつクサビ本体に何度が打撃を加えるうちに本体から剥落した剥片と考えられる。自然面のほかには素材の面は残っていない。359の左図下端には細かな剥離面が並んでいる。上半の多くをしめる剥離面は末端で段を作っていることから、垂直割れによるものと考えられる。その後、左図左端の折れが起っている。主剥離面は自然面を打面とする大きく歪んだ面である。右図下端の剥離面は、左図下方の剥離と一連の打撃によって生じたと考えられる。以上のことから、この剥片はクサビ本体から剥落した剥片の可能性がある。そうすると素材の面は自然面と左図下半の細かな剥離の両脇の平らな剥離面で、左端と上半の剥離面は使用の際に本体から剥落した面と考えることができる。しかし自然面には何度も加撃した形跡がなく、この剥片がクサビ使用によるものと断言することはできない。

360～362は横長剥片である。360の背面側にはさまざまな方向からの剥離面がみられる。主剥離面は剥離面を打面として剥離されており、割れは2方向に分れて進んでいる。361の背面側では、図の右方向から大きく分けて2枚の剥片を剥離したのち、同じ方向から調整的に何回もの剥離を加えている。主剥離面の打面は自然面である。薄い板状の剥片の剥離が目的で、この剥片を剥離したと思われる。なお主剥離面側にみられる図左上からの剥離は、主剥離面形成以前に素材の中に割れ傷となって入込んでいた可能性がある。362の背面側では中央図にみえる剥離面を打面として2枚の剥片を剥離している。この後、自然面に向って数度の調整的な剥離を施すが、結局、主剥離面は自然面を打面としている。打面が

不安定なため、バルブ・バルブスカーともに不明瞭で、剥離の末端はヒンジフラクチャーとなっており背面側にまで回り込んでいる。なお底面に当る面は認められない。

363は石核である。素材となる剥片の主剥離面は右図の左方向から剥離した平らな面で、右図右側のフィッシャーの激しい面に切られている。素材の背面は自然面と1枚の大きな剥離面からなり、この石核の素材は端に自然面を有する厚さ約2cmの板状の剥片と推定できる。この剥片の主剥離面側を底面として、図の上から順に3枚の剥片を剥離している。最終的に剥離した面は中央図下半にみられる横長の剥離面である。この後で細かな剥離を数回加えているが、目的とする剥片は剥離しえていない。なお右図右側の剥離面は、左図左上の剥離面を打面として剥片の剥離を試みたものである可能性がある。以上のことから363は横長剥片を剥離してはいるが、打面調整がみられないことから、典型的な瀬戸内技法による石核とはいえない。364の左図は自然面とネガティブな複数の剥離面からなる。右図も基本的には左図と同じであるが、下半に残る広い剥離面はポジティブな面で、おそらく自然面を背面として剥離した分厚い剥片の主剥離面側に当ると考えられる。この剥片を図の上下方向と横方向から加撃している。これらによって生じたものが「両面」の多くを占める剥離面であり、おそらく垂直割れによるものと考えられる。また、左図右側辺すなわち右図左側辺に不規則に並ぶ多くの剥離面も、この部分に加撃したことを示すと考えられる。最終的に左図下半の下方向からの剥離面が素材の多くを欠いて、この剥片を放棄する原因となったと思われる。以上のことから364はクサビ本体として使用した可能性を指摘しうる。ただし図の上下・横方向に使用したと仮定したばかり、打縁と刃縁のいずれも設定しがたく、クサビ本体と断言することはできない。

(田島)

2) 古墳時代の遺構と遺物

5基の古墳を新たに発見し、1基の再調査を行った。新発見の5基のうち144・165号墳については本書p.7に報告した。再調査の1基、123号墳に関しては、すでに[大阪市文化財協会1992b]にNG86-43①次の調査成果も含わせて報告を行っている。

南地区は長原古墳群の中でもっとも古墳の密集するところである(図111)。この地区の東西両端に盟主墳と考えられる塚ノ本古墳・一ヶ塚古墳があり、その間に100基を超える小古墳が存在する。[大阪市文化財協会1993]の南地区の小結で、塚ノ本を中心とする一群と一ヶ塚を中心とする一群という、2群の存在を想定する案を示したが、今回報告する古墳

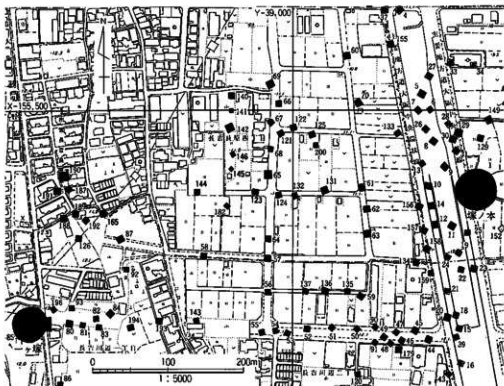


図111 南地区の古墳分布

は、この両群の境界付近に位置するものである。

I区西端に143号墳の墳丘、II区に同墳の周溝を検出した。I区では東部に幅広く調査地を設けていたにもかかわらず、その部分に古墳は存在せず、同時代のその他の遺構もみられなかった。飛鳥・奈良時代には、古墳の周溝や墳丘の一部を破壊して灌漑用水路とみられるSD01・02が造られている。

III区の東端には123号墳の一部が見つかり、NG84-48次調査の成果と合わせ、一辺約6mの方墳と推定されている。周溝底から墳丘最高所までは約0.5mあり、墳丘の示す方位はN19°Eであった。この古墳に伴う遺物は未発見であるが、各層の出土遺物の中に掲載した円筒埴輪347は、あるいはその可能性もある。周溝が埋没したのちに、灌漑用水路SD04がその肩部に掘削されている。

IV区には145・146号墳を検出した。145号墳はやや規模が小さい。146号墳には主体部の痕跡と思われるSX01があった。また、南周溝内には飛鳥時代以後の灌漑用水路と思われるSD05が造られている。

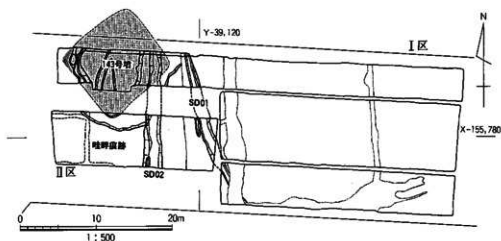


図112 I・II区古墳～奈良時代遺構

i) 143号墳(図112・114、図版10)

I区西端に、東・西隅を含む墳丘の中央部が見つかり、南接するII区に墳丘南隅と周溝が検出された。墳丘東隅はSD02によって削平を受け、その他の溝や後世の水田化によって墳丘全体に破壊が及んでいる。しかし、残存部分から推測して、墳丘の一边が11mほどの方墳と考えられる。周溝は広いところで幅3mと推定される。周溝底から墳丘最高所までは1.1m、盛土の厚さは0.6mである。また、盛土直下の長原7B層の標高は11.3m前後である。主体部は確認できなかった。

今回の調査では、この古墳に伴うものと認められる遺物は見つかっていない。しかし、付近から出土している古墳時代の遺物は5世紀後半から6世紀初めのものが多く、この時期の古墳かと推測される。

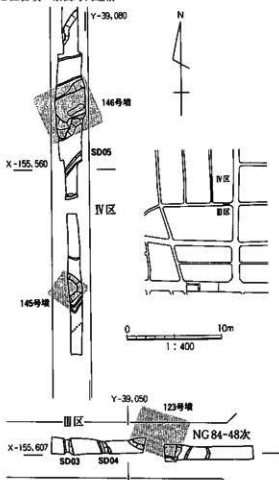


図113 III・IV区古墳～奈良時代遺構

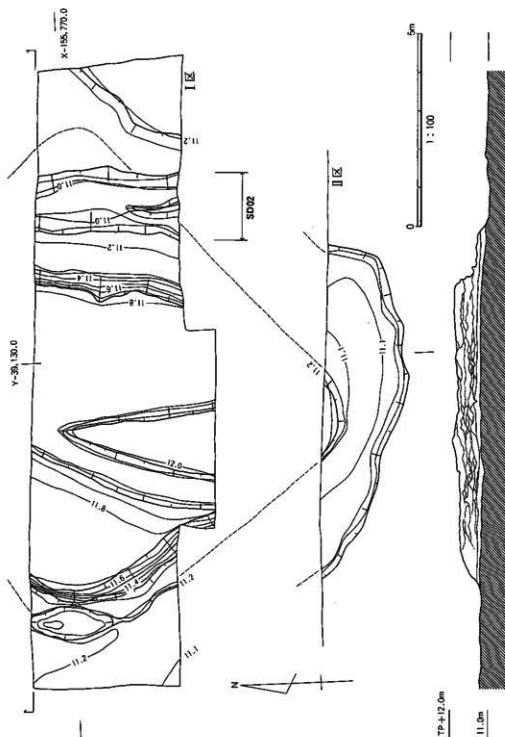


図114 143号堤平・断面図

ii) 145号墳(図113・115、図版11)

Ⅳ区南半部に墳丘東隅が見つかっている。方墳と推測されるが、一辺の規模は2.5m以上としか明らかにできない。周溝は幅2.0～2.2m、深さ10～15cmで、埋土は灰黒色粘土であった。墳丘南東側に溝状の浅い凹みがあるが、後世の水田造成による侵食の跡と思われる。周溝底から墳丘最高所までは0.6m、長原7B層(標高10.25m)の直上に厚さ0.4mの盛土を行っている。盛土は下部に長原7B層を主とした灰黒色シルト、上部に長原13層を主体とした灰～黄色シルトがみられる。墳丘上および周溝内から遺物は出土していない。

iii) 146号墳

遺構(図113・116～118、図版11)

Ⅳ区北半部に墳丘中央部を確認した。墳丘の一辺が5.5mと推定される方墳である。墳丘の縁辺部や周溝の上部は、奈良時代の流路SD12・13により削平され、大きく変形している。周溝幅を確認できるのは北周溝のみで、その幅は2.3～2.7mである。周溝埋土はオリーブ黒色シルトで、須恵器杯身368・円筒埴輪374が出土している。周溝底から遺存する墳丘頂部までは0.8mである。墳丘の方向はN65°Eで、墳丘の中心よりやや南の位置に、墳丘の方向と平行してSX01がある。

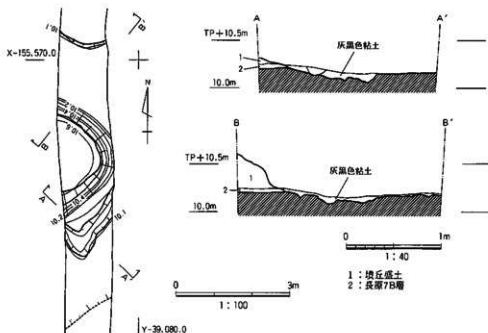
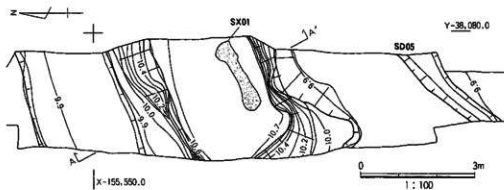


図115 145号墳平・断面図



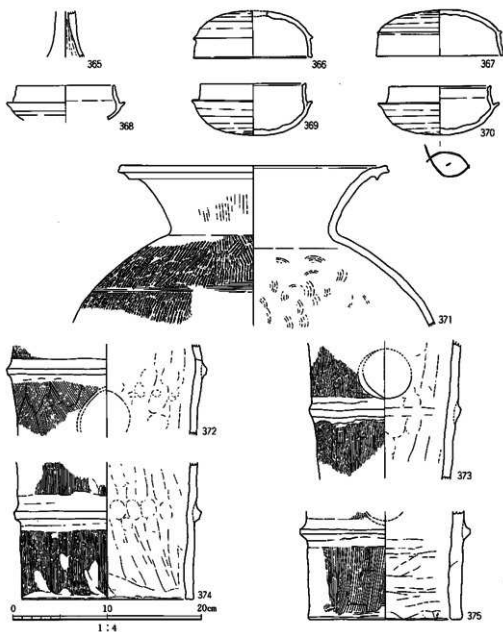


図119 146号墳出土遺物

SX01は埋葬施設部分の空洞が陥没した痕跡と考えられ、その凹みに含細砂灰黒色シルトが堆積し、また、多数の供献土器が落込んでいた。平面形は両端の拉がった長方形で、長さ1.93m、幅28～47cm、深さ11cmである。土器は中央部に集中しているが、落込む以前にすでに破砕されていたと思われる。遺物には土師器高杯365、須恵器蓋杯366・367・369・

370・甕371があった。なお、調査時点ではこのSX01を主体部そのものと考えたため、実際の埋葬施設の状況は明らかでない。

墳丘は標高10.1mの長原 7B層上に、厚さ0.7mの盛土を行って築かれている。まず、灰黒色粘土や灰褐色シルトといった長原 7B層や長原 7B層から長原 13層にかけて漸移的に移行する部分の地層をおもに用いて高さ0.4mの盛土を行い、その後、長原 13層の灰色シルトを積み上げている。埋葬施設はこの盛土作業の後半に据え置かれたと考えられる。

遺物(図119、図版59)

365は土師器高杯の柱状部である。外面はユビナデ調整され、内面にシボリメがある。

366・367は須恵器杯蓋で、天井部はやや丸みをもち、口縁部との境界に明瞭な稜をもつ。口縁端部は浅く凹む面を有する。天井部のヘラケズリはともに右回りである。367のヘラケズリは広範囲に及んでいる。366の口径は12.2cm、367は13.4cmである。368～370は須恵器杯身である。368は底部を欠き、全周の1/3が残るが、口径10cm強と推定できる。口縁端部は丸くおさめられ、器壁がやや薄い。体部のヘラケズリは右回りである。369・370は口径が11cm程度、口縁端部の内側に段をもち、丸い底部となっている。ヘラケズリの方は369が右回り、370が左回りである。370の口縁部は焼け歪んでおり、また底部には木葉形のヘラ記号がみられる。371は須恵器甕である。口縁部から肩部にかけての破片で、口縁部は全周の1/8が残る。口縁直下に突出度の高い稜を1本巡らす。体部外面には平行タタキメとカキメがみられ、内面にはナデ消された同心円文がかすかに残る。頸部外面にもタタキメとみられる縦方向の筋が観察できる。復元口径28cm、中型の甕である。以上の須恵器はTK23型式からTK47型式のものと考えられる。

372～375は円筒埴輪の破片で、372・373は胴部、374・375は基底部である。いずれも外面調整はタテハケ、内面調整はユビナデ・ユビオサエで、断面台形のタガを巡らしている。374のハケメの密度は12条/cmで、その他が7・8条/cmであるのに比べて細かい。373のタガはこれの中では低めである。372・373・375には円形のスカシ孔の一部がみられる。黒斑はなく、土師質から半須恵質に焼上がっている。374・375の復元底径は18cmと16cmで、小型の埴輪といえる。

3) 飛鳥・奈良時代の遺構(図120)

飛鳥・奈良時代の南地区は、古墳の密集地から一転して、畦畔や灌漑用水路の広がる水田地帯に変貌する。飛鳥時代の水田については、まだ不明な点が多いが、奈良時代の水田

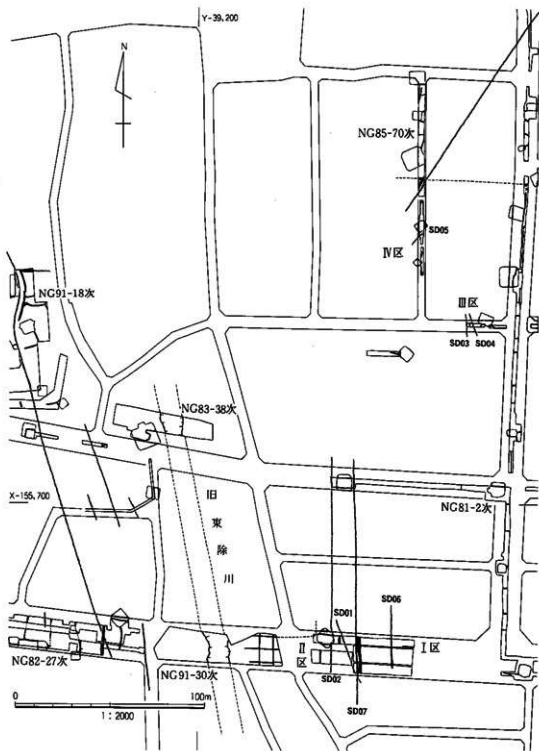


図120 飛鳥・奈良時代の南地区（朱色は長原6B層段階、黒色は長原6A_i層上面遺構）

(長原6Ai層上面遺構)はほぼ全域で検出されている。奈良時代においても、墳丘の高まりはまだ一帯に残っており、それを畦畔の一部として利用しつつ水田が造られている。したがって一筆の平面形態には不整形なものが多く、面積も一定しない。しかし、一部には正方位方向に直線的に延びる畦畔や水路も認められ、条里地割の導入が進められていたと考えられている[横山洋1992a]。

南地区の中央からやや西寄りには、現在は埋没して川としての痕跡を留めていない旧東除川があり、南から北に流れていた。その位置が丘陵の尾根筋に当ることから、人工的に開削された河川と考えられている。開削時期ははまだ明らかではないが、古墳の分布状況から古墳群築造後のもので、長原7A層上面の水田が形成される直前と推定されている[趙哲済・京嶋覚・高井健司1992b p.184]。この旧東除川を水源として灌漑用水路を配し、同地区内の水田への給水が行われた。旧東除川の開削については、古市大溝とともに「国家的開発」の第一歩と評価する見解もある[広瀬和雄1983]。

古代における洪水層は次の4層が確認されている。長原6Bii・6Aii・5A・5B層がそれであるが、各々の時期についてはまだ十分に絞り込まれていない。その中で長原5A・5B層については、『続日本紀』・『日本後記』などの正史に記された洪水記事との対比から、785(延暦4)年の9月と10月に河内国を襲った大洪水による可能性が考えられている[京嶋覚1990]。また、6Aii層については出土遺物から平城宮Ⅱの時期(本書p.62参照)、6Bii層も

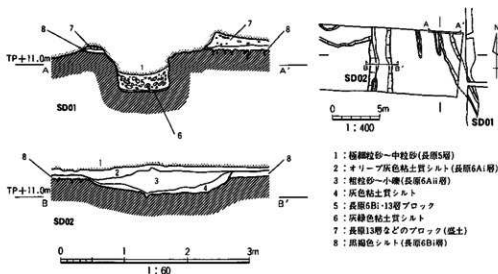


図121 SD01・02断面図

土器から飛鳥Ⅲの時期に当ると推定されている[趙哲済・京嶋覚・高井健司1992a p.21]。

i) 溝

SD01(図112・121・122)

I・II区にまたがり、北で西へ20°振る方向をとる。長原6Bi層段階に掘削され、埋没したとみられるが、上半部が長原5層の洪水によって侵食されている。幅0.6~1.5m、深さ0.6mで、幅の割には深さがあり、底が平坦に造られている。溝底には数cmの厚さで水成の灰緑色粘土質シルトが堆積し、その上に6Bi層や13層のブロック土がみられる。また、肩部には盛土がなされる。II区から須恵器高杯形器台376・377が出土している。

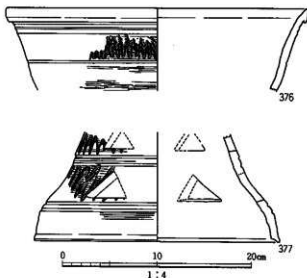


図122 SD01出土遺物

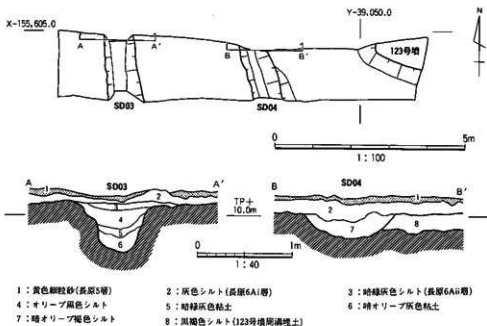


図123 SD03・04平・断面図

376は杯部、377は脚部で、同一個体と思われる。376の口縁端部は折り返されて垂下しており、体部は凹線をもって区画され、櫛状波状文やカキメが施されている。復元口径は32cmである。一方、脚部は裾付近で内湾し、端部に内傾する面をもつ。外面は2条一組の凹線によって画され、その間に櫛状波状文や三角形のスカシ孔を入れる。底径は26cmに復元される。TK47型式に属するものと考えるが、この溝の時期を直接示ものではなく、付近に存在した古墳に伴う遺物であろう。

SD02(図112・121)

I・II区を縦走する南北方向の溝である。埋土は長原6Aii層の粗粒砂～小礫で、6Bi層上面の遺構といえる。幅1.5～2.5m、深さ45cmを測り、15mにわたって検出された。I区では143号墳の墳丘東隅を削りとって掘られている。

SD03 · 04 (图113 · 123、图版12)

Ⅲ区にある南北方向の溝である。ともに長原 6AⅠ層の基底面で見つかったものであるが、SD03が「正南北に近い方向をとるのに対して、SD04は北で西に15°傾いている。また、横断面形や埋土の状況も異なっており、両者には時期差があると思われる。SD03は幅0.8～1.0m、深さ0.5m、SD04は幅0.8m、深さ0.3mである。なお、SD04は123号墳の西周溝の肩を一部破壊して造られている。

SD05(图113)

Ⅳ区中央部にあり、南西から北東に向う溝である。上部がSD12の砂礫によって削りとられているため、本来の規模は明らかでないが、現状で、幅0.6m、深さ0.2mである。埋土は

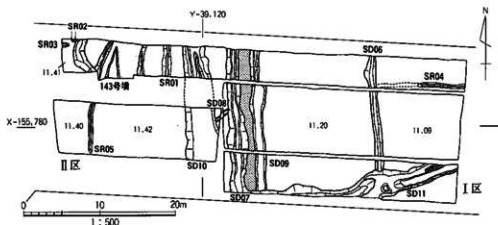


図124 I・II区奈良時代遺構（数値は水田面の標高m）

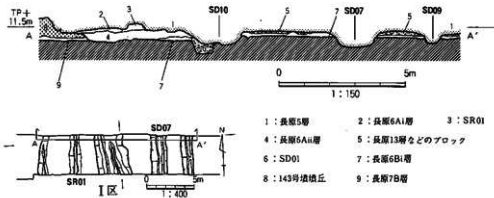


図125 SD07・09・10およびSR01断面図（I区北横）

オリブ黒色シルトで、長原 6Bi 層に相当するであろう。

SD06(図124)

I 区東部にある南北方向の溝である。北で西方向に 5° 傾いている。幅0.9～1.6m、深さ36cmを有する。長原 5 層の砂礫で、一気に埋没している。

SD07～09(図124・125)

いずれも長原 6Ai 層上面の遺構で、I 区中央付近にあり、SD08はII区にも延びている。SD07・09は南北方向に並走し、座標北からわずかに 3° 西に傾いている。SD07は幅1.5～2.9m、深さ0.9mで、東肩に幅1.6m、高さ10cm程度の盛土が行われている(図版12)。この盛土に東接して幅1.3m、深さ5cm程度のSD09がみられ、盛土はここから供給されたものと推測される。SD08はSD07に取付く小溝で、幅53cm、深さ12cmである。方向は南西から北東である。SD10に切られているため、2mほどの長さを検出したに留まる。SD07は規模などから主要な灌溉水路の一つと考えられ、SD08はそれに接続する排水溝と思われる。

SD10・11(図124・125)

SD10はI・II区に、SD11はI区にあり、ともに長原 5 層段階の洪水による侵食を受けている。SD11は溝底の起伏も激しく、洪水によって形成された流路とみられるが、SD10の西肩部は南北に直線的に延びており、本来は人工の溝があり、そこに砂などが流れ込んだことによって変形したとも考えられる。SD10は幅3.0～4.5m、深さ0.6m、SD11は幅2.4～3.5m、深さ0.4～0.9mである。

SD12～14(図126)

いずれもIV区北部にあり、南西から北東に向って流れ、長原 5 層によって埋没する流路

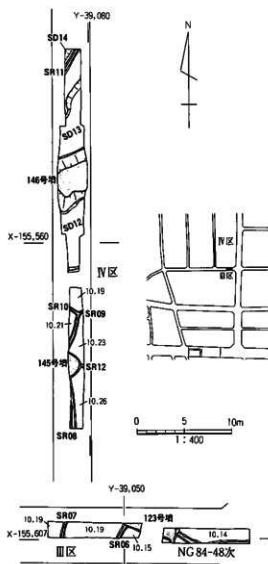


図126 Ⅲ・Ⅳ区奈良時代遺構（数値は水田面の標高m）

である。SD12は146号墳の南、SD13は北を流れて、長原6Ai層の水田作土を運び去り、古墳の墳丘を变形させている（図版13）。SD14は[大阪市文化財協会1993]に報告する南地区Ⅵ区のSD07と同一の溝と思われる。SD12・13はともに幅約6m、深さ0.2～0.3mである。SD14は先の調査成果を踏まえると、幅約2m、深さ0.8mとなり、南肩にSR11を伴う。

ii) 水田遺構

南地区においては、長原7A層上面の水田と認定できるものはまだ見つからない。それに続く長原6Bi層上面の水田についても部分的に確認されているだけである。NG82-27次調査では6Bi層上面に数本の畦畔が検出されており、南北方向の畦畔は北で西方向に10°前後の傾きをもっている。今回の調査範囲ではⅡ区にこの時期の畦畔の痕跡とみられる遺構があり、それは正方位に造られていた（図112）。

長原6Ai層上面の遺構であるSR01～05はⅠ・Ⅱ区で見つかった水田畦畔

とができる(図120)。Ⅰ・Ⅱ区の水田面の標高は11.09～11.42mの範囲にある。

SR06～12はⅢ区ないしⅣ区の長原6Ai層上面の畦畔である(図126、図版13)。SR06・07はⅢ区にある南北方向の畦畔で、北で東に15°～25°振っている。SR06は123号墳の墳丘に取付いている。Ⅲ区の水田面の高さは10.15～10.19mである。SR08～10・12はⅣ区南部にあるが、同区北部はSD12・13の侵食のため、SR11が1本見つかったにすぎない。SR08はほぼ南北、SR12は東西方向であるが、その他の畦畔は正方位に乗っていない。SR11は[大阪市文化財協会1993]の南地区SD06の南屑に当り、溝の堤としても機能していた。SR08・09・12は145号墳の墳丘に取付いている。Ⅳ区南部の水田は10.19～10.26mの高さにあり、北に向かってレベル高を下げている。

4) 平安時代の遺構と遺物

8世紀末～9世紀初頭にこの地を襲った洪水は、水田畦畔や灌溉用水路などの施設を厚い砂礫(長原5層)の下に覆い尽くし、長原の水田に壊滅的な打撃を与えた。しかし、その砂礫は、整然とした地割を広範囲に施行させる上でこれまで障害となっていた古墳の墳丘をも地下に埋没させ、現代まで踏襲される方田地割を完成させるきっかけを作った。平安時代はまさに長原の再開発の時代であり、この時代を土器編年を基に平安Ⅰ～Ⅳ期に区分して捉えている[佐藤隆1992]。開発の手が頻繁に加えられるようになるのがこのⅢ期で、[鈴木秀典・植木久1983 p.242]では、この時期の変化は自然成長的なものでなく、外的な要因、すなわち中央との関係が緊密化したことによると推定している。

今回報告する遺構・遺物も平安Ⅲ期に属するもので、Ⅳ区において検出されている。この場所は丹北郡条里7条4里29坪および32坪に当っており、東接する4里31坪、北接する5里5

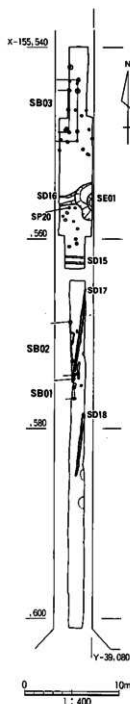


図127 Ⅳ区平安時代遺構

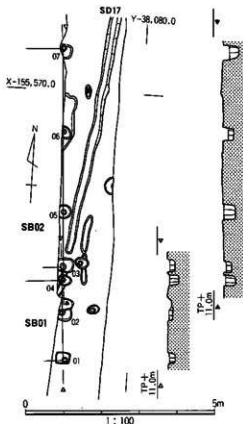


図128 SB01・02平・断面図
(01～07の数字は柱穴番号)

2間、東西1間以上の建物で、恐らく東西棟と考えられ、そのばあいの棟方位はE4°Nである。柱穴は隅丸方形を呈し、短辺30～40cm、長辺35～50cm、深さ20cm、柱痕跡の直径は約15cmである。柱間寸法は梁行南より、1.25m、1.20mである。にぶい黄褐色シルトを掘形埋土とする。SP01・03より、黒色土器B類碗384・386がそれぞれ出土している。

SB02 IV区中央部にあり、SB01の北側に一部重複して存在する。南北3間、東西1間以上の南北棟の建物と推定され、棟方位はN4°Wである。柱穴は楕円形を呈し、短径25～35cm、長径35～40cm、深さ30～40cm、柱痕跡の直径は約13cmである。柱間寸法は南から1.80m、2.05m、2.15mである。にぶい黄褐色シルトを掘形埋土とする。SP06・07から土師器小皿379・黒色土器A類碗387がそれぞれ出土している。

SB03 IV区北部で検出した掘立柱建物である。身舎は南北2間、東西1間以上で、北・東・南の3面に庇が取付く東西棟の建物と考えられる。棟方位はほぼ正東西で、上記2棟

坪にも同時期の建物群が見つまっている。また、IV区の北に接してNG85～70次調査が行われており、そこでも建物・井戸・土壌などが確認されている[大阪市文化財協会1993]。これらの建物群の分布状況は、条里地割とは積極的に関連づけがたく、むしろ長原5層の堆積によって形成された微地形に即した選地が行われていたと考えられている[大阪市文化財協会1992b p.141]。

i) 掘立柱建物

遺構(図127～129、図版14)

3棟の掘立柱建物が確認された。この建物を構成する柱穴以外にもまだ多数の柱穴が検出されている。その中には、遺物を出土したSP17～20もある。

SB01 IV区中央部に位置し、SB02と一部重複するが、両者の柱穴に切合いがなく、前後関係は明らかではない。南北

とは柱筋の方向を若干異にする。柱穴は身舎で直径30～40cm、深さ20～25cm、底では直径25～40cm、深さ10～35cmである。柱痕跡の確認できたものでは、その直径は約15cmである。身舎梁間の柱間寸法は、南から2.3m、2.0m、底の出は0.9～1.0mとなっている。にぶい黄褐色シルトを掘形埋土とする。

遺物(図130)

378～382は土師器である。そのうち379～381は「て」字状口縁をもつ浅い皿で、口径は379・380が10cm強、381が14cm弱を測る。378は[佐藤隆1992]の土師器碗Aの退化形態で、口径9.4cmに小型化している。382は口径14.0cmの小皿で、口縁部をわずかに外反させる。

383・384・386～388は黒色土器碗で、383・384・386がB類、387・

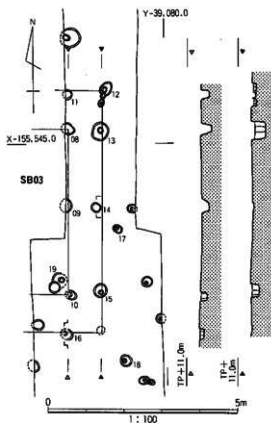


図129 SB03平・断面図
(08～19の数字は柱穴番号)

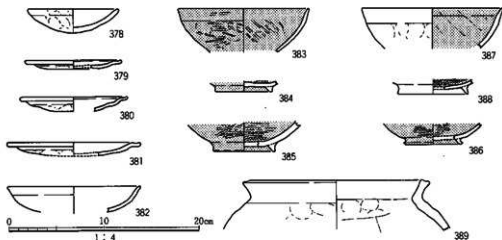


図130 柱穴およびSB01出土遺物

388がA類である。383・387は、内湾ぎみの体部に斜め上方へ直線的に延びる口縁端部をもつ。口径は前者が13.6cm、後者が14.6cmである。387には暗文がみられない。底部の残る破片では、高台の直径は5.8～7.2cmである。

384・386はSB01、379・387はSB02、383はSP17、380～382はSP18、378はSP19、388はSP20から出土した。遺構の記述の中で、SB01・02とSB03の柱筋の方向が若干異なること、SB01とSB02は同時存在しないことを述べたが、遺物から各遺構の時期差を読み取ることはできない。これらは平安Ⅲ期の遺物である。

ii) 井戸(図127・130、図版14)

Ⅳ区の中央部からやや北寄りにSE01がある。この井戸の西側にSD16があり、井戸はそ

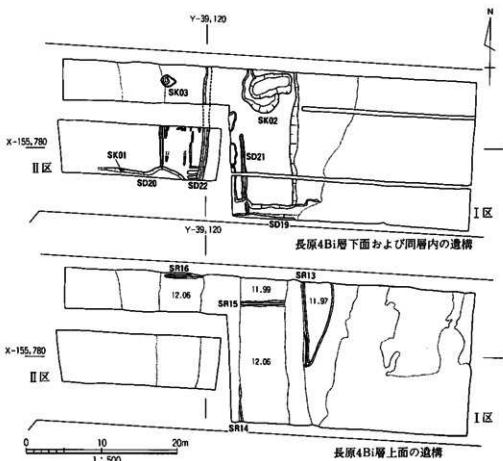


図131 I・Ⅱ区鎌倉時代遺構(数値は水田面の標高m)

の埋没後に掘られている。掘形は直径4mに及ぶが、段掘り状に掘られており、井戸本体の大きさは直径1m程度と推測する。全体の2/3は調査区外にあり、全容については明らかでない。井戸側には曲物を使用されていた。

埋土内から黒色土器B類碗385・土師器甕389が出土した。385は底部の破片で、高台径6.4cmである。389は土師器甕B〔佐藤隆1992〕の系譜を引くもので、口縁部の立上がりは低く、その端面がヨコナデによって浅く凹む。いずれも平安Ⅲ期と考えられる。

iii) 溝

SD15・16(図127)

Ⅳ区の中央部からやや北にある東西方向の溝である。SD15は幅80cm、深さ20cm、SD16は幅1m前後、深さ20cmで、ともにいはい黄褐色シルトを埋土とする。SD16はSE01によって東半部を壊されている。遺物は図示していないが、黒色土器・土師器の破片がある。

SD17・18(図127・128)

Ⅳ区の中央部からやや南部にある。南北方向に並走する溝で、北で東に9°傾いている。幅20～30cm、深さ5cm前後である。灰オリーブ色シルトを埋土とする。SD17はSB01・02のビットの一部分を切っている。鎌倉時代に下る可能性もある。

5) 鎌倉時代の遺構と遺物

この時代の遺構は長原4Bi層下面、同層内、または同層上面の遺構として存在する。4Bi層上面においては正方位方向をとる水田畦畔や溝が見つかり、畦畔の中でも下幅で1mを超えるものは、推定条里の主要な区画線となっている〔大阪市文化財協会1992b pp.139-140〕。こうした遺構は、4Bi層の直上を覆う長原4A層という水成層が分布する範囲に限定され、今回の報告ではⅠ区とⅣ区の北部に畦畔が確認されている。4A層の時期は13世紀後半から14世紀初頭と考えられている。

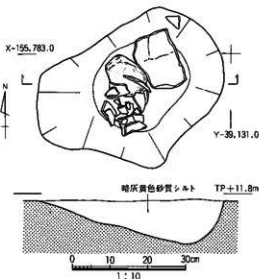


図132 SK01平・断面図

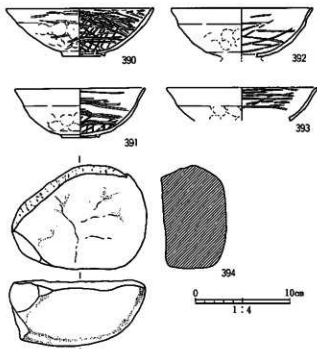


図133 SK01出土遺物

i) 溝・土壌

SD19・20(図131)

SD19はⅠ区、SD20はⅡ区に見つかった東西方向の溝で、一連の遺構の可能性もある。SD19は幅1.5m前後、深さ20cm、SD20は幅1.5m以上、深さ20cm以上である。長原4Bi層下面または同層内の遺構である。

SD21・22(図131)

SD21はⅠ区、SD22はⅠ区とⅡ区にまたがっている。ともに南北方向の溝で、SD21の南端はSD19に繋がる。SD21は幅60cm、深さ15cm、SD22は幅75

cm、深さ20cmである。このほかにもSD22の西側などには東西方向および南北方向の小溝がみられる。これらは長原4Bi層下面または同層内の遺構である。

SK01(図131・132・133)

Ⅱ区の南端中央部、SD20の肩から傾斜面にかけて検出した長原4Bi層内の遺構である。不整形な土壌で、平面52cm×33cm、深さ12cmという小規模なものである。埋土は暗灰黄色砂質シルトであった。SD20との切合い関係は明らかでない。

SK01内には瓦器碗390～393、火を受けた痕を残す河原石394のほか土師器羽釜があった。瓦器碗の口径は13.6～15.8cm、底部の残るものの高台径は4.0～4.6cmである。内面には暗文が施され、390・391の見込みには斜格子状の暗文がみられる。390には外面にも暗文がある。[鈴木秀典1982]のⅢ-1期に属する瓦器である。394は五角形の平坦面をもつ砂岩で、その平坦面だけでなく、割れた周縁の部分にも焼け焦げた痕がある。

SK02・03(図131)

いずれもⅠ区にある土壌である長原4Bi層内の遺構で、埋土は灰色シルトである。SK02の平面形は、円形の土壌と長方形の土壌が重なり合った形状を呈する。円形部分の直径約5m、長方形部分が5.5m×3.0mで、深さは35cmである。土師器・須恵器・瓦器・布目瓦など

が出土している。瓦器はⅢ-2期のものである。SK03は直径約2m、深さ25cmである。土師器や円筒埴輪が出土した。

ii) 水田遺構

長原4Bi層上面の遺構として、Ⅰ・Ⅳ区にみられる(図131・134)。まずⅠ区では、南北方向の畦畔SR13・14、東西方向の畦畔SR15・16がある。SR15はSR13とSR14の間に渡された推定長約9mの畦畔で、その南方16m以上に平行する畦畔が未確認であることから、水田一筆の形態は南北に長いものであったことが推測される。このことはⅣ区のSR17の状況からもうかがえる。SR17は正南北方向の畦畔で、長さ17m分を確認したが、その間に東西方向の畦畔は見つかっていない。SR17はまた、坪内を半町に区切る線上に位置している。なお、Ⅰ区の東側1/3は長原4A層段階の洪水によって水田面が大きく侵食を受けており、畦畔等については確認できなかった。

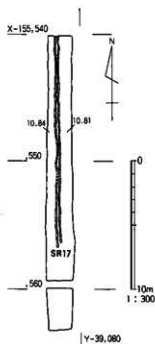


図134 Ⅳ区鎌倉時代遺構
(数値は水田面の標高m)

6) 室町時代以降の遺構

室町から江戸時代の遺構は長原3層から2層のものである。Ⅰ・Ⅱ区やⅣ区において島岡関連の幅数mの溝や小溝群が見つかっている。Ⅰ区の島岡は南北に長く配置されているが、Ⅳ区では東西に造られている。

i) 溝

SD23・24(図135、図版14)

ともにⅠ区中央部にあり、SD24はⅡ区にもまたがる。SD24は南北方向をとるが、SD23は北で5°西に傾く。SD23は幅3.2m、深さ0.3~0.4m、SD24は幅5.5m、深さ0.3mである。埋土は灰白色砂質シルトであり、長原3層の遺構である。

SD25~29(図135)

SD26~29は幅2.5~6.0mの溝で、島岡間の窪地に当る。いずれも断面台形に掘られており、深さ0.2~0.3mを測る。一方、SD25は幅1.1m、深さ15cmの小規模な溝で、上記の溝とは性格が異なるであろう。溝の方位はSD28・29が北で東に4°傾くのに対し、SD25~27はほぼ正南北である。SD25はその北端部が東に屈曲している。SD27の東側、SD29の東側

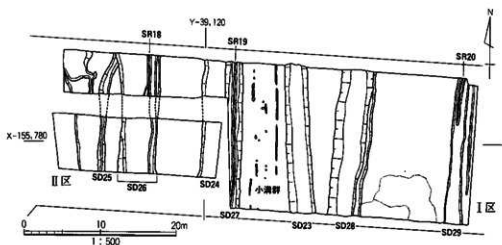


図135 I・II区室町時代以降の遺構

にはそれぞれに平行する小溝がみられる。埋土は灰黄褐色粘土質シルトであり、長原2層の遺構である。

ii) 畦畔(図135)

SR18～20が、それぞれSD26・27・29の溝内に、溝と平行して存在する。SR18・20は溝の中央からどちらか一方に偏った位置にあり、検出した長さも6mほどであるが、SR19は溝中央にあり、19m以上続いている。

7) 小結

i) 古墳の分布状況

長原古墳群でもっとも古墳が集っている塚ノ本古墳と一ヶ塚古墳に挟まれた範囲で調査を行った。しかし、その中央付近にある143号墳の東側には分布の空白が認められた。同じことが58号墳の東側でもうかがえ、中央付近はかえって分布密度が低いことが考えられる(図111)。

また、今回報告した146号墳はTK23型式ないしTK47型式の須恵器をもつ古墳であった。過去の報告を振り返っても、この中心部付近の古墳はTK23型式以降の須恵器を共伴するものがほとんどで、まれにTK208型式段階の須恵器を伴う古墳が存在することがわかっていく。すなわち、古墳群形成の後半に現われるものが多いことも指摘できるだろう。古墳の時期を特定できるものが少なかったことは、本来は供献土器や埴輪を備えていたも

のもあろうが、量的にそれが多くなかったことも推測させる。

[大阪市文化財協会1993 pp.216-218]の中で、塚ノ本古墳を中核とするグループ、一ヶ塚古墳を中核とするグループの存在を考えた。両グループの境界の状況は上述の通りで、古墳の分布密度が低くなることはこの考え方にとって有利である。また、比較的新しい時期の古墳が多く、遺物量も減少きみであることも中核から離れているためとみることもできよう。今後も検証を重ねていく必要がある。

ii) 飛鳥・奈良時代の水田と水路

I区で検出した灌漑用水路はSD01→SD02→SD07と変遷した。SD01は北で西へ20°傾いていたが、SD02以後は正南北方向となる(図120)。これに似た状況は、旧東除川を挟んでI区と対称位置にあるNG82-27次調査地でもみることができる[大阪市文化財協会1990]。こちらでは北で西に11°傾く水路のちに正南北方向の畦畔が造られている。さらに南地区の西半部一帯まで視野を広げると、長原7A～6Bi層段階までは旧東除川に平行する溝が多く、その後、正方位優位に代ってきているようである。正方位化が比較的早く達成される所として、従来、古墳の分布の少ない場所があげられていたが、それに加えて旧東除川沿いの部分も注目される。それを示すSD02・07は100m以上続くことが推定され、主要な灌漑用水路であったことを示している。また、I・II区の西にあるNG91-30次調査地では整然と区画された畦畔も見つかっている。旧東除川の開削については「国家的開発」の第一歩とする広瀬和雄氏の見解もある[広瀬和雄1983]。その実態を検討するためにも、今後、灌漑用水路の在り方を丹念にみていく必要があろう。

iii) 平安時代の建物群

IV区において平安時代Ⅲ期の掘立柱建物を3棟報告した。そのうちSB01とSB02は重複し、

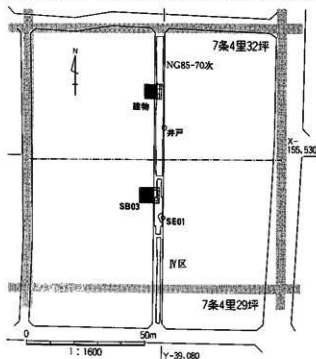


図136 7条4里32坪の状況

それらとSB03は柱筋の方向が若干異なっていた。このことから3棟は同時に存在したものではないと考えられる。Ⅳ区の北にはNG85-70次調査地があり、そこでも平安時代Ⅲ期の掘立柱建物・井戸が見つかった[大阪市文化財協会1993]。これらの建物群は丹北郡条里の7条4里32坪内にあり、その状況を図136に示した。先の調査の建物と今回見つかったSB03とは柱筋の方向が共通しており、36m離れているにもかかわらず、東の柱筋がほぼ揃っている。そのためこの両者は同時期に存在した可能性が考えられる。また、この2棟の建物は条里地割の一町を東西に折半する位置にあり、条里を意識して配置されていたことも考えられる。さらに、建物の南東にそれぞれ井戸を設けている点も共通している。このことから、平安時代Ⅲ期の建物群の中に条里地割を重視したものがあること、そして、一町四方の区画を南北に二分するような屋敷地の存在をも想定できるのではなかろうか。この問題も、今後の検討課題としておきたい。

(櫻井)

註)

(1) 329-332の陶磁器の所見については、当協会の松尾信裕・森毅・嶺山洋より教示を得た。

第4節 長原遺跡東南地区の調査(NG86-54①・54②・58①・58②・70次調査)

当年度、本地区内で行われた主要な調査は5件である(図137)。そのうちの4件は同地区北部のNG86-54①・54②・58①・58②次調査で、これをそれぞれⅠ～Ⅳ区とする。残る1件は同地区南部のNG86-70次調査で、これをⅤ区と呼ぶ。このⅠ～Ⅳ区周辺では、それまで、区画整理関連の発掘調査はあまり行われていなかったが、本年度から翌年度にかけてこの区域の調査が行われている。また、Ⅴ区周辺についても、その南部の東西道路をNG85-13次で調査しているが、調査が本格化するのは87年度以降である。

1) 層序と各層の出土遺物

i) Ⅰ・Ⅱ区の層序(図138)

沖積層上部層

長原1層：現代の作土層で、0.3～0.8mの盛土の下にみられる。層厚は最大0.3mである。

長原2層：灰オリーブ～黄灰色系のシルト・細粒砂などからなる江戸時代の作土層である。層厚は最大0.4mで、場所によって2枚に細分できる。

長原3層：灰黄～にぶい黄色系の作土層である。最大層厚0.4mで、部分的には3～4枚に細分可能であった。本層の下面から鳥島が検出される。

長原4層：平安から鎌倉時代にかけての層準で、かなり多くに細別される。長原4A層は

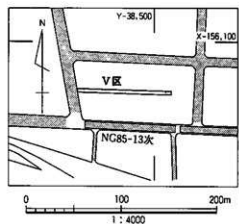
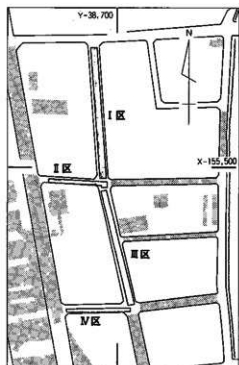


図137 東南地区の調査区分

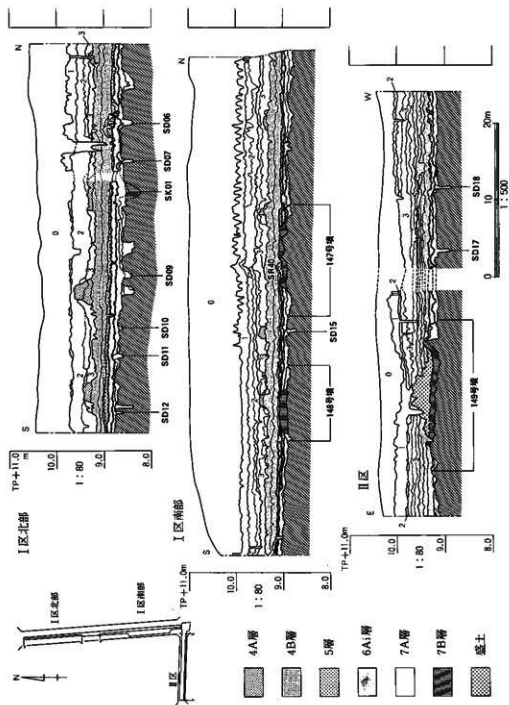


図138 東南地区Ⅰ・Ⅱ区の層序

黄褐色系の中～細粒砂からなる水成層で、Ⅰ区で島島の頂部付近にのみ残存していた。長原4B層は合計6枚に分れ、Ⅰ区で4枚、Ⅱ区で6枚が検出され、それぞれの地層に係わる多くの遺構が検出された。ここでは便宜的に4B-1～4B-6層としておく。Ⅰ区・Ⅱ区とも共通して認められたのは4B-5層、4B-6層だけであるが、後者の分布はごくわずかである。4B-5層の基底面では平安時代の遺構が検出された。4B-5層以上には瓦器を含むが、4B-6層にはなく、直上で検出された遺構には黒色土器が含まれる。

長原5層：浅黄～黄褐色系の砂礫からなる水成層である。Ⅰ区北半に残存しており、最大層厚は15cmであった。Ⅱ区のごく一部でも本層らしき砂層が認められた。

長原6層：Ⅱ区149号墳の東を除いてほぼ全域に堆積している。長原5層に覆われた部分で層厚15cm前後であり、その上面には水田畦畔が遺存していた。長原6Ai層に相当するとみられる。

長原7層：長原6Ai層の下には黒褐色～褐灰色シルト質粘土ないしシルトが認められたが、良好な遺物を欠いているため、今回の報告では暫定的に7A-1層としておく。その下は、Ⅰ区では黒色シルト質粘土が薄く堆積しており、これを7A-2層と考えておく。Ⅱ区では西半部で、地山の長原13層や長原7B層の偽礫が余り淘汰されずに含まれる長原7A層が1枚だけ認められた。また、7B層は古墳の盛土下に主として残存していた。

沖積層下部層～低位段丘構成層上部層

長原13層：いわゆる長原地山層である。本書第Ⅰ章の調査の経過の中で述べた通り、Ⅱ区で旧石器の調査を実施したが、この地点では出土していない。

(積山)

ii) Ⅲ・Ⅳ区の層序(図139)

Ⅲ区南半部およびⅣ区東半部は谷状の窪地内に入るため、同一調査区であっても、他の部分とは大きく異なった地層の状況を示している。

沖積層上部層Ⅰ

長原0～3層：長原0層は現代の客土、長原1層は現代の作土である。長原2層は江戸時代、長原3層は室町時代の地層と考えられているが、両層とも残りはよくない。

長原4A層：Ⅲ区北端部にわずかに遺存する。淡黄色極細粒砂の水成層である。

長原4B層：Ⅲ区全域にみられ、もっとも厚いところで層厚0.4mを測るが、Ⅳ区では主として遺構内埋土として存在する。Ⅲ区北端付近では3層に細分され、上から灰黄色粘土質シルト、明黄褐色粘土質シルト、褐灰色粘土質シルトとなっている。中部の地層は上下層

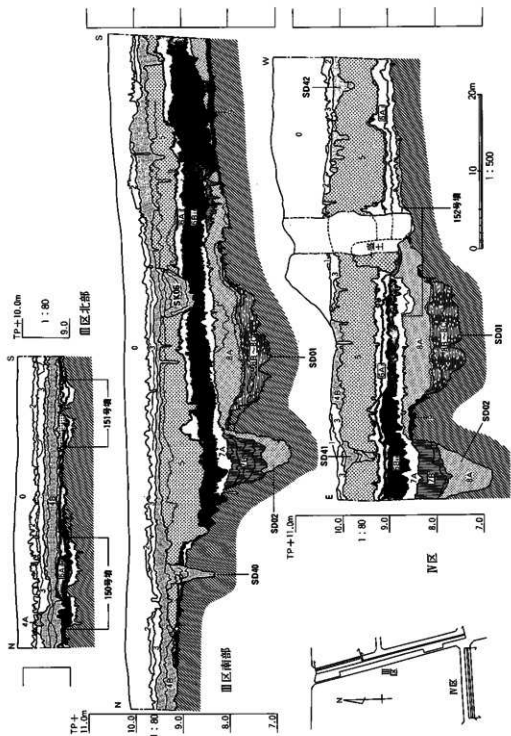


図139 東南地区Ⅲ・Ⅳ区の断面

よりも砂礫を多く含んでいる。下部の地層には黒色土器・土師器が包含されるが、瓦器は含まれず、Ⅰ・Ⅱ区の4B-6層に相当すると思われる。上中部の地層に伴う遺構としてⅢ区南半部とⅣ区全域に井戸・溝・土壌などが検出されている。また、下部の地層に関連する掘立柱建物や井戸がⅢ区北端に見つかっている。

長原5層：細粒砂～粗粒砂からなるラミナの発達した水成層である。Ⅲ区北半部では部分的に確認できるのみであるが、Ⅲ区南半部およびⅣ区では0.4～1.3mという厚さで堆積している。

長原6Ai層：暗オリーブ灰～暗緑灰色粘土で、平均的な層厚は10数cmである。調査区のほぼ全域に分布する。Ⅲ区南半部とⅣ区に、当層上面の水田面が検出されている。

長原6Bii層：色調は暗オリーブ灰～緑灰色を呈するが、中粒砂～細粒砂であったり、シルトとなる地点もあり、場所によって層相が変化する。後述の長原7A層の水田面を覆う水成の地層である。長原6層のグループには、その他に長原6Aii層という水成層も存在するが、出土遺物からこのように判断した。

長原7A層：灰～黄灰色粘土である。Ⅳ区では全域にみられ、上面に水田畦畔が見つかっている。Ⅲ区南半部にも水田畦畔を確認したが、同区北部では古墳の周溝埋土として、限られた範囲に存在する。

沖積層上部層Ⅱ

長原7B層：SD03・04の埋土としてみられ、詳細は後述の通りである。また、Ⅳ区に見つかった152号墳の墳丘盛土下にも遺存しており、そこではオリーブ黒色粘土である。

長原8A層：Ⅲ・Ⅳ区の谷状の窪地内に顕著に分布する水成層である。緑灰色を基調とし、粘土質の部分、砂礫を主とする部分がある。後述するようにSD01・02の埋土となっている。

長原8B・8C層：SD01の埋土下部にみられる弥生時代中期の地層である。詳細は遺構の記述を参照されたい。

長原9層：SD01の肩部周辺に数cmの厚さで確認された灰色シルトの地層である。

沖積層下部層～低位段丘構成層上部層

長原13層：谷状の窪地となるⅢ区南半およびⅣ区東半を除いて分布している。主として灰白色粘土であるが、Ⅲ区の一部には粘土質砂礫層となる部分もある。

長原14・15層：長原14層はオリーブ黄色シルト質粘土、長原15層は明緑灰色シルト質粘土で、谷状の窪地の斜面から底にかけてみられた。

iii) V区の層序

調査区内数箇所の地層の記録しかないため、ここでは層序の概略を記す。調査区周辺の地層の状況については[大阪市文化財協会1993]の東南地区の報告を参照されたい。

現代作土である長原1層および江戸時代の地層である長原2層が層厚0.2~0.3mでみられ、その基底に黄褐色粗粒砂の長原8層が存在する。弥生時代以降の遺構の多くはこの長原8層の直上(標高11.5~11.6m)で見つかる。今回の調査ではこの面までの遺構を調査したが、標高11.2m前後にある長原13層までの間には長原9層の存在も確認されており、さらにさかのぼる時代の遺構・遺物も埋蔵されているとみられる。

iv) 各層の出土遺物(図140~142、表10、図版60~62)

長原2・3層出土遺物

395は唐津焼碗の底部である。高台を削り出しており、見込みに砂目が残る。17世紀前半のものと考えられる。396は青白磁合子の蓋で、直径5.5cm程度の大きさのものである。天井部に型押し文様をもち、外縁を菊花状にする。12世紀代の舶載品である。

長原4B層出土遺物

表10 東南地区出土遺物

地区	地層	遺物番号
I区	長原2・3層	396
	長原4B層	397・399・404・405・412
	長原7A層	417~422・427・429
II区	長原4B層	400・401・403・406~409・411
III区	長原4B層	410・437
	長原5層	413・416
	長原6Ai層	424・426・428・436
	長原6Bii層	423
	長原7A層	432・435
	長原7B層	430・431・433
IV区	長原8A層	434
	長原2・3層	395
	長原4B層	398・402
	長原5層	414・415
	長原7A層	425

397は瓦器小皿で、口径約10cmある。見込みに平行暗文がある。398は瓦器碗で、口径14.6cm、器高5.3cmである。内外面に暗文があり、見込み部分は平行暗文となっている。これらは瓦器碗のⅡ-2期に当てはまる。399は灰釉陶器の壺である。口縁部のみ遺存する。400は青磁碗で、同安窯系に属する。体部外面に横方向の沈線と細かい櫛目があり、内面上位にも横方向の沈線がみられる。このことから[横田賢次郎・森田勉1978]のⅠ-1類に分類され、12世紀中頃以降のものと考えられる。401は緑釉陶器の碗で、軟質の素地に濃緑色の釉が

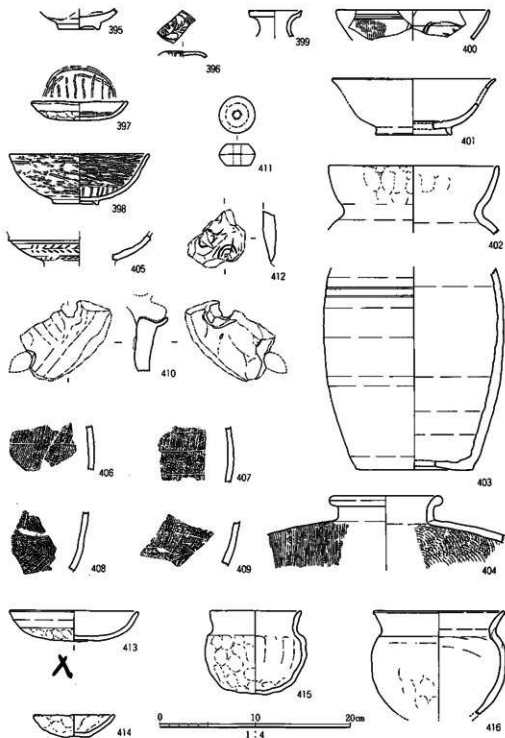


図140 東南地区各層の出土遺物（1）

掛かるが、高台の内側には及んでいない。底部には糸切り痕があり、高台は貼付けによっている。見込み部分に圈縁が巡る。11世紀前半頃のもので、平安Ⅲ期の遺構と関連するものと思われる。402は土師器甕で、復元口径は約18cm、内湾する大きな口縁部に特徴がある。403は須恵器の壺で、口縁部を欠いている。底径12.2cmに復元され、体部上方に2条の沈線がある。

以下の遺物は当層より下層に存在する遺構に関係すると思われる遺物である。404は須恵器横瓶で、短い頸部に玉縁状の口縁部をもつ。体部内面には同心円文が明瞭に残る。6世紀後半のものと思われる。405は須恵器高杯の杯部とみられ、体部に櫛描列点文が綾杉文風に付く。TK73型式またはTK216型式に当るものであろう。406～409は須恵器壺の破片で、体部外面に縄唐文や横方向の沈線がみられる。焼成がややあまい。410は馬形埴輪の頸部である。目から耳の付け根の部分が残るだけであるが、耳をソケット式にはめ込む手法で作るものであったことがわかる。表面には頭緒の剥落した痕跡を認める。411は算盤玉形の土製紡錘車である。最大径3.8cm、厚さ2.4cmを測る。焼成は土師質で、胎土に3mm以下の砂粒を含む。形態から、古墳時代中期の韓式系土器と同じく、朝鮮半島からの渡来人に係わる遺物とみられる。412は線刻画のある土製品である。全体像が明らかでないため、線刻の意味は明らかでないが、表面の凹んだ部分に円弧とそれを切る直線があり、その左上方にも不整円形の線刻がみられる。



写真12 鉄製錐

437は鉄製錐と思われる(写真12)。

全長10.9cmを測り、先端より4.5cmのところから木質が遺存する。断面形は茎部分では長方形を呈するが、先端に近い場所では正方形になる。

長原5層出土遺物

413は土師器杯で、口径13.6cm、器高3.2cmである。平城宮Ⅴに当るとみられ、底部外縁に「×」の墨書がある。

414は土師器小皿で、口径8.4cm、器高2.4cmを測る。ほぼ全面にユビオサエ痕が残る。415は土師器甕で、ユビオサエ痕を明瞭に残す球形の体部と直立

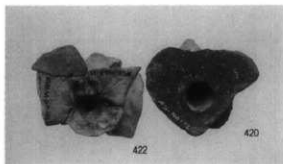


写真13 土師器高杯の脚部裏面

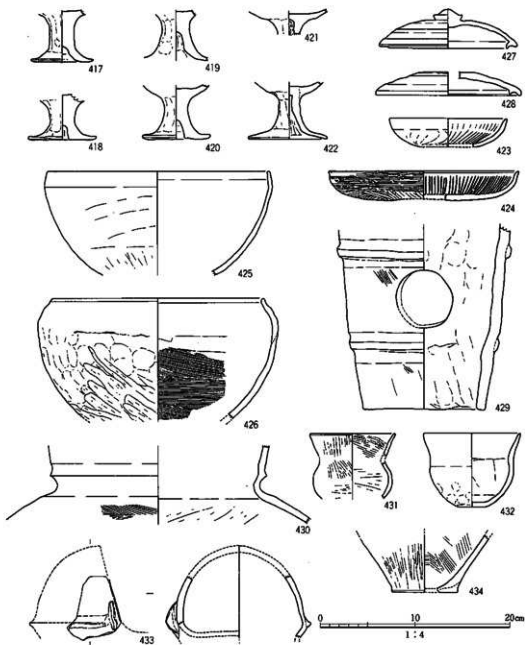


図141 東南地区各層の出土遺物（2）

に近い口縁部をもつ。口径9.4cm、器高8.9cmである。416も土師器甕で、口径13.7cmに復元されるものである。これらの長原5層出土遺物は従来の知見通り、奈良時代末から平安時代初頭までのものである。

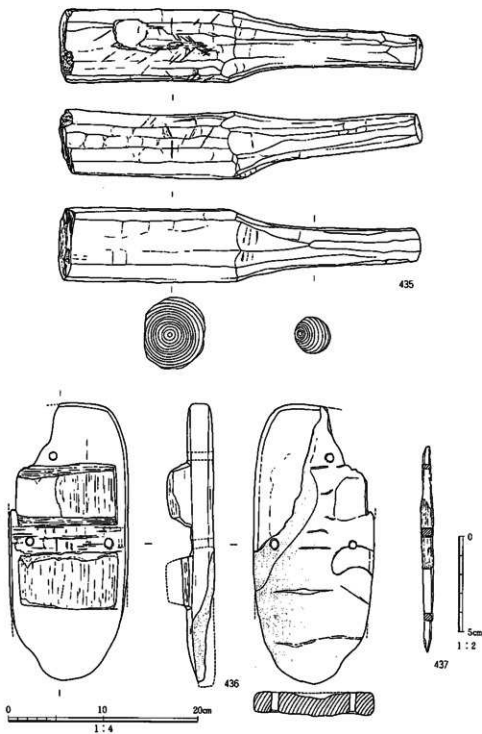


図142 東南地区各層の出土遺物 (3)

長原 6Ai 層出土遺物

424は口径20.0cmの土師器皿で、内面に正放射状暗文がみられ、体部外面には細かいヘラミガキ、底部にはやや幅のあるミガキが行われている。426は口径22.3cmの土師器鉢である。口縁部付近で大きく内湾し、その端部を上方につまみ上げている。外面下部にはヘラケズリ、内面には細かいハケメがみられる。これらの土師器は飛鳥ⅢないしⅣの時期と考えられる。428は須恵器杯蓋で、口縁部内面にかえりをもつ。口径15cm強に復元され、平城宮Ⅰに当ると思われる。

436は左足用の下駄で、後方を欠損するが、平面形は隅丸長方形になると思われる。残存長29.0cm、幅12.8cm、厚さ2.4cmを測り、台の両側から少し内寄りに側面形が台形をなす高さ2.1cmの歯を彫り出している。前壺は右に寄り、後壺は後歯の前に開けられる。また、前後の歯の間隔がやや狭い。横木取りである。表面の大半は火を受けて焦げている。京都府石本遺跡[京都府埋蔵文化財センター1987]に類似するものがある。

長原 6Bii 層出土遺物

423は口径12cm強、器高約3cmに復元できる土師器杯である。内面に斜放射状の暗文がある。飛鳥Ⅲに当るものであろう。

長原 7A 層出土遺物

417～422は土師器の小型高杯で、Ⅰ区南部から出土した。421・422のように中空の柱状部をもつものもあるが、その他は中実またはそれに近いものとなっている。また、420などでは、脚端部の表面が完全に平坦になっている(写真13)。417～420の製作に当っては、脚部裏面から柱状部側に指を挿入して回転の軸とし、それによってヨコナデ調整を行ったことが推定される。425は土師器鉢で、口径はほぼ23cmである。器壁が磨耗しており、調整の痕跡は不明瞭である。体部下半はヘラケズリされているようである。427は須恵器杯蓋で、口縁部内面にかえりを有する。天井部に宝珠形のつまみを頂く。口径14.1cmで、飛鳥Ⅲに当ると思われる。

429は円筒埴輪、432は土師器鉢で、当層形成以前の遺物である。前者は古墳時代後半、後者は前半のものである。

435は全体の残る横槌である。[渡辺誠1985]のEタイプに分類される。全長38.2cm、敲打部は長さ18.5cm、幅7.5cmである。

長原 7B 層出土遺物

430・431は古墳時代前期末から中期初頭の土師器である。430は頸部と口縁部の境に明

瞭な稜を作る山陰系の甕、431は口径9cmほどの小型の甕である。433は手焙形土器で、鉢部と覆部の境に断面三角形の突帯を巡らせる。覆部の開口部分は幅8mmほどの面をもっているが、その縁に沿って、その下端に長さ約3cmの耳状の突出部を貼り足している。

長原 8A層出土遺物

434は弥生土器の甕の底部である。平底となる底部はもっとも薄い部分では数mmの厚さしかない。畿内第Ⅳ様式のものである。

(櫻井)

v) 動物遺体

動物遺体は9点出土した。うち4点が次の2種に同定された。

ウマ科ウマ *Equus caballus* Linnaeus

ウシ科ウシ *Bos taurus domesticus* Gmelin

ウマは、Ⅲ区の長原2層あるいは3層相当層から右上顎歯M1が、Ⅰ区の長原6Ai層から右下顎の臼歯破片が出土した。歯根の形成のようすから、前者が5才以上、後者は5才

前後の年齢が推定される。また、151号墳周溝内に堆積した長原6Ai層からは右距骨の破片が出土した。古墳に関連するものかどうかは明らかでない。

ウシは、Ⅰ区4B-2層から左下顎の臼歯破片が出土した。

(久保)

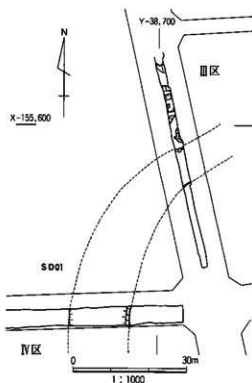


図143 SD01の位置と方向

2) 弥生時代以前の遺構と遺物

i) 流路

SD01(図143・144、図版15)

Ⅳ区東部からⅢ区南部へ大きく湾曲する流路で、幅は10～16mである。長原8C～8B層段階のものである。最深部から50cmほどは粗粒砂と極細粒砂が互層になっており、その上部に黄灰～褐灰色のシルトが約40cmの厚さで堆積する。その段階でも流路

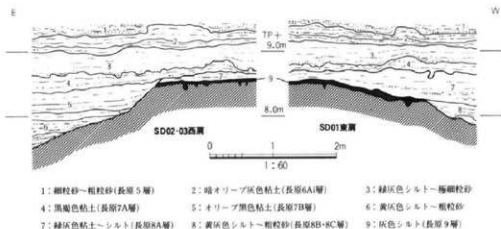


図144 SD01・02・03肩部断面図 (Ⅳ区南壁)

は浅い凹みとして残っており、最終的にはそれを長原8A層の水成層が覆い尽くしている。8A層の最下部は厚さ10cmほどの緑灰色粘土で、その上を層厚60cmの緑灰色シルトが覆う。

SD02(図144・151、図版15)

Ⅳ区東端からⅢ区中央部へ大きく湾曲する流路である。後述するSD03と重複する位置にあり、それによって掘直されているため、本来の幅は明らかでない。深さは1.5m以上である。長原8A層の粗粒砂～細粒砂によって埋没するが、その肩部付近ではシルトまたは粘土となっている。

(櫻井)

ii) 土壌

SK01(図145・154、写真14・15)

Ⅰ区北部において、7A層の基底面で検出した土壌である。トレンチ内のヒューム管が障害となって、平面形態は明らかでないが、深さは0.5m弱であり、埋土には13層以下の地山土のブロックが多く含まれていた。438の甕が出土している。

438は庄内式の要素をもつ甕の上半部である。口縁部は全周の1/4が残る

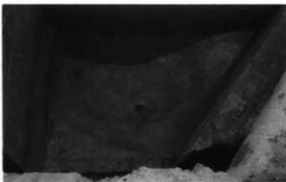


写真14 SK01(東から)

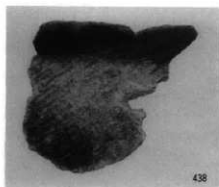


写真15 SK01出土土器

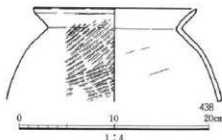


図145 SK01出土土器

が、直径約17cmに復元される。口縁端部は斜め上方に向って尖りぎみに作られる。タタキメが細かく、器壁も薄い。内面調整は磨滅のため不明。

(横山・櫻井)

iii) 石器遺物(図146～149、表11、別表2、図版63・64)

ここに報告する石器遺物は、すべてが古墳時代以降の地層・遺構に含まれる遊離資料である。

石鏃

439は先端と基部を欠くため本来の形は不明である。右図側に、刃部の細部調整剥離面を切って長軸方向に広がる大きな剥離面があり、その先端部分に折れ面がある。これは使用によって生じた破損の痕と思われる。440～449は凹基無茎式である。440は全体に正三角形をしており、脚部の先端にやや膨らみをもつ。441は、外形が縦長の

三角形で、脚端部がやや膨れる。刃部は鋸歯縁で、基部の挟り込みが深い。442は全体として正三角形に近いが、刃縁の中ほどから末端にかけて外側に開いている。脚端部はやや膨れる。443は先端部を欠いているが、442と同様な形態と考えられる。ただし、442よりも大ぶりで、かつ薄手である。444は先端部と脚の末端を欠くが、正三角形に近い形が推測できる。全体に細部調整の剥離面が大きめである。445は縦長の三角形をしている。刃部はその先端付近で角度を鈍らせる。脚部はやや膨らみ、基部の挟りはやや浅い。446は先端部を欠くが、縦長の三角形をしたものと思われる。刃部は鋸歯状に作られ、片面に先行剥離面が残る。脚端部は尖り、基部の挟りはきわめて浅い。447は縦長の三角形を呈し、脚や基部の作りは446と同じである。やや小型の石鏃といえ、両面に先行剥離面が残る。448は刃部の中ほどに刺状の張出しをもち、刃部の先端をかなり鋭角的に作る。脚端部も鋭く尖っている。449はやや縦長の三角形をしたもので、刃縁は湾曲ぎみに作られる。脚端部も鋭さを欠き、基部の挟りもきわめて浅い。また、両面に先行剥離面を広く残している。450は凸基無茎式のいわゆる木葉形石鏃である。451は先端と脚部を古い折れによって欠き、全体の形態は不明である。しかし、比較的大型品であるといえる。

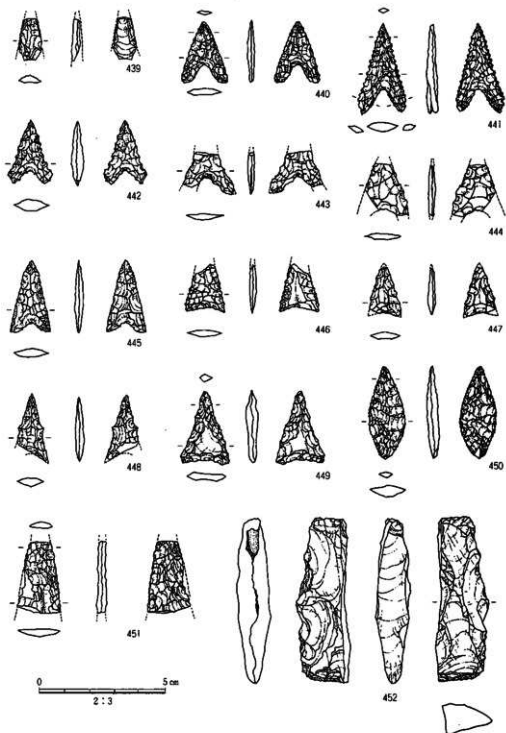


図146 東南地区の石器遺物 (1)

表11 東南地区石器遺物

地区	出土遺物
I区	440・448・449・451・452
II区	441・445・447・450・458
III区	439・442・443・444・446 454・456・457・459
IV区	455
V区	453

440～448は長原12層～長原9C層から出土する石鏃と形態的に共通するため、縄文時代中～後期のものと考えられる。450は弥生時代前～中期のものであろう。

クサビ

452は右端の図の右側縁に横長の主剥離面を残し、それが上下に向い合う縦長の剥離面によって切られている。また、その側縁には若干の自然面も残されており、加撃による潰れもみられる。そのため、まずは、この側縁をクサビの打縁または刃縁として使用したこ

とが考えられる。さらに、図の上方および下方にも細かい潰れがみられ、側面図に示した縦長の裁断面が上方からの加撃によるものであることから、上方を打縁、下方を刃縁として再度利用したことが推測される。

(櫻井)

453はクサビの本体と考えられるものである。右図では上方からの加撃によってできた剥離面があり、この石器が形成された最終的な剥離面である。中央付近と末端のリングで強く屈曲し、剥離面は、一見複数の平坦な面で構成されているようにみられる。これは、垂直方向の強い加撃で形成された割円錐に沿わない剥離面である。また、その下端は対向する方向から加わった力で、ステップ状に潰れている。ステップの一部は上方からの剥離面の末端のフィッシャーにつながり、これらが同時に形成されたものと考えられる。下端の潰れを復元すると、もとは下に向ってすぼまる形状の石器であろう。こうした状況から、この石器が向い合う加撃によって形成されたものと考えられ、上方を打縁に、下方を刃縁としたクサビの本体と考えられる。

次に、それ以前の作業の状況を考える。左図には、素材となった石器の剥離面である中央の縦に長い剥離面がある。それに併行する方向で剥離された面が左側にみられるが、この面も、平坦で末端が著しいステップとなっており、右図の剥離面が形成される以前にも割円錐に沿わない方向で強く加撃された作業が想定される。さらに、左図の右側の下方から剥離された裁断面も、この石器が形成される前段階の作業が、垂直方向に加撃するものであったことを想定させる。この裁断面の末端に打痕があり、右図の剥離面の打点と隣合うため、一連の加撃の可能性がある。

(清水)

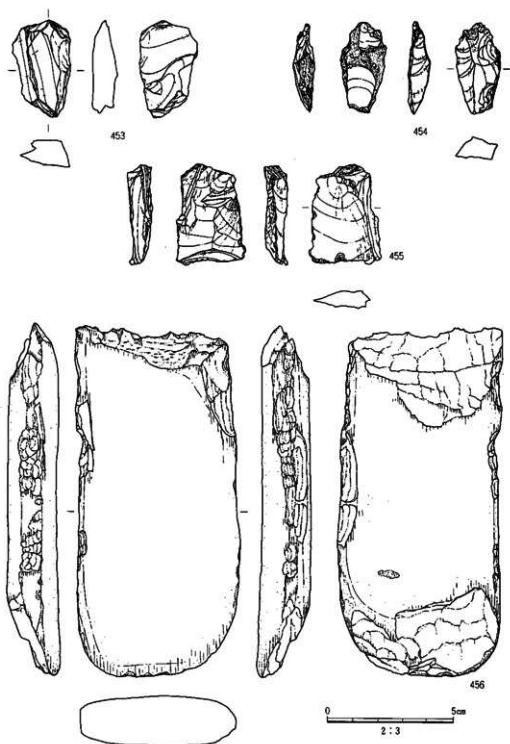


図147 東南地区の石器遺物（2）

454は背面に自然面が多く残る板状の剥片を素材とするクサビである。加撃の方向は2方向である。素材となった剥片の主剥離面の末端に細かな剥離痕が多くみられる。これらはクサビとして使用された時の複数の加撃によって生じたもので、よって右図右縁を打縁と考える。この右方向からの加撃により、主剥離面の向って上下に2つのネガティブな面が形成される。上の面は末端がステップをなす。下の面は細かな剥離面が集中し、ヒビが入込んで階段状を呈している。そして、図の左右に向い合う方向で使われていたクサビは、なんらかの理由で、次は加撃の方向を図の上下に向い合う方向に変えて使われている。打縁は図の上縁であり、この加撃で背面上部に、末端がステップになった剥離面が形成されている。また、右図の左半部にある裁断面も縦方向の衝撃で生じたと考えられ、そのためにこのクサビが図の横方向で使用された際の刃縁は失われている。一方、上下方向の刃縁は図の下縁で、下方向からの衝撃を受けて形成された大小の剥離面が認められる。

455は上縁に自然面をもつ板状の剥片である。主剥離面は右図の上部にわずかに残る小さな面である。主剥離面を切って左側に大きく拉がるネガティブな面は、上からの加撃で生じている。同じ上からの加撃で形成されているのが、背面の、自然面を打面としている末端がステップをなす細かな剥離面である。これらの剥離は、ほぼ同時に形成されたものと思われる。こうした特徴から、この剥片を図の上縁を打縁とするクサビと考えることができる。しかし下縁は折れにより失われ、その状況は明らかではない。また、クサビ本体からはじけた剥片としての可能性もある。一方、図の左方向から加撃されてきた剥離面が背面にみられる。末端がステップで、打点付近は折れにより失われている。しかし対向する右縁には細かく小さな剥離面が残るだけであり、横方向でのクサビとしての使用は考えにくい。この左方向からの加撃の意図は不明である。

(細川)

石斧

456は扁平片刃石斧身である。側縁の一方が幅4～9mmの面をもつのに対して、他の一方が丸く整形されている。刃部と基端は欠損しているが、その部分にさらに研磨を行った痕跡がみられる。また、両側縁には多数の敲打痕がある。基端側の欠損部分は両面にわたって広い割れ面をみせており、かなりの衝撃がこの方向から加えられたことがわかる。この割れ面の生じた理由としては、ここで基端と考えた側がかつて刃部として使用されていたこと、また、この石器が柄から取り外されて単独にクサビとして使われたことなどを考えることができる。

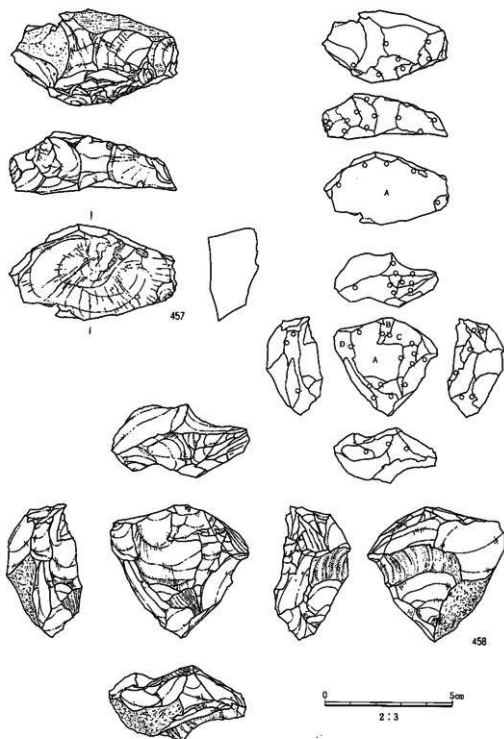


図148 東南地区の石器遺物 (3)

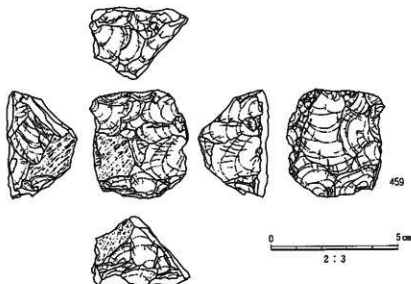


図149 東南地区の石器遺物（4）

石核

457は剥離面構成図に示すA面のような横長の剥片を得ることを目的とした石核と考えられる。A面の打面には打面調整がみられる。背面側には自然面が残り、それをある程度取り除くための調整剥離が行われている。458からはA面のような逆三角形の剥片が得られたと思われる。A面の後にB～D面といった小さな剥片がとられ、のちに廃棄されている。背面側には調整剥離を行うが、自然面がまだ一部に残っている。459は逆円錐形をしており、円錐の底面に当たる部分に打面調整が施され、斜辺部分からやや縦長の剥片が獲得されている。斜辺部分には自然面もみられる。打面調整剥離面はそのほとんどに打点を残す。

（櫻井）

3) 古墳時代の遺構と遺物

I～IV区のある東南地区北部、この区域の西端には塚ノ本古墳があり、かつては東向きの方後円墳と推定されていたが、今回の調査によってその可能性はなくなった。しかし、塚ノ本古墳を中心として衛星のように取巻く小方墳のいくつかを検出し、塚ノ本古墳の造墓と同時期と考えられる人工的な流路SD03が存在することなどが明らかになった。

一方、同地区南部にあるV区では、狭いトレンチ調査であるにもかかわらず、古墳の周溝とみられる遺構を多数検出し、塚ノ本古墳周辺の一群とは異なる墓域の存在を確認した。

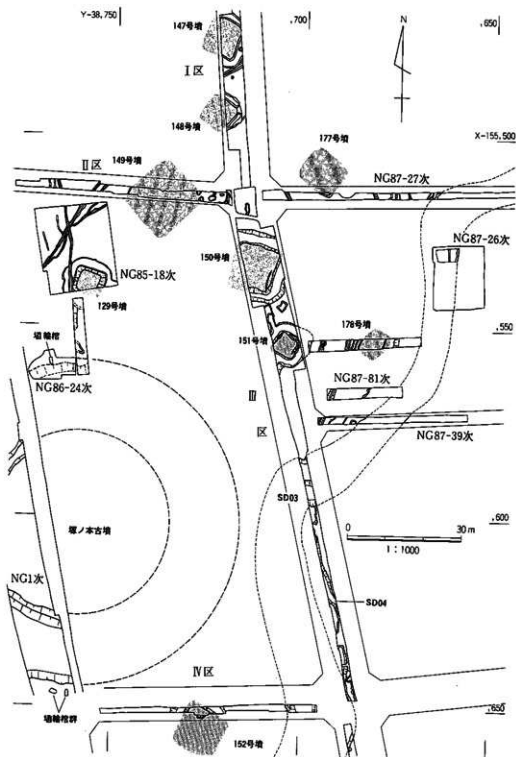


図150 東南地区古墳時代の遺構



図151 SD02・03断面図(Ⅲ区東壁)

i) 流路・溝

SD03(図150・151・152・153、図版15・16・65・66)

前述のSD02の跡を掘直して造られた流路である。塚ノ本古墳の推定される外堤位置の東側を南北に走り、Ⅲ区中央部付近で北東方向に向きを変える。その後も蛇行きみに北東に向って延びている。上幅は広いところで17m、下幅は約5mである。埋土は長原7B層で、大きく3層に分れる。最深部から50cmは黄灰色粘土で、下部に炭化物を多く含んでいる。土師器460～462・464・469などはここから出土し、鰭付朝顔形埴輪474はこの上面付近にまともって見つかった。その上部には10～15cmの厚さでシルトまたは中粒砂の層があり、さらに厚さ20cmの黒褐色粘土で埋没している。

460は土師器の小型壺で、底部の一部を欠くがほぼ完形である。ややひしゃげた球形の体部に直線的に斜めに延びる口縁部をもつ。外面の体部中位から下部にかけては斜め方向のヘラミガキ、肩部には横方向にヘラミガキが入る。口径10.2cm、器高10.5cmである。461・462も土師器の壺であるが、後者は頸部と口縁部の境に鋭い稜をもつ山陰系のものである。462の肩には竹管文もみられ、ここにも山陰系の特徴を示すが、口縁端部は布留式土師器の壺・甕にみられるように内側に肥厚している。口径17.7cm、内外面とも灰白色を呈し、堅く焼上がっている。464は土師器高杯で、直線的な口縁部をもち、その端部に外傾する面を作る。柱状部内面にはヘラケズリ調整が行われ、その後ヨコナデしている。口径14.0cm、脚底径12.1cm、器高12.1cmである。469は口径16.4cmの布留式の甕で、口縁部に内傾する大きな面を作る。体部内面は頸部のやや下方までヘラケズリされ、外面には縦方向のハケメのち、横方向にハケメが入る。これらの土師器については古墳時代前期末から中期初頭のものと考えられる。473もSD03から出土したもので、庄内式期の壺の底部であろう。

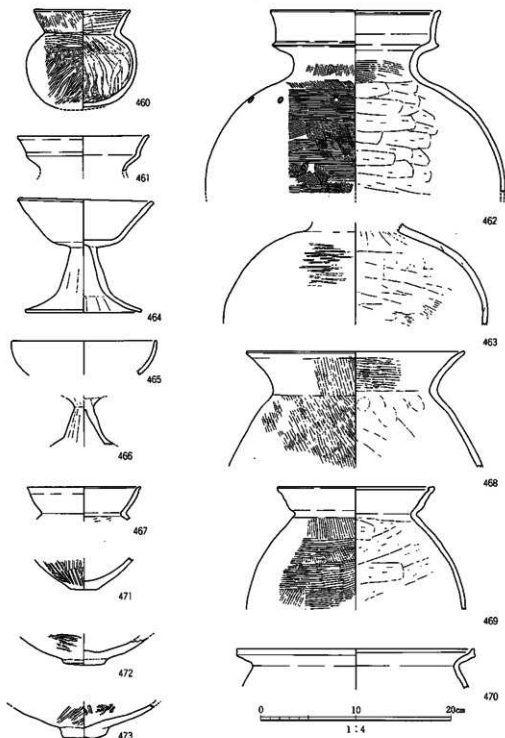


図152 SD03・04出土遺物

鱈付朝顔形埴輪474は底径28.5cm、頸部までの高さ74.0cmを測る。円筒部はタガによって5段に区切られるが、最上段はその他よりも幅が狭くなっている。2、4段目にスカシ孔があり、形はややいびつな正方形である。最下段のタガの位置から壺部の肩にかけて鱈が付けられる。鱈は長方形を呈するが、下端外側のコーナーを弧状に切り落としている。鱈と円筒部との接合に当っては、円筒側に縦方向の深い沈線を入れ、それに沿って鱈が付けられている。外面調整は一次調整のタテハケ後にナデ調整されている。内面にはユビオサエまたは縦方向のハケメがみられる。壺部外面の肩にはヨコハケが一部に確認できる。野焼きで焼成されたもので、以上の特徴から、本来は塚ノ本古墳に用いられていたことも考えられる。

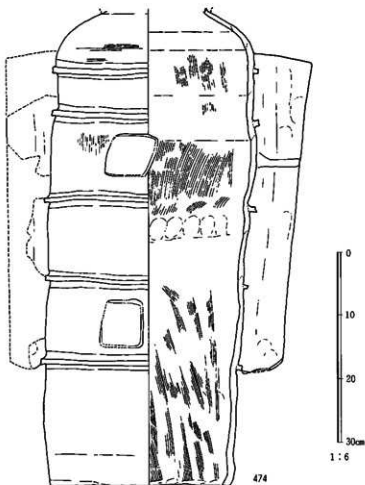


図153 SD03出土鱈付朝顔形埴輪

SD04(図150・152、図版16・65・66)

長原 7B 層内の遺構で、Ⅲ区の SD03 から南に延びる溝である。幅 2m あまり、深さ約 0.2m で、やや蛇行する。埋土は黒色粘土である。以下の土器が出土した。

463 は土師器壺の肩部で、頸部内面にシボリメがみられる。
465・466 は土師器高杯で、近接した場所で見つかっており同一個体の可能性もある。467 は布留式の系統を引く小型甕であるが、口縁部内面に内傾する面をもつものの肥厚してはいない。復元口径は約 12cm である。468 も土師器甕で、口縁部から肩部の破片である。やや長胴になるものと思われる。これらの土師器から、SD03 と同時期の遺構と考えられよう。
470 は第Ⅳ様式の甕の口縁部、471・472 は庄内式期に入る甕・壺の底部であろう。

SD05(図161)

Ⅲ区北端部にあり、150号墳の北周溝に切られる溝。最大幅 30cm、深さ約 5cm で、埋土は暗灰黄色粘土であった。溝の方向と古墳の墳丘方位はほぼ同じである。

(櫻井)

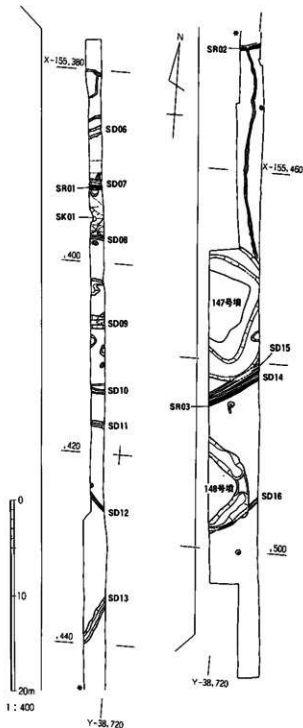


図154 I区弥生～飛鳥時代の遺構

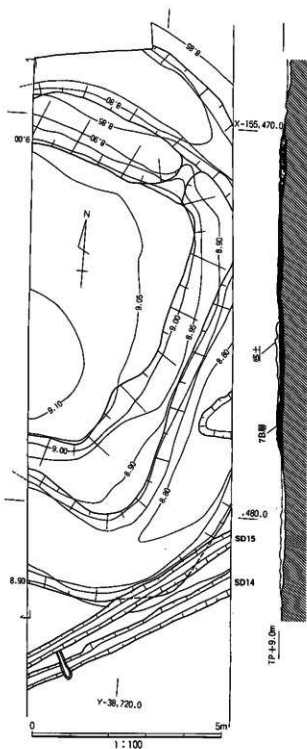


図155 147号墳平・断面図

ii) 147号墳

遺構(図154・155、図版17)

I区南部で検出した古墳である。墳丘の直上を4B-6層が覆っており、そのころには削平されていることがわかる。さらに、墳丘縁辺部も長原6層によって幅0.8~1.2mほど削平されていた。盛土は平安時代の坪境畦畔の下にわずかに残っていたが、主体部は失われており、墳丘はおもに長原7B層の高まりとなっており残っていた。墳丘規模は東の一边が約9mを測り、周溝の幅は2.1~2.5mである。周溝は飛鳥時代の溝や土壌に切られていた。墳形の全容は不明だが、恐らく方墳であろう。周溝のもっとも深い部分と、残存した墳丘頂部とのレベル差は約35cmである。北東のコーナー付近には幅0.4mほどの畦畔状の高まりがみられるが、これは直上を覆っていた長原6A層の削り残しかもしれない。そうだとすれば、ここに畦畔が取り付けいていた可能性が出てくる。また、東周溝の一部は深さ5cmほど掘り凹められていたが、層位的な確認は充分でない。遺物は、直接周溝から出土したものはほとんどないが、南周溝直上の長

原7A層から埴輪が出土し、また墳丘直上の4B-5層から須恵器475が出土している。やや根拠は薄いものの、本墳に伴っていたと推測される。

遺物(図156、図版67)

475は須恵器杯蓋で、口径11.8cm、全体にやや厚手である。やや丸みのある天井部を持ち、そのヘラケズリは左回りとなっている。TK208型式に含まれよう。

476~481は円筒埴輪で、いずれも窯焼成され、半須恵質に焼上がつている。外面に一次調整のタテハケが施された浅黄橙色の埴輪である。476~478は口縁部を残し、口径17cmほどに復元される。476・477の口縁部は先端で内側につまみ出される。476・478の口縁部内面はハケメ調整されているが、477にそれはみられない。479は底部を含む破片で、円形のスカシ孔、断面台形のタガを確認することができる。全周の1/3の底部が残り、その復元直径は11.4cmである。480・481は胴部であるが、480の内面にはその上部にハケメ調整が行われており、口縁部に近い破片であることがわかる。残存するタガは断面台形を呈す。

482・483は甲冑形埴輪である。482は肩甲、483は肩甲と短甲の一部を含んでいる。肩甲は、どちらも線刻で鉄板の重なりを表わしており、483には頸甲の引合板の表現とみられる縦方向の3条の線刻がある。また、肩甲と短甲は立体的に段差をつけて区別されている。

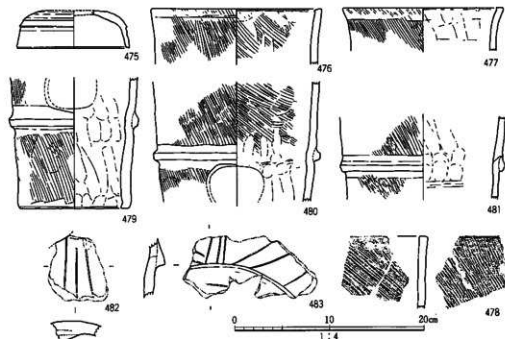


図156 147号墳出土遺物

iii) 148号墳

遺構(図154・157、図版17・18)

I区南部で検出した古墳である。墳丘の直上は4B-6層に覆われており、盛土も削平されて主体部は残っていないかった。これも方形墳とみられるが、東のコーナー部分を南北約10m、東西約4.3m検出するに留まった。周溝は幅1.5~2.0mで、東コーナーのところは通路状に掘残されて高くなっていた。周溝最深部とその高まりおよび残存した墳丘頂部とのレ

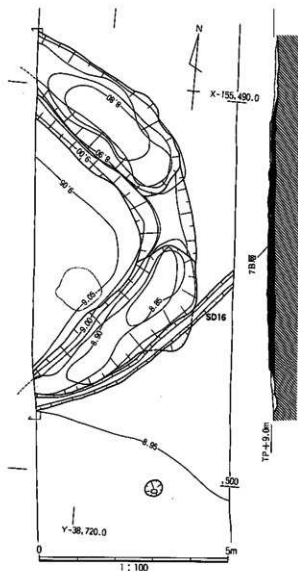


図157 148号墳平・断面図

ベル差は各々25cm、35cmである。飛鳥時代の溝SD16に周溝が切られていた。墳丘の北辺から円筒埴輪が出土している。

遺物(図158、図版79)

同墳北辺から円筒埴輪484が出土している。タガとスカシ孔の一部を残しており、タガの断面形は三角形または台形、スカシ孔は円形になると思われる。外面調整は一次調整のタテハケである。窖窯焼成によるものであろう。

iv) 149号墳

遺構(図159、図版18)

Ⅱ区の東部で東西約20mにわたって検出した古墳である。墳丘は長原7B層の上に長原13層以下の地山を用いた盛土が最大0.4mの高さで残っていた。長原6層や長



図158 148号墳出土埴輪

原4層の段階にかなり削られているが、もっとも高い部分の直上は長原2層で覆われており、最終的に地表から姿を消すのはかなり後世になってからとみられる。周溝は西側では検出できず、削られて失われたのかもしれない。東側の周溝は深さ0.1m前後と浅く、しかも途切れた状態で見つかった。その部分が掘残されたために途切れたとすると、148号墳のようなタイプと考えられ、コーナーの位置に当ると思われる。西側では長原6層の畦畔が墳丘に取付いており、過去の例から、ここもコーナーに近い位置かと推測される。また、飛鳥・奈良時代の溝や小畦畔の方向は古墳の近傍では墳丘の方向に影響されることが多く、それから逆に墳形を類推すると、方墳であろうとみられる。その規模は一辺15~18m程度とみられ、長原古墳群ではやや大型の部類に属することになる。なお、墳丘盛土の分層と築造工程の解明を試みたが、充分にはできなかった。

遺物は、485が墳丘の上面出土、489が東周溝付近のトレンチから出土し、その他は本墳のものと断定できないが、墳丘の西10mまでの範囲で長原7A層から出土している。

遺物(図160、図版67・79)

485は須恵器杯蓋で天井部に放射状に櫛描列点文が施される。天井部と口縁部の境には水平方向に延びる突帯を有し、外方に大きく開く口縁部をもつ。486は須恵器杯身で、短く水平方向に張出す受部と深い体部をもつ。底部のヘラケズリは左回りである。487は須恵器高杯の脚部で、裾に2本の稜線を巡らせる。スカシ孔も一部分残る。488は須恵器大甕の頸部~肩部である。体部外面には平行タタキメ、内面には同心円文がかすかに残る。これらの須恵器はTK73型式に当る。

489は須恵質の円筒埴輪である。大人の手の掌ほどの破片であるが、本来はかなりの大型

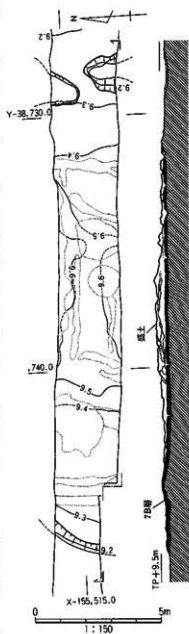


図159 149号墳平・断面図

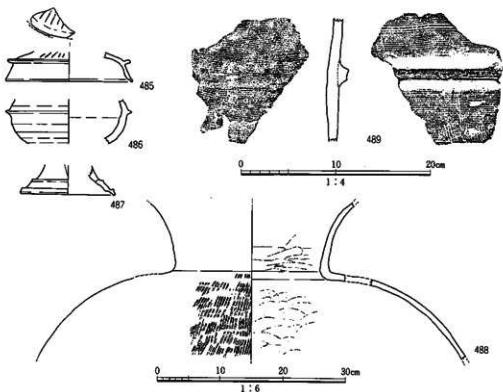


図160 149号墳周辺出土遺物

品であったことが推測される。タガは断面台形で、側面が浅く凹んでいる。外面調整には二次調整のB種ヨコハケがみられ、内面にも横方向のハケメ調整が行われている。

(積山・櫻井)

v) 150号墳

遺構(図161・162、原色図版1、図版19・20)

Ⅲ区北端にある一辺約12mの方墳である。墳丘方位をN20°Eにとる。墳丘の西辺および南西隅周辺を除いて、その他の部分を調査することができた。墳丘の周囲には幅3～4mの周溝が巡る。墳丘の北辺の中央部がわずかに張出しているが、造出しのような施設があったかは不明である。墳丘盛土は遺存せず、長原13層上に薄く長原7B層が残るだけであった。それでも周溝底から墳丘最高所までは50cmの高さを有していた。周溝内埋土は最下層に灰～暗灰色粘土が15cmほどの厚さでみられ、墳丘側の方が暗色が強くなっている。続いて黄灰色シルト質粘土の層が10cm弱の厚さでみられるが、長原13層などのブロックが含まれる。その上を長原6Ai層と考えられる浅黄色シルト質粘土が覆っており、それは墳丘上

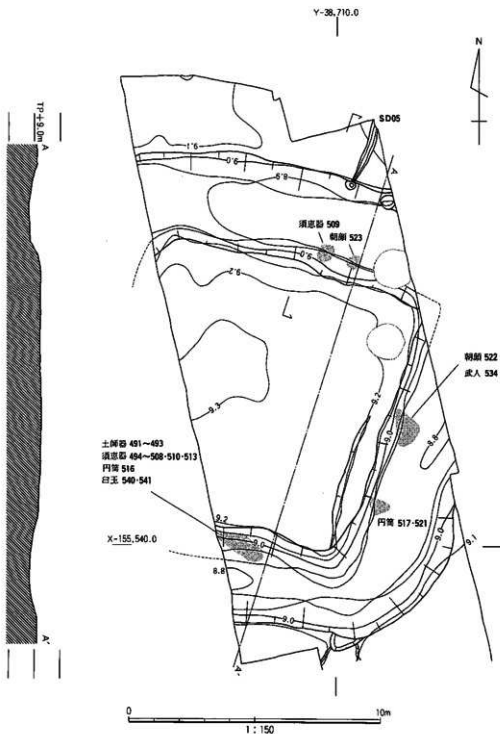


図161 150号墳平・断面図

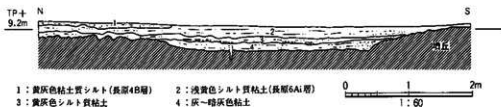


図162 150号墳北周断面図

にも分布している。

墳丘の各辺から遺物が出土しているが、南辺中央からは土師器・須恵器がまとまって出土し、清石製白玉なども見つかったことから、この場で墓前祭祀が行われたことも考えられる。墳丘東辺の中央では武人埴輪534が、北辺中央では完形の須恵器壺509が出土している。墳丘南辺以外で、全体のわかる須恵器が見つかったのはこの例のみである。

遺物(図163～169、図版68～72)

土師器 490は壺で、半球形の体部に直線的な短い口縁部をもつ。復元口径は約11cmである。491～493は高杯で、いずれも杯部と脚部の接合部分の破片である。柱状部内面にはシボリメを残す。

須恵器 494～496は杯蓋で、口径が11.8～12.2cmの範囲にある。496はやや丸みのある天井部をもつが、その他はほぼ平坦に作られる。494の天井部ヘラケズリは左回り、その他は右回りである。497～507は杯身であり、口径10.5～12.3cmのものがある。底部の平坦なもの497・498・501・506・507、底部の丸いもの503・504があり、体部にカキメが施されるもの502・505もある。底部のヘラケズリは、497が左回りである以外はみな右回りとなっている。497の口縁部には焼成後の針描き、503の底部にはD字形のヘラ記号がある。508は無蓋高杯の杯部である。口径23.6cmの大型品で、体部に3本の稜をもつ。上から2本目と3本目の稜の間は広く取られ、そこに櫛描波状文を1段巡らせる。509・510は壺で、509は直口壺、510は肩部だけを残す破片であるが、小型の甕と思われる。509は肩の張った体部をもち、その最大径位置に櫛描波状文を入れ、その上下に凹線を引く。口縁部中ほどにも櫛描波状文が巡り、その上下は断面三角形の突帯となっている。底部外面には平行タキメ、内面には同心円文がみられる。口径

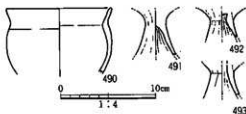


図163 150号墳出土土師器

9.6cm、器高14.5cmの完形品である。510も体

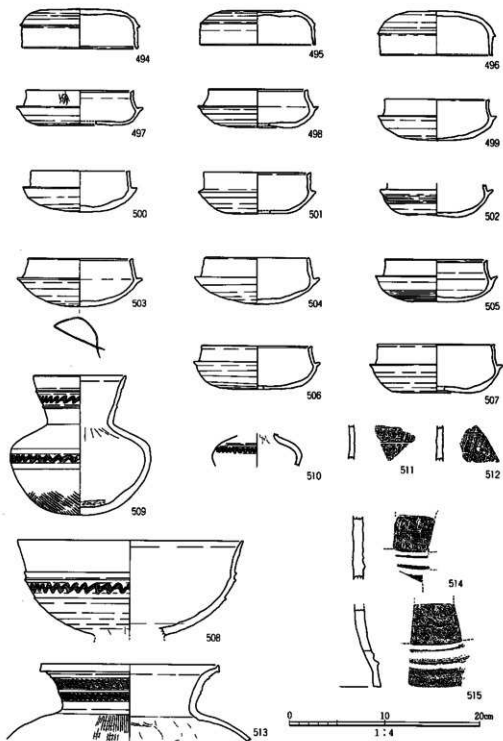


図164 150号墳出土須恵器

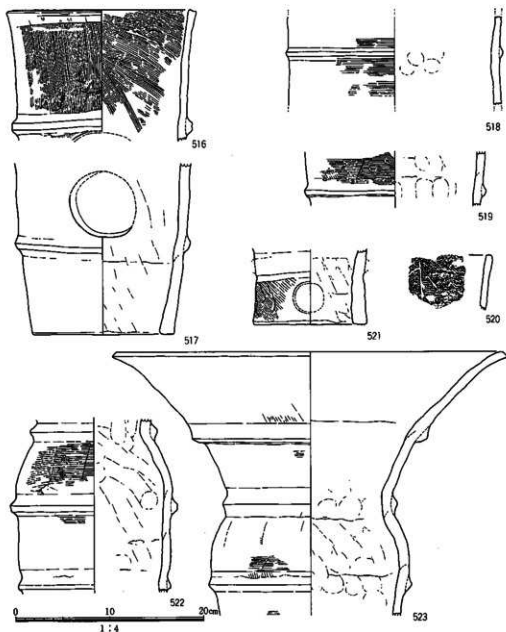


図165 150号墳出土土円筒・朝顔形埴輪

部最大径位置よりやや上位に櫛描波状文をもち、その上部にカキメが施されている。511・512・513は甕で、511・512は体部の一部であるが、外面に縄席文と横方向の圈線をもつ。513は小型の甕で、体部外面には擬格子状のタタキメが残る。口縁部には2段の櫛描波状文

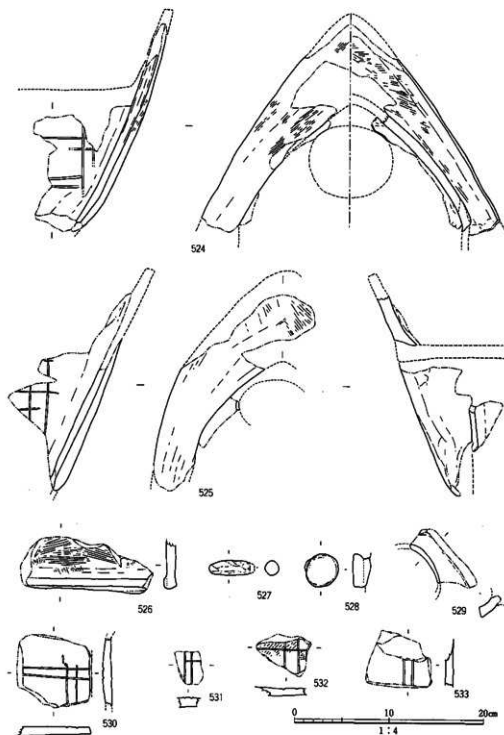


図166 150号墳出土家形埴輪

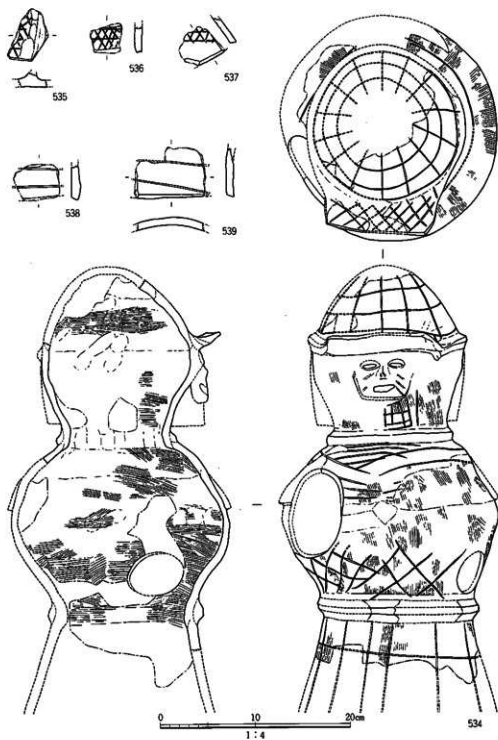


图167 150号墳出土土人埴輪 (1)

があり、口縁端部は上下につまみ出されて、幅のある垂直な面となっている。514・515は器台の脚部の破片で、同一個体と思われる。稜線や凹線によって区切られた空間に櫛描波状文を入れ、方形のスカン孔を配している。

以上の須恵器はTK208型式の範疇に含まれるものと思われる。

円筒埴輪 516～519にはタガが残り、断面台形または三角形を呈するが、いずれも突出度が低い。口縁部のある516・520では、前者の内面



写真16 武人埴輪頭部（断面を外した状態）

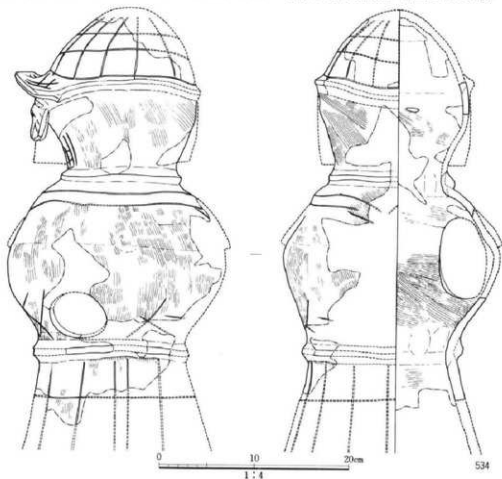


図168 150号埴出土武人埴輪（2）

にハケメ調整がみられるが、後者には行われていない。516は口径20cmに復元される。底部の残る517・521では前者の底径が14.6cm、後者が11.6cmである。後者は最下段にスカシ孔をもち、タガも水平ではなく、やや斜めに付けられている。こうした特徴から521については形象埴輪の基底部の可能性も考えられる。外面調整には一次調整のタテハケで終了するもの516・521、二次調整のヨコハケのあるもの518～520がある。焼成は窑窯によるものとみられ、黒斑はなく、土師質の焼上がりである。確認されたスカシ孔はみな円形である。

朝顔形埴輪 522・523はいずれも胴部の下半を欠いている。522は頸部までの破片で、胴部には断面台形のタガ、頸部には断面三角形のタガが巡る。523は口縁部までを残し、胴部・頸部・口縁部に断面三角形のタガが付けられる。外面調整にはともに二次調整のヨコハケがみられる。また、両者とも窑窯焼成で、土師質の焼上がりである。

家形埴輪 524～533は家形埴輪の破片である。そのうち524・525は切妻屋根の妻部の破片である。524の破風板は、側辺が直線的であるが、525は中央部の影らんだものとなっている。しかし、どちらの破片にも屋根表面に縦横に走る線刻があり、妻側の壁には円形のスカシ孔がある。529もスカシ孔部分の破片であろう。526には、一端に断面台形の突帯が付加されており、屋根の軒先と推定される。527は壁木、528は棟木が剥落したものであろう。530～533は壁で、縦横の線刻は柱を表現したものと考えられる。

武人埴輪 534は武人埴輪で、535～539はその一部分とみられる。武人埴輪は頸部から草摺部分までが残り、残存高は43cmである。頸部・胴部はいびつな球形を呈し、頸部正面に板状の粘土を貼付けて顔を表わしている(写真16)。胴部には左右の腰に直径5～6cmの円形スカシ孔があり、さらに右胸に直径約9cmの円窓が開けられているようである(註1)。

まず頸部について詳しくみると、甕は眉庇付甕で、上部には経緯に配された線刻があり、腰巻板に当る部分に断面台形の突帯、その下に鋸が付けられていた痕跡を残す。鋸の表面には横方向の線刻に加え、斜格子の線刻が施されていたことが535～537の破片からわかる。眉庇の部分は平面長方形で、上部に斜格子の線刻をもつ。顔は前述の通り別作りで、鼻と眉の部分に粘土が付加されており、両眼は紡錘形に削り抜かれている。鼻孔および口はヘラ先で突いて表現する。頬には斜方向の線刻が数条確認される。この線刻は[伊藤純1984・1987]によれば鯨面の表現の可能性がある。頸部にも格子状の線刻がある。

続いて胴部をみる。本体胴部には粘土の剥離痕が帯状に残っており、この部分に肩甲があったことがわかる。538・539はこの部分のものであろう。肩甲の鉄板の重なりが線刻で表わされているが、正面で、左右の肩甲が交差しており、実際の甲冑ではありえない姿と

なっている。頸甲に当る部分には横方向に数条の線刻がある。頸部との境には断面三角形の突帯があり、頸甲の襟に当ることも考えられるが、それにしては誇張されすぎている。短甲部分には斜格子状の線刻がいくつかの単位で施されているが、このような表現のもととなるものを実物の短甲の中にもとめることはできない(註2)。

草摺には経緯の線刻が用いられている。縦方向の線刻は、まず2条一組になったものを正面・背面・両側に配し、それによって4分割された区画の中にさらに1条の線刻を割付けているようである。横方向の線刻は腰から下3~4cmの位置に1条だけが残る。

背部分の外面はナデ調整されており、それ以外の外面には縦方向のハケメがみられる。内面には横または斜め方向のハケメが顕著に残る。焼成は窑窯によるもので、土師質の埴輪である。

滑石製品 540・541は滑石製の白玉で、緑灰色を呈する。ほぼ同大で、直径0.5cm弱、厚さ0.3cm、孔径0.2cmである。側面中央に微かな稜をもつ。



図169 150号墳出土
滑石製品

vi) 151号墳

遺構(図170・171、図版19)

Ⅲ区北部にあり、150号墳の南に隣接する古墳である。墳丘部分についてはほぼ全容を知ることができた。一辺が約7mの方墳で、墳丘方位をN30°Eにとるものとみられる。盛土および旧地表である長原7B層は遺存していなかったが、周溝底から墳丘最高所までは約60cmを測る。周溝は幅2~3mの規模をもつが、北西周溝から150号墳の方向に向って浅い凹みがあり、また南西周溝では、周溝肩が南方に開いている。こうした周溝の状況から、この古墳の西に周溝を共有する別の古墳が存在することも推測される。周溝埋土は最下層に灰~黒褐色粘土、次に褐色シルト質粘土が堆積し、さらに長原6Ai層に相当する明黄褐色シルト質粘土で埋没する。

周溝埋土の上方から円筒埴輪543が出土し、周溝底付近から土師器小型壺542が見つかった。

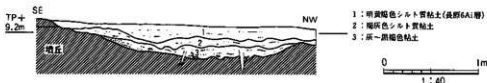


図170 151号墳北西周溝断面図

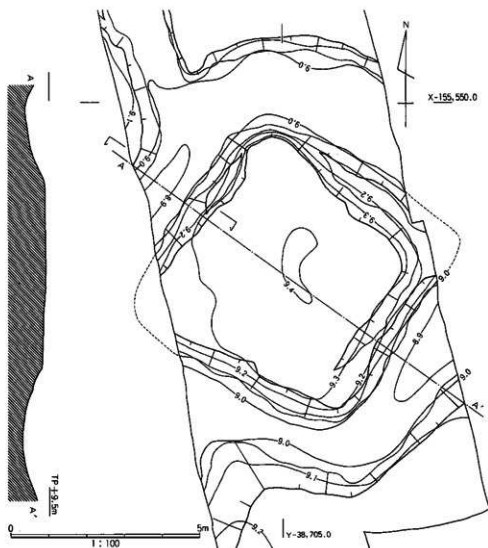


図171 151号墳平・断面図

遺物(図172、図版79)

土師器小型壺542は、球形に近い体部と、斜め上方に直線的に延びる口縁部をもつ。口径8.4cmを測り、船橋O-IIあるいはO-III[田辺昭三・原口正三・田中琢・佐原真1962]に当るものと思われる。

円筒埴輪543は全周の1/5に当る破片であるが、直径35cmを越える大型品と推測される。円形のスカシ孔をもち、断面正方形をした突出度の高いタガが巡らされている。外面調整にはB種ヨコハケがみられる。内外面とも淡黄色を呈する半須恵質の埴輪である。

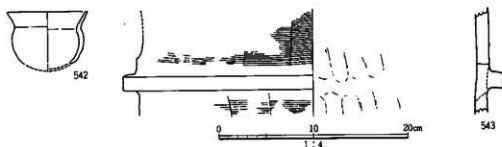


図172 151号墳出土遺物

vii) 152号墳

遺構(図173、図版20)

Ⅳ区中央部にある古墳で、塚ノ本古墳の南東に位置し、塚ノ本の周囲を取巻く小墳の中ではその一重目に立地するものである。墳丘の北端付近を検出したに留まるが、墳丘コーナーが直角をなすことなどから、恐らく方墳であろう。墳丘北隅を三角形のテラス状に削平されているが、周溝底から墳丘最高所までは1.3mの高さがある。周溝の幅は3.7~4.5mである。墳丘は長原7B層(標高8.8m)の上部に高さ約1mの盛土をもっている。長原7B層は層厚15cm、その下方、長原13層との間に長原8A・9層が介在する。そのため、盛土には長原7B~9層が用いられている。周溝の埋土は黒色粘土である。遺物は周溝内および残存する墳丘頂部で多く見つかり、墳丘頂部では円筒埴輪の基底部の出土がめだった。

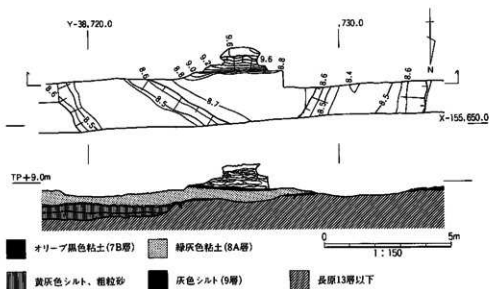


図173 152号墳平・断面図

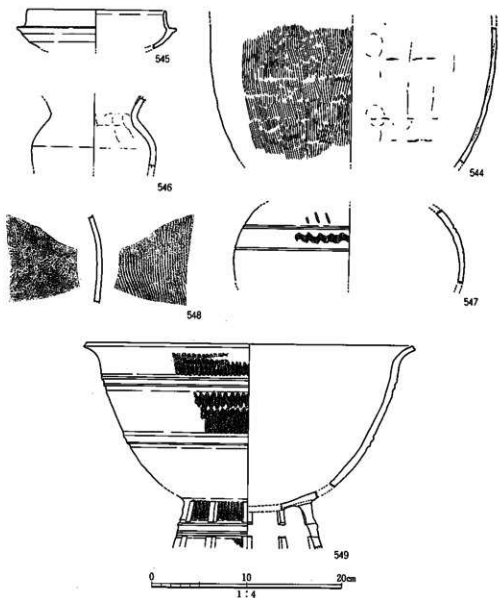


図174 152号墳出土土器

遺物(図174～179、原色図版2、図版73～76)

土師器 544は長胴甕で、外面にはハケメ、内面にはユビナデがみられる。

須恵器 545は杯身で、全周の1/4が残り、口径14.6cmに復元される。直立に近い立上がりをもち、口縁端部を丸くおさめている。546は壺で、口縁部および底部を欠く。頸部が

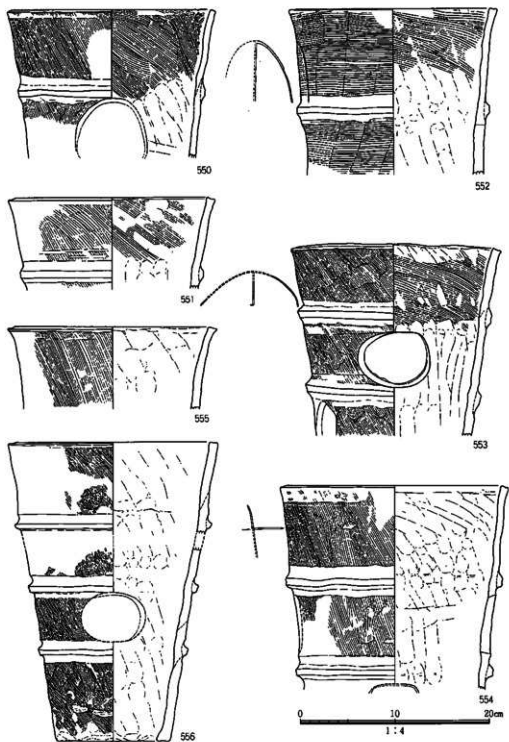


図175 152号墳出土円筒埴輪 (1)

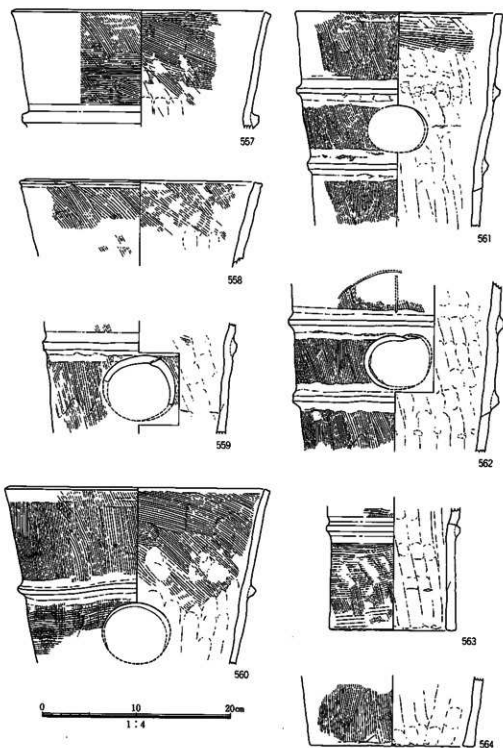


図176 152号墳出土円筒埴輪（2）

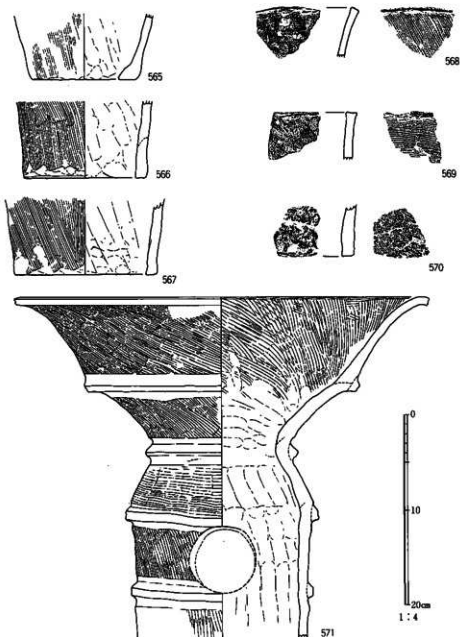


図177 152号墳出土円筒・朝顔形埴輪

ら体部にいたる外形が緩やかな曲線をなしている。外面に文様は施されていない。168 (城山6)号墳[大阪文化財センター1986]から出土しているような平底鉢に類似するものと思われる。547も壺で、御描波状文や列点文がみられる。体部中ほど部分の破片であるが、張り

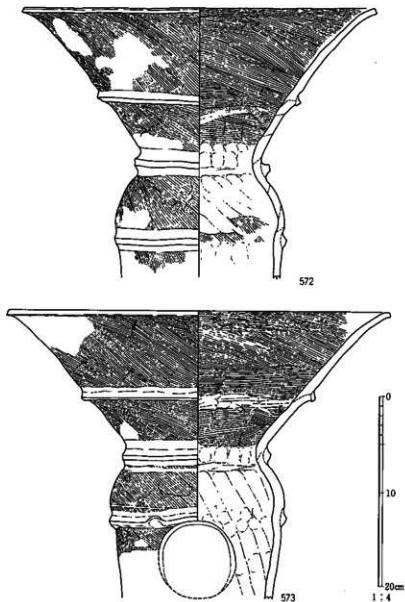


図178 152号墳出土朝顔形埴輪

のある胴部をもつことがうかがえる。548は甕の体部で、外面に平行タタキメがみられる。内面の同心円文はナデ調整によって不明瞭になっている。549は高杯形器台で、杯部と脚部の一部が残る。杯部外面は3条一組の凹線で3段に区切られ、その内の上部2段に櫛描波状文を挿入している。口縁部は緩やかに外反し、浅く凹んだ端面を作っている。脚部も凹

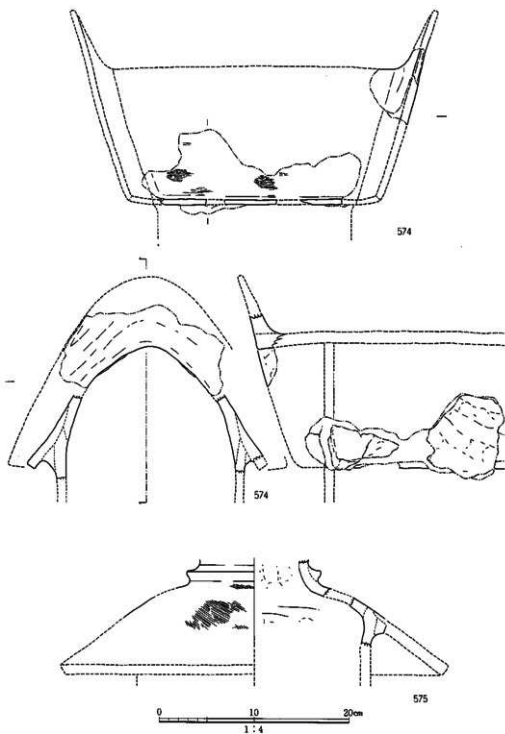


図179 152号墳出土土家形・衣蓋形埴輪

線で区画され、櫛波状文で飾られる。長方形のスカシ孔が12方向に開けられている。口径は34.4cmである。これらの須恵器についてはTK216型式の時期を考えるのが妥当と思われる。また、出土している器種はさまざまだが、それぞれの焼成具合、自然釉の状況などがよく似ている。同一窯、あるいは同一地域の窯で製作されたものかと推測する。

円筒埴輪 550～570は円筒埴輪である。いずれも焼成には窖窯が用いられているとみられ、無黒斑であるが、土師質のものや須恵質のものが含まれる。口径のわかるものは22～28cmの大きさで、全体の高さの推定できる556では約31cmの器高を測る。しかし、556は出土した埴輪の中ではやや小ぶりなグループに属し、その他のものの器高はそれ以上になると考えられる。口縁部や基底部を含めた段数は4段で構成される埴輪と推測され、2、3段目に円形スカシ孔を設けている。タガは断面台形となるものが多く、その他に低いM字形、三角形のものがある。底部の破片には直径11～17cmに復元されるものがあり、法量の差が大きい。基底部の破片563の外面には、基部となる粘土板を作る段階に付いたと思われる木目圧痕がある。外面調整については一次調整のタテハケのみのものと、二次調整にヨコハケが加えられるものとがある。また、内面調整については、口縁部にハケを用いるものと、ユビナデ調整によるものとがみられる。確認されるヘラ記号は2種あり、「ㄏ」が552・553・562に、十字形のものが554にある。ヘラ記号が共通していても、焼成具合や調整手法は同じではない。

朝顔形埴輪 571～573の3個体がある。いずれも土師質・無黒斑の埴輪であるが、571は他の2者に比べて、器壁が厚く、壺部の肩の形態も異なっている。572・573ではまだ、壺らしい肩の膨らみを残しているが、571では直線的に作られている。また、571には肩部にB種ヨコハケが施されてもいる。それぞれの口径は、571が44cm強、572が37cm強、573が41cm弱である。571・573には円形のスカシ孔がみられる。

形象埴輪 574は家形埴輪の屋根の部分である。切妻形式で、妻の転びの角度は16°程度になる(註3)。575は衣蓋形埴輪の笠部である。頭部に断面三角形の突帯をもつ。家・衣蓋ともに土師質で、黒斑をもたない埴輪である。

viii) 160号墳

遺構(図180、図版21)

V区東端に、平行する東西の周溝を検出し、それから一辺が約9mの方墳と推定される。墳丘の各辺はほぼ正方位に向くとみられる。東周溝の規模は不明だが、西周溝は幅1.8～2.4m、深さ0.5m前後で、埋土は黒褐色粘土である。盛土は遺存せず、墳丘の西部は奈良時

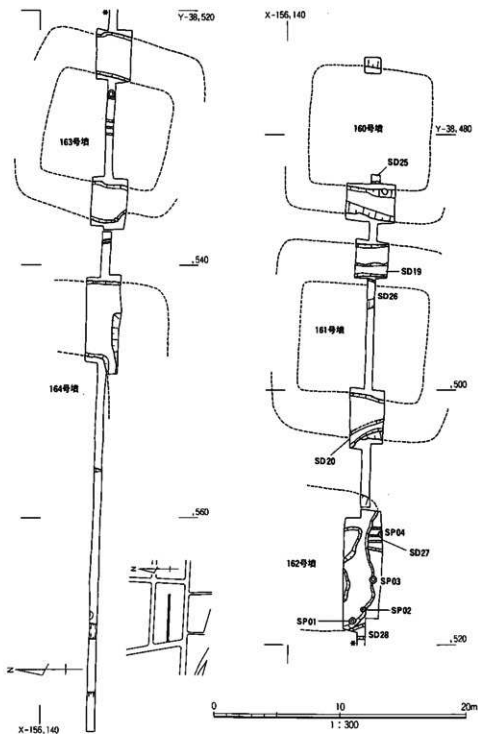


図180 V区古墳～奈良時代の遺構

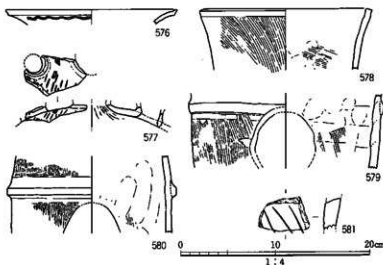


図181 160号墳出土遺物

代の区画溝であるSD25に破壊されている。西周溝から須恵器・埴輪が出土している。

遺物(図181、図版77・78)

576は須恵器で、壺の口縁部と思われる。口縁部は大きく外反したのちに、端部で斜め上

方につまみ出される。外面には櫛描波状文が施される。577は子持壺と考え図化しているが、別の器形の裝飾須恵器である可能性もある。中央に直径約4cmの頸部をもち、その部分の内面にはシボリメがみられる。子の付け根での直径は3.2cm、肩部に付けられた櫛描列点文は子の側にも及んでいる。

578～580は円筒埴輪で、578は口縁部、その他は胴部の破片である。外面調整は一次調整のタテハケによるもので、内面調整は主としてユビナデ、一部にハケメがみられる。579・580に残るタガはやや低い台形で、スカシ孔は円形であるが、580のスカシ孔はややいびつになるようである。

581は鳥形埴輪の羽根の部分と考えられる。表面に3条の線刻が認められる。

この古墳については出土須恵器からの時期決定はむずかしい。円筒埴輪は5世紀後半から6世紀初頭の特徴を示しており、この時期の古墳と推定される。

ix) 161号墳

遺構(図180)

V区にあり、160号墳の西に隣接するものである。東西の周溝が見つかっており、160号墳とはほぼ同規模であったと思われる。墳丘の各辺はほぼ正方位に向くであろう。墳丘東肩は飛鳥時代の溝SD19に破壊されており、東周溝の正確な規模は不明だが、幅は1.5m以上、深さは20cm前後である。西周溝は幅3.0～3.4m、深さは34cmである。埋土はどちらも黒色粘土である。

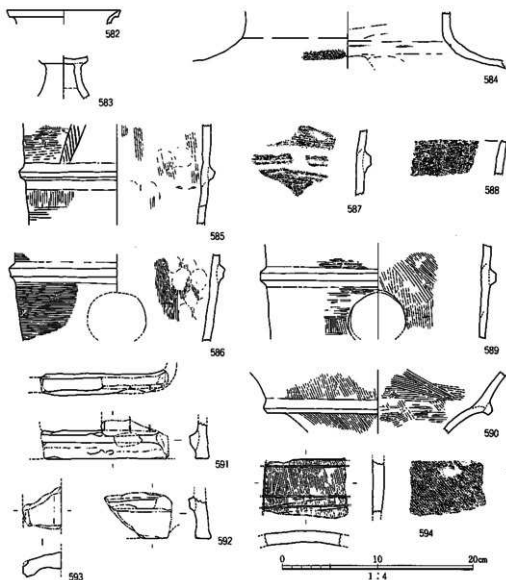


図182 161号墳出土遺物

遺物(図182、図版77～79)

582は韓式系土器の鉢と思われ、軟質で、口縁部のみが残る。口縁部は大きく外反し、鋭い端部をもつ。口縁直下には下方に張出す稜が作られる。

583は須恵器高杯の柱状部である。残存する範囲にスカシ孔はみられない。584は須恵器大甕の頸部付近の破片である。頸部から肩部に移行する部分は緩やかな曲線となっている。肩部外面には斜格子状のタタキメがあるが、内面の当て具痕は不明瞭である。これらの須

恵器はTK73 型式またはTK216 型式とみられ、本墳の造営時期を示すと考えられる。

585～589は円筒埴輪である。外面はどの破片も一次調整のタテハケののち、二次調整のヨコハケが施されており、タガは断面台形、スカシ孔は円形をしている。土師質で、無黒斑の埴輪である。585の外面には線刻文様がある。文様は完存してはいないが、斜方向に引かれた2条の線刻の内部を7条以上の垂直方向の線刻で充填しており、本来は全体として盾形埴輪の鋸歯文のような文様ではなかったかと推測する。

590は朝顔形埴輪の口縁部で、円筒埴輪と同様に土師質に焼かれ、黒斑をもたない。口縁部中位に段を設け、その外側に断面台形のタガを巡らせる。

591～593は家形埴輪の破片である。591は基底部で、下端に沿って断面台形の突帯が付加され、その上方に入口を示すとみられる切り取りと縦に延びる2条の線刻が残る。右端は曲線を描いており、家のコーナーに当たっている。592も基底部の破片で、591と同様な突帯が付く。また、下端には半円形になると思われる抉りがある。593は裾台で、先端部を短く折り曲げている。

594は草摺形埴輪と思われる。外面左端に縦方向の線刻があり、それを切って、2条一組になった横方向の線刻が上下2段に引かれている。内外面にハケメ調整が残る。

x) 162号墳

遺構(図180、図版21)

V区にあり、161号墳の西側に見つかった方墳の周溝とみられるものである。南周溝を検出したのみで、墳丘規模は明らかでないが、周溝の両外側間は東西11m程度と推定される。周溝の深さは約0.3mで、埋土は黒色粘土である。周溝南西隅から南辺にかけてSP01～04が周溝肩に沿って見つかっており、そのうちSP01には須恵器杯身595が口縁部を上にして埋納されていた(図版21中)。これらのピットは直径30～50cmの円形で、深さ17～30cmを測る。また、埋土は灰黒色粘土であった。

遺物(図183、図版78・79)

596は韓式系土器の平底鉢である。軟質で、口縁部および底部を残す。口縁部は大きく外反し、尖った端部をもつ。また、口縁直下を下方に張出させている。

597は円筒埴輪の口縁部で、外面に逆U字形のヘラ記号をもつ。外面調整には二次調整のヨコハケも行われている。内面にもハケ調整がみられる。土師質であるが、黒斑はない。

598～600は家形埴輪で、598は屋根の棟、599は破風板、600は柱を表現するものと推定する。601・602は馬形埴輪であろう。601は脚部、602は障泥と考えられる。602の表面に

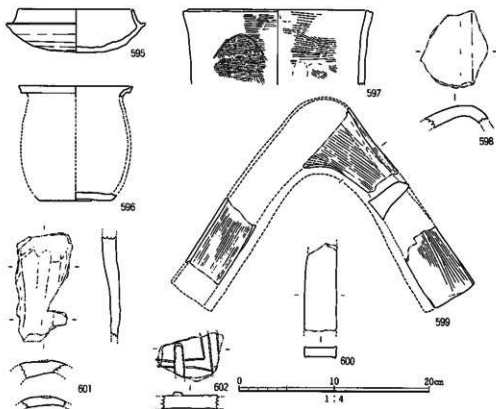


図183 162号墳およびSP01出土遺物

は紐状の粘土が付加されており、鋲に繋がる革紐の表現と思われる。その粘土紐の接合後、2条一組の線刻で障泥の輪郭を縁取る。障泥の輪郭は段差をもって周囲と区別される。

595は須恵器杯身で、本墳の周溝の外周にあるSP01から出土した。口縁部の1/3を欠く以外は遺存しており、口径12.1cm、器高4.5cmを測る。もともと焼成があまいせいもあると思うが、全体に風化が進んでいる。TK10型式に当たる。

これらの遺物からみた古墳の時期は5世紀中頃から後半にかけてと推定する。その後、1世紀以上たってからSP01～04が掘られたと考えられる。

xi) 163号墳

遺構(図180、図版22)

V区に東西の周溝を確認した。162号墳の西にある古墳である。墳丘の一边が約8mの方墳と推定する。東周溝は幅3.3m、深さ0.2m、西周溝は幅2～3m、深さ0.1mである。周溝埋土は黒色粘土である。東西の周溝は北で正方位から東に振れる。盛土はまったく残らない。

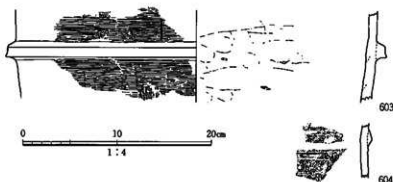


図184 163号墳出土遺物

遺物(図184、図版78)

603・604は円筒埴輪である。603は須恵質で、直径38cmに復元される大型品であるが、604は土師質で、径もさほど大きくはない。603のタガは断面台形、604は三角形という違いもある。外面調整は両者とも二次調整のヨコハケが行われている。埴輪の時期は5世紀中頃から後半に位置づけられよう。

xii) 164号墳(図180・185)



図185 164号墳
出土埴輪

V区に墳丘南東隅と東周溝の一部を検出した。163号墳の西側にあり、周辺で見つかっている古墳と同様な小方墳と思われる。東周溝は幅約6m、深さ0.1mである。埋土は黒色粘土であった。

周溝から円筒埴輪605が出土しているが、子供の手の掌ほどの小片である。須恵質の埴輪で、外面に二次調整のB種ヨコハケがみられる。

(櫻井)

4) 飛鳥時代の遺構と遺物

この時代の遺構は長原7A層の下面または同層内、そして同層上面において検出される。Ⅲ・Ⅳ区には7A層上面の水田が見つかっており、同層の直上を覆う水成層である長原6B ii層内の遺物から飛鳥Ⅲの時期の遺構と考えられている。しかし、Ⅰ区の畦畔、溝その他の遺構のうち、層序の項で述べたように7A-1層に係わるものは遺物の裏付けがなく、将来、長原6B層に変更される余地が残っている。V区には7A層内の遺構に含まれる溝SD19があり、飛鳥Ⅰの土器が出土している。この溝は古墳の墳丘の一部を破壊して掘られており、この時期すでに前時代の墳墓の破壊が行われていたことを示している。[大阪市文化財協会1982]に報告する調査地Ⅲにおいてはこの時期の掘立柱建物や土器埋納ピットが見つ

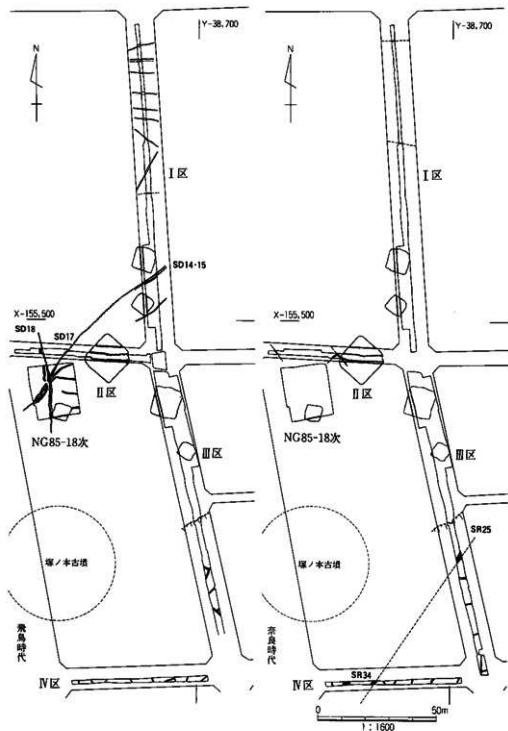


図186 東南地区北部 飛鳥・奈良時代の主要遺構

かっている。

i) 水田畦畔(図154・186・188・189、図版24)

SR01

I 区北部に位置する東西畦畔である。後述する溝SD07の南側縁に伴っており、7A-2層上面に長原13層のブロックを含んだ盛土の状態で検出した(図187)。残存高10cm余り、下幅0.6m程度である。断面図をみると、直上の位置で7A-1層にも小さな高まりが認められ、その段階まで継続して存在していた可能性がある。SD07を挟んで北側にも7A-2層の高まりがあり、ここにも畦畔が存在したのではないかとみられる。

SR02

I 区中央付近で検出した東西方向の畦畔で、7A-1層の高まりとして検出した。残存高10cm弱、下幅は0.7m弱である。

SR03

I 区南部で検出した7A-1層上面の畦畔で、SD14の直上に位置する。長原6層によってかなり削られたようで、下幅は0.7m前後ながら、残存高は5cmにすぎなかった。

SR04

II 区の西部に位置する南北畦畔で、後述の溝SD18の西側縁に伴い、また直上の長原6層や溝SD23に多少削られた状態で検出した。残存高5~10cmで、下幅約0.6mであった。SD18の東側縁では畦畔の有無は明らかではない。

II 区西部には、その他に、溝SD17の両側にも長原7A層の高まりが断面図で読み取れる。ここにも畦畔が存在した可能性があるが、平面的には検出できなかった。

SR05~09

III 区南半部に検出したものである。南北方向の畦畔SR05~07は北で東へ20°~40°傾いている。それに取付く東西畦畔SR08・09はほぼ直角に交わっている。畦畔の下幅は0.6~0.8m、高さは数cm程度である。水田面の標高は8.39~8.61mである。

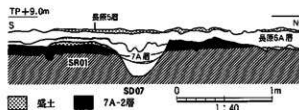


図187 SR01・SD07断面図

SR10~18

IV 区の全域にみられる。南北方向の畦畔としてSR10~15を検出したが、それぞれ方向が若干異なっている。東端にあるSR15は北で東に15°の傾きであるが、その西にある

SR14は西に15°の傾きとなる。SR14以西の南北畦畔はみな西傾しており、5°～30°振っている。一方、東西畦畔にはSR16～18があり、これらも正方位にはのってこない。西寄りにあるSR16は東で北に40°傾き、SR17・18は北に25°～30°振っている。畦畔の方向が一定しない状況はⅢ区においてもみられたが、その原因として、塚ノ本古墳の墳丘やその外堤があったことは十分考えられよう。

畦畔の規模は下幅で0.5～0.7m、高さ5～10cmである。SR14とSR17の交わる部分には水口が設けられている。水田面の標高は8.70～9.03mで、おおむね東に向けて低くなる傾向がみられる。

ii) 溝(図154・180・186・189、図版23)

SD06～12

I区北部の溝群である。幅は0.3～1.0m、深さ10～30cmとさまざまである。北端のSD06は7A-1層に伴い、方向は南西から北東方向であるが、その他は東西方向、ないし南東から北西方向で、7A-2層に伴うが、埋土などは個々に異なり、すべてが同時存在したとは限らない。南端のSD12はかなり振れている。SD07は先述したように、畦畔SR01を南側に伴い、またその直上や北側にも畦畔が存在した可能性がある(図187)。なお、西方約60m余りのNG87-56次調査地では幅6m前後で平行する2条の東西溝が見つかっており、各々本調査地のいずれかの溝と一連であるとみられる。

SD13～17

I区中央から南部およびⅡ区中央部の溝群で、幅、深さともI区北部の溝群と同様、個々に異なる。方向は南西から北東方向である。I区ではSD13・14が7A-1層下面、SD15・16は7A-2層基底面で検出され、Ⅱ区のSD17は、細かく特定できないが、長原7A層下面の遺構であった。SD17はその位置と方向からみてSD15またはSD14と一連の溝と考えられ、また南隣のNG85-18次調査にも連続する。この溝は両側に径15～20cm、深さ5～10cmの不定形な凹みを列状に伴っていたが、柱痕などは確認していない。

I区南部ではその他に、147号墳の周溝付近から北へ蛇行しながら続く溝が見ついている。深さは最大でも5cm余りで、幅が狭くしかも一定ではない。この溝は長原7A層下面で検出したが、その性格はよくわからない。耕作痕であろうか。同様な小溝はI区北部などでも数例見ついている。

SD18

Ⅱ区西部で検出した溝で、北でやや西に振れる南北方向をとる。幅35cmで、深さは40cm

図188 I・Ⅲ区飛鳥・奈良時代の遺構（数値は水田面の標高m）

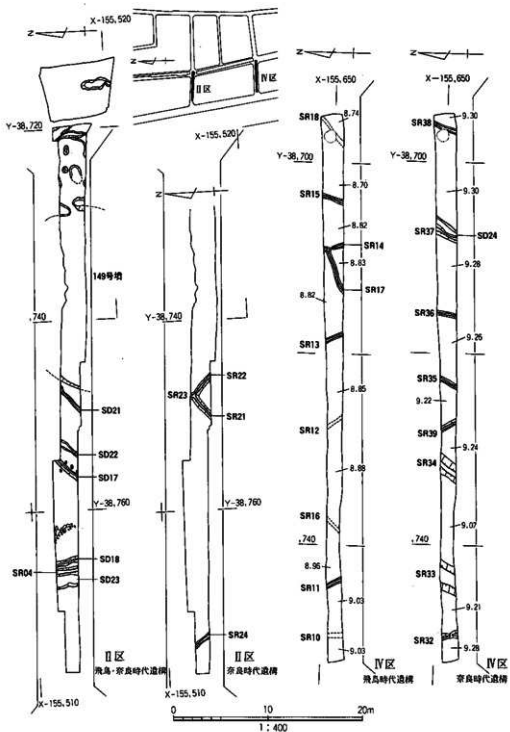


図189 II・IV区飛鳥・奈良時代の遺構 (数値は水田面の標高m)

である。長原 7A 層下面の遺構である。南隣の NG85-18 次調査地でも、これと連続する溝が見つかっている。

SD19・20

V 区にある溝で、SD19 は 161 号墳の墳丘東肩および東周溝を掘込んでおり、SD20 は同墳の西周溝を切っている。前者は南北方向をとり、幅 0.8~1.2m、深さ 0.3m ほどである。埋土は古墳の周溝埋土と同様な黒色粘土であった。TK10 型式に属する須恵器なども出土しているが、TK209 型式に下る須恵器も含まれる。後者は南東から北西に向う溝で、幅 0.9m、深さ 0.4m を測る。埋土は黒色粘土である。

(積山・櫻井)

iii) その他の遺構(図189)

Ⅱ区西部のSD18の東で、浅く不定形な落込みやビット風の凹み列が見つかった。凹みには柱痕跡はなく、鋤や鍬などによる耕作痕かと思われる。

(積山)

5) 奈良時代の遺構

この時代の遺構は長原 6Bi 層や長原 6Ai 層に関連するものである。東南地区の北部では水田址、同地区南部では区画溝などが見つかっている。

i) 水田畦畔(図186・188・189、図版24)

I~IV区において、長原 6Ai 層上面の遺構として検出されたものである。

SR19・20

いずれもⅠ区北部で検出した東西方向の畦畔で、下幅0.6m、上面は4層に削られており、残存高は5~10cm弱であった。SR20は東でやや南に振れている。SR20はNG87-56次調査の南側の畦畔に連続するとみられるが、北側の畦畔の延長位置には、本調査地では一部未調査部分もあり、畦畔は確認できていない。なお、Ⅰ区ではこれより南には長原 5 層が失われており、長原 6Ai 層の畦畔も残っていなかった。

SR21~24

Ⅱ区では149号墳の西側にかろうじて長原 5 層が残っている部分があり、長原 6Ai 層の畦畔を検出することができた。SR22は149号墳の墳丘から北西に延びており、SR21と直角に交わる。その交点から畦畔SR23が北へ続くが、これは検出長わずか0.5m足らずであった。SR24はⅡ区西端で検出した畦畔で、SR22と平行に近い方向をとっている。いずれも

上面が長原4層に削られていて残存高5～10cm、下幅0.5～0.7mであった。

SR25～31

Ⅲ区南半部に検出したものである。南北方向の畦畔としてSR25・31があるが、SR25は北で東に30°の傾きをもち、SR31は正南北となっている。東西方向をとるSR26～30はほぼ正東西に近い方向をとるが、その中で南端のSR30は東で北へ15°振っている。畦畔の方向については、飛鳥時代の状況に比べ正方位化が進んできているとみることができるが、SR25のようなものも依然として存在している。畦畔の規模はSR25が下幅1.8m、高さ50cmの大型であるほかは、下幅0.5m、高さ5～10cm程度のものである。水田面の標高は9.01～9.45mにあって、おおむね北に向って低く造成されている。

SR32～39

Ⅳ区にあり、確認されたものはみな南北方向の畦畔である。しかし、各畦畔の方向は一律ではない。西端にあるSR32はほぼ正南北であるが、SR33～38は北で東に10°～30°の傾きをもっている。調査区の中央付近にあるSR39だけは北で西に傾き、30°の振れを示す。ほぼ平行する関係にあるSR33～38の間隔は7～11mの範囲にある。畦畔の規模は、SR33が下幅2.7m、高さ40cm、SR34が下幅1.8m、高さ45cmという大型である以外は、下幅0.5～0.8m、高さ5～10cmほどである。SR32には水口が存在する。水田面の標高は9.07～9.30mにあり、SR33とSR34の間がもっとも低くなっている。

SR33・34については、その規模から一般の畦畔とは異なる役割をもっていたと推測される。SR34の延長方向にはⅢ区のSR25があり、一連のものである可能性が高い。Ⅲ・Ⅳ区の飛鳥時代にみられた水田畦畔の方向は非常に不統一なものであったが、これらの大型畦畔を造ることによって方向の統一を図ろうとしたのではなかろうか。

ii) 溝(図180・189)

SD21～23

Ⅱ区の中央から西部では長原6Ai層下面で3条の溝を検出している。SD21はSR21の直下に位置していた。SD22はその西方で同じ方向をとっている。SD23は長原7A層に伴うSR04を少し削り、それと同じ南北方向である。それぞれの幅、深さは、SD21が約0.9m、0.2m、SD22が0.4～0.7m、0.1mで、SD23が1.3m、0.2mであった。

SD24

Ⅳ区東寄りにある溝で、SR37の東側に接して並走する。幅0.8m、深さ0.1m弱である。長原5層によって埋没する。

SD25～28

V区に確認した溝である。埋土はいずれもオリーブ褐色シルトであるが、この地層が長原 6Bi 層に当るのか、長原 6Ai 層なのかは明らかでない。

SD25は160号墳の墳丘西肩付近にある南北溝である。幅は0.7m以上、深さは0.4mほどであった。この溝については、NG87～51次調査などV区の北側にあるいくつかの調査地において連続する遺構が見つかったことから、当時の地割に係わるものと考えられる。須恵器・土師器の小片が出土している。

SD26は161号墳の墳丘東肩付近にある南北溝である。幅2.2～2.5m、深さ0.2mを測る。

SD27は162号墳の南周溝を東西に分断する南北溝である。幅1.7～1.9m、深さ0.2m弱である。溝中央の幅0.5mほどの区間が1段深く掘られている。

SD28は162号墳の南西にあり、周溝とも一部接して検出された浅い溝状の遺構である。幅1.0～1.2m、深さは6cmである。

(積山・櫻井)

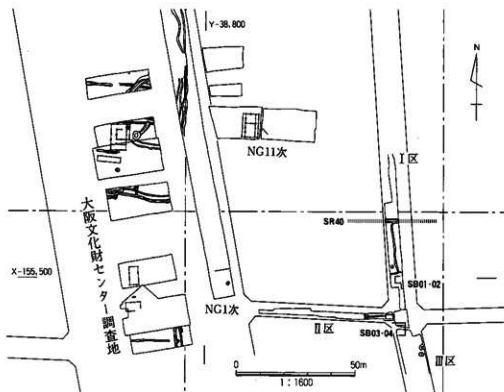


図190 東南地区北部 平安時代の遺構

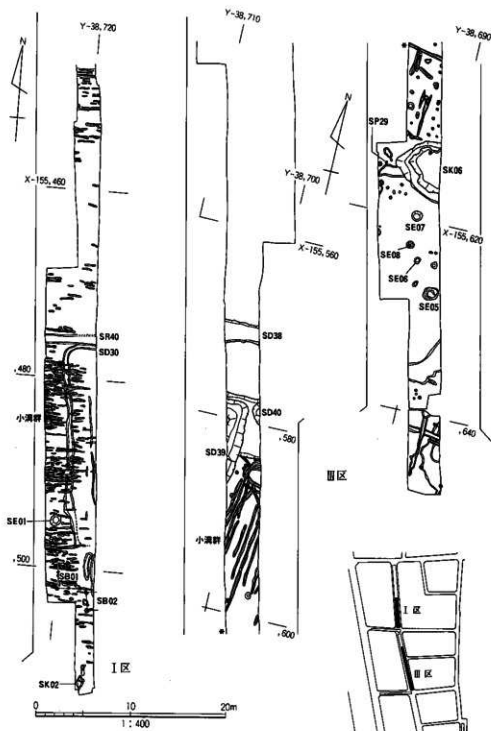


図191 I・III区平安・鎌倉時代の遺構

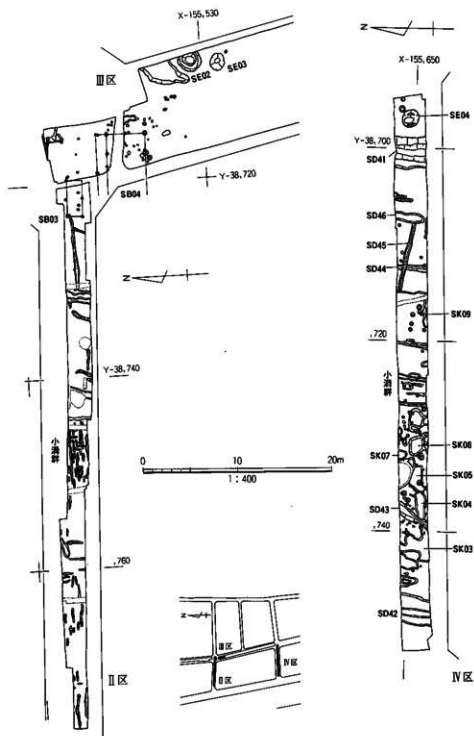


図192 II・III・IV区平安・鎌倉時代の遺構

6) 平安時代の遺構と遺物

この時代の遺構は長原4B層下面および同層内の遺構として確認されている。Ⅰ・Ⅱ区では同層が6層に細分される。

[大阪市文化財協会1982]に報告する調査地Ⅰ(NG8次)では建物・井戸・火葬墓などの遺構があり(図206)、調査地Ⅱ(NG11次)では2間×5間の身舎の東西に庇をもつ建物が見つかる(図190)。この調査地Ⅱから、南北の坪境溝を挟んで西側には[大阪文化財センター1978]に報告される建物群もある。建物群の多くは平安時代Ⅲ期に属するもので、今回報告するSB01～04も、このⅢ期に当る。このような、Ⅲ期における建物群の増加は、本格的な水田の再開発と関係し、平安京から移り住んだ官人クラスの居住者によってもたらされたものと考えられている[佐藤隆1992 p.113]。

i) 掘立柱建物・ピット

SB01(図193・194・199、図版25・26)

Ⅰ区南部に位置し、4B～6層内の遺構として検出した建物である。南北2間(2.6m)、東西2間(2.4m)の規模だけ判明しているが、失われた柱穴もあり、全容は不明である。掘形は小さな楕円形ないし不整形で、最大の南西隅の柱穴SP07でも一辺約35cmしかない。南西隅柱では柱根が良好に遺存しており、その直径は14cmであった。この柱穴の掘形から平安Ⅲ期の土師器小皿614が出土している。北側の柱穴でも柱根が部分的に残っていた。この建物は西側柱列の内側に土器埋納ピットSP10(後述)を伴っている。

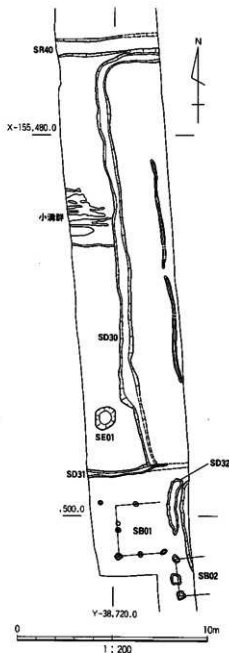


図193 Ⅰ区南部 平安時代の遺構

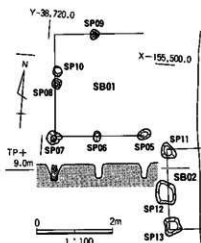


図194 SB01・02平・断面図

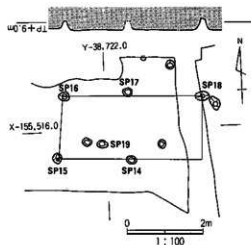


図195 SB03平・断面図

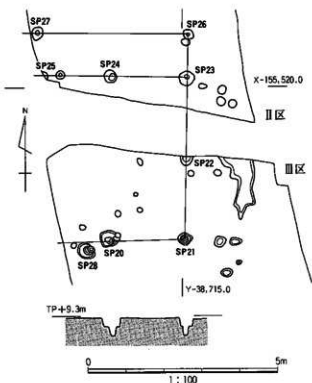


図196 SB04平・断面図

SB02(図193・194)

I区南部で、SB01の南東側に隣接して南北2間(2.1m)だけを検出した建物である。4B-6層内の遺構である。建物の大部分は調査地の東に存在するとみられる。掘形は不整形を呈し、一番大きい中央の柱穴は一辺50~60cmである。柱痕跡については明確にできなかった。

SB03(図195)

II区東部で確認した建物で、4B-6層内

の遺構である。南北1間(1.6m)、東西2間(3.65m)を検出したが、建物の範囲がトレンチ外の北または南に広がっている可能性が高い。南西隅柱で、柱根が部分的に遺存していた。

掘形は楕円形で、柱痕跡の直径は10～15cm程度である。南側柱列の内側には後述の土器埋納ビットSP19があり、この建物に関連するものと思われる。

SB04(図196・197、図版25)

Ⅱ区東端とⅢ区北端にまたがる掘立柱建物である。前述のSB03の南東に位置し、それとともにひとつの建物群を構成するものと考えられる。南北2間、東西2間以上

の東西棟で、北側に底が確認されている。棟方位は正東西である。柱間寸法は1.9～2.1m、底の張り出しは1.1mである。柱穴掘形は直径35～50cmの不整な円形をしている。SP20・21は段掘り状に掘られており、中央の直径15cmほどの部分が1段深くなっている。深さは45cmを測る。埋土は褐色粘土で、長原13層の偽礫を多く含んでいる。遺物には以下の土器・黒色土器がある。

610・611は土師器小皿である。口縁部を水平方向に折り曲げ、その端部をかるくつまみ上げたものである。口径は8cmに復元される。612・613は黒色土器碗A類である。612には断面台形を呈する高台が残る。613の口縁部は、端部で斜め上方につまみ上げられている。これらの遺物は平安Ⅲ期に該当するであろう。

SP10(図194・199、写真17、図版80)

Ⅰ区南部で、SB01に伴って検出した土器埋納ビットである。平面形はやや方形に近く、深さは40cm弱で

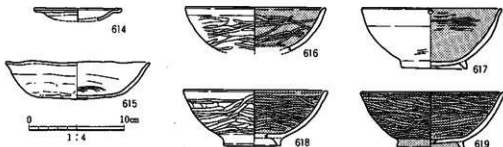


図197 SB04・SP29出土遺物

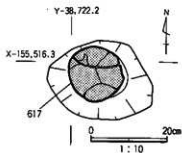


図198 SP19土器出土状況平面図

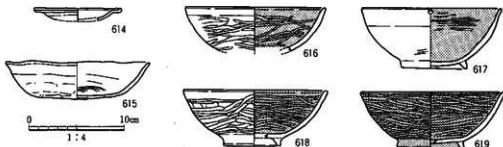


図199 ビット・溝出土遺物

SP07 (614)、SP10 (615・618・619)、SP19 (617)、SD32 (616)

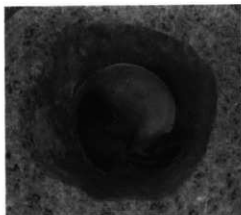


写真17 SP10土器出土状況



写真18 SP29土器出土状況（西から）

あった。底からかなり浮いた状態で土師器皿615が置かれ、その上下から被砕された黒色土器碗618・619が出土した。

615は完形の土師器皿である。口径15.1cm、器高4.0cmを測る。口縁部がやや波打つ。618・619はともに黒色土器碗で、618はA類、619はB類である。618は全周の2/3が残るもので、口径15.0cm、器高5.9cmである。619は完形で、口径14.9cm、器高5.9cmである。619には、底部に焼成後の穿孔が認められる。いずれも平安Ⅲ期に属す。

SP19(図195・198・199、図版26・80)

Ⅱ区東部で、SB03に伴うかとみられる位置で検出した土器埋納ピットである。4B-6層内の遺構である。長径30cm弱の楕円形で、深さ30cm余りの掘形に、底から25cm浮いた状態で完形の黒色土器碗A類617が置かれていた。

617は完形品で、口径14.8cm、器高6.3cmを測る。口縁部に、焼成後に穿たれた直径4mmの円孔がある。平安Ⅲ期に当るものであろう。

SP29(図191・197、写真18、図版80)

Ⅲ区南部に設けられた土器埋納遺構である。平面は歪んだ楕円形で、検出時の規模は長径41cm、短径25cm、深さ4cmである。土師器小皿を南北2個所に3枚ずつ置く。皿は正位置で整然と重ねられていた。

皿6点のうち4点は、底部が狭く、口径の割に深さのある小皿である(606-608ほか1点)。法量は口径9.5cm前後、器高2.7cm。残る2点は、底部が広く、口縁部が短く外反したのち、端部がわずかにつまみ上げられるものである(609ほか1点)。法量は口径9.0cm、器高1.5cm。これらは平安Ⅳ期の古段階に当ると思われる。

ii) 井戸

SE01 (図193・200、図版25・26)

I区南部で検出した井戸で、後述の溝SD30・31に近接して位置している。4B-5層基底面で検出した。残存する深さは約1.4mで、長径1.3m・短径1.1mの不定形な平面形である。井筒に曲物を用いていたが、記録不十分で、底の深さの確認だけに留まった。614に類する土師器小皿や黒色土器細片が出土している。

SE02 (図192・201・202、図版80)

III区北端部にあり、SB04の南東8mの場所に位置する。検出時

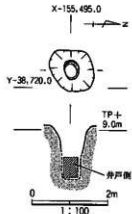
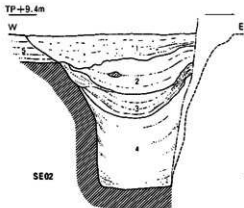
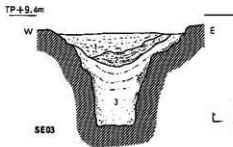
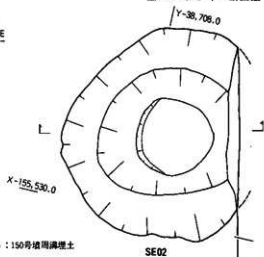


図200 SE01平・断面図



- 1: 含小礫黄灰色粘土質シルト 2: 灰色粘土
3: 緑灰色粘土、粗粒砂 4: 緑灰色粘土 5: 150号墳周溝埋土



- 1: 含小礫黄灰色粘土質シルト 2: 黄灰色粘土
3: 含小礫黄灰色粘土

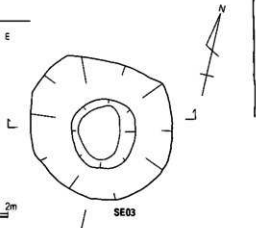


図201 SE02・03平・断面図

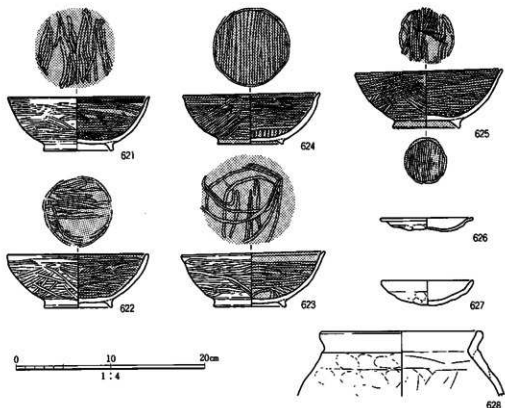


図202 SE02出土遺物

の規模は直径約2.3mの円形で、深さ約1.6mである。井戸底は平坦で、直径0.8mほどの正円形に造られている。井戸底から80cm近くまでは緑灰色粘土によって人為的に埋められ、その上部は砂や粘土が自然に流れ込んだ状況を示していた。最終的には小礫を含む黄灰色粘土質シルトによって埋まっている。埋土最下層から完形の黒色土器碗が5点出土しており、なんらかの意図で埋納されたものと思われる。

621～625は黒色土器碗で、621～623はA類、624・625はB類である。621～623は口径14.8～15.0cm、器高5.5～5.7cmという範囲にあり、法量もほとんど変わらない。しかし、暗文の施し方、口縁部の作り、高台の断面形などはそれぞれ異なっている。624と625では、前者が口径14.3cm、器高5.3cm、後者が口径15.3cm、器高6.1cmを測り、法量上の差のある上に、暗文や各部分の形態に違いがみられる。625の見込み部分には松葉状の針描きがある。これらは平安Ⅲ期に当てはまる。

626・627は土師器小皿、628は土師器甕である。626は浅い皿で、水平方向に折り曲げら

れた口縁部をもち、627は半球状の体部をもつ。628は口縁部から肩部の破片である。627以外は上記の黒色土器とともに出土している。

SE03(図192・201)

Ⅲ区北端部にあり、SE02とは約1mの間隔をおいてその南側に位置する。平面は直径1.6mの円形で、深さ約1.1mである。井戸底は平坦で、直径40cmほどの円形に造られている。井戸底から60cmまでは黄灰色粘土によって人為的に埋められ、その上部の15cmほどには自然堆積とみられる状況がある。埋土最上部には小礫を含んだ黄灰色粘土質シルトがみられる。

iii) 溝

SD29(図203)

Ⅰ区北部で4B-5層除去後、長原5層上面で検出した東西溝である。幅1.5m、深さ0.2mを測り、断面形はU字状である。遺物はない。

SD30・31(図193、図版25・30)

Ⅰ区南部で直交する2条の溝を検出した。埋土はいずれも含小礫灰色シルトで、4B-5層基底面の遺構である。SD30は長さ約21mにわたって南北方向に延び、北端で直角に東へ曲り、南端ではSD31と交差する。上面が削られているため、深さは5cm程度、平均幅0.6~0.7mであるが、断面形は逆台形に近く、本来はかなりしっかりした溝である。両端を結んだ方位は、座標北から西に約10°振れている。この溝の東には幅15cmほどで南北方向の耕作溝(後述)が認められた。SD31はこれとT字状に交わる溝で、残存する深さ10cm足らず、平均幅0.3mである。双方の溝内から614と同類の土師器小皿や黒色土器細片が出土している。

SD32(図193・199)

Ⅰ区南部、SD31の南には幅約0.5m、深さ5cm弱の弧状を呈する溝状の遺構があり、その東にも同様のものが4B-5層基底面で検出された。616が出土した。

616は黒色土器A類の碗で、全周の1/5ほどが残

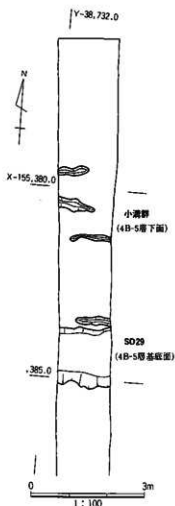


図203 Ⅰ区北端部平安・鎌倉時代の遺構

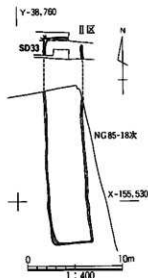


図204 SD33の連続状況

り、口径は14.5cmほどに復元される。

SD33(図204)

II区西部に位置し、4B-5層基底面で検出したコ字状に巡る溝で、北西コーナーからはさらに西と北へ延びていたかもしれない。幅0.2~0.3m、深さ0.1mを測る。南隣のNG85-18次調査でも同様の溝が見つかっており、復元すると東西3.8~4.1m、南北21m余りの空間を取巻くことになる。一筆を区画する溝かと想像される。

小溝群(図192・193)

I区の北端と南部、II区では、耕作に係わる小溝群が検出された。これらには、層位と切合い関係から、①4B-5層基底面で検出した南北方向をとるもの、②ごくわずかに分布する4B-6層内の遺構で東西方向のものがある。①の南北方向の小溝はSD30と同一層位、同一方向なので、ともに本来は同時存在かと思われる。また、①と同一層位の掘立柱建物群や土器埋納ピットと、②と組み合わせるSD30・31などの遺物からみると、ともに4B-6層内の遺構といえそうだが、わずかながら②とSD30には切合いがあり(②が古い)、完全に同時ではない。

iv) 畦畔

SR40(図193・205)

4B-5層基底面で検出したI区南部の大畦畔である。147号墳の墳丘が削平されたのち、東西方向に設けられている。下幅約1m、残存高10~15cmで、上面にはかなり凹凸があった。同一層準のSD30が南側に直角に曲っていることから、同時存在であったことは疑

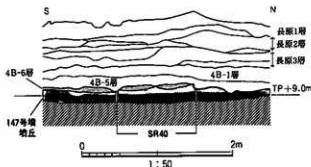


図205 SR40とその上層断面図(I区西壁)

いない。147号墳の墳丘上付近には主として地山(長原13層以下)と長原7B層のブロックが混る4B-6層が薄く残っており、墳丘削平時の土とみられる。本畦畔の盛土はその4B-6層であった。坪境の畦畔と考えられるが、現行の復元条里地

割と対比すると、6m前後南へずれている。なお、直上の4B-5層でも下幅1.9m、残存高10cm足らずの畦畔状高まりが認められ、その後、畦畔は検出されないものの、2層にいたるまで一貫してここが地境であったような地層の変化を認めることができた。ただ、坪を区画する水路を伴うのは本畦畔だけで、しかも検出したうちの南側だけである。

(積山・櫻井)

7) 鎌倉時代の遺構と遺物

この時代の遺構も平安時代と同じく長原4B層層準のものである。

平安時代後期に、この地区の屋敷地は集村化に向い、南北に連なる3ヶ坪内に集中すると考えられている[植木久1982]。その3ヶ坪のうち北端の区画に一町四方の溝(堀)が巡らされる(図206)。その時期は鎌倉時代の初頭と推測され、さらにさかのぼる可能性も指摘されている[福岡澄男1985]。また、この一町四方の溝に囲まれた空間については領主の館であろうという見方もある[広瀬和雄1988]。[大阪文化財センター1978]では、この区画の西半部を調査し、区画溝の北西隅・南西隅を含む広範囲に及ぶ状況が捉えられている。今回の調査ではⅢ区にこの区画溝の北東隅を確認し、Ⅳ区にその延長部分を検出した。これまで3ヶ坪内に集村化するとみられていたが、Ⅲ区では、さらにこの区画の外側に井戸や土塀を確認し、Ⅲ区の南方に続く道路上を調査したNG87-16次調査では数棟の掘立柱建物の存在を明らかにした。なお、Ⅰ・Ⅱ区では4B-4層以上は遺物に乏しく、年代を確定できないので、ここで述べる遺構を鎌倉時代とした根拠は、下層の4B-5層出土遺物が13世紀初頭頃であること、下限が14世紀の前半[趙哲済・京嶋覚・高井健司1992b]とされる水成層の長原4A層より下層で検出されたことによっている。

i) 井戸

SE04(図192・207、図版27・29・81・82)

Ⅳ区東端にあり、一町四方の区画溝の外側に位置する。平面形は長径1.9m、短径1.6mの楕円形を呈し、深さは1.3mである。埋土は3層に大きく分れ、その上・中層から多数の遺物が出土している。

629~633は土師器小皿で、平安時代の後半にみられる、「て」字状口縁の浅い皿の系譜を引くものと思われる。631・632・633では、口縁部を外方に折り曲げる手法の名残りがうかがえるが、629・630では口縁部の内側に中央の凹んだ内傾する面を作るだけになっている。634・635は土師器皿で、口径約15cm、器高3cm弱である。636・639は瓦器碗

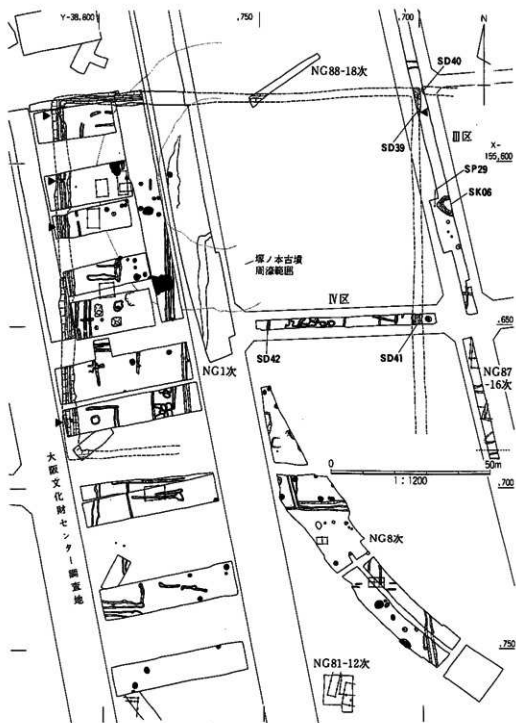


図206 東南地区平安・鎌倉時代の遺構（点い網かけは井戸、▲は陸橋状高まりの位置を示す）

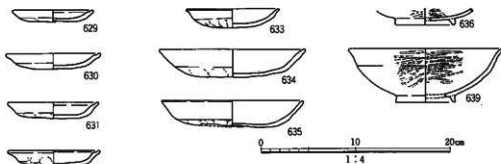


図207 SE04出土遺物

で、内外面の暗文が密に残り、高台も大きく張出している。Ⅱ-3期のものであろう。

SE05～08(図191・209、図版81)

これらはⅢ区南端付近にあり、一町四方の区画溝の外側東側に位置する。SE05・08は曲物を井戸側とするが、SE06・07では井戸側は見つかっていない。SE08に残っていた曲物は1段分で、直径32cm、高さ7cm弱を測る(図208)。SE05の曲物は断片のため本来の量量は不明である。SE05は直径1.7m、SE06・08は直径0.6m前後、SE07は直径1.1mを測る。検出面からの残存する深さはSE05・07が約0.3m、SE06が0.2m弱、SE08が0.1m弱である。

SE05からは次のような遺物が出土している。土師器小皿640、白磁碗657・658、瓦器碗646・647がそれで、白磁碗657と658は釉色や胎土からみて別個体である。瓦器碗はⅡ-3期またはⅢ-1期に当る。

SE06の遺物には、瓦器碗648～651がある。内面には暗文がまだ密に残っているが、外面では簡素である。649・651の見込みには平行暗文がみられる。Ⅱ-3期に該当しよう。

SE07からは瓦器碗652が出土している。小片であるが、Ⅱ-3期が妥当であろう。

SE08の遺物には土師器小皿641・642、土師器台付皿643、瓦器小皿645、瓦器碗653、瓦質土器鉢654、須恵器鉢655、土師質羽釜656に加え土師器の鉢かと思われる644がある。瓦器碗のⅡ-3期またはⅢ-1期の時期が考えられる。

(櫻井)

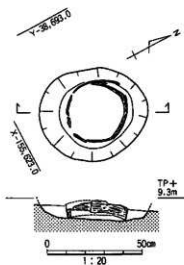


図208 SE08平・断面図

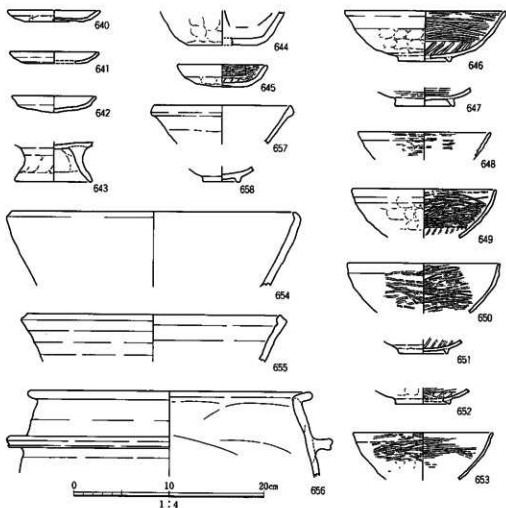


図209 SE05～08出土遺物

ii) 溝

SD34・35(図223、図版30)

Ⅱ区中央から西部にかけて、上下に重なって検出した東西溝である。SD34は4B-3層下面、SD35は4B-1層下面で検出した。前者は幅0.7m以上、深さ0.1mで、後者は幅0.6m、深さ0.1mである。これらの溝の位置は復元条里の坪境から南へ約44m(2/5町)ずれているが、現代の小字「ヌクヤ」と「塚ノ本」の字界に当たっており、その起源が少なくともこの時期までさかのぼることを示している。なお、この頃にはまだ149号墳がすぐ東側で地表に残っていたため、これらの溝はそこで途切れたか、あるいは方向を変えたようで、Ⅰ区の南端ではその延長線上に溝は見つかっていない。

SD36・37(図223)

Ⅱ区東部で、後述の畦畔SR41などに伴って4B-1層の下面で検出した溝である。SD36は東西方向、これとT字状に交わるSD37は南北方向である。SD36を挟んで耕作の小溝群が東西、南北と方向を変えていることから、これらの遺構は耕作地を小さく区画する溝であった可能性が高い。幅は最大0.4mで、深さは小溝群よりやや深く、0.1mほどである。

SD38(図191)

Ⅲ区中央付近にあり、後述するSD39・40の北約6mに検出された東西溝である。幅2.1m、深さ0.2mで、水成とみられる砂礫層が堆積していた。

SD39(図210・211、図版28)

Ⅲ区の中央付近にあり、同地区西側に位置する一町四方の区画溝(丹北郡条里8条4里26坪)の北東隅部に当る。幅1.7~2.6m、深さ1.2mで、下部では横断面V字形に掘られているが、北肩部では段掘りされている。最深部では長原15層に相当すると思われる緑灰色シルト質粘土まで掘削が及び、埋土最下部には自然堆積とみられる暗青灰色粘土質シルトが約50cmの厚さでみられる。その上部にはブロック土が多く含まれ、人工的に埋められた状況があるが、完全には埋戻されておらず、残った凹みに土砂が流入している。検出した溝の南端部には、陸橋状の高まりが見つかっている。このような高まりは[大阪文化財センター1978]にも報告されており、堰の可能性などが考えられている。また、大阪文化財センターの調査で確認された区画溝北西隅の底のレベルは8.42mであったが、この北東隅では8.10mであった。図191には、この溝の東側に南北方向の小溝群が並走しているが、これらはSD39が埋没したのちのものである。

この溝からは661の瓦器碗、664の須恵器壺が出土している。661は見込みに平行暗文をもつが、体部外面には暗文のみられないⅢ-2期の瓦器で、埋土下部より見つかった。664は飛鳥時代の壺の破片で、溝の時期とは直接かかわらない。

SD40(図210・211)

Ⅲ区中央付近にあり、前述のSD39の東西線の延長上に位置する。幅2.6m、深さ1m強を測り、横断面が逆台形になる。埋土最下部には暗青灰色粘土質シルトがあり、SD39と共通する。以下に述べる遺物が出土している。

659・660は土師器小皿である。659は口縁部を外方に折り曲げるもので、660は内湾ぎみに口縁部を立上げる。662・663は瓦器碗で、外形や暗文からⅢ-1期のものと思われる。665は灰釉陶器で、壺の肩部と推定する。外面にオリーブ黄色の釉が厚く掛かる。

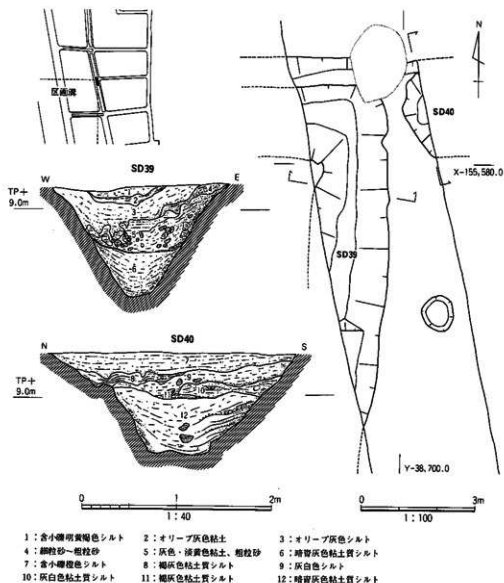


図210 SD39・40平・断面図

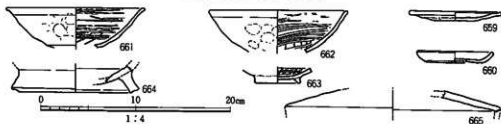
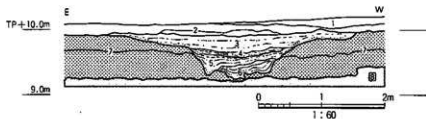


図211 SD39・40出土遺物

SD41(図192・212・213、図版27・81)

Ⅳ区東端部にある南北溝であり、前記SD39から続く区画溝の東辺となるものである。幅は約4m、深さ0.7mで、溝中央の幅1.7mの部分が一段深くなっている。溝埋土の最下部には黒褐色粘土が堆積しており、溝内は滞水状態にあったと思われる。溝底は長原6Ai層の粘



- 1: 黒褐色粘土質シルト(長原1層) 2: におい黄褐色シルト(長原2・3層) 3: 黒褐色粘土質シルト
 4: 暗褐色砂質シルト 5: 黒褐色シルト質粘土 6: 黒褐色粘土
 7: 細粒砂～粗粒砂(長原5層) 8: 暗オリーブ灰色粘土(長原6Ai層)

図212 SD41断面図(Ⅳ区南壁)

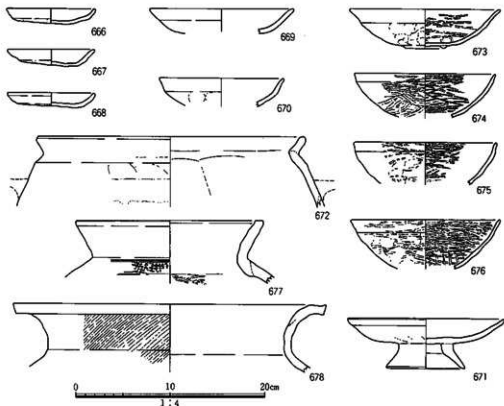


図213 SD41出土遺物

土上にあり、その標高は9.20mであった。

出土遺物には次のようなものがあるが、段掘りされた溝の上部と、一段深くなった部分のものとを区別して記述する。

埋土上部からは669・670・672・677・678が出土した。669・670は土師器皿、672は土師質羽釜、677・678は須恵器甕である。土師質羽釜はⅢ-1期のもの、678の須恵器甕も同時期に該当しよう。

埋土下部からは666~668・671・673~676が出土した。666~668は土師器小皿、671は台付皿、673~676は瓦器碗である。671は完形品で、口径16.6cm、器高5.3cm、高さ2.6cmの台部をもつ。673はⅢ-3期、674~676はⅡ-3期の瓦器碗と考えられる。

SD42(図192・214、図版81)

Ⅳ区西端部にある南北溝で、幅約3m、深さ35cmほどである。中央部付近の幅0.9mの部分が一段深くなっている。埋土は2層に分れ、下部はオリーブ黒色シルト、上部は黄褐色砂質シルトである。以下に述べる遺物が出土している。

679・680は土師器で、679は皿、680は台付皿の台部である。680は高さ3.3cmを有す。681~683は瓦器碗であるが、それぞれ時期が異なる。681はⅣ-1期、682はⅡ-3期、683はⅢ-1期と考えられる。684は瓦器皿で、口径11cm強に復元されるが、内外面に暗文はみられない。685は青磁碗、686は白磁碗である。685は内面に草花文を片彫りする竜泉窯系の青磁で、[横田賢次郎・森田勉1978]による分類のⅠ-2類に当り、12世紀中頃以降にみられる。686はⅣ-1類に分類されるものに該当しよう。687は丸瓦で、凸面に縄目タタキ、凹面に布目痕がみられる。

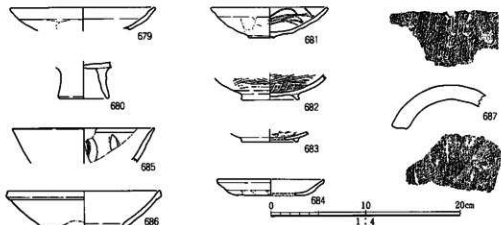


図214 SD42出土遺物

出土遺物の時間幅が大きく、この溝の存続期間は決めがたい。しかし、Ⅳ-1期に存在したことは考えてよからう。

SD43(図192、図版27)

Ⅳ区西半部の土壌やピットが集中する場所にある。南西から北東に向い、幅0.5～1.0m、深さ0.1m弱という小規模な溝である。

SD44～46(図192、図版27)

Ⅳ区の東半部にある溝である。これらの溝がみられる範囲は、それ以西に比べ、土壌・ピットの密度が低い。SD44・46は南北方向をとり、前者は幅0.6m、後者は幅0.9mである。SD45は東西方向の溝で、幅0.4mである。深さはいずれも5～10cmを測る。

小溝群(図191・192・203・223・224、図版27・30)

Ⅰ・Ⅱ区で耕作に伴う小溝を多数検出している。まずⅠ区とⅡ区東部では4B-1層下面に検出され、直下は4B-5層であった。Ⅱ区中央以西では同層の間に4B-2～4B-4層が認められ、同一1層下面、同一3層下面、同一4層下面で、各々耕作溝を検出した。さらに、Ⅱ区に4B-5層下面の一群もあった。これらの多くは深さ5cm内外と浅い。多くは東西方向であるが、SD36・37の付近では南北方向である。また、4B-3層下面では径20～50cmの浅い凹みが列状に並んで見つかったが、柱痕跡などはなく、これもなんらかの耕作によるものであろう。

Ⅲ・Ⅳ区の小溝群も耕作に伴う遺構で、区画溝の廃絶後のものと思われる。

iii) 土壌

SK02(図191・215)

Ⅰ区最南端で検出した不定形な土壌状の落込みで、検出面は確認できなかったが、4B-5層に伴うとみられる。瓦器碗688が出土している。



図215 SK02出土瓦器

瓦器碗688は全周の1/3が残存し、口径14.4cmに復元される。内面にのみ暗文が施され、Ⅲ-2期に当ると思われる。

SK03(図192・216、図版29・84)

Ⅳ区西半部にある不整形な凹みで、深さは10cm弱である。埋土は褐灰色シルトであった。次のような遺物が出土している。

693は瓦質土器の足釜で、底部と脚部以外を残す。口縁端部は内傾する平坦面をもつ。口縁部と胴部の境に断面三角形の鐙を巡らせる。697は須恵器鉢である。その他にⅢ-3期ま

たはⅣ－Ⅰ期の瓦器碗が出土している。

SK04(図192・216、図版27)

Ⅳ区西半部にあり、SK03の東側に位置する。楕円形に近い平面形で、長径3m以上、短径約1m、深さ0.2m弱である。褐灰色シルトを埋土とする。底面中央部から以下に述べる土器がまとめて出土している。

690・691は瓦器碗で、690には断面三角形の低い高台が付く。どちらの個体にも外面に暗文はみられない。Ⅲ－3期またはⅣ－1期に該当するものであろう。694は土師器甕の大型品である。口縁部形態がSD41出土の須恵器甕678に類似している。696は東播系の須恵器鉢である。695は土師質羽釜である。鈎から上方はやや直立ぎみで、頸部端を外方に短く折り曲げて口縁部を作っている。

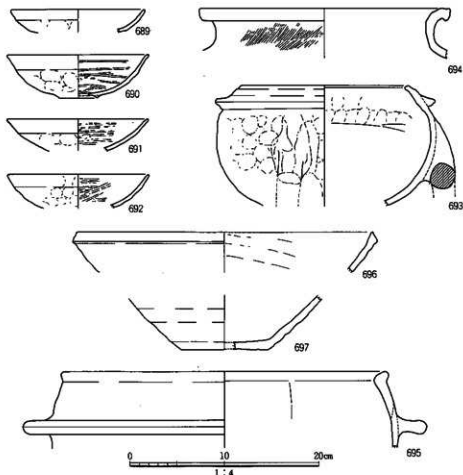


図216 SK03～05出土遺物
SK03 (693・697)、SK04 (690・691・694～696)、SK05 (689・692)

SK05(図192・216、図版27)

Ⅳ区西半部にある不整形な凹みである。もっとも深い部分で、深さ17cmを測る。褐灰色シルトを埋土とする。

出土遺物には土師器Ⅲ689、瓦器碗692があり、Ⅲ-3期のものと思われる。

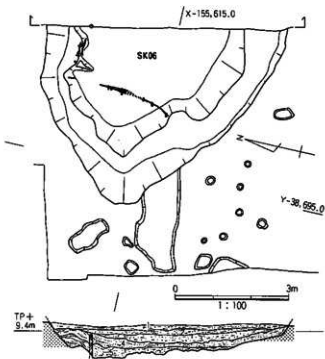
SK06(図217~221、図版29・82~84)

Ⅲ区南端付近に見つかった大型の土坑である。調査区の東へ続くため全容は不明であるが、西側に一つのコーナーが確認できる。東西4.6m以上、南北6.4m、深さ84cmである。土坑底の北斜面および西斜面に寄った位置に、L字形をなす杭列を伴っている。杭列はほぼ正東西、正南北方向に造られ、杭に板材や竹を横方向に噛まして、シガラミ状にしていた。杭の直径は約7cmである。埋土は上部と下部に大別でき、上部は砂礫を多く含んだシルトで、人工的な埋戻しによるもの(図217-1~3の地層)、下部は主として自然堆積したものであるが、杭列の外側の部分にはブロック土もみられ、裏込めされていたようである。自然堆積層である図217-4の中心

部は粘土であるが、周縁に向うにつれ砂礫が主体となっている。この砂礫は土坑の肩にある長原5層から供給されたもので、杭列はこの砂礫の流入を防ぐ目的で設けられたものと思われる。検出時、多くの杭は内側に倒れ込んでおり、外側からの土圧を受けていたことを示していた。

出土遺物には土師器・瓦器・陶磁器のほか、石製品・木製品があり、以下、埋土の上部と下部に分けて記す。

上部出土遺物 700・701は口径約8cmの土師器小皿、706・707は口径13cmほどの土



- 1: 含小礫棕色シルト 2: 含小礫明黄褐色シルト 3: 含小礫黄灰色シルト
4: 暗緑灰色シルト質粘土~淡黄色細粒砂 5: 含小礫暗緑灰色シルト

図217 SK06平・断面図

第Ⅱ章 調査の結果

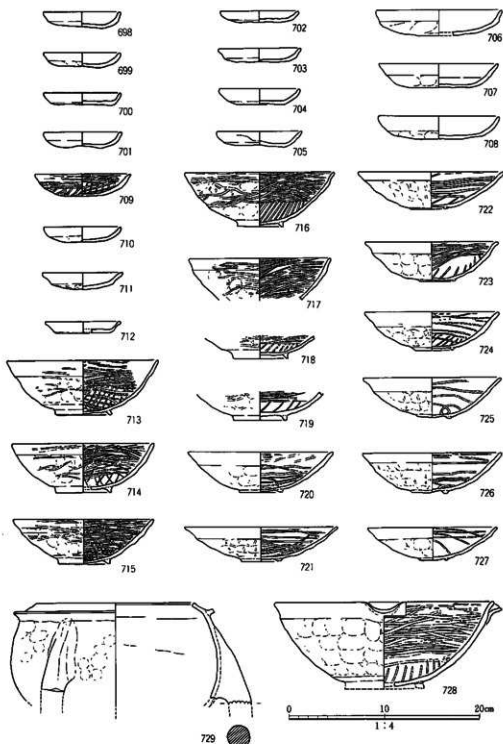


図218 SK06出土土器(1)

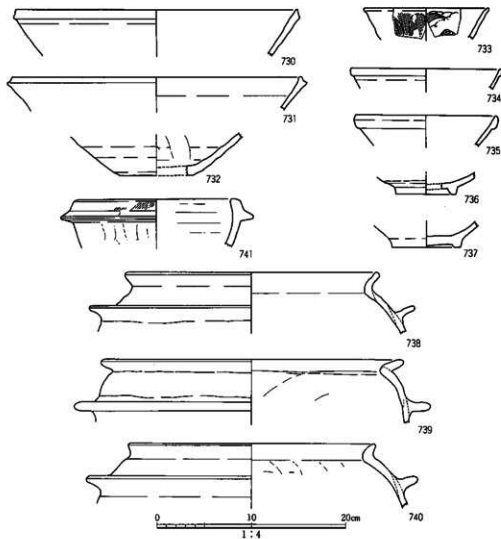


図219 SK06出土土器(2)

節器皿である。709・710は瓦器小皿で、709には内外面に暗文がみられるが、710にはなく、後者は前者に比べ小ぶりでもある。713・715～717・719・720・722～726は瓦器碗である。713・715は内外面に暗文をもち、見込みの暗文が斜格子状となっている。Ⅱ-3期に当る。716・717・719も両面に暗文をもつが、716・719の見込みは平行暗文である。Ⅲ-1期と考えられる。720・722～726は外面に暗文がなく、内面に施されるものも粗くなっている。高台も低く、径も小さい。Ⅲ-2期～Ⅲ-3期に該当しよう。728は瓦器の鉢で、片口が設けられている。内面にのみ暗文がみられ、見込みは平行暗文となる。730・732は



図220 SK06出土砥石

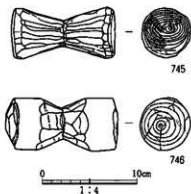


図221 SK06出土木錘

須恵器鉢で、730は口縁部、732は底部の破片である。733は青磁碗、734・736・737は白磁碗で、[横田賢次郎・森田勉1978]によれば733は竜泉窯系Ⅰ-6類、734はⅡ類の白磁碗に当る。734と736は同一個体の可能性がある。737は軸が厚く掛かり、736に比べて厚い底部をもつ。738・739は土師質羽釜である。738は頸部から徐々に外反させて口縁部を作るが、739は口縁部となる粘土帯を頸部外面に貼付けることによって口縁部を作る。742～744は砥石である。742は正面方形、側面三角形をしており、743は板状を呈する。744は一部欠損しており、残存部分は鶏頭状をしている。使用されている各面には敲打痕がみられる。

下部出土遺物 698・699・702～705は口径8～9cmの土師器小皿で、698には灯明芯の痕が残る。708は口径12.6cmの土師器皿である。711・712は瓦器小皿であるが、711には暗文はなく、712には見込みにのみ螺旋状暗文がみられる。714・718・721・727は瓦器碗で、714はⅡ-3期、718はⅢ-1期、721はⅢ-2期またはⅢ-3期、727はⅣ-1期に該当しよう。729は瓦質足釜で、口縁端部に内傾する平坦面を作るが、鈎の先端も平坦面をもつ同様な形態となっている。[菅原正明1983]による山城Ⅱ型に分類される。731は須恵器鉢の口縁部である。735は白磁碗Ⅳ類に当る[横田賢次郎・森田勉1978]。740は土師質羽釜で、口縁端部を短く外方に折り曲げている。741は滑石製石鍋で、口縁部と体部の境に鈎を巡らせ、内湾する体部をもつ。[森田勉1983]の形態分類に従えばB-1類に該当する。745・746は木錘で、745は746に比べ非常にいい材料に製作されている。745は全長11.1cm、最大径5.2cm、クビレ部径2.5cm、746は全長11.9cm、最大径5.3cm、クビレ部径3.1cmを測る。

時期決定の指標となる瓦器碗などから比較すると、埋土の上部と下部の遺物にはほぼ同じ時間幅のものがみられることになる。下部層の最終的な堆積物である図217-4の地層には瓦器碗727、瓦質足釜729といったⅣ-1期の土器が含まれており、SK06はこの時期に

廃絶されたものとみられる。上部出土遺物に含まれるⅡ-3期やⅢ-1期の遺物については付近の包含層や遺構内にあったものが混入したものであろう。下部層に含まれるⅡ-3期などの遺物はSK06の存続期間を示すものと思われ、流入する土砂を掻き出しつつ、水溜めのような施設として約1世紀にわたって使用されてきたものと推測する。

SK07(図192・222、図版27)

Ⅳ区西半部にある土坑。北壁内に遺構が延びるため全体の規模は不明であるが、北壁部分での幅は1.1m、深さは0.2m弱となっている。埋土は灰黄褐色シルトである。土師器小皿757が出土している。

SK08(図192・222、図版27・84)

Ⅳ区西半部にあり、SK07の南にみられる方形の土坑である。2.0m×1.5mの平面規模もち、深さは35cmである。灰黄褐色シルトを埋土とする。758・764が出土している。

758は土師器小皿で、SK07のものとほぼ同形態である。764はほぼ完形の土師器皿で、口径14.4cm、器高3.0cmを測る。

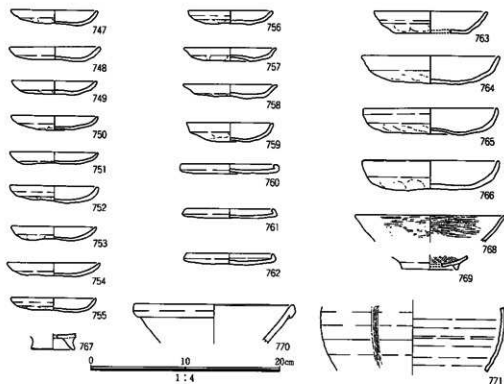


図222 SK07～09出土遺物

SK07 (757)、SK08 (758・764)、SK09 (747・756・759・763・765・771)

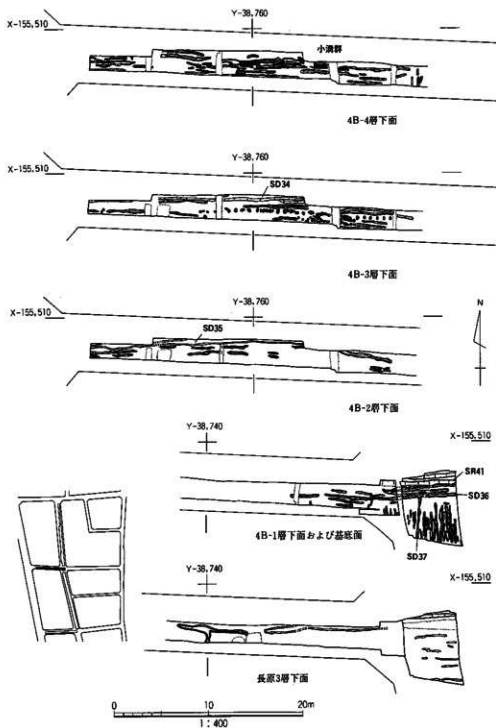


図223 II区鎌倉・室町時代の遺構

SK09(図192・222、図版27・84)

Ⅳ区中央部にあり、遺構の北端のみを検出した。深さ0.1m程度の浅い凹み状の遺構である。褐灰色シルトを埋土とする。

SK09からは多数の土師器小皿が出土しているが、次の3形態に分れる。一つは浅い体部にやや内湾ぎみの口縁部をもつもので、747～756の10点がある。口径約9cm、器高1.5cm前後である。二つ目は、内湾ぎみの口縁部をもつものの、体部の深いものである。これに当るのは759の1点だけであり、前者の範疇に含めうるかもしれない。口径9.1cm、器高2.0cmを測る。三つ目は平坦な底部から短い口縁部が内傾ぎみに立上がるもので、コースター状の皿などとも呼ばれる。760～762の3点があり、口径9.0～10.0cm、器高1.0～1.2cmである。

763・765・766は土師器皿で、763は口径11.8cmで、底部と体部の境界が明瞭なもの、765・766は口径14cm強で、体部から底部になだらかに移行するものである。後二者はSK08出土のものと同形態をしている。767は土師器

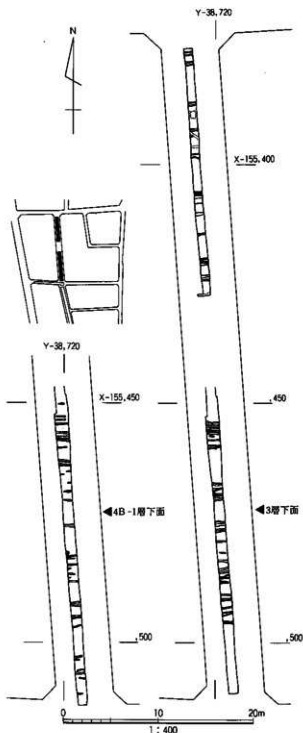


図224 I区鎌倉・室町時代の遺構(右図網かけ部分は島島)

台付皿の台部で、高さ1.4cm。

768・769は瓦器碗で、768は口縁部、769は底部の破片である。768の内外面には暗文がみられ、769には断面台形の高台と、見込み部の斜格子状暗文が確認される。

770・771は白磁である。770は碗で、[横田賢次郎・森田勉1978]のⅣ類に当る。771は壺の体部と考えられ、外面に縦方向の櫛描文がみられる。

以上の出土遺物から、SK09の時期はⅡ－3期ないしⅢ－1期と推定される。

iv) 畦畔

SR41(図223)

Ⅱ区東部で検出した東西方向の畦畔である。下幅は1.2m、残存高0.2mを測る。この畦畔は上面を4B－1層で削られており、厳密にはその基底面の遺構であるが、直下の4B－5層上面の遺構である可能性が高い。

(積山・櫻井)

8) 室町時代の遺構

島島(図224)

Ⅰ区で東西方向の島島を計8基検出した。規模は幅1.6～3.5m、高さ0.2～0.4mとまちまちであるが、いずれも水成の長原4A層以下の高まりである。両側に溝を伴うケースが多い。高まりの直上層が長原3層で、これによって削られていること、4A層の下限が14世紀前半におかれていることなどから、鎌倉末から室町時代にかけて形成された遺構とみられる。

(積山)

9) 小結

i) 谷状窪地の変遷

Ⅲ・Ⅳ区に、SD01～03が存在する谷状の窪地があった。SD01がもっとも先行するもので、長原8C～8B層段階と推定される。Ⅳ区ではこの溝の肩に長原9層がみられ、それが溝の内側に向けて緩やかに傾斜している。このことから、9層段階に浅い窪地状をなしていたところに、8C層の砂礫が流れ込み、それによって形成されたものがSD01であったと考えられる。続くSD02は、水成層である長原8A層で埋没するが、この溝に先行して凹みがあった形跡はみられない。また、Ⅳ区で南北方向、Ⅲ区で東西方向というように、直角に近い曲り方をしていることから、人工的に掘削された可能性もある。人工としたばあい、

弥生時代中期に相当な土木作業が行われたと考えねばならない。

SD03はSD02を掘直したもので、出土遺物から古墳時代前期末あるいは中期初頭に造られた溝とみられる。これは塚ノ本古墳が造営された時期であり、塚ノ本古墳の東に接するこの溝は、古墳の築造に関係する物資の運搬や周濠内の排水に利用されたと考えられる。また、この一帯の古墳の分布をみると、SD03の西側に偏っており、墓域を画する溝として認識されていたことも推測される。

ii) 古墳の時期と出土遺物

古墳の時期

本節では11基の古墳を報告した。それぞれ、須恵器または円筒埴輪を出土しており、造営された時期を推定することができる。円筒埴輪については[積山洋1992]に最新の分類と編年が提示されており、その円筒埴輪様式を用いて表12に示した。

表12 東南地区の古墳の時期

地区	古墳番号	須恵器型式	埴輪様式
I	147号墳	TK208	4式(D2類)
	148号墳		4式(D2類)
II	149号墳	TK73	3-1式(C1類)
III	150号墳	TK208	3-2式(C3類・D2類)
	151号墳		3-1式(C1類)
IV	152号墳	TK216	3-2式(C3類・D2類)
V	160号墳		4式(D2類)
	161号墳	TK73・TK216	3-1式(C3類)
	162号墳		3-1式(C3類)
	163号墳		3-1式(C1類・C3類)
	164号墳		3-1式(C3類)

I～IV区に見つかった古墳にはTK73型式～TK208型式の須恵

器をもつものがあり、埴輪編年からは3-1式・3-2式～4式のものが見られた。V区では須恵器の出土量が若干少ない傾向がうかがえるが、161号墳にTK73型式またはTK216型式とみられるものが出土している。埴輪は3-1式～4式のものである。これらの古墳の実年代については5世紀中頃から6世紀初頭にかけてと考えられよう。

[積山洋1992]では、3-1式と3-2式との時期差は見出しがたいとしたが、その点は今回の整理からも検証される。ただ、ともにTK208型式の須恵器を出土している147号墳と150号墳では、前者に4式、後者に3-2式の埴輪があり、3-2式と4式とに一部重複する期間があることも考えられるかもしれない。

150号墳の武人埴輪

この埴輪は、冑から草摺までが一体で表現されており、それに別作りの顔が取付けられるという点できわめて異例なものである。これと同様に、腕の表現がなく、甲冑形埴輪に顔の表現を加えたものが、長原45号墳[大阪市文化財協会1989]と京都府赤塚古墳[京都府

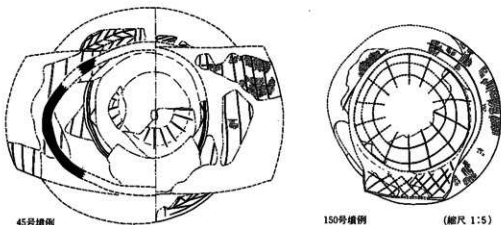


図225 武人埴輪の比較（上方より見る。図下が正面）

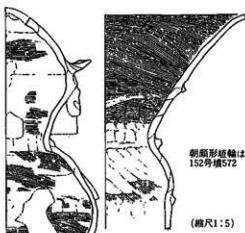


図226 製作方法の比較

立山城郷土資料館1991]にみられる。しかし、どちらの例も頸部からの連続で顔を作っており、150号墳例のように別作りの顔を用いるものではない。長原45号墳と赤塚古墳のものは製作当初から顔のある甲冑形埴輪を作る意図があったと思われるが、本例についてその点は明らかでない。

150号墳例の特異な点はまだある。通常、短甲部分の横断面は前後に潰れた楕円形を呈するが、この埴輪では冑から草摺まで、どの部分の横断面も円形である（図

225）。また、粘土の継ぎ方や内面調整についてみると、朝顔形埴輪との共通点がうかがえる（図226）。頭部の中位までは朝顔形埴輪の製作方法を応用したものとみられ、製作者が甲冑を十分に理解していなかったためこうした製作方法が採られたのであろう。

このような武人埴輪が人物埴輪の祖型となった可能性もあるが、今回の例を加えて再考するならば、人物の顔を付けた器財埴輪という位置づけのほうが相応しいと思われる。

iii) 飛鳥～奈良時代の水田遺構

I・Ⅱ区では長原7A層の溝群に方向の異なる3群が認められた。北部の一群では東西南向ないし北西から南東方向をとり、中央～南部の一群は南西から北東方向をとっている。

また一例だけであるが、Ⅱ区西部のSD18はやや西へ振れながら南北方向であった。これらを1・2・3群としておく。自然地形の傾斜は調査地から北東へ下がっているから、1群は東へ、2群は北東へ向う水路であり、3群は北へ流れたものであろう。埋土の違いから1群と2群の水路がすべて同時存在とは断言できず、各群2時期程度は想定しておいた方が無難であろうが、このころに、方向を異にする複数の水利系統が存在したことがみてとれる。

Ⅲ・Ⅳ区ではこの時期のものと考えられる水田面を2面確認した。上部のものは長原6Ai層上面、すなわち奈良時代末に埋没する水田である。下部のものは、直上を被覆する水成層に含まれる遺物から長原7A層上面(飛鳥時代中頃)と考えられた。下部の水田の時期については今後の検証が必要である。

iv) 平安時代の遺構

平安時代の遺構には、Ⅰ～Ⅲ区で検出した4B-6層内の遺構群が注目される。ここでは近接して少なくとも4棟の掘立柱建物が確認された。この層が分布していない場所で、4B-5層基底面で検出した区画の溝SD30・31・33や坪境の大畦畔SR40、井戸SE01、溝SD32や小溝群①なども、遺物その他からみると本来は4B-6層内の遺構とみられる。これらの遺構群は長原編年の平安時代Ⅲ期で、10世紀末から11世紀前半に当っており、該期の屋敷地と耕作地の良好な実例といえる。掘立柱建物SB01・03には土器埋納ピットを伴っていた。

またこのころ、溝や畦畔によって区画される耕作地の規模が2例判明したことも見逃せない。Ⅰ区のSD30・31および坪境畦畔SR40は南北約22mを測り、SD33も南北21m余りであった。長原遺跡で判明している1町(約110m)であるから、これらの例はおよそ1/5町に相当する。いずれもこの単位が東西・南北にどのように連続していたか不明なので、これだけで半折型か長地型かはいえないが、平安時代Ⅲ期には、前代以上に条里制が整ってきていることは明白である。

しかしその一方、現代の小字「ヌクヤ」と「塚ノ本」の字界の位置には、遅くとも鎌倉時代にⅡ区SD34・35などが存在することが判明した。また大畦畔SR41が13世紀初頭頃の遺物が出土する4B-5層の遺構である可能性が高く、そうすると鎌倉時代の初めまでさかのぼることにもなる。一方、Ⅰ区の坪境の大畦畔SR40は復元条里の地割から数mずれている点に問題を残すが、やはり直上の4B-5層までは存続していたようである。その後この位置はなんらかの地境ではあったらしいものの、大畦畔は姿を消している。つまり、平安時

代から鎌倉時代にかけて、大畦畔が坪境の位置から南へ約38mずらせて南へ付替えられたと想定され、必ずしも1町の区画に限定されない耕地があるという実態もみて取ることができる。

v) 鎌倉時代の遺構および遺物

区画溝と周囲の状況

Ⅲ・Ⅳ区において、丹北郡条里8条4里26坪を取囲む区画溝の一部を確認することができた。この溝については[大阪文化財センター1978]に西半部の調査成果が報告され、その規模から、一般農民層より上の階層に位置する人々の屋敷地に当たると推測された。こうした溝が出現した背景には、平安時代後期にそれまでの疎雑村から集村化する現象があった[植木久1982]。[佐久間貴士1986]はこの集村化現象を中世村落の祖型となるものと考えている。区画溝とそれに圍繞された空間については、領主の館であるという位置づけもなされた[広瀬和雄1988]。

今回の調査では区画溝の内外で多数の遺構を検出することができた。その中で、時期決定の指標としやすい瓦器を出土している遺構について表13に整理した。区画溝の一部に当るSD39・41では、前者にⅢ-2期、後者にⅡ-3期およびⅢ-3期に該当する瓦器がみられた。[大阪文化財センター1978]には溝内出土遺物として、Ⅱ-3期～Ⅲ-3期に推定されるものが示されていることから、今回の結果と矛盾するものではない。区画溝内の遺物としてⅢ-3期のものももっとも新しく、その時期に溝が存在したことは間違いないが、どこまでさかのぼれるかについては議論の余地がある。今回調査したSD41ではⅡ-3期とⅢ-3期の遺物が出土したが、特に新しい時期のものの割合が多いということとはなかった。また、[大阪文化財センター1978]でもⅡ-3期～Ⅲ-3期までの遺物がくまなく一様に出土していることから、溝の掘削時期はⅡ-3期を推定しようと思われる。そして、Ⅲ-3期までの期間、何回かの掘直しを行いながらも存続してきたものと考ええる。[福岡澄男1985]に集村化と環濠の掘削は同じ要因に基づくものと考えられているように、平安時代後期にその初源をもとめたい。

区画溝内には、地山から削り出して造った陸橋状の高まりが何箇所にも設けられていた。今回の調査でもSD39にこの施設が見つかった。こうした施設が存在は溝の機能に係わるものとして注目すべきであろう。[大阪文化財センター1978]では簡単な橋状の構造物あるいは堰と考えられている。[中井均1987]も堰と考え、こうした溝が防御的な堀の役割以外に田畠への灌漑用水としても利用されていたとする。SD39の高まりは谷状の窪地にかか

表13 各遺構出土瓦器の時期（網かけは区画溝内の遺構）

	遺構名	Ⅱ-3	Ⅲ-1	Ⅲ-2	Ⅲ-3	Ⅳ-1
Ⅳ	SE04	●				
Ⅲ	SE05	●	●			
	SE06	●				
	SE07	●				
	SE08	●	●			
	SD39			●		
	SD40		●			
Ⅳ	SD41	●			●	
	SD42	●	●			●
Ⅰ	SK02			●		
Ⅳ	SK03				●	●
	SK04				●	●
	SK05				●	
Ⅲ	SK06	●	●	●	●	●
Ⅳ	SK09	●	●			



図227 土師器羽釜の分類

	SE08	b			
SK06	a	—	b	—	c — d
	SD41		b	—	c — d
					SK04 d

図228 各遺構の土師質羽釜の形態

る手前に設けられていた。窪地内は砂礫が主となっているため、この位置に高まりを設けることは貯水を目的としたばあい理にかなっている。この区画溝には貯水機能があったと考えてよからう。

Ⅲ・Ⅳ区では区画溝の外側にのみ井戸が見つかっており、内側に土壌が多いという状況がみられた。また、井戸がⅡ-3・Ⅲ-1期のものであるのに対して、土壌はⅢ-3・Ⅳ-1期と、区画溝の終盤から廃絶時のものが多い。[大阪文化財センター1978]の調査地では区画溝内からも井戸が検出されているが、その分布は塚ノ本古墳の周濠の輪郭と一致している(図206)。これは周濠内の砂礫層に含まれる地下水を集めようとしたもので、厚く砂礫層の堆積する周濠の範囲を経験的に捉えていたものと推測される。区画溝の内部および外部で、その空間の利用方法に違いがあったことは考えてよからう。だが、区画の中心部についてはまだ十分な調査は行われておらず、今後の調査をまってさらに検討を加える必要がある。

土師質羽釜の分類

今回の調査においても多数の土師質羽釜が出土している。その口縁部の製作方法に注目

したところ、以下のa～dの4形態を認めた(図227)。

a：頸部に粘土帯を継ぎ足し、頸部から連続的に口縁部を作る。

b：口縁部となる粘土帯を頸部外面に貼付けることによって口縁部を作る。

c：口縁部のために粘土帯を付加することなく、頸部の端を外上方に折り曲げて口縁部を作る。

d：cと同様に頸部の端を折り曲げ、その後、玉縁状の丸みのある口縁部を作る。

bの製作方法には、鐳の接合と共通する発想がうかがえる。cでは口縁部のために粘土帯を付加しない。dではcに残されていた外上方に折れ曲る口縁部の特徴を失っている。このことからa→dの順に型式変遷を推定できる。

図228に出土した羽釜の形態を各遺構ごと示した(ここでは本文中に掲載していない遺物についても扱っている)。先に示した遺構別の出土瓦器碗の時期(表13)と対比してみると、推定した変遷とはほぼ一致している。さらに検証を重ねて、製作技法から変遷を考えて行きたい。

他地域からの搬入品

船載の青磁・白磁が出土したほかに、山城地域との繋がりを示す瓦質の足釜、コースター状の土師器皿が注目される。また、滑石製の石鍋も他地域で製作されたものであろう。その他、東播系とみられる須恵器もあった。

(積山・櫻井)

註)

- (1)人物埴輪の胸部に円形スカシ孔をもつものが東大阪市大賀世3号墳にみられる[上野利明・中西克宏1985]。
- (2)当協会調査員高橋工の教示による。
- (3)妻の転びについては[岡村勝行1990]に考察されている。

第Ⅲ章 遺構と遺物の検討

第1節 5・6世紀の集落構成の復元とその特質

長原遺跡の西地区に古墳時代の集落が存在することがはじめて明らかになったのは、1983年度の長吉長原西1丁目における発掘調査[大阪市文化財協会1992a]によってであった。それ以後、この地区の開発に伴う発掘調査は急速に進展し、集落遺構の分布域をおおむね南北700m、東西300mと推定することが可能になってきた。また、中央地区南端部の南地区との境界付近(図229-H地点周辺)にも建物遺構が検出され、この北西に位置し、未調査区域である現在の長原集落内にも存在するとみれば、東西600mに及ぶことになる。

しかし、これらの発掘調査の多くが道路敷設に伴うトレンチ調査であるため、集落全体の一断面をわずかにかきまみることしかできず、そこから得られる情報量もそれほど多いとはいえない。したがって、集落全体の概要が判明しつつある現在においても、細部にわたる検討を行うには困難な多い。そこで、ここでは、既存の調査資料を整理したのち、集落遺構のうち典型的あるいは特異な状況を示す部分のみを取上げて検討を加え、当遺跡における古墳時代の集落研究の基礎作業を提示したい。

1) 建築遺構と居住に関連する遺構

集落(註1)を構成する遺構には、掘立柱建物や竪穴住居などの建築遺構、井戸・溝・土壊などがある。以下に、この地区で調査された各遺構について分析する。なお、遺構の時期については、[京嶋覚1993]で示した土器の時期区分(表14)を使用する。

i) 竪穴住居

長原遺跡では、竪穴住居はTK73 型式の時期(1期)には認められず、TK216 型式の時期(2期)以後TK23 型式の時期(3期)まで存在することが確認されている。

床面は正方形を基調とし、主柱穴は4個である。規模は、床面の一辺長が4~5mのものが一般的であるが、7mの大型のものもある。住居内に遺付けの竈が検出された例はない

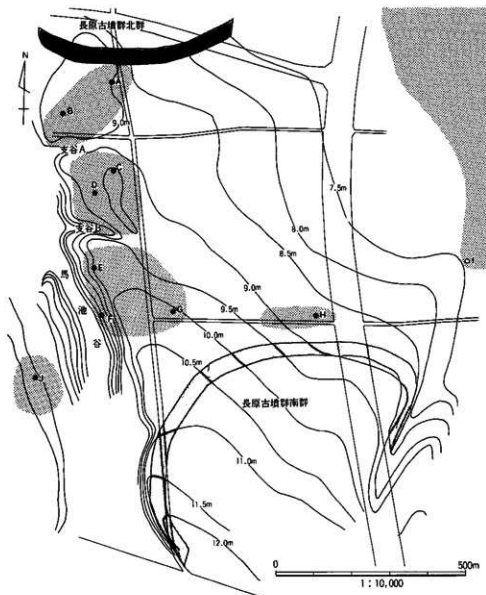


図229 古墳時代の集落と長原古墳群（アミ目は居住遺構の分布範囲）

が、壁際の床面に焼けた痕跡をもつ例が2期以後いくつかあり、付け底系[稲田孝司1978]の移動式竈の破片が出土することから、この遺跡では造付け竈は構築されなかったと思われる。竈の位置はいずれも北方向を示す。主柱穴は掘形が方形を呈するもの、円形を呈するものがあり、埋土が地山粘土を主体とするため、検出しにくいことが多い。周壁溝は幅が広く浅い傾向があって、溝内に小穴が並ぶなどの例はあまり認められない。地上から床

面までの深さを復元できる例はほとんどないが、旧地表が削平されていることを考えても、それほど深くはないと予想される。時期はやや古いが、北地区の長吉戸で発掘された第Ⅴ様式末期の方形竪穴住居の外周には堤が巡り、その上から床面まで0.5mの深さがあったが、周堤外側の旧地表からの深さは最大で0.2mにすぎなかった[今津啓子1989]。こうした床面をあまり掘込まない傾向は加美遺跡の竪穴住居でも認められ、その後5世紀代においても踏襲されていたと考えることができよう。

また、竪穴住居内での出土遺物はきわめて少なく、住居の廃棄時に持ち出されていたと考えることができる(註2)。さらに、住居の切合い(建替え)は3回ある例が2例、2回ある例が2例、切合いのないものが2例ある。建替えは、いずれもほぼ同じ位置でなされ、建物方位がしだいに変化していく傾向がある。

ii) 掘立柱建物

西地区におけるこれまでの発掘報告では、竪穴住居・橋と考えられる遺構を除いた建築遺構を掘立柱建物として報告している。この中には4個の柱穴により構成され、床面を削平された竪穴住居と考えられる遺構も含まれるが、本節ではこれらも除いて検討したい。柱穴しか遺存しない考古資料から、その穴が支持する柱の用途を判断することはきわめて困難であるといわざるをえないが、あえて推定するための要素としては、柱穴の掘られた位置、柱穴の規模(平面規模・深さ)やそこに残された柱痕跡の大きさなどであろう。これらの点に注目して、推定される建物構造は以下のように分類できる。

側柱のみで構成される建物

側柱のみが遺存する建物は多くあるが、本来そうであった可能性の高い建物は少ない。旧地表面が後世に削平されているばあいが多く、建物内部の浅い柱穴が消失している可能性は否定できない。ここでは側柱のみで構成されるものであった可能性の高い資料について記述する。

1985年度調査のSB19[大阪市文化財協会1993 p.66]は3間×2間の建物である(図229-D地点)。総柱建物のばあい、後述するように梁行柱間が大きくなるが、この建物は柱間が梁桁ともにほぼ同じで、梁行総長を1としたばあいの桁行総長は1.58となり、1.5を越えている。総柱建物のばあいの平均値1.36(3間×2間)との差が大きいため、SB19は側柱のみから構成される平地式の建物の可能性が高い。

建物内部に棟持柱をもつ建物

棟持柱は建物の中でもっとも長い柱であり、建築時の仮設的なものを除けば、一般的に

それを支持する柱穴はもっとも大きく、深いものであると推定され、また棟通りの位置にバランス良い配置をとる必要があろう。兵庫県神戸市松野遺跡[神戸市教育委員会1983]の建物などのように、両妻柱の外側に棟持柱をもつ例は長原遺跡では確認されていない。しかし、1985年度調査のSB14[大阪市文化財協会1993 p.63]は建物内部の棟通りに2個の柱穴を配する建物で、内部棟持柱[植木久1992]をもつ例である(図229-D地点)。棟持柱の柱穴は側柱の柱穴に比べて規模が大きく、静岡県浅羽町古新田遺跡[浅羽町教育委員会1991]や大阪府大阪市山之内遺跡[京嶋覚・伊藤純・金村浩一1989]の例に近い形態を示している。

いわゆる総柱建物

「総柱建物」は一般的に高床式建物と考えられるが、建物内部の柱穴の規模などによって、床を支持するだけの束柱のみの「総束柱構造」[宮本長二郎1983]または側柱を通し柱とする「束柱、通し柱構造」[植木久1991]と、建物内部にも通し柱を含む構造を想定することができる。

前者の構造のうち、「総束柱構造」は7世紀以後に普及する構造と考えられており、古墳時代の建物のほとんどは「束柱、通し柱構造」と考えられる。

1983年度調査(図229-D地点)のSB31[大阪市文化財協会1992a pp.64-65]は3間×2間の建物で、内部に2個の柱穴がある(図230)。この建物の妻柱の柱穴の内側には小柱穴があり、この柱穴は内部の2個の柱穴と同じ程度の深さで、側柱よりやや浅い。したがって、内部の柱穴とこの妻柱掘形を切る柱穴はいずれも束柱を支持するためのものと考えられる。

1985年度調査(図229-D地点)のSB05[大阪市文化財協会1993 pp.61-62]は2間×2間の建物で、棟通りの内部に2個の柱穴がある(図230)。内部の柱穴は小規模なもので浅く、束柱と考えてよいだろう。桁行2間で内部に2個の柱穴がある構造の古墳時代の建物は、大阪府高石市大園遺跡[大阪府教育委員会1976・1982]や堺市伏尾遺跡[大阪府埋蔵文化財協会1990]、静岡県古新田遺跡などにあり、いずれも束柱と考えられる。

1985年度調査(図229-D地点)のSB15・16[大阪市文化財協会1993 pp.64-65]はいずれも2間×2間の建物で、中央にも柱穴がある。側柱の柱穴の規模は一辺が0.50~0.75mと大きい。内部の柱穴は規模が小さく浅い。いずれも束柱と考えられるものである。こうした2間×2間の総柱建物は中央の柱穴が小さい傾向が強く、多くは束柱と考えるべきであろう。また、3間×2間の総柱建物は棟通りの柱穴の規模が側柱と変らないものもあるが、小さいものが多く、やはり束柱となるものが多いと思われる。

後者のばあい、建物内部の柱穴の規模は側柱のそれと同程度以上のものでなければなら

ないが、そのすべてが通し柱であるとはいえない。すなわち、側柱と同規模の柱穴でも束柱を支持することが可能なのである。ここでは、内部の柱穴が通し柱のものを含む可能性があるものを示す。

NG84-25次調査(図229-A地点)のSB02[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1985]は4間×2間の建物で、棟通りの内部に3個の柱穴が並ぶ。これらの柱穴は側柱と同じく直径0.8mの大型の柱穴で、柱痕跡の直径も側柱と同じく20cmと太いものである。

1983年度調査(図229-B地点)のSB13[大阪市文化財協会1992a pp.61-62]も同様の4間×2間の建物である。内部の柱穴の平面形や規模は側柱と同じであり、柱の位置が掘形の北に寄っている点も側柱と共通している。これらのことから、内部の柱穴も側柱と同じ規模の柱を支持していたと考えることができる。ただし、この建物のばあい、両妻柱の1間内側の2柱穴の深さが妻柱より深く、建物中心に位置する柱穴がかなり浅い。これを重視すれば、深い2柱穴が通し柱を支持するものであった可能性もある。

以上のことからみて、古墳時代のいわゆる総柱建物のうち内部に通し柱をもつ可能性が考えられる建物は、桁行4間の建物2棟に限定され、3間のものにもその可能性のあるものが含まれているとの推定を示しうる。一方、2間×2間の総柱建物の内部の柱穴はおおむね束柱と考えられ、3間×3間の建物も同様と考えられる。

iii) 櫓

長原遺跡西地区では、兵庫県松野遺跡のように建物群を完全に取囲むような大規模な櫓は検出されていない。しかし、建物群をほかから区画する小規模の櫓が幾例かある。特徴的な例としてあげられるのは、NG84-25次の南北に延びる柱穴列である(図231)。この柱間は正確に等間ではなく、柱穴の規模・形状も不統一であるが、明らかに直線的に並んでいる。また、これと平行する柱穴も近接して一部分に認められる。この柱列に沿って、溝や土壌が集中して並んでおり、この南北のラインが何らかの区画を示していたことを表わしている。この柱穴の断面観察により、いくつかの柱穴の下端が杭状に尖っていたことが判明している。すなわち、下端を尖らせた柱を柱穴で固定し、さらに上から打込んだものと思われ、櫓の高さはそれほど高いものではなかったと考えられる。これと同様の櫓は、中央地区の調査(図229-H地区)でも検出されている[佐藤隆1989]。

iv) 井戸

井戸は長原遺跡西地区および中央地区の集落では8基が検出されている。これらはいずれも素掘りと考えられ、井戸側の施設は認められなかった。平面形が楕円形を呈するもの

が多いが、それを意図して掘られたとは思われない。深さは2~3mで、瓜破台地の硬い洪積層を掘込んでいる。「馬池谷」の斜面や地形のやや低いところのものは浅い。井戸の分布は数棟からなる建物群の分布範囲に1基ずつあり、複数掘直した例はない。長原遺跡東南地区にある、八尾南遺跡と一連の5世紀後半の集落では、ほぼ同時期の3基の井戸が近接して掘られており、全体に井戸の数が多い。これは、集落の立地する地形・地質の違いによる壁面の強度や地下水位の差異、灌漑用などを含むといった用途の差によるものかもしれない。

井戸からの出土遺物は、水を汲み上げるために使用したと思われる須恵器甕や土師器甕が多い。ほかに建築部材と思われる木製品も出土することがあり、NG84-25次調査の大型井戸からは扉・蹴放しなどの建築部材が、NG85-16次調査のSE01(図229-D地点)でも軸を作り出した建築部材が出土した[大阪市文化財協会1993p.123]。また、NG93-26次調査(図229-D地点)の井戸では、埋土の上層から大量の土器が出土している。

これに対して、本書で報告した1986年度調査(図229-E地点)のSE01[本書pp.43-49]からは木製の叩き板・当て具という須恵器製作に使用する道具や、陶土の粉砕や混練に使用された可能性のある横杵が出土したほか、鑿柄、鉄斧柄などの工具、轆の羽口片など手工業生産に伴う道具を多く出土しており、当遺跡の古墳時代の井戸からの出土品としてはきわめて特異な様相を示している。

v) 土壌

土壌には各種の形態や規模があり、用途も多様であると推測される。そのすべてにわたって検討することはここではできないため、特徴的な遺構のみを取上げたい。

焼土壌

土壌内で何かを燃焼させたと考えられるものである。この土壌は平面形が小判形をなすことが多く、浅い。埋土中に多くの炭や炭化材が含まれている。1983年度調査(図229-B地点)の土壌SK12[大阪市文化財協会1992a p.72]は炭化材とともに、ウマの歯・骨、多数の須恵器蓋杯、土師器甕・甔が出土したが、底面はあまり熱を受けていなかった。また、同調査のSK39[大阪市文化財協会1992a p.73](図229-C地点)では多量の炭化木がみられ、土師器甕や甔、須恵器高杯などを出土し、ウマの歯、製塩土器も出土した。底面は熱により赤く変色していた。こうした土壌はNG84-25次調査(図229-A地点)の建物群内にもある。

建物に伴うと思われる土壌

建物に沿って位置するもので、その建物に関連する用途が考えられる土壌である。やや

細長い形態のものが多く、溝状のものもある。また、出土遺物も多いものと少ないものがあり、一様でないため、各種の用途が考えられる。建物における生活廃棄物の処理や排水処理、高床建物の梯子や階段の固定用などが想定される。

粘土採掘による土壌

西地区の一部で検出される土壌で、1985年度調査(図229-C地点付近)のⅢ区土壌群[大阪市文化財協会1993 pp.71-72]などがそれである。埋土は地山層の粘土に近いもので、検出時に輪郭が明瞭でない。形状は円形あるいは楕円形にみえるが、不整形なものも多く、切合いが顕著である。壁面は直か、横に掘込んだものが多い。この土壌の分布する付近の地山層は西地区の中でも砂粒が少なく粘性の強い粘土層であり、陶土として適している。この地点では平安時代後期と江戸時代にも粘土採掘が行われている。

vi) 溝

建物群全体を区画する溝

2条平行して掘られていることが多い。これは、溝の間に土

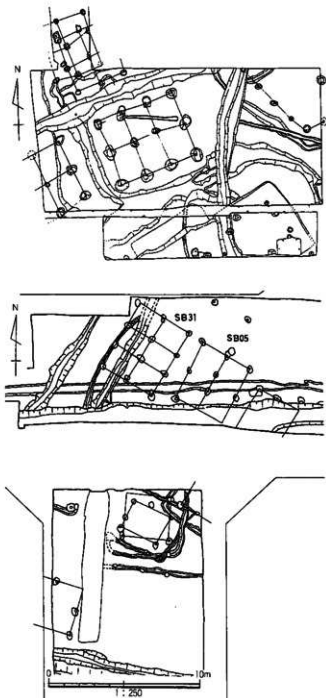


図230 D・H地点の建物群
(上：H地点、下：D地点)



図231 A地点の建物群

壘が築かれていたとみることもできるが、今のところその痕跡は確認されていない。また、2条の溝は必ずしも平行せず、途中で1条が曲ったり、消失したりするばあいがある。建

物群からの排水処理の溝としても利用されたと考えられる。

建物に伴う溝

建物の周囲や、その一部から掘られた溝で、排水用の溝と考えられる。1棟の建物に伴うばあいと、複数の建物に共有されたものがあり、いずれも、その一端は建物から離れた排水処理溝に向っている。

vii) その他の遺構

祭祀遺物出土遺構

この時期の祭祀遺物には滑石(結晶片岩を含む)製の子持勾玉・白玉・勾玉・管玉・剣形・有孔円板、木製の刀形、土馬がある。長原遺跡西地区においては、数棟からなる建物群内または近接する土壌・溝あるいは柱穴内から勾玉・管玉・有孔円板などが出土する。各建物群単位の祭祀が想定されるが、これらはそれほどまとまった出土状況を示しておらず、また現状の資料数はそのように断定するには十分ではない。

一方、長原遺跡東および東南地区の集落遺構群の範囲には、祭祀遺物がまとまって出土した遺構が2箇所が発掘されている(註3)。いずれも、炭が多く堆積する浅い土壌または平坦に近い遺構で、多数の滑石製品と、韓式系で軟質の小型平底鉢や土師器高杯を多く出土しており、製塩土器も多く出土している。また、土器を入れ子にしたり重ねたりしており、何らかの祭祀行為がなされたことを示している。須恵器はごく少量で、TK73型式ないしはTK216型式に属するものであると考えられ、西地区の集落遺構群より時期はやや古く、1～2期に当る。

ウマ遺体出土遺構

長原遺跡の古墳時代の遺構や包含層からはウマの遺体の一部が多く出土している。出土する遺構は、溝・土壌・井戸・包含層中であり、1頭分がまとまって出土することはなく、一部のみ出土する。頭部が出土することが多く、中でも歯は良く遺存している。出土状況は土器片とともに廃棄されたものが多いが、長方形を呈し、土壌墓と考えられる遺構から出土する例もある。

2) 5・6世紀の集落構成の変遷(図232)

1期

長原遺跡東部および南東部で部分的に発掘されている。南東部における集落遺構は、八尾南遺跡に中心をおく集落と一連の建物群と考えられ、これらの資料と総合的に検討する

必要がある。西地区には当該期の土器は出土するものの、この時期と断定できる建物群を確認することはできない。したがって、西地区における集落の形成はこの時期より後と考えることができる。

遺跡東部の集落では明確な住居遺構群の検出例が少なく、集落の景観を想定することはできない。南東部では掘立柱建物を中心とする建物群が検出されているが、八尾南遺跡を含めてこの時期の竪穴住居は今のところ検出されていない。

2 期

NG89-25次調査地(図229-H地点、図230)は中央地区南端に位置し、東西に長い範囲に展開する集落遺構群の一角を調査した[佐藤隆1989]。ここでは、3回の建替えを行い4時期にわたる竪穴住居と、溝を挟んで北側に3間×2間で内部に2個の柱穴をもつ掘立柱建物があり、その西側に並んで、南北2間で東西2間以上の建物がある。さらに、これら2棟の掘立柱建物の北側に2間×2間の建物がある。これらの東側には南北に小規模の櫓列が造られている。

1983・1985年度調査の建物群[大阪市文化財協会1992a・1993](図229-D地点)は、3時期にわたる竪穴住居SB10~12とその北側に3間×2間と2間×2間の束柱をもつ建物SB31・SB05が柱筋を揃えて並んでいる。SB31はTK208型式ないしTK23型式の土器を出土しており、2期において竪穴住居と掘立柱建物が共存していたと考えられる。

本書で報告した1986年度調査の竪穴住居と掘立柱建物もこの時期のものが含まれている。

ここでも、竪穴住居が4~5時期にわたっていることが前2例と共通しており注目される。

表14 古墳時代後半期土器の位置付け

後半期土器の時期	調査地	長原古墳群	備考
1	TK73	2 期	船橋O-II
2	TK216		
	ON46		
3	TK208	3 期	船橋O-III
	TK23		
	TK47		
4	MT15	4 期	船橋O-IV・V
	TK10		
	TK43		
5	TK209		飛鳥I

このように当該期の建物群は竪穴住居と掘立柱建物とからなり、前述のように竪穴住居は同じ位置に3・4回の建替えを行うものが含まれることが特徴である。竪穴住居は移動式竈を用いていたと推定され、住居内からの出土遺物は少ない。掘立柱建物はいわゆる総柱のものでは桁行3間までの規模である。建物群は1棟の竪穴住居(建替えが顕著なものが多い)と2・3棟の総柱の掘立柱建物からなる単位が認められ、建物の構成は桁行3間の大型と2間の小型の組合せとなる。

東地区や東南地区では集落の最末期に相当し、これ以後集落遺構はほとんどみられなくなる。一方、遺跡中央地区の南部や西地区で新たに建物群が形成されるようになる。この時期の建物群の分布範囲を辿れば、東から西に弧を描くような分布がみられ、中央地区全域と東地区西部にかけての範囲を囲むような建物群の配置を示している。中央地区南部のH地点の建物群は東地区の集落遺構群と西地区のそれを結ぶものであり、両地区をつなぐ東西の「道」がこの位置にあったことが推察される。2期における集落立地の特徴は伝統的に継承されてきた東部の集落域から離れ、西部の台地上に新たな建物群が形成される点にあるが、完全に移動したとみることはできず、その過渡期であるということができよう。

3期

NG84-25次調査地(図229-A地点)では5群に分けられる建物群(註4)が検出されている(図231)。建物は4間×2間、3間×2間、3間×3間、2間×2間、2間×1間であり、復元された16棟のうち12棟がいわゆる総柱建物である。出土資料は未整理であり、各遺構の詳細は正報告にまちたいが、建物の配置や切合いから、1時期のものではないことは確かである。だが、2間×2間の小規模の建物と桁行3間以上の建物が単位をなすとみられる点で共通していることは重視すべきであろう。また、一辺長が約7mの方形の竪穴式建物(註5)と思われる遺構が2棟復元でき、ほぼ同じ規模で、小さな側柱が1mほどの間隔で並ぶ方形の建築遺構が1棟存在する。

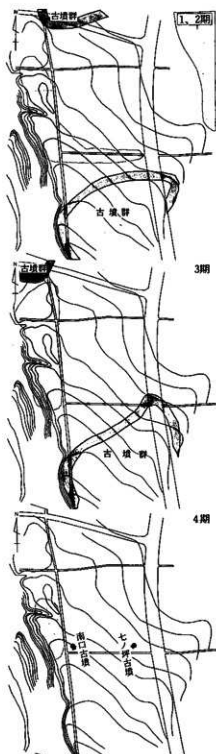


図232 集落と古墳群の変遷

一方、既述のように調査区の中央に南北に延びる溝と思われる柱穴列を復元することができ、溝などの遺構もこれに沿った配置を示しているように思われる。この遺構列を重視すれば、建物群を東西2群に分けることも可能となろう。時期差を考慮しても、上述の単位が二つ以上並存していたと考えることができる。

1985年度調査では、各建物群として把握することは困難であるが、建物群中に建替えにより3時期にわたる竪穴住居SB24と建替えのない竪穴住居SB23があり(図229-D地点)、掘立柱建物に平地式で3間×2間の建物SB19、総柱と思われる3間×3間の建物SB17などがある[大阪市文化財協会1993]。

この時期の建物群も竪穴住居と掘立柱建物とからなるが、竪穴住居はTK23型式の時期を下限としており、これ以後の資料はない。竪穴住居の構造は2期と同じで、やはり3時期にわたり建替えを行う例がある。また、一辺が7mの大規模な竪穴式建物が見られる。掘立柱建物は、いわゆる総柱のものに桁行4間の建物や、梁・桁とも3間の建物など規模の大きいものが現われる。また、3間×2間の平地式建物もある。掘立柱建物の構成は、2期と同じく桁行3間以上の建物と2間×2間の小型建物の組合せを想定できる。

このように、2期の段階の建物構成と基本的に大きな変化はみられないものの、相対的に規模の大きい建物群が認識できるようになった点にこの時期の特徴をみることができる。建物群の分布は、2期の建物群と重なるが、中央地区南部やそれ以東では認められていない。すなわち、集落は伝統的に受け継いできた東部の居住規制から解放され、遺跡西部の台地上の「馬池谷」東肩部に並ぶような配置をとる。集落域は支谷A・Bを挟んで大きく3地区に分けられ、2期には遺構の分布が希薄であった支谷Aの北側に大型の建物群が形成される(A地点)。また、「馬池谷」を挟んだ西側の瓜破遺跡内でもこの時期に集落の盛期があったことが、大量の出土土器(註6)から推測できる。

4期

3期のNG84-25次調査地の建物群の終末はほぼMT15型式の時期にあると思われる。それ以外の建物群はそれまでに廃絶したものと思われるが、この4期に限定できる遺構はNG85-16次調査地のⅨ区[大阪市文化財協会1993]から本書報告の遺構群(図229-E地点)とその南部の「馬池谷」斜面で確認されている。遺構の内容は断片的なものにすぎず、掘立柱建物があるものの竪穴住居は確認されていない。本書で報告した井戸SE01の出土遺物に櫛の羽口や須恵器の製作用具など、それ以前の長原遺跡では出土例がない資料が出土している点は注目される。

遺構の分布範囲は2・3期と重複するとはいえ、支谷B周辺から南に限定されていく傾向が認められる。この区域の発掘調査は区画整理事業においても未調査部分を多く残しており、今後、4期の時期の集落に関する資料も増加するものと思われる。

5期

飛鳥Ⅰの新相の土器を出土する溝などを伴う建物群が1例知られている。この建物群は「馬池谷」西屑部付近のNG89-67次調査(図229-J地点)で検出されたものである。建物は整った方形を呈する柱穴からなる掘立柱建物で、桁行4間以上、梁行3間の平地式建物を含む5棟である。上記の1棟を除く建物は南北54m(約半町)の方形に巡ると思われる溝により区画された屋敷地を構成しているようである。瓜破台地南部に形成される飛鳥Ⅱ～Ⅳの段階の建物群[南秀雄1987、大阪市文化財協会1992b]へ発展する建物群と考えられ、建物の構造も古墳時代の建物と異なり、梁行3間で桁行4間以上の平地式建物を含む点で、ほかの飛鳥時代の建物と共通した形態を示す。これらに先行する6世紀後半の建物群が飛鳥時代建物群との過渡的な様相を呈しているものと予想されるが、現段階では未確認である。

飛鳥Ⅰ以後の建物群は、古墳時代建物群とは「馬池谷」を挟んで立地も明確に区分されており、建物群の内容も古墳時代のものとは大きく異なっていることから、この時期に居住および建築様式の画期的な変化があったと思われる。

3) 建築遺構の検討と用途

発掘されたすべての建築遺構に対してその構造を推定することはできないが、既述のようにいくつかのものに対しては想定可能である。群馬県市持村黒井峯遺跡では竪穴式・平地式・高床式の掘立柱建物など多様な建築遺構が存在した[石井克巳1994]。長原遺跡の集落でも、これまで検出できていない未知の建築遺構が存在した可能性もあろう。

また、黒井峯遺跡の建物の用途は、住居・倉・納屋・家畜小屋・作業(酒造?)小屋などが想定されている(註7)。これに対して、長原遺跡における建築遺構の当時における使用状況を復元することは、それ自体の分析だけでは不可能であり、周囲の関連すると予想される種々の遺構群や、想定される全体の建物配置などから推定していき、その妥当性をあらゆる角度から高めていくほかに今のところないと思われる。

そこで、掘立柱建物内部に通し柱または束柱の柱穴をもつものを総称した「総柱建物」と呼ぶ掘立柱建物遺構に関して、以下に若干の検討を加えてみたい。

梁行2間で、桁行が3間以上の総柱建物については、大阪府下のほかの遺跡の資料も含

めて、梁行柱間に比べて桁行柱間が短くなる傾向がある。長原遺跡では2間×2間と桁行3間以上の建物を比較すると、桁行柱間が平均して20cm短くなっており、3間×2間の総柱建物の梁行を1としたばあいの桁行長の平均は1.36で、1.5を下まわっている。

次に、大阪府下の各遺跡において検出された古墳時代の掘立柱建物の中で総柱建物の占める割合を検討すると、高石市大園遺跡、岸和田市三田遺跡[大阪府埋蔵文化財協会1987]、堺市伏尾遺跡ではいずれも3割程度で、古墳時代から飛鳥時代までの時期幅をもつ大阪市山之内遺跡、同市難波宮跡でも少なく(註8)、特に後者では1割にも満たない。総柱建物の規模の内訳では、桁行3間以上の建物が大園・伏尾遺跡では1～2割程度にすぎないが、山之内遺跡や難波宮跡では約6割となっている(図233)。

一方、長原遺跡西地区でこれまで検出された5・6世紀代の掘立柱建物についてみると、総柱建物の占める割合は7割近く、先の泉州の3遺跡や大阪市内の2遺跡の2倍以上である。また、その規模の内訳は桁行3間が9棟、2間×2間が9棟、3間×3間が2棟、桁行4間が2棟となり、梁行2間で桁行3間以上の建物が約6割を占めている。

以上の数値を検討すると、まず大園遺跡における平地式建物の占める割合の高さは、この遺跡で竪穴住居が検出されていないことと関連づけることができよう。竪穴住居にかわって平地式の掘立柱建物が用いられた結果とみることもできるのである。また、山之内遺跡や難波宮跡では、竪穴住居がみられなくなる6世紀後半以降の建物が中心であると思われることが、こうした数値を導きだしたものととも考えられる。しかしながら同様の数値を示す伏尾遺跡では3棟の竪穴住居が存在しており、長原遺跡とこれら遺跡との総柱建物の占める比率の差異は必ずしも竪穴住居の有無によるものとのみいされないであろう。総柱建物の規模については、大園・伏尾遺跡や堺市小阪遺跡[大阪文化財センター1987]において桁行3間の建物は一般的ではないと思われ、長原遺跡との違いが顕著である。6世紀後半以降を中心とする山之内遺跡、難波宮跡は総柱建物は少ないものの、規模は大きい傾向がある。

このように総柱建物の数や規模に関して長原遺跡の特異性が看取され、建物群内での総柱建物の位置づけを考察するに当り、他遺跡と同様に扱うことはできないであろう。

ここで、長原遺跡最大規模の建物であるNG84-25次SB02について検討してみよう。この建物は桁行4間(7.0m)、梁行2間(4.8m)のいわゆる総柱建物で、床面積33.6㎡である。本節第1項でも記したように、棟通りに3個の柱穴があり、通し柱を含む可能性がある。南妻側から内側に1mのところから南側と東側柱列から東側の旧地表面を削込み、基壇状をな

す。この建物の柱穴は、建物内外部を問わず柱痕跡は直径約20cmであり、ほかの建物のそれがおおむね15cm以内であることから考えて、より太い柱材を使用した特筆すべき建物であると考えられる(神戸市松野遺跡の中心建物も柱は20cm)。東側および西側柱列にそれぞれ平行する溝状の土壌がある。この建物の床面積の規模33.6㎡は、大園遺跡の5世紀後半の建物群[大阪府教育委員会1976]の中心となる建物(37㎡)に近く、A地点の建物群内で中心的な建物と考えられる。この建物も含めた2・3期に認められる桁行3間以上の高床建物が2間の小型の高床建物と共存する傾向は、両者とも倉と考えるより、住居と倉という機能差として理解することも可能であろう。

近畿地方における古墳時代の掘立柱建物は、5世紀における大陸との活発な交流の中で、新しい土器様式にも反映された新しい生活様式の一端をなすも

のであり、それ以前に想定される居住および建築様式と一線を画した意義をもつと考えられる。また、7世紀以降の掘立柱建物は桁行4間以上の桁行の長い建物が増え、総柱建物では柱間が短くなるなどの差異が認められ、やはり古墳時代建物との違いを感じさせる。これらのことから、古墳時代における倉以外の高床建物を祭儀用として限定するのではなく(註9)、居住用として、しかも一般集落においても想定しうる余地があるのではなかろうか(註10)。

4) 集落構成の特質

集落を構成する、共時的でありかつ空間的なまとまりとして認識される遺構群の特徴を、以下に抽出しておこう。

堅穴住居は移動式竈を用いており、造付けでない点は市内の他遺跡とは異なる。掘立柱建物は柱穴の配置と規模から四つの構造を想定することができ、そのうち東柱・通し柱を含めたいわゆる総柱建物の占める割合は他遺跡と比べて高く、しかも、桁行3間以上の建物が占める割合が高い点に長原遺跡の顕著な特徴がある。これらを従来のようにすべて「倉」

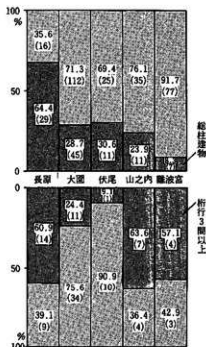


図233 総柱建物と桁行3間以上の建物の割合
() 内の数値は棟数

と解釈すれば、長原ムラの住人はより多くの物資を蓄積している富裕な集団であると評価できよう。しかしまた、これを住居とみたばあい、集団の居住様式の特徴として把握できる。いずれにせよ、柱穴しか残らない掘立柱建物の機能を決定する考古学的手法は確立されておらず、あくまで、関連する考古遺物や建築史学や民族学などの成果を模倣とする蓋然性の高さを提示しえるのみである。

2・3期においては、堅穴住居1棟と2・3棟の掘立柱建物からなる単位を数個所で認識できる。これらは桁行3間以上と2間以下の大小の総柱建物が組み合うことを特徴とし、両者の明確な機能差の存在を予想させる。さらに、内部に棟持柱をもつ大型の建物は、この集落内では特異な構造といえ、相応の用途を考える必要があろう。これらの堅穴住居や掘立柱建物からなる単位が1個または2～3個まとまった建物群が存在し、そこでは井戸が共用されていたと思われる。あるいは、日常的な祭祀行為もこの単位で行われていた可能性がある。

古墳時代後半期を通じた集落の変遷を辿ると、まず遺跡東部に立地していた1期の集落は2期に居住域を大きく西に移動する。そして、3期には堅穴式建物・掘立柱建物の規模に大型のものが出現する点に2期の集落からの発展的な変化をみることができる。だが、各建物の構造や建物の構成において質的な変化は認められず、2期において居住域の移動をうながした背景と契機が、3期における継続的な居住と大型建物群の出現をも規定しているように思われる。4期は堅穴住居の消滅などの変化を伴いつつ、集落の中心がしだいに南に移行し、5期には、さらに立地や建築様式、建物構成における大きな変化があった。

以上の変遷過程を立地を軸にみると、時期を追って低地から台地高所を指向する過程と把握できる。その変化の画期は1・2期の間と4・5期の間にあり、前者は標高7～8mから9～10mへ、後者は10mから11～12mへの移動である。また、3期には「馬池谷」の東肩沿いに南北に長い居住範囲が形成され、遺跡東部の旧居住域とのつながりが断たれたとみられる。このことを瓜破台地上に居住の拠点とする新たな生活圏の確立とみるならば、伝統的な居住規範を克服した新しい居住域の開発理念が今後の探求課題になるだろう。そして、これ以後、台地上の宅地開発は低地部の耕地開発と軌を一にして進展していったものと思われる[京嶋寛1990]。

(京嶋)

註)

- (1) ここでは、墓を除く居住に係わる遺構のまとまりと考える。
- (2) 群馬県黒井峯遺跡では、竪穴住居内からの出土遺物が少なく、平地建物から完形土器などが多く出土すること、この集落を襲った榛名山の噴火が初夏に起ったものであると想定されていること、『日本書紀』景行天皇条の記述などから、夏期と冬季の住み替えがなされていた可能性が指摘されている。
- (3) 図229-I 地点[小田木富恵美・大庭重信・細川富貴子・瀬尾真由美1993]と1984年の長吉六反での調査地で検出されている。
- (4) [京嶋寛1986]で発表した際の分類である。当時述べたように、建物群は明らかに時期差があり、並存する建物はより限定されなければならない。群構成も再検討の余地は十分あるが、柵や建物の配置、溝・土壌のあり方から、この調査で検出された遺構群が、分割できない最小の一単位のみ各時期における集積であるとは考えられない。
- (5) 調査時、この遺構を竪穴住居として認定できず、主柱穴も明らかでないため、以下、明らかな竪穴住居と区別してこの名称を用いる。
- (6) 瓜破遺跡1次調査で「馬池谷」西にある「瓜破東谷」の斜面から大量の須恵器・土師器が出土している。
- (7) 石井克巳氏には遺跡の実見に際して、多くのご教示を得た。
- (8) 未報告資料も多い。
- (9) 神戸市松野遺跡の高床の建物や八尾市美園遺跡出土の家形埴輪や家屋文鏡に描かれた高床の建物を「高殿」と呼び、首長の祭儀用建物とする考え[辰巳和弘1990]が定着しつつあるが、これらの建物は「主宰者の優越性」がみられ、「大陵風建物」を含み、多くは木製(高)床をもつ居住用建物としての「トノ」[木村徳園1973]のイメージがより近いものと思われる。
- (10) 従来の発掘報告や集落研究では掘立柱建物を建物内部の柱穴の有無のみで「住居」と「倉庫」に単純に2分される傾向があり、こうした研究姿勢は複雑で多様な生活形態を包摂する集落の考古学的研究において、新しい分析技術の開発や多角的な研究視点の提起を阻害するものといえよう。

表15 古墳時代竪穴住居一覧表

発掘次数	報告番号	遺構番号	主柱穴	一辺長 ^m	床面積 ^{m²}	その他	備考
NG84-25				7.40	7.00	51.80	
NG84-25				7.00	7.00	49.00	
NG83-70	Ⅱ SB35	SB02	4	4.30	4.20	18.06	周壁溝
NG85-16	V SB04		(2)	4.80		(23.04)	周壁溝
NG85-16	V SB10	SB709(B-1)	(2)				周壁溝・枕土面 SB10～12の2回建替
NG85-16	V SB11	SB710(B-1)	4	4.70	4.20	19.74	周壁溝
NG85-16	V SB12	SB711(B-1)	4	5.30		(28.09)	周壁溝・枕土面
NG85-16	V SB23	(2)		6.30		(36.69)	周壁溝
NG85-16	V SB24	(2)		6.10		(37.21)	周壁溝・枕土面 2回建替
NG86-41	Ⅱ SB01			5.80	(3.50)	(33.64)	周壁溝 SB01～04の3回建替
NG86-41	Ⅱ SB02		4	4.10	(4.00)	(16.81)	周壁溝・枕土面
NG86-41	Ⅱ SB03			4.30	(2.00)	(18.49)	周壁溝
NG86-41	Ⅱ SB04			4.90	(2.00)	(24.01)	周壁溝
NG86-41	Ⅱ SB05	SB05		6.00		(36.00)	周壁溝
NG89-25		SB05		5.30		(28.09)	SB05～07の2回建替
NG89-25		SB06		5.20	4.80	24.96	枕土面・貼床
NG89-25		SB07					枕土面

(報告番号の頭のローマ数字は「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅲ～Ⅵを示す。床面積の()内数値は遺存する一辺長を基にした正方形と想定したばいの面積。)

表16 古墳時代掘立柱建物一覧表

発掘次数	報告番号	図面番号	構造	桁行 m	梁行 m	桁長 m	梁長 m	面積 m ²	備考
NG83-32	ⅡSB13	SB208	竪柱	4	2	5.65	5.10	28.82	
NG83-32	ⅡSB15	SB210	竪柱	37	2	4.65	3.42	15.90	
NG83-32	ⅡSB16	SB211	竪柱	2	2	3.90	3.20	12.48	
NG83-32	ⅡSB17	SB212	竪柱	3	2	4.45	3.70	16.47	
NG83-32	ⅡSB21		竪柱	1	1	2.70	2.70	7.29	
NG83-32	ⅡSB22		竪柱	37	2	3.18	3.05	9.70	
NG83-32	ⅡSB23	SB216	不明	(3)		(3.00)			
NG83-53	ⅡSB31	SB08	竪柱	3	2	4.83	3.82	18.45	奥内側に床東
NG83-53	ⅡSB32		竪柱	37	2	4.69	3.80	17.82	
NG83-53	ⅡSB33	SB09	不明	(2)	(1)	(3.00)	(1.40)		
NG83-70	ⅡSB34	SB01	不明	3	(1)	4.20	(1.70)		
NG84-25		SB01	竪柱	3	2	4.20	4.00	16.80	
NG84-25		SB02	竪柱	4	2	7.00	4.80	33.60	
NG84-25		SB03	竪柱	3	2	5.30	3.80	20.14	
NG84-25		SB04	竪柱	2	2	3.00	2.70	8.10	
NG84-25		SB05	竪柱	3	3	5.60	4.60	25.76	
NG84-25		SB06	竪柱	3	2	4.50	3.40	15.30	
NG84-25		SB07	竪柱	3	2	5.20	3.50	18.20	
NG84-25		SB08	竪柱	3	2	4.00	3.80	15.20	
NG84-25		SB09	竪柱	2	2	4.50	4.00	18.00	
NG84-25		SB10	竪柱	2	1	3.40	3.00	10.20	
NG84-25		SB11	竪柱	2	2	3.50	2.80	9.80	
NG84-25		SB12	竪柱	2	1	3.00	2.00	6.00	
NG84-25		SB13	竪柱	2	2	3.40	2.80	9.52	
NG84-25		SB14	竪柱	2	1	3.00	2.00	6.00	
NG84-25		SB15	竪柱	2	1	3.00	2.20	6.60	
NG84-25		SB16	竪柱	3	2	4.80	3.50	16.80	
NG85-16	V SB03	SB701(A-1)	不明	(2)	(1)	(2.60)	(1.65)		
NG85-16	V SB05	SB703(A-1)	竪柱	2	2	4.10	3.65	14.97	床東2
NG85-16	V SB06	SB704(A-1)	不明		(1)		(1.55)		
NG85-16	V SB07	SB703(A-2)	竪柱	1	1	2.20	1.90	4.18	竪穴住居か
NG85-16	V SB08	SB704(A-2)	竪柱	1	1	2.10	1.80	3.78	竪穴住居か
NG85-16	V SB09	SB705(A-2)	不明	2		3.10			
NG85-16	V SB13	SB703(B-1)	竪柱	(1)	2	(1.80)	3.20		
NG85-16	V SB14	SB707(B-1)	竪柱	4	3	7.20	5.25	37.80	内廊様持柱2
NG85-16	V SB15	SB706(B-1)	竪柱	2	2	3.65	3.35	12.23	
NG85-16	V SB16	SB705(B-1)	竪柱	(1)	2	(1.85)	3.20		
NG85-16	V SB17	SB704(B-1)	竪柱	3	3	5.20	4.70	24.44	
NG85-16	V SB18	SB701(B-1)	竪柱	3	2	4.50	4.20	18.90	
NG85-16	V SB19	SB702(B-1)	竪柱	3	2	4.90	3.10	15.19	
NG85-23		SB1301	竪柱	(1)	2	(1.30)	3.10	4.03	
NG86-41	ⅤSB06	SB06	竪柱	(1)	(1)	(2.00)	(1.60)		
NG86-41	ⅤSB07	SB07	竪柱	(2)	2	(2.95)	4.00		
NG86-41	ⅤSB08	SB08	竪柱	2	2	3.70	3.55	13.14	床東
NG86-41	ⅤSB09	SB09	竪柱	2	(1)	3.75	(1.80)		
NG86-90		SB701	不明	(1)	(1)	(1.30)	(1.70)		
NG87-54		SB01	不明	(1)		(1.85)			
NG88-54		SB701	竪柱	(1)	2	(2.05)		3.60	
NG88-54		SB703	竪柱		1		1.20		
NG88-54		SB705	不明	(1)	(1)	(1.00)	(1.00)		
NG88-54		SB706	不明	(1)		(1.20)			
NG88-54		SB707	不明	(1)	(1)	(1.40)	(1.40)		
NG89-25	SB01	竪柱	3	2	5.40	4.20	22.68		
NG89-25	SB02	竪柱	(1)	2	(1.95)	4.00			
NG89-25	SB03	竪柱	2	2	3.70	3.30	12.21		
NG89-25	SB04	竪柱	2	2	3.70	3.30	12.21		
NG93-14	SB01	竪柱	2	2	4.25	2.15	9.14		
NG93-14	SB02	竪柱	(3)	2	(4.50)	4.20			
NG93-34	SB01	竪柱	3	2	5.10	4.00	20.40		
NG93-34	SB02	竪柱	2	(2)	4.50	(3.30)			
NG93-34	SB03	竪柱	(1)	2	(2.20)	4.00			

(報告番号の頭のローマ数字は『辰原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ～Ⅴを示す)

第2節 古墳時代の算盤玉形紡錘車—近畿地方出土例の検討—

古墳時代中期、算盤玉形をした新たな形式の紡錘車が北部九州または近畿を中心としてみられるようになる。これは朝鮮半島南部の古墳では副葬品などとしてよくみられるもので、我が国では陶質土器または初期須恵器などとともに出土することから、朝鮮半島より舶載されたもの、あるいは渡来した人々またはその子孫が日本で製作したものと考えられている。本書において3例を報告するように、近畿地方の出土例も増加しつつあり、ここにそれを整理し、その意味について考えてみたい。

1) 既往の研究

この算盤玉形紡錘車を朝鮮半島との関係で注目したのは橋口達也氏である[橋口達也1982]。橋口氏は福岡県甘木市にある池の上・古寺墳墓群の調査を通して、この紡錘車は舶載の可能性があるとした。池の上・古寺墳墓群では石蓋土墳墓などから棺内に副葬されて出土しており、その状況は朝鮮半島の例と酷似している。

一方、西谷正氏は香川県の窯址からの出土例があることなどから「日本出土の陶質製紡錘車は国産品である可能性が強い」とする[西谷正1983]。西谷氏が「陶質製紡錘車」と呼ぶものは、本論の算盤玉形紡錘車のうち須恵質のものをさし、こうした算盤玉形のもの、日本古代の紡錘車の型式編年の体系からみると突如として出現していること、また朝鮮半島南部においてふつうにみる形式であることから、朝鮮系の遺物であり、初期須恵系の系譜から伽耶系統であろうと推測している。

中村勝氏も国産説をとり、法量からの検討により、多元的な導入経路の存在を推定している[中村勝1986]。それによると、福岡西部にみられるものは径が大きく、やや薄手という傾向がみられるが、甘木・朝倉地方のものと近畿地方のものは径がやや小さく、厚みがあるという。

門田誠一氏は新羅・伽耶の人骨出土古墳と紡錘車の関連について検討し、小規模墳から王陵・王族の墓まで、女性の埋葬に際して副葬されたものとした[門田誠一1992]。そして、日本にみられるこうした紡錘車は、朝鮮半島の葬送習俗をそのまま持ち込んだ渡来1世の女性たちの異郷における終焉の姿を示すものと捉えている。

古墳時代の日本と朝鮮半島との係わり合いをみていくばあい、土器や金属製品などに重

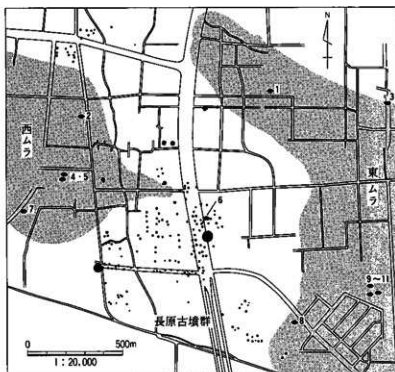


図234 長原遺跡周辺の算盤玉形紡錘車の出土状況

点が置かれ、このような紡錘車にはあまり注意が向けられてこれなかったといえよう。また、冒頭で述べたように近畿地方での類例も増えてきており、それらと他地域の事例との比較検討から地域間の共通点・相違点が一層明らかになると思われる。なお、ここでは日本で出土

したものを須恵質・土師質などと呼ぶが、そのすべてを日本製と断言するものではない。

2) 近畿の事例

ここでは須恵質の製品に限らず、土師質や石製のものも同様に取上げる。管見によるだけでも、兵庫県2例、大阪府18例、京都府1例、奈良県1例を確認した。

兵庫県の2例は姫路市三方古墳[兵庫県教育委員会1980]と神戸市神楽遺跡[神戸市教育委員会1987]のものである。三方古墳は横穴式石室を主体部とする6世紀後半の古墳で、土師質の紡錘車が出土している。神楽遺跡では5世紀後半から末にかけての集落遺構が検出されている。紡錘車はそのSD03から韓式系土器や滑石製模造品・手捏ね土器などとともに出土した。紡錘車は滑石で作られており、側面に複合鋸歯文を線刻している。

大阪府下18例の内訳は、大阪市長原遺跡7例、瓜破遺跡1例、八尾市八尾南遺跡3例、そして東大阪市鬼塚遺跡1例、堺市大庭寺遺跡4例、深田遺跡1例、土師遺跡1例である。

まず、大阪市と八尾市の事例についてみる(註1)。長原・瓜破遺跡と八尾南遺跡は東西に接しており、古墳時代を扱うばあいにはこれらを区別してもあまり意味はないであろう。

表17 長原遺跡周辺出土の算盤玉形紡錘車

編年番号	調査名・遺跡名	遺構・層位	直径cm	厚さcm	重さg	側面角度	同伴須恵器	備考
1	NG16	SD04	3.9~4.1	2.3	40.1	120~130	TK73	
2	NG83-70	SK39	4.2	2.2	23.6+	140	TK216~TK208	[大阪市文化財協会1992a] 177
3	NG84-4	NG7B層	4.0	2.2	35.3+	120		
4	NG86-41	NG4B層	4.4	1.9	41.4+	130		本巻27
5	NG86-41	SP06	3.8	2.0	33.3+	155		本巻120
6	NG86-54②	NG4B層	3.8	2.4	35.9	125		本巻411
7	UR93-14	SK03	4.4	2.2	46.7	125~130		
8	NG93-56	SE302	3.7	1.9	16.4+	140~145	ON46	
9	八尾南遺跡	SE15	4.1	2.0	39.2	135~140		[八尾南遺跡調査会1981]
10	八尾南遺跡	SE21	3.8	2.0	27.7	125~130	TK73以前	[八尾南遺跡調査会1981]
11	八尾南遺跡	D1区包含層	4.5					[米田敏幸1985]

そのため長原遺跡周辺からは、実に11点もの算盤玉形紡錘車が見つかったことになる。池の上・古寺墳墓群で9点であったことから、この数は注目値する。11点すべてが土師質であり、墓からではなく集落域から見つかっているものがほとんどである。この時代の集落は、南北に長い並びをもつ長原古墳群を挟んで、その東西に確認されており、東ムラ、西ムラと呼ばれている[京嶋覚1991]。

東ムラは長原遺跡東部から八尾南遺跡にかけて存在し、そこから6点が出土している。同伴遺物の明らかなものを示すと、八尾南遺跡SE21では韓式系土器のほかTK73型式以前の段階と思われる須恵器壺がみられる。また、長原遺跡ではNG16次調査例がTK73型式の須恵器とともに溝内から出土している。この例は直径が小さい割に厚さがあり、側面の稜

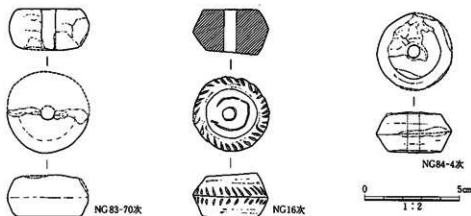


図235 長原遺跡出土の算盤玉形紡錘車

を挟んでその上下にヘラ先による刺突文が施されている(図235)。NG93-56次調査ではSE502からON46号窯段階の須恵器とともに出土している例がある。NG84-4次調査例は古墳時代の包含層から見つかったものだが、付近からは初期須恵器・韓式系土器のほか滑石製勾玉・白玉が出土している。

続いて西ムラでは、瓜破遺跡のものを含め4例が確認されており、そのうちNG83-70次調査のものはTK216型式またはTK208型式の須恵器と共伴していた。本書120はビットから出土し、周辺の遺構から推測してTK23型式～TK10型式段階に当る可能性が高い。瓜破遺跡の例(UR93-14次調査)は古墳時代の遺構から出土しているが細かな時期は明らかでない。

残る1例(本書411)は古墳群中から見つかっている。出土層準は長原4B層という平安～鎌倉時代の地層であったが、TK73型式の須恵器を出土した149号墳の西側に当る。紡錘車の見つかった周囲からは、外面に縄文のある須恵器甕(壺)も採集されている。この古墳の主体部は未確認であるが、紡錘車は本来この古墳に伴う遺物であった可能性もある。

長原遺跡周辺出土の紡錘車の法量は表17の通りである。孔径は0.6～0.8cmにあって、大きな差がみられないことから、表から省いている。

鬼塚遺跡の例は土師質で、直径4.4cm、厚さ2.4cmである[東大阪市文化財協会1993]。

大庭寺遺跡では須恵質3点、土師質1点が確認されている。須恵質のもののうち2点は、大阪府埋蔵文化財協会が調査したA区包含層出土のA119[大阪府埋蔵文化財協会1989]と393-OLから出土したものである(註2)。前者は包含される遺物の内容からTK73型式～TK216型式の須恵器に伴うものと推定される。一部欠損しているが、直径4.4cm、厚さ1.1cm、残存部分の重さは19.9gである。薄手で、側面の稜が鋭いという特徴をもつ。一方、後者はTK73型式より先行する段階に属し、直径5.1cm、厚さ2.1cm、重さ64.0gの完形で、近畿でもっとも径の大きい製品である。残る須恵質1点と土師質の例は[大阪文化財センター1991 p.38・63]に報告されている。この須恵質のものは側面中央に稜がなく、ヘラケズリによって平坦面に作られている。直径は5.0cmと大型で、7世紀前葉から中葉の遺物を含む溝から出土した。土師質のものは包含層から出土している。直径は4.1cmを測り、側面の稜は鋭さを欠く。その他に、須恵質で側面台形を呈するものも出土している(註3)。

深田遺跡例は須恵質の紡錘車である[大阪府教育委員会1973]。集落内の溝Bから出土しており、TK208型式と思われる把手付碗と共伴している。直径4.3cm、厚さ2.15cmある。

土師遺跡例も須恵質のもので、直径4.6cm、厚さ2.2cmである[堺市教育委員会1975]。一面

に「キ」字状のヘラ記号をもつ。5世紀後半から6世紀前半の集落内から見つかり、製埴土器がややまとまって出土していることから、居住者が製埴にも関与していたことが推測されている。

京都府の1例は長岡京市天神下出土のもので、須恵質の紡錘車である[京都府教育委員会1979]・[高橋れい子1981]・[國下多美樹1988]。布留式から陶邑Ⅰ期～Ⅲ期の土器を含む包含層から出土している。最大径4.15cm、厚さ2.20cmで、重さ53g強である。

奈良県の1例は御所市下茶屋遺跡から出土しており、須恵質の製品である。この遺跡では韓式系土器も出土している(註4)。

近畿地方の出土例については墓に副葬されていたものが1例、その可能性のあるものが1例、その他は集落内から出土しているものが大勢を占めていた。また、須恵質のものに比べ土師質のもの比率が高く、神楽遺跡例のように滑石で忠実に模したのももあった。須恵質の紡錘車は、やはり陶邑周辺の遺跡によくみられるが、大庭寺遺跡には土師質のものも存在する。土師質と須恵質に作られたものを比較すると、成形や調整に大差はないが、土師質のものは胎土に砂粒を多く含む傾向がうかがえる。

3) 他地域の事例

北部九州

北部九州での出土数は、[中村勝1986]によると17点で、すべて福岡県内のものである。ここではまとめた数を見ることのできる池の上・古寺岡墳墓群の状況を[甘木市教育委員会1979・1982]から概観する。岡墳墓群は隣接する丘陵上に位置し、実質的には一連の遺跡である。池の上墳墓群ではD-1石蓋土墳墓、D-19石蓋土墳墓、D-25石蓋土墳墓付近、D-26土墳墓、10号墳周溝内から合計6点の須恵質の紡錘車が出土しており、そのうちD-26土墳墓には2点が副葬されていた。一方、古寺岡墳墓群では2号土墳墓、3号土墳墓、9号土墳墓から1点ずつが見つかる。9号土墳墓の例は須恵質、他の2例は土師質である。2号土墳墓のものは側面に明瞭な稜をもたないが、側面にヘラケズリ調整を行うなど、算盤玉形のものと共通する手法が認められることから、「算盤玉形紡錘車」の枠内で捉えてよからう(註5)。池の上Ⅱ式およびⅢ式の土器に伴っている例が確認され、それらは5世紀初頭から5世紀前半の中頃に近い部分に比定されている。

注目される点は、紡錘車のうち原位置を留めるものの多くが棺内に副葬されているという点である。この点は朝鮮半島南部の古墳の状況と同じであり、副葬する点数も似通っ

ている。しかし、池の上墳墓群 10 号墳、古寺墳墓群 9 号土墳墓のものについては棺外に供献された可能性がある。2 点の紡錘車を出土した池の上墳墓群 D-26 土墳墓のものは両者の形態が次のように異なっている。一つは直径 5.4cm、厚さ 2.1cm と、全体としてやや扁平なもので、もう一つは直径 4.3cm、厚さ 3.6cm を測り、直径の割に厚い。重量も前者の方が 10g ほど重く、繊維の然り具合をどの程度にするかによって使い分けされていたのかもしれない。その他、岡墳墓群の特徴としていえることは、須恵質のものの比率が高いことである。被葬者の集団が須恵器生産に関与していたことによるのであろうか。岡墳墓群の近くには朝倉窯址群が存在する。

その他の遺跡では、福岡市吉武遺跡に 5 例あり、土師質・須恵質・滑石製のものがみられる[中村勝 1986]。中村氏によると、この遺跡のものは直径の割に薄手で、側面の稜が不鮮明という。滑石のものは表面には研磨痕が残り、直径 5.1cm、厚さ 1.8cm、重さ 78.8g である[福岡市教育委員会 1989 p.75]。その他には夜須町石櫃[橋口達也 1982]、三輪町山隈下堤、前原町三雲寺口での出土が知られている。

瀬戸内

香川県豊中町宮山窯址からは須恵質の製品が出土している[松本敏三 1982]。直径 4.7cm、厚さ 2.3cm である。外面をヘラケズリ後、ナデ調整する。焼成はやや瓦質さみという。宮山窯址の操業年代については TK73 型式から TK216 型式と TK208 型式の中間、および TK208 型式の段階と考えられている。

岡山県倉敷市菅生小学校裏山遺跡では 2 点の土製紡錘車が出土している[岡山県古代吉備文化財センター 1993 p.208]。いずれも 5 世紀前半の包含層から見つかったものである。これまでみてきたものとは形態が異なり、上下に明確な平坦面をもたず、側面の稜は不明瞭であるため、側面形は楕円形にちかい。これらを「算盤玉形紡錘車」に含めるべきかは、まだ問題として残るが、同遺跡からは韓式系土器や初期須恵器(陶質土器)も出土していることから、ここに取上げておきたい。

4) 検討

分布

今回知りえた事例は、近畿が 22、北部九州が 17 であった。これまで、北部九州に分布の中心が考えられていたが、近畿にもそれに比肩する数量が存在するといえよう。また、両地域を結ぶ瀬戸内の事例として宮山窯址・菅生小学校裏山遺跡をあげたが、今後この地

域についても注目していく必要がある。

長原遺跡周辺からは11点が出土した。そして、陶邑古窯址群周辺にある大庭寺・深田の両遺跡から合わせて5点が見つかっており、この2つの地域は近畿でも集中度の高い場所として重視される。

土師質と須恵質のものは北部九州および近畿でともにみられたが、近畿では土師質製品の割合が高かった。それには長原遺跡周辺のものがすべて土師質であったことが影響している。堺市土師遺跡を含め陶邑周辺の遺跡では須恵質のものが多くことから、須恵器窯が近くにあるところでは須恵質の製品が普及し、それ以外の地域では各集落ごとに自給された土師質の土器などとともに焼成されていたのであろう。須恵質の紡錘車の出土した長岡京市天神下遺跡・御所市下茶屋遺跡の例は、遺跡周辺に須恵器窯が未発見であることから、その他の須恵質製品とともに持ち込まれたと推測される。

石製のものも、北部九州と近畿で、それぞれ1例みられた。そのうち神戸市神楽遺跡例には複合鋸歯文が刻まれており注意を引く。これらも須恵質製品の入手困難な地域で代用品として製作されたと思われる。

出土状態

朝鮮半島では、今のところ墳墓からの出土例がほとんどである。そして、紡錘車は遺体の脇に土器とともに添えられているばあいが多い。これは池の上・古寺墳墓群でも同様であった。一方、近畿では墓からの出土例として姫路市三方古墳のものしか確認されていない。しかし、本書411は長原149号墳に近接する場所から見つかっており、副葬または供献されていた可能性がある。また、大庭寺遺跡は渡来した陶工の集落と考えられており[岡戸哲紀1993]、彼らの墳墓から出土する可能性は高いといえる。

法量

長原遺跡周辺のものと池の上・古寺墳墓群のものとを直径・厚さ・重さから比較した(図236)。長原遺跡周辺のものは直径・厚さとも比較的まとまっている。東ムラと西ムラのものとを比べると、西ムラにやや径の大きいものがみられる。149号墳の付近で出土した本書411(NG86-54②次調査)は直径の割に厚みがある。一方、池の上・古寺墳墓群では、突出して径の大きいものと厚みのあるものがある。その他のものの法量はややまとまっているが、長原遺跡周辺のものと比べて若干薄く、径が一回り大きいことがいえる。しかし、古寺墳墓群の2点の土師質紡錘車は、長原遺跡周辺例の平均的な大きさであり、土師質のものについては両地域で変りがない。このことは重さの比較からもいえる。

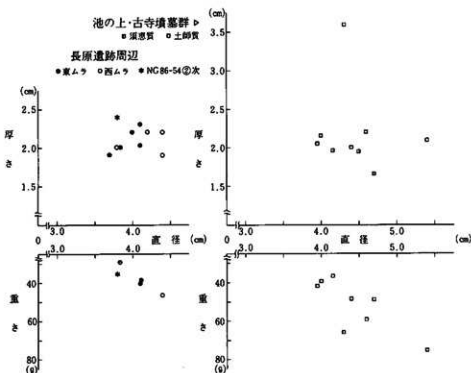


図236 法量および重さの比較

池の上・古寺墳墓群にある突出した大きさの2点は同じ土墳墓から出土したものであった。これが同じ被葬者の持ち物であるなら、糸の撚り方を変えるために2つの形態を作り分けたことも考えられる。先に、大阪府埋蔵文化財協会が調査した大庭寺遺跡の2例について述べたが、これらも形態が著しく異なっていた。共伴した土器からわずかに時期差も認められるが、この形態の違いは撚り具合を変える目的によるものと推測する。

側面角度

今回、大庭寺遺跡(大阪府埋蔵文化財協会調査)の2例と長原遺跡周辺で出土しているものについて、その側面角度を計測することができた(図237)。その結果、 100° ~ 155° までの

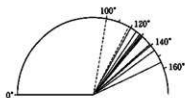


図237 側面角度の状況
(破線は大庭寺遺跡例)

範囲でばらつきがあり、 130° 程度のもが多いことがわかった。須恵器を共伴する例をみると、TK73 型式以前の段階のものでは 120° ~ 130° 、TK216 型式~TK208 型式段階では 140° ~ 145° にある。TK73 型式~TK216 型式段階と推測された大庭寺遺跡包含層出土例は側面角 100° 、TK73 型式の須恵器をもつ長原 14

9号墳付近で出土した本書411は125°であった。また、周辺の遺構の遺物からTK23型式～TK10型式段階に考えられた本書120は、もっとも側面角度が鋭く、155°であった。時期の推定できる資料についてみると、古いところに鋭い角度のものが多く、下につれて角度があまくなる傾向がうかがえる。この点については、時期のわかる資料に乏しいため、今後さらに検証する必要がある。

5) まとめ

近畿地方にも北部九州に劣らぬ数の算盤玉形紡錘車があり、この長原遺跡周辺は陶邑周辺と並んで集中して分布する地域であることが明らかになった。この分布を朝鮮半島から渡来した人々の集中度として捉えうるならば、当時の河内湖の南岸は渡来者の一大拠点であったといえよう。また、長原遺跡周辺で出土する算盤玉形紡錘車は、現在までのところすべて土師質の製品であった。一方、陶邑周辺ではやはり須恵質のものがめだつ。渡来者たちの定住場所の選定に当り、窯業技術をもつ人々とその他の人々を分けて住まわせるようなことが、政治的に行われていたことも想像される。門田誠一氏が述べるように、算盤玉形紡錘車が女性の埋葬に際して副葬される品物であるならば、糸を紡ぐという仕事の領域は女性のものであったといえよう(註6)。その紡錘車が多数出土している地域においては、渡来者の中に女性の姿もあったのであろうか。

(櫻井)

註)

- (1) 八尾南遺跡出土の3点のうち2点については、八尾市教育委員会米田敏幸氏・吉田野乃氏のはからいで実現することができた。また、計測値の公表についても快諾いただいた。なお、長原遺跡例も含め既報告のものについては表17に引用文献を記している。
- (2) 大阪府埋蔵文化財協会の資料については同協会戸哲紀氏のご配慮により実現することができた。また、計測値の掲載についても許可いただいた。393-OL出土品は未公表資料であり、掲載データの内容は、今後、同協会によって刊行される報告書の記述が優先する。
- (3) 同様なものが愛知県尾張旭市城山古窯址[尾張旭市教育委員会1978]からも出土している。
- (4) 奈良県立橿原考古学研究所付属博物館の1993年度発掘調査速報展「大和を掘る」XIVにて実現する。
- (5) 釜山徳川洞古墳群から出土している紡錘車も側面の稜が不明瞭なものである[釜山直轄市立博物館1983]。
- (6) 中間研志氏の研究では、中国大汶口文化に伴う紡錘車も女性墓から出土することが多いと述べられている[中間研志1985]。

第3節 長原遺跡の土器埋納遺構－飛鳥～平安時代－

これまでの長原遺跡の調査・研究により、古代から中世にかけての土器編年が整いつつある[鈴木秀典1982・佐藤隆1992]。そこで、ここでは飛鳥～平安時代にかけての土器埋納遺構を取上げ、土器のものさしでその変遷をたどってみることにする。それによって、土器埋納遺構を理解する上での新たな視点を示したい。

1) 土器埋納遺構の捉え方

「土器埋納遺構」という用語は、性格不明の遺構から完形の土器が出土しているばあい用いられていることが多い。しかし、土器を埋納するという行為は、井戸や墓のように、遺構の種類のわかる事例にも確認することができる。ここではその行為に重点を置いて、これらの遺構も含めて見ていくこととする(註1)。まず、本論における土器埋納遺構を次のように規定する。

1、完形またはそれに近い土器がある。

2、土器に意図的な配置が認められる。

3、人為的に埋められることなどによって、外部から遮断される(人の手に触れない状態となる)。

1については、出土する土器の中には穿孔や口縁部の打欠きのみられるものがあり、完形品に限定できない。また、今回は未確認であるが、土器を意図的に破砕した上で埋めるというケースも考えられる。土器がある対象への供献品であるならば、その再利用を防ぐ意味で、土器の破砕が埋納に先行して行われることもあったであろう。こうしたばあいは、2・3の状況が明確に看取されるときのみを埋納と捉える。2については、複数の土器を重ねたり、組合せたりしていれば、明らかに意図的なものと判断することができる。しかし、完形品が単独であるばあいや、複数であっても意図して配置されたとは呼びにくいばあいもある。こうしたときの判断方法として、同様な状況を示す遺構が群として周辺に存在するか、また、器種の選択がみられるか、といった見方ができる。ピット中央に土師器杯が1点だけみられるという遺構が飛鳥時代に多くあり、こうしたピットは群在する傾向があることから埋納と認定できる。また、同一器種ばかりが出土するばあいは、そこに器種選択という点において行為者の意図がはたらいっていると考えるべきであろう。3に外部

から遮断される、としたのは、埋められる土器の中には井戸側や土管・貯蔵容器などのように埋設状態で使用されるものがあり、これらを排除するためである(註2)。

土器を埋めるという行為には大別すると供献・埋設・貯蔵・廃棄のうちいずれかの目的があったと考えてよいであろう。その中で埋納と捉えるものは供献・埋設または貯蔵という意図のもとに埋められたものを指すことになる(註3)。廃棄されたばあい、上記1・2を満たさない。また、埋設された土器のうち、3に該当しなければ、埋納とは呼べない。以上のことを確認し、次に分類に入ろう。

今回、土器埋納遺構としたものには、井戸や墓といった遺構の性格の明らかなものも含まれるが、まずはその概念を取り払って、新たな枠組みを設けたい(図239)。

遺構の規模・形状と埋納する土器との関係から、まず2大別できる。土器を埋納するに足るだけの規模の遺構と、土器の埋納だけを目的としないと考えられるものとのである。後者のばあい、土器は遺構の一隅にかため置かれることが多い。また、井戸側内に埋納されたと判断されるばあいも、その遺構は土器を埋めるためのものではないから、後者に含まれる。以下、これをC類型とする。前者はさらに二分されて、蓋と身からなる密閉型のB類型と、皿や碗などを積み重ねたり、並べ置いた開放型のA類型とに分れる。

井戸を除くその他の遺構について、その規模と各類型との相関関係をみた(図238)。まずA類型をみると、長軸方向の長さが30~140cmにあつて、かなりの開きをもつが、40cm前後にややまとまりをもつ。遺構の長軸が70cmを越える規模のものは、

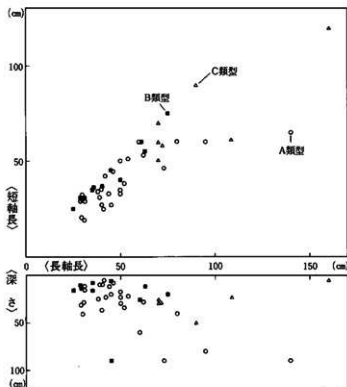


図238 類型別遺構規模の比較

土器だけの埋納を目的としたと考えるにはやや大きいように思われるが、それらは比較的深めに掘られており、そのため大きめの平面プランとなったのであろう。多くは深さ20cm前後に集中している。B類型は密閉型の容器である。そのため、遺構の平面形もそれに合わせてやや小ぶりで、長軸長と短軸長の差がほとんどないものが多い。深さは20cm弱に集まっているが、遺構の上部を侵食されている例があるため、その傾向はつかみにくい。1例だけ、90cmもの深さをもつが、実際に土器が埋納されているのは、その中位以上である。土器以外の埋納をも想定されるC類型は、A・B類型に比べてやはり平面規模で卓越しているが、深さではあまり変らない。

以上から、A～C類型は遺構の規模の比較からもそれぞれの特性をうかがうことができるものといえる。また、A・B類型は墳底面が狭く、断面形が逆台形になるものが多いが、C類型は墳底が広くて平坦になっていることがいえる。

2) 各類型の内容

A類型

土器の配置状況は開放型で、土器を埋納するに足るだけの規模の遺構である。今回42件を確認し、全体の5割を占める。この類型の内容は、以下の2つに分けて説明する。

まず、A類型1式(以下A1式と略す)は1、2点の杯や碗などを埋納し、正位かそれに近い配置が確認されるもの、すなわち、土器になんらかの供物を入れていたことも想定できるものである(供膳型)。この一群には平面規模の割に深いものがあり、また、多数の同形態の遺構が密集して検出されたりする。NG92-9次調査SP701は須恵器杯蓋を埋納したピットであったが、柱痕跡が確認されており、その他のA1式とは性格が異なることも考えられる。A2式は複数の皿・小皿を埋納することが多く、それらは積み重ねられたり、逆位にされたりしている。よって、供膳型に対し収納型といえる。A1式は34件、A2式は8件ある。A1式は飛鳥Ⅰ・Ⅱの時期に数多く見つかったが、それ以降激減し、平安時代Ⅲ期まで続く(註4)。飛鳥の土師器杯には口縁部を意図的に打ち欠いたものがあり、平安Ⅲの例では黒色土器碗の口縁部に小孔を穿ったものもある。A2式は平安Ⅱから平安Ⅳまでの間にみられる。平安Ⅱの例では3～6点の皿を並べたり、重ねたりしているが、平安Ⅳでは11～29点の皿をピット内に詰め込んでいるような状況がみられる。

B類型

蓋と身で構成される密閉型で、それが納まる程度の規模のものである。今回は19件確認

表18 長原遺跡の土器埋納遺構（飛鳥～平安時代）

報告書・調査名	遺構名	時期	規模	土器種類	分類	備考
調査会1978	31工区SK07	飛鳥	直径60×60	土師器杯	A1	
センター1978	古基	平安Ⅰ	直径30	土師器甕・皿	B2重	2基確認
	SB001柱穴	平安Ⅲ		土師器甕	B3	掘形一隅に正位で置く
	SE101	平安Ⅲ		黒色土器碗・土師器碗・小皿	C2	曲物井戸
	SE113	平安Ⅳ新		瓦器碗・土師器小皿	C2	曲物井戸
センター1985	ビット1	平安Ⅰ	70×60×25	土師器碗・小皿	C1	複立柱建物2と関連
	井戸1	平安Ⅳ新		瓦器碗・小皿	C2	曲物井戸・埋土最下層
協会1982	P5	飛鳥Ⅰ	54×51×22	土師器杯	A1	
	P12	飛鳥Ⅰ	50×33×23	土師器杯	A1	
	P13	飛鳥Ⅰ	50×34×18		A1	
	P14	飛鳥Ⅰ	44×33×12	土師器杯	A1	
	P31	飛鳥Ⅰ	直径42×23	須恵器杯蓋・土師器杯	A1	
	P39	飛鳥Ⅰ	52×38×34	土師器杯	A1	
	P46	飛鳥Ⅱ	40×35×37	土師器杯	A1	
	P50	飛鳥Ⅰ	39×31×10	土師器杯	A1	
	P56	飛鳥Ⅰ	40×27×10	土師器杯	A1	
	SK462	飛鳥Ⅰ	46×73×90	須恵器杯身・土師器鉢	A1	
	火葬墓301	平安Ⅲ	直径75×20	土師器甕・小皿	B2重	甕を台口にする
	火葬墓302	平安Ⅲ	63×55×12	土師器甕・碗	B2	甕逆位
	火葬墓303	平安Ⅰ?	直径45×7	須恵器杯蓋・土師器鉢	B2重	甕逆位
	火葬墓304	平安Ⅲ	直径30×11	土師器甕・小皿	B2重	甕逆位・内部に小皿
	SE307	平安Ⅳ新		瓦器碗	C2	曲物井戸・碗4点以上
協会1983	火葬墓401	平安Ⅲ	直径35×8	土師器甕・小皿	B3	甕正位・内部に小皿
	火葬墓402	平安Ⅲ	不明	土師器甕・杯	B2	甕逆位
	ビット408	平安Ⅳ新	70×50×30	瓦器碗	C1	
	ビット409	平安Ⅲ	直径100×60	土師器羽釜	—	大和型の羽釜、井戸側?
	ビット415	平安Ⅳ新	直径90×50	瓦器碗	C1	
	ビット416	平安Ⅳ新	直径70×30	瓦器碗	C1	
協会1989	SX401	平安Ⅳ古	160×120×5	土師器皿・小皿	C1	埋土に骨片・炭・灰
	SX402	平安Ⅳ新	直径50×30	土師器小皿	A2	定形29点
協会1992a	西地区SP01	平安Ⅲ	直径30×15	黒色土器碗・土師器碗	B1重	
	西地区SP02	平安Ⅲ	直径35×17	土師器甕	B1	正位
	西地区SP03	平安Ⅲ	直径25×16	土師器甕	B1	正位
	西地区SP04	平安Ⅳ		土師器皿	A2	
	西地区SK08	平安Ⅲ	109×61×23	土師器小皿	C1	SB14に関連
	西地区SE03	平安Ⅲ		黒色土器碗	C2	曲物と板材の井戸
協会1992c	南Ⅱ区SP123	平安Ⅱ	45×27×20	土師器碗	A2	逆位に重なる
	南Ⅱ区SP149	平安Ⅱ	45×45×7	土師器碗	A2	並べ置く
	南Ⅱ区SP415	平安Ⅲ	72×58×	土師器皿	C1	一隅にかためる
	南Ⅰ区SE003	平安Ⅳ新		土師器皿	C2	曲物井戸
	南Ⅱ区SE001	平安Ⅳ新		土師器碗	C2	丸太割き井戸・土層伴う
	南Ⅱ区SE002	平安Ⅳ新		瓦器碗	C2	曲物井戸
	南Ⅳ区SK001	飛鳥Ⅰ	130×80×	土師器杯	A1	
協会1993	東南地区SK01	飛鳥Ⅰ	95×60×80	土師器杯	A1	付近にSK02・03
	土器埋納遺構	平安Ⅲ	50×40×	土師器甕・皿	B1	甕正位
本書	中央地区SK27	平安Ⅲ	直径60×25	土師器甕・皿	B2	甕逆位
	土器埋納遺構1	平安Ⅲ	不明	土師器碗・皿	B1重	
	土器埋納遺構2	平安Ⅲ	不明	土師器鉢	B1重	鉢を台口にする

	中央地区SK26	平安Ⅲ	直径60×30	土師器小皿	A1	SD02に関連?
	東南地区SP29	平安Ⅳ	41×25×5	土師器小皿	A2	重ね置く
	東南地区SP10	平安Ⅲ	直径30×40	黒色土器碗・土師器皿	A1	正位で重ねる、SB01に伴う
	東南地区SP19	平安Ⅲ	30×20×30	黒色土器碗	A1	正位、SB03に伴う?
	中央地区SE02	平安Ⅱ		土師器甕・碗	C2	曲物井戸
	東南地区SE02	平安Ⅲ		黒色土器碗	C2	裏掘り井戸、碗5点
NG80-3次	P451	飛鳥		土師器杯	A1	
NG81-12次		平安Ⅲ?		土師器甕・甕	B3	小型甕を蓋とする
NG82-41次	土師器納ビット	飛鳥Ⅰ		土師器杯・須恵器杯	A1	5基検出
NG88-1次	SK01	平城宮Ⅰ	80×60×40	土師器杯・須恵器杯	A1	桑里溝付近
NG88-4次	SP01	飛鳥	62×53×28		A1	
NG88-19次	SP02	平安Ⅳ		土師器小皿	A2	小皿11枚
	SP08	平安Ⅳ	直径30×13	土師器小皿	A2	小皿11枚
	SP09	平安Ⅳ		土師器小皿・皿	A2	小皿22枚・皿2枚
NG88-36次	P-01	平安	直径30×15	土師器碗	A1	
NG88-59次	SP01	飛鳥	30×20×30	土師器杯	A1	
NG89-47次	SK403	平安Ⅳ新		瓦器碗	C1	碗逆位、口縁部に穿孔
NG90-5次	SP02	平安	40×35×90	土師器甕	B3	甕は正位、掘形中位に置く
NG91-1次	SK7C01	飛鳥		土師器小皿	A1	
	SK7C02	飛鳥		土師器杯	A1	
	SK7E01	飛鳥		土師器杯	A1	2基の土壌が重複
	SK7E02	飛鳥		須恵器杯	A1	
	SK7E13	飛鳥	140×65×90	土師器杯	A1	ウリ種子多数
NG91-30次	蔵骨器	平安Ⅲ		須恵器甕、土師器皿・杯	B3?	洪水に流され、単位数不明
NG92-2次	SE02	平安Ⅳ		土師器小皿	C2	正位に置く
	SE03	平安Ⅳ		土師器小皿	C2	正位に置く
NG92-5次	SK78	飛鳥Ⅱ・Ⅲ		土師器杯	A1	
NG92-9次	SP701	飛鳥Ⅰ	38×34×25	須恵器杯蓋	A1	柱痕あり
NG92-24次	ビット	飛鳥～奈良		須恵器	A1	

*規模の単位はcm、また、井戸については規模を省略した。

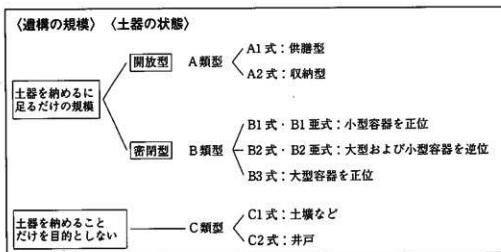


図239 土器埋納遺構の分類基準

し、全体の1/4に当る。その形状から、土器自体が埋納の主体ではなく、土器の内容物に意味があったと考えられ、B類型においては内容物の問題が重要な課題となる。したがって、身として使用されている土器がどのようなものが第1の注目点、続いて、内容物が固体なら土器の向きは問われないが、液体または液状のものであったならば口縁を水平に据える必要があり、身が正位か逆位であるかが第2の注目点となる。

身としてもっとも多く用いられているのは、体部が球形を呈する土師器甕(口径15~28cm、器高20cm前後)で10例。次に多いのは、前述のものより小さい土師器甕(口径13cm前後、高さ13cm前後)で4例ある。その他は須恵器壺2例、黒色土器碗1例、土師器碗1例、土師器鉢1例となっている。

小さい土師器甕を用いた4例のうち3例は、甕がちょうど納まるほどの小穴に、土器を正位に納めるという点で共通している。うち1例は土師器皿を逆位に使って蓋とする。これらは共通する意図で埋納されたと考えられることから、その他とは区別してB1式と呼ぶ。このB1式と容量の上で近似するものに、黒色土器碗や土師器碗・鉢を使ったものがあり、液体を入れるにも可能な配置が行われている。これらにもB1式と同様な用途が考えられ、B1変式とする。

体部球形の大型の土師器甕は正位または逆位に用いられている。逆位になるもののうち3例は、その蓋として土師器の杯や皿を入れ子に使い、身にはめ込むような格好で組合せている。身の内部に土師器小皿を埋納するものもある。こうした構造をとるものをB2式とする。逆位になるその他のものには土師器の小型甕や皿を合口に用いて蓋としているものがあり、これらはB2変式とする。また、身として使用する容器が小型の甕や須恵器の壺であるものも、B2変式に含める。身を正位に置くものは4例あるが、これらはB3式とする。

以上、B類型の内容物として、B1式・B2式のようにそれぞれの目的に応じて一定の埋納形態が存在したと思われること、すなわち、ある種の作法があつて、それに則って埋納という行為が行われていたと考えられるものがある。そしてまた、それぞれに類する埋納形態が存在し、双方の特徴を備えたB3式があるというB類型の実態が見えてくる。

B類型は今のところ平安時代にみられるのみで、そのほとんどが平安Ⅲに集中している。B2変式には平安Ⅰに該当するものがある。

内容物がわかるものとして、洪水層から出土し、原位置を留めない須恵器壺が1点あり、中から多量の骨片・灰が出土している。また、壺内には土師器杯・皿も納められていた(NG91-30次調査)。内部に土師器の皿を埋納する例が多く、それは次の通りである。

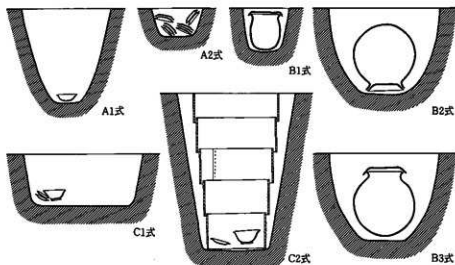


図240 各類型の基本モデル

2枚：B2 垂式・B3 式、2枚以上：B2 式・B3 式、5枚：B2 式・B2 垂式

C 類型

遺構が土器の埋納だけを目的として掘られたものでないあいである。20件あり、全体の1/4を占める。埋納された土器は遺構の片隅に置かれるほか、井戸底に置かれるといった状況で見つかる。そこで、土壌・ピットにおけるものをC1 式とし、井戸で行われる土器埋納をC2 式と呼び分ける。

C1 式は平安Ⅰ～Ⅳの間に該当するものがあるが、その間の平安Ⅱに当るものは今のところ未確認である。平安Ⅰ・Ⅲにあつては土師器皿を数点埋納する例がめだつが、平安Ⅳの時期には瓦器碗1点を埋納するという例が多くみられる。土壌の長軸方向と隣接する掘立柱建物の棟方向が揃う例がいくつかみられ、両者の関連が推測されるものもある。土器以外のものが同時に見つっている例が1例あり、そこでは骨片や焼けた板材が出土している[大阪市文化財協会1989]。

C2 式は奈良～平安時代の遺構が知られる。奈良時代の例では土師器碗とともに土馬も出土している[大阪市文化財協会1992c]。平安Ⅱの例には土師器の壺・碗、平安Ⅲでは黒色土器碗を納めるものがある。平安Ⅳでは瓦器碗や土師器皿を入れるものが多くなる。

3) 各類型の分布状況

これまで見てきた各埋納遺構の内容から、B 類型が現われる平安Ⅰの時期、そしてB 類型が突如みられなくなる平安Ⅳの時期に大きな画期があることがうかがえる。そこで、飛

鳥～奈良時代、平安Ⅰ～Ⅲ、平安Ⅳに分けて分布状況を見ることにする。

飛鳥～奈良時代

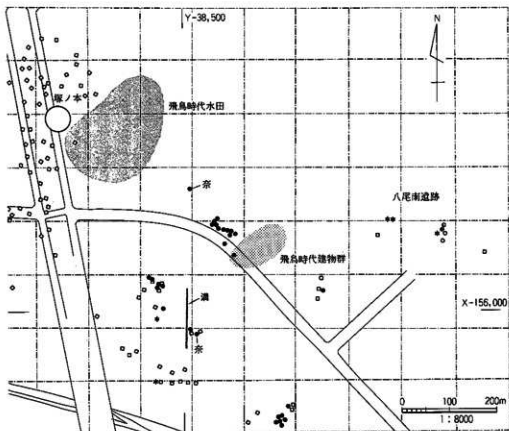
A1式が長原遺跡の東南地区に確認されている。飛鳥Ⅰ・Ⅱのものは多数の遺構がやや密集した状況でみられ、それらがいくつかのかたまりを作っている。この状況は東接する八尾南遺跡においても確認される〔八尾南遺跡調査会1981、八尾市文化財調査研究会1987〕。しかし、奈良時代には極端に少なくなり、その分布のしかたも異なっている。図241中央下部に奈良時代の南北溝があり、奈良時代の埋納遺構はこの溝付近に点在するかたちをとる。溝の位置はのちの推定条里線とも近い場所にあり、約250m北に位置する調査地においては下幅1.3mの大陸畔が確認されている(註5)。このことから、奈良時代の重要な区画線であったことはまちがいない、土器埋納はそれを意識して行われたと考えられる。

では、その他の土器埋納遺構の分布は何によるものであろうか。この地区の古墳や方形周溝墓の分布と重ねてみると相似た傾向を示すことがうかがえる。図に＊印が5箇所あるが、これは古墳時代の須恵器を埋納したピットの位置である。ピットの規模や土器の埋納の仕方は飛鳥時代のものと同様である。これは、古墳時代にすでに飛鳥時代と変らない土器埋納行為が行われていたことを示すものであろうか。長原の古墳は遺跡のほぼ全域に分布しているが、こうした埋納遺構はこの地区に集中している(註6)。また、埋納されている土器も、埋められる直前まで使用されていたものが埋納されたにしては風化の度合いが著しい。さらに、八尾南遺跡では古墳時代の土器を入れるものと飛鳥時代の土器を入れるものが近接して見つっている。すると、これらには古墳時代の土器を使った飛鳥時代の埋納遺構という可能性も出てくる。仮に飛鳥時代のものとする、A1式の分布と古墳・方形周溝墓の分布はより密接なものとなる。

図の中央部に飛鳥時代の建物群があり、その北西に埋納遺構が密集している。この付近には古墳や方形周溝墓は確認されていないが、建物群からみてその方向には長原古墳群でもっとも古墳が集中する範囲があり、盟主墳である塚ノ本古墳が存在する。また、飛鳥時代の水田が見つっているのも建物群からみてこの方向に当る。さらに、図示してはいないが、長原中央地区にある高廻り2号墳付近にも飛鳥Ⅰの土師器を埋納する遺構(南Ⅳ区SK001)が確認されている。こうしたことから、飛鳥時代のA1式については、水田や前時代の墳墓との関連をもって分布しているといえよう。

平安Ⅰ～Ⅲ

この時期、建物群は長原遺跡の広範囲に散在する傾向がみられ、土器埋納遺構の分布も



凡例 ● A1式(奈：奈良時代) * 古墳時代の土器の埋納 □ 古墳・方形周溝墓
図241 飛鳥～奈良時代の土器埋納遺構(長原遺跡東南地区・八尾南遺跡)

それに呼応している。A1式・A2式は、推定条里線付近または建物群の周辺に存在する。平安Ⅲの区画溝が数個所で見つかるが、それらは推定条里線と合っており、この時期には条里地割が広範囲に行きわたっていたことが推測される。

B1式・B1垂式も推定条里線に近い所に存在するが、それよりも建物群が見つかるひとつの坪内にあって、建物の分布するその外縁に多く存在するように見受けられる。長原遺跡西地区では建物群を取囲む溝の外側にB1式の遺構が検出されている(図243)。

B2式・B2垂式・B3式は図242の中央付近にややまとまってみられるほか、建物群が見つかるところに点在している。B2式とB2垂式は近接して存在しており、B3式もそれらと近い場所にある。

井戸における土器埋納であるC2式が建物群の分布と重なるのは当然のことであるが、C1式の土溝・ピットについても、これまでのところ建物群とともに存在する傾向がある。

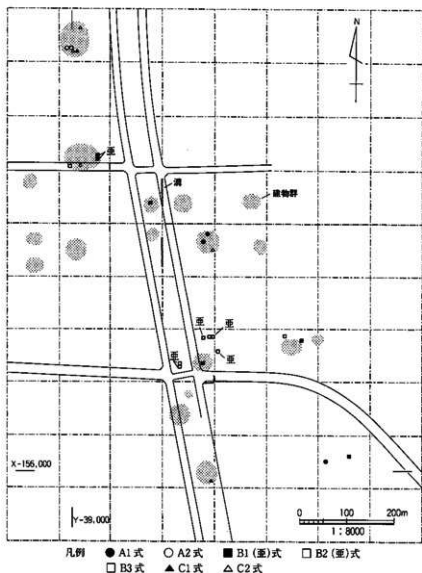
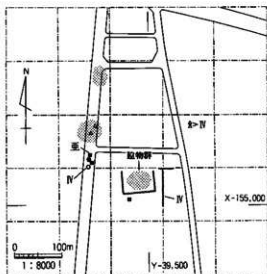


図242 平安時代Ⅰ～Ⅲ期の土器埋納遺構(長原遺跡東南地区付近)

平安Ⅳ

平安Ⅳの建物群の分布状況から打って変って、長原遺跡の東南地区と南地区が接する辺りに建物群が集中するようになる(図244)。鎌倉時代の初め、建物群の北端部に一町四方の区画に則った溝が巡らされる。この溝が平安Ⅳにまでさかのぼれるかは確証はないが、建物群の集中と溝の掘削は共通の要因によるものと思われ、溝の時期はさかのぼれることも考えられる。



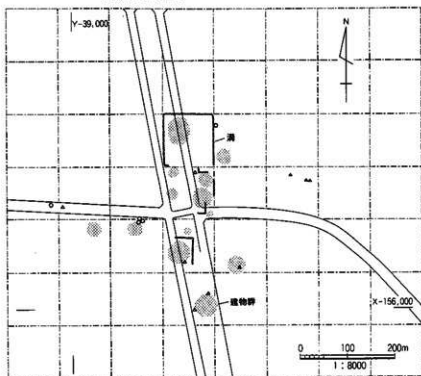
凡例 ○ A2式 ■ B1(塞)式 ▲ C1式
△ C2式 IV: 平安時代IV期

図243 平安時代I～IV期の土器埋納遺構
(長原遺跡西地区)

A2式はみな推定条里線付近にみられる。C1式は、平安Ⅲまでのように建物群と同じ場所に見つかるものと、建物群の範囲から離れて分布するものとがみられる。C2式はやはり、建物群とともに存在する。平安Ⅲまでは建物群とともにあったC類型のうち、C1式だけがそこから分離していることに注目したい。

4) 埋納の目的

飛鳥～平安時代の土器埋納遺構に2つの画期を考え、それぞれの時期の遺構の分布状況をみてきた。その中で、同様に



凡例 ○ A2式 ▲ C1式 △ C2式

図244 平安時代IV期の土器埋納遺構(長原遺跡東南地区付近)

分類したものが、時期ごとに分布状況を変化させていることがうかがえ、それぞれのもつ意味の変容が推測された。また、異なる類型どうしでは、やはり分布の仕方にも違いがみられ、それは埋納の目的が異なっていたためと考えられる。各類型ごとその目的について考察しよう。

A 類型

次に述べるB類型とは異なり、納められる土器どうしを組合せて容器をかたち作るものではないことから、土器は埋設されたものではないであろう。また、1、2点の土器を貯蔵したとも思われないことから、主として供献を目的としたものと考えられる。では、一体何のための供献であろうか。

A1式は飛鳥時代、特に飛鳥Ⅰ・Ⅱの時期に集中し、奈良～平安時代には数例確認されるのみである。分布状況をみても飛鳥時代のものは古墳や方形周溝墓の分布と重なる状況がみられ、のちのものは条里地割線付近に存在する傾向があった。A1式は、八尾市と東大阪市にまたがる池島・福万寺遺跡においても飛鳥時代のものが見つかっており、そこでは遺構が正方位方向に並んで検出されることから、地割線上で行われた地鎮に係わるものと推定されている[江浦洋1992]。恐らく、長原遺跡の奈良～平安時代の例はこれと同様な意味をもつものであろう。では、大多数を占める飛鳥時代のものはどうであろうか。

長原遺跡において、古墳～飛鳥時代の前半にかけては顕著な洪水層は確認されていない。そのため、飛鳥時代のはじめごろは、まだ古墳の墳丘が累々と並ぶ姿がみられたはずである。その場所に水田開発をはじめたのが飛鳥Ⅰの時期である。この開発に伴って多くの古墳が壊され、そのための供養がA1式というかたちの供献埋納であったのではなかろうか。そしてまた、墳丘を破壊した際に現われた古墳時代の土器についても穴を掘っていいいに埋納するという処置がとられていたのではないかと推測されるのである。

古代において、古墳を壊し、その改葬を行った例として、藤原京における日高山横穴群の例がある[奈良国立文化財研究所1986]。同じく藤原京の造営に伴って削平された日高山1号墳では、周溝の肩の部分に6世紀後半と7世紀初頭の土壌があり、須恵器・土師器の完形品がまとめて出土している[奈良国立文化財研究所1985]。その報文中では土壌の造られた意味について言及していないが、古墳の破壊と関係するものと思われる。また、橿原市四条古墳は藤原京造営に関連する溝によって削平を受けていたが、その際に土器を使った地鎮を行っているという[西藤清秀・林部均1990]。さらに恭仁宮においても、その造営によって破壊された古墳の周溝内からはほぼ完形の須恵器が出土した例があり、周濠を埋め

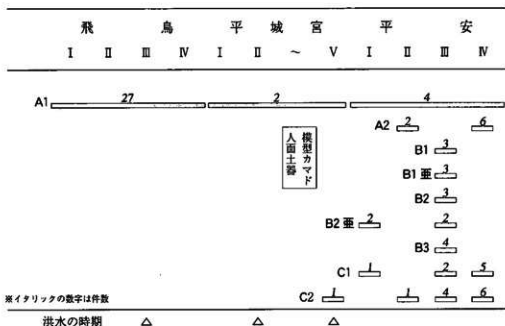


図245 土器埋納遺構の変遷

る際に安置されたものと理解されている[中谷雅治1976]。やや時期は下がるが、平安時代の例が交野市清水谷古墳群にある[水野正好1992a]。ここでは横穴式石室を開口してしまった際に、土師器皿3枚を重ねて供進していた。

史料の上でもこれに関連すると思われる次のような記事がある(註7)。

日本書紀 卷二十五 孝徳天皇(白雉元年)

「冬十月、宮の地に入るが為に丘墓を壊られ、及び遷されたる人に、物を賜うこと各差有り」

日本書紀 卷三十 持統天皇(七年)

「己巳、造京司衣縫王等に詔して、所掘戸を収めしむ」

続日本紀 卷四 元明天皇(和銅二年)

「癸巳。造平城京司に勅すらく、若し彼の墳隴、發き掘らるる者は、随って即ち埋み斂めて露はし棄てしむること勿れ。普く祭酹を加えて以て幽魂を慰めよ」

続日本記 卷三十六 光仁天皇(宝龜十一年)

「左右京に勅すらく、今聞く、寺を造るに悉く墳墓を壊ち、その石を採り用ゐる、と。唯、鬼神を侵し驚かすのみにあらず、実にまた子孫を憂へ傷ましむ。今より以後、宜しく禁断を加ふべし」

史料から、古代人が墳墓に対し畏怖の念をもち、その破壊に際し非常に注意を払っていたことが読み取れる。また、藤原京などでの調査成果からも今回の解釈が妥当性を欠くとはいえないであろう。

長原遺跡では、飛鳥Ⅲ・Ⅳの時期にはこうした土器埋納は減少している。これは飛鳥Ⅲの時期が推定される長原 6BⅡ 層に係わる洪水によって開発の手がやや鈍ったことがその理由として考えられる。前述の池島・福万寺遺跡では、土師器杯の中からウリ科の種子が見つかった。長原遺跡でも1例ではあるが、ウリ科の種子を多数出土しているものがあり(NG91-1次調査SK7E13)、河内平野において共通した祭祀が行われていたことをうかがわせる。

平安時代のA1式は4例を数え、その内の3例は付近の建物となんらかの関係をもつものと推測された。特定の建物に対する供養については[森郁夫1984]に詳細に述べられているように、造営工事のさまざまな段階で行われていたと思われる。その中にA1式の土器埋納を伴うものもあったと考えられる(註8)。

A2式は平安Ⅱに2例、平安Ⅳに6例がある。土器の出土状況は逆位や横位であって、何かを盛っていたとは考えられない。また1遺構からの出土点数も多く、もっとも多いもので29点を数える。したがってA2式の目的として、なんらかの祭祀後に、それに使用した土器をまとめて収納したことが考えられる。土器は並べたり、重ねた状態で見つかることから、使用後に廃棄したものとはいいがたく、使用した土器をも奉獻品としていねいに埋納したのであろう。平安Ⅳになって埋納する土器の数が急激に増えるが、これはそれまで散在していた建物群が1個所に集中することと関連する事象ではなからうか。すなわち、散在する各建物群単位で行われていた祭祀が、より大きな単位で実施されるようになったことを示すものであろう(註9)。

B類型

複数の土器をどのように容器として組合せているかによって、5つに分類した。その中で、B1式・B2式はそれぞれひとつの作法として確立したものがあるかのように型にはまったものであった。また、それに類するものとして、B1亜式・B2亜式があり、これらは分布の上でそれぞれの範型と共通していた。B3式はB2式に近い分布を示しており、分布状況からみたところではB1式・B1亜式と、B2式・B2亜式・B3式という2群に分けて考えることができるだろう。

B1式に類似するものを求めると、平城京左京3条2坊16坪に土師器甕を身、須恵器杯

蓋を蓋とした奈良時代の例がある[森下浩行・宮崎正裕1992]。ここでは壺内に墨が納められていたことから、胞衣壺の可能性が考えられている。長原遺跡の例では内容物の明らかになっているものではなく、胞衣壺と即断することはできない。また、長原で見つかっているものは平安Ⅲの時期のものばかりで、胞衣壺であるばあい、この時期に限定されることも考えがたい。さらに、平安京においてこの時期の胞衣壺を埋納する例がまったく見つからないことからB1式を胞衣壺とするには消極的にならざるをえない(註10)。もう一度分布状況にもどってみると、建物群の範囲の外周、屋敷地を巡る溝の外側といった地点で出土していた。このことから地鎮・鎮宅を目的としたものではないかと思われる。

神戸市の2遺跡には9世紀末から11世紀にかけての遺構にB1式あるいはB1亜式と呼べるものがあり、ここでは地鎮遺構と報告されている。まず、住吉宮町遺跡ではSX01・04という土師器小壺や須恵器壺を身とするものがあり、それぞれ掘立柱建物の東南隅に当たる場所を選んで埋納していることから、地鎮に関係する遺構と考えられている[神戸市教育委員会1990]。また、日暮遺跡では地鎮遺構として6例あり、その中に土師器甕を正位に用いる例が2例含まれている。これらは建物群の周囲に分布しており、中には銭貨や粟またはヒエを埋納するものもあった[神戸市教育委員会1989]。

さらに「延喜式」陰陽寮の記事には、新年のはじめに、「害気消除、人無疾病、五穀成熟、築二七杵」の呪を読み、「缶」などの鎮物を深さ三尺の穴に納める行事があったことが知られる[村山修一1981 p.99]。『延喜式』は延長5(927)年に撰進されており、平安Ⅲの時期とも大きくかけ離れるものではない。8世紀末頃に発生した大洪水ののち、長原地域の開発はやや停滞みであった。そこに再び積極的な開発が及ぶのが平安Ⅲの時期である。B1式およびB1亜式はこうした背景のもとに執り行われた地鎮・鎮宅を目的とした土器の埋設と考えることができよう(註11)。内容物については、土器を正位に置くことから五穀粥・酒などが想像される。

B2式は住吉区南住吉遺跡においても1基確認されている(MN86-40次調査)。ここでは壺内から骨片や炭が見つかり、火葬墓と考えられている。これも長原遺跡の例と同様に平安Ⅲのものである。B3式と同様に甕を正位に置くものが、富田林市甲田南遺跡から数基発見されており、壺内部に銭貨を入れた土師器皿を正位に置いていることから、火葬墓と考えられている[大阪府教育委員会1981]。長原の土器編年に照らすと平安Ⅱ・Ⅲに当る時期のものである。奈良市薬師寺西遺跡ではビット内に土師器甕を正置し、その中に須恵器壺を納めた平安時代後半期の例が報告されており、骨片も見つかっている[寺沢薫

1989]。これらの事例から、B2式は火葬墓、B3式についてもその中には火葬墓が含まれていると考えることができる(註12)。B2式と近接してみられたB2垂式についても火葬墓の可能性があろう。そして、身の中に納められた土師器小皿は死者に対し供献されたものと理解される。

B2式・B2垂式は身となる土器をともに伏せて使っていたが、水野正好氏によれば、『兵範記』仁安2(1167)年7月27日の条から、一つの約束事として骨櫃や墓誌といったものをうつ伏せにするということが行われていたという[水野正好1985 p.295]。

C類型

C1式は土壌などの一隅に土器を埋納するもので、その状況から、土壌は土器を埋めるためだけに掘られたものではない。また、土壌の平面形は隅丸長方形や楕円形を呈するものが多く、底面が広く、かつ平坦に掘られていた。こうした特徴から土壌墓である可能性が高い。府下では高槻市宮田遺跡[原口正三1982]・藤井寺市津堂遺跡[大阪府教育委員会1987]・堺市日置荘遺跡[大阪府教育委員会・大阪文化財センター1988]などで、このような土器埋納土壌から人骨が検出されている。特に宮田遺跡では、土壌墓が屋敷の北東に見つかっており、屋敷の守護者としてこの場所に葬られたことが推測されている。長原遺跡でもC1式と隣接する建物との関連が指摘されている例がいくつかあり、宮田遺跡と同様に屋敷墓と考えられるかもしれない。そのばあい、埋納された土器は供献されたものと理解できる(註13)。

C1式に分類した[大阪市文化財協会1989]のSX401では、浅い土壌の内部から人骨と思われる骨片が出土していたが、焼けた板材なども散乱していた。このような状況から、この遺構については墓と考えるよりも周辺で火葬を行ったことを示すものであろう。

C2式は井戸への供献を目的としたものである。多くは椀や皿が用いられており、土壌墓と推定したC1式と共通する点が興味深い。井戸の廃絶という行為に人間の死と共通の観念がはたらいっていたのであろうか。しかし、井戸への土器埋納については、以下のようなケースもあり、埋納行為を廃絶時に限定できない。

[大阪市文化財協会1992c]の南Ⅱ区SE001では頭部や脚部を欠損した土馬を伴っていた。[水野正好1985 p.302]にあるように、こうした土馬は疫神乗騎の損壊をねらったもので、井戸の廃絶時だけでなく使用期間内にも土器の供献が行われていた可能性を示している。高槻市嶋上郡衛跡では10世紀の井戸から「北方土公水神王」などと墨書された土師器皿が見つかり、これを水野正好氏は井戸水の濁りや濁濁に係わるま

じなび世界を表現しているものと考えている[水野正好1985 pp.308-309]。また、和泉市池田寺遺跡の9～10世紀の井戸267-OWでは、須恵器の壺や鉢、黒色土器の杯などが数回にわたって埋納されている状況がみられた[大阪府教育委員会・大阪府埋蔵文化財協会1989]。こうしたことから、井戸における土器埋納は使用時か廃絶時かを明確にした上でないと、その意味を誤って解釈することにもなりかねない。井戸への土器供献といっても、意図されたところは一概ではないであろう。

5) まとめ

土器を埋納する行為には、土器を廃棄したり、また土器を井戸側などに転用するばあいと違って、行為者の思想が込められている。何者かへの供献品として、供献品を納める容器として、または棺として土器は埋納されてきた。

飛鳥時代の初頭、地鎮のためにさかんに土器埋納が行われた。それは、それ以前にあった古墳を水田開発のために破壊することへの代償であったと思われる。その後、奈良時代末の洪水によって、水田は完全に埋没する(註14)。しかし、平安Ⅰの時期から徐々に再開発が進められ、平安Ⅲの時期には建物群をはじめとする遺構が激増する。この時期、土器埋納遺構も急激に増え、B1式・B2式といった定式化した作法の存在をうかがわせるものがみられるようになる。B1式は飛鳥時代にみられたA1式に代る新たな地鎮の方法なのであろう。B2式をはじめ、B2亜式・B3式は火葬墓と考えられるが、これらが続く平安Ⅳの時期にはみられなくなる。平安Ⅳの時期、長原遺跡の屋敷地の状況は一変し、建物群が散村的に存在する姿から、集村化を示すようになる。建物群ごとの小単位で行われていたA2式という土器埋納も、この時期からより大きな単位で行われるようになる。また、建物に近接した場所に設けられていた土墳墓と考えられるC1式も、屋敷地から離れた特定の場所に集められる傾向が現われる。ここに居住者を取巻く社会の枠組みの変化がうかがえるように思う。

これまで土器埋納遺構といえば、性格不明の遺構として扱われることもあったが、分類基準を設け、それを歴史的変遷の中で位置づけ、広く類例を求めていくことで明らかになってくことも多い。特に過去の人々の思想に関係する部分を復元する上で重要な意味をもつものであるといえよう。

(櫻井)

註)

- (1) ヨーロッパ先史考古学における埋納(デポ)の概念について整理した佐原真氏は、埋納とは、遺物の単数・複数は問わず、「意図的に遺物を埋め納めること、その遺跡、遺物。墓への副葬は除く」とする[佐原真 1985 p.541]。佐原氏の提唱に従うならば、墓に副葬された土器を埋納遺物とは呼べないが、墓と断定困難なばあいや、墓かどうかを再検討すべき遺構について考えるには土壌墓や火葬墓とされているものも同様に見ていく必要がある。よって本論では墓も扱う。
- (2) [大阪市文化財協会1983]で土器埋納ピットとされるピット409では、直径1.0m、深さ0.6mの掘形の底に、底部を欠いた羽釜が正位で置かれていた。こうした状況からこの羽釜は井戸側と考えられ、今回の検討から除いた。
- (3) [佐原真1985]ではゴールドン=チャイルドが「青銅器時代」(1930年)で示した「埋納(hoards)」に関する記述が抜粋されている。それによると埋納遺物の種類として「家財の埋納」・「供献の埋納」・「商人の埋納」・「鋳物師の埋納」があるとされる。「供献の埋納」を除く他の事例は貯蔵を目的としたものと考えることができる。「供献の埋納」の中には岩の下、木の下、泉や沼の中でまともに見いだされる遺物があるとされる。泉や沼においては、遺物を埋めたとは表現しにくい、人為的に埋められたばかりと同等に、泉に沈めることによって人の手に触れない状態になることから、ここではそれらも含めて埋納と捉える。
- (4) [佐藤隆1992]に基づく「平安時代Ⅰ期～Ⅳ期」の名称は、以下「平安Ⅰ～Ⅳ」と省略して用いる。
- (5) 図241～244の中で一点鎖線で示すものが推定条里線である。推定条里の位置については[木原克司1982]を参照した。
- (6) 古墳時代の土器を埋納する遺構にはA1式とはやや形勢の異なるものもある。それは[大阪文化財センター1986]SP01、[長原遺跡調査会1978]土壌Ⅰなどで、楕円形または隅丸方形の掘形に多数の須恵器を並べ、あるいは積み重ねて埋納するものである。これらは、同時期の土器がまともに存在することから古墳時代の遺構とみてまちがいがなく、長原遺跡東南地区以外にも分布している。
- (7) 史料の読み下し文の出典は[黒板勝美1932 p.251・p.435]、[林隆朗1986 p.84・1988 p.24]である。
- (8) 住吉区山之内遺跡の古墳時代の掘立柱建物に、須恵器の完形品を数点埋納した柱穴が見つかった例もある(YM83-41次調査)。
- (9) 喜連東遺跡(KR92-3次調査)では平安時代後期～鎌倉時代に属する土器埋納遺構があり、土師器小皿を十数枚埋納していた。また鎌倉～室町時代に当る例が住吉区山之内遺跡で検出されている(YM92-8次調査、SP03)。ここでは小規模なピット内に土師器小皿ばかりを19枚埋納していた。
- (10) 平安京の土器埋納遺構については久世康博氏の研究がある[久世康博1990]。その中で、10世紀の例として右京1条3坊9町のSK94・131に土師器甕を正位に使い、それに黒色土器鉢や蓋をする事例が示されている。これらは今回の分類のB1並式に含めてよいと思われる。久世氏はこれらを地鎮に関係する遺構と考えている。また、[原秀樹1991]には長岡京右京で行った調査で、平安時代創建と伝えられる勝龍寺に関連するとみられる遺構が報告されている。その中のSX34は長原遺跡のB1式と共通点が多い。SX34からは延喜通寶が2枚出土しており、地鎮供養の跡と考えられている。
- (11) 難波宮下層遺跡において、B1並式に該当する7世紀前半の例が見つかった。遺構の直径は40cm強、土師器甕を正置し、その上に土師器杯を入れ子に使用して蓋としている。甕の中に炭や灰はなかつ

たと報告されている[大阪市文化財協会1992d p.53]。なお、本文中では陰陽道に関する史料を示したが、[水野正好1992b]には、橘家神道地鎮祭に土や葉を土器に納めて鎮物とする事例があることのほか、仏教の安祥寺流に伝わる地鎮の作法などが紹介されている。B1式のような土器埋納が仏教に関連するものであれば、末法思想との係わりを考える必要があろう。末法に入ると信じられた永承7(1052)年は平安Ⅲの新段階に当る。各地で経塚が築造されるのもこのころである。

- (12) B2式・B3式に類似するものが奈良県平群町から三郷町の高安城跡にもあり、火葬墓と考えられている。ここでは奈良～平安時代の多数の蔵骨器がまとまって検出されている[河上邦彦1983]。身として使われる土器には土師器壺のほか須恵器壺・横瓶や灰釉陶器がある。
- (13) [江浦洋1988]では、12～14世紀を前後する時期の土墳墓における土器の埋納形態の分析が行われている。
- (14) この洪水層は長原5層と呼ばれているもので、同層内からは人面墨書土器・模型カマドといった平城京などで大蔵に使われていたものが出土する。こうした都城における祭祀を、長原の居住者がいち早く受容し、執り行っていることに注目したい。土器埋納に係わる思想的な背景も、本来は都に原型があって、それが伝播したものと推測する。

別 表

別表1 長原遺跡の標準層序 1992

層序		層相概念図	層相	層相 (20)	自然現象 自然現象 自然現象	おもな遺構・遺物 (注1)	C-14年代測定 (注2)	時代	
沖積層Ⅰ	上部層Ⅰ	NG0層	現代家土	11	—	—	—	近代・現代	
	上部層Ⅱ	NG1層	近代家土	12	—	—	—	近代	
		NG2層	近代家土	13	—	—	—	近代	
		NG3層	近代家土	14	—	—	—	近代	
	上部層Ⅲ	NG4層	近代家土	15	—	—	—	近代	
		NG5層	近代家土	16	—	—	—	近代	
		NG6層	近代家土	17	—	—	—	近代	
	上部層Ⅳ	NG7層	近代家土	18	—	—	—	近代	
		NG8層	近代家土	19	—	—	—	近代	
		NG9層	近代家土	20	—	—	—	近代	
	沖積層Ⅱ	上部層Ⅴ	NG10層	近代家土	21	—	—	—	近代
		上部層Ⅵ	NG11層	近代家土	22	—	—	—	近代
			NG12層	近代家土	23	—	—	—	近代
			NG13層	近代家土	24	—	—	—	近代
		上部層Ⅶ	NG14層	近代家土	25	—	—	—	近代
NG15層			近代家土	26	—	—	—	近代	
NG16層			近代家土	27	—	—	—	近代	
上部層Ⅷ		NG17層	近代家土	28	—	—	—	近代	
		NG18層	近代家土	29	—	—	—	近代	
		NG19層	近代家土	30	—	—	—	近代	
沖積層Ⅲ		上部層Ⅸ	NG20層	近代家土	31	—	—	—	近代
		上部層Ⅹ	NG21層	近代家土	32	—	—	—	近代
			NG22層	近代家土	33	—	—	—	近代
			NG23層	近代家土	34	—	—	—	近代
		上部層Ⅺ	NG24層	近代家土	35	—	—	—	近代
	NG25層		近代家土	36	—	—	—	近代	
	NG26層		近代家土	37	—	—	—	近代	
	上部層Ⅻ	NG27層	近代家土	38	—	—	—	近代	
		NG28層	近代家土	39	—	—	—	近代	
		NG29層	近代家土	40	—	—	—	近代	
	沖積層Ⅳ	上部層Ⅼ	NG30層	近代家土	41	—	—	—	近代
		上部層Ⅽ	NG31層	近代家土	42	—	—	—	近代
			NG32層	近代家土	43	—	—	—	近代
			NG33層	近代家土	44	—	—	—	近代
		上部層Ⅾ	NG34層	近代家土	45	—	—	—	近代
NG35層			近代家土	46	—	—	—	近代	
NG36層			近代家土	47	—	—	—	近代	
上部層Ⅿ		NG37層	近代家土	48	—	—	—	近代	
		NG38層	近代家土	49	—	—	—	近代	
		NG39層	近代家土	50	—	—	—	近代	
沖積層Ⅴ		上部層ⅰ	NG40層	近代家土	51	—	—	—	近代
		上部層ⅱ	NG41層	近代家土	52	—	—	—	近代
			NG42層	近代家土	53	—	—	—	近代
			NG43層	近代家土	54	—	—	—	近代
		上部層ⅲ	NG44層	近代家土	55	—	—	—	近代
	NG45層		近代家土	56	—	—	—	近代	
	NG46層		近代家土	57	—	—	—	近代	
	上部層ⅳ	NG47層	近代家土	58	—	—	—	近代	
		NG48層	近代家土	59	—	—	—	近代	
		NG49層	近代家土	60	—	—	—	近代	
	沖積層Ⅵ	上部層ⅴ	NG50層	近代家土	61	—	—	—	近代
		上部層ⅵ	NG51層	近代家土	62	—	—	—	近代
			NG52層	近代家土	63	—	—	—	近代
			NG53層	近代家土	64	—	—	—	近代
		上部層ⅶ	NG54層	近代家土	65	—	—	—	近代
NG55層			近代家土	66	—	—	—	近代	
NG56層			近代家土	67	—	—	—	近代	
上部層ⅷ		NG57層	近代家土	68	—	—	—	近代	
		NG58層	近代家土	69	—	—	—	近代	
		NG59層	近代家土	70	—	—	—	近代	
沖積層Ⅶ		上部層ⅸ	NG60層	近代家土	71	—	—	—	近代
		上部層ⅹ	NG61層	近代家土	72	—	—	—	近代
			NG62層	近代家土	73	—	—	—	近代
			NG63層	近代家土	74	—	—	—	近代
		上部層ⅺ	NG64層	近代家土	75	—	—	—	近代
	NG65層		近代家土	76	—	—	—	近代	
	NG66層		近代家土	77	—	—	—	近代	
	上部層ⅽ	NG67層	近代家土	78	—	—	—	近代	
		NG68層	近代家土	79	—	—	—	近代	
		NG69層	近代家土	80	—	—	—	近代	
	沖積層Ⅷ	上部層ⅾ	NG70層	近代家土	81	—	—	—	近代
		上部層ⅿ	NG71層	近代家土	82	—	—	—	近代
			NG72層	近代家土	83	—	—	—	近代
			NG73層	近代家土	84	—	—	—	近代
		上部層ⅿ	NG74層	近代家土	85	—	—	—	近代
NG75層			近代家土	86	—	—	—	近代	
NG76層			近代家土	87	—	—	—	近代	
上部層ⅿ		NG77層	近代家土	88	—	—	—	近代	
		NG78層	近代家土	89	—	—	—	近代	
		NG79層	近代家土	90	—	—	—	近代	
沖積層Ⅸ		上部層ⅿ	NG80層	近代家土	91	—	—	—	近代
		上部層ⅿ	NG81層	近代家土	92	—	—	—	近代
			NG82層	近代家土	93	—	—	—	近代
			NG83層	近代家土	94	—	—	—	近代
		上部層ⅿ	NG84層	近代家土	95	—	—	—	近代
	NG85層		近代家土	96	—	—	—	近代	
	NG86層		近代家土	97	—	—	—	近代	
	上部層ⅿ	NG87層	近代家土	98	—	—	—	近代	
		NG88層	近代家土	99	—	—	—	近代	
		NG89層	近代家土	100	—	—	—	近代	

註) 1. 瓦葺納の享年は〔鈴木秀典1982〕、平安1〜正暦は〔佐藤龍1992B〕による。 註) 2・5〔朝岡ほか1979〕の享年を対比し引用する。
註) 3・4. 吉川ほか(1988)の年代による。

Figure 3. The effect of the concentration of the polymer on the gelation time of the polymer solution.

別表2 石器計測表 (長さ・幅・厚さの単位はcm、重量はgである)

番号	種類	長さ	幅	厚さ	重量	番号	種類	長さ	幅	厚さ	重量
30	石鏃	3.12	2.29	0.81	6.11	77	剥片	1.90	4.62	1.25	6.36
31	クサビ	3.95	1.80	1.29	8.44	78	剥片	1.60	2.89	0.49	2.06
32	剥片	3.25	5.06	1.06	17.68	79	剥片	2.82	3.15	0.90	7.70
33	剥片	2.70	1.85	0.42	2.31	80	剥片	3.99	2.60	1.33	10.94
34	剥片	3.39	2.81	0.44	5.34	81	剥片	2.00	3.43	0.96	4.05
35	剥片	1.20	1.99	0.23	0.62	82	剥片	1.60	3.00	0.88	3.91
36	釧石	7.53	4.57	3.61	141.74	83	剥片	3.08	4.40	0.71	10.84
37	ナイフ形石器	4.71	1.75	0.82	6.03	84	剥片	5.82	3.53	1.02	18.67
38	ナイフ形石器	4.61	1.73	0.62	4.98	85	剥片	2.72	4.23	1.12	12.15
39	ナイフ形石器	3.10	1.58	0.52	3.01	86	剥片	2.88	2.69	0.71	4.24
40	ナイフ形石器	4.20	2.37	0.84	6.71	87	剥片	1.16	2.15	0.70	1.41
41	ナイフ形石器	5.40	3.24	1.18	19.93	88	剥片	3.02	5.63	1.20	27.20
42	ナイフ形石器	3.88	1.94	1.07	6.15	89	剥片	7.72	4.00	2.27	70.55
43	ナイフ形石器	4.86	1.69	1.10	6.99	90	剥片	6.00	3.71	1.46	36.47
44	ナイフ形石器	3.56	1.77	0.71	6.31	91	剥片	10.17	6.00	3.01	142.89
45	ナイフ形石器	5.08	1.90	1.03	10.13	92	剥片	7.34	4.82	1.83	73.79
46	ナイフ形石器	4.94	2.02	0.88	7.64	93	鏃	4.06	2.14	0.59	4.37
47	石核	2.97	4.83	1.50	19.41	94	石鏃	1.71	2.21	0.44	1.39
48	石核	3.35	4.00	1.04	15.70	95	ナイフ形石器	5.16	1.82	0.61	6.32
49	石核	3.79	4.73	1.55	19.57	96	剥片	1.31	2.39	0.20	0.62
50	石核	4.61	5.52	1.64	42.06	97	クサビ	4.36	4.82	1.35	28.15
51	石核	3.62	6.52	1.58	37.21	98	剥片	1.94	3.07	0.60	3.37
52	剥片	1.70	4.40	0.50	2.65	99	剥片	2.21	3.32	0.49	3.35
53	剥片	2.43	4.91	0.80	9.75	100	剥片	1.90	2.23	0.60	2.57
54	剥片	1.87	2.55	0.26	1.41	101	剥片	3.25	2.61	1.30	9.23
55	剥片	2.00	2.84	0.69	3.90	102	剥片	2.28	4.56	1.58	13.08
56	剥片	1.60	2.96	0.78	1.93	103	剥片	3.18	2.89	0.68	6.12
57	剥片	1.39	3.12	0.36	1.47	104	剥片	6.65	4.60	1.27	39.26
58	石核	5.05	6.21	1.90	49.72	105	剥片	4.65	5.69	1.60	41.93
59	石核	10.00	5.61	2.60	135.44	106	石核	14.08	10.22	4.80	773.36
60	剥片	1.71	2.56	0.51	2.03	234	ナイフ形石器	6.18	2.33	0.74	13.61
61	剥片	2.54	1.98	0.60	2.91	235	石鏃	2.51	1.66	0.50	1.36
62	剥片	2.89	2.27	0.93	5.16	236	石鏃	2.90	2.05	0.46	1.87
63	剥片	3.04	3.62	0.57	6.12	237	石鏃	1.85	2.36	0.48	2.05
64	剥片	3.98	3.55	1.28	16.72	238	クサビ剥片	1.94	2.42	0.23	1.20
65	剥片	3.18	3.27	0.77	7.15	239	クサビ剥片	2.27	1.94	0.38	1.78
66	剥片	3.62	4.06	0.87	12.63	240	二次加工のある剥片	4.74	4.20	1.18	29.05
67	剥片	3.05	2.83	0.94	7.76	241	横長剥片	2.45	4.25	0.59	5.66
68	剥片	2.56	4.32	1.14	11.53	242	横長剥片	3.07	3.98	1.19	9.34
69	剥片	3.40	2.02	1.15	6.26	243	縦長剥片	4.63	3.40	0.34	6.25
70	剥片	4.49	4.52	0.71	15.45	244	剥片	4.52	3.83	1.28	19.82
71	剥片	5.23	2.90	0.91	11.81	349	石鏃	2.03	1.23	0.27	0.84
72	剥片	4.59	1.97	0.89	8.99	350	石鏃	2.49	1.74	0.40	1.16
73	剥片	2.15	1.04	0.62	2.11	351	石鏃	3.12	2.26	0.43	2.19
74	剥片	3.90	1.88	0.80	4.37	352	二次加工のある剥片	2.66	1.51	0.46	1.74
75	剥片	1.61	2.10	0.40	1.60	353	石鏃未製品	3.12	2.43	0.57	3.61
76	剥片	2.12	1.93	0.38	1.49	354	未製品・スクレイパー	5.65	2.20	0.91	12.10

番号	種類	長さ	幅	厚さ	重量	番号	種類	長さ	幅	厚さ	重量
355	スクレイパー	3.03	2.82	0.49	4.47	445	石鏃	2.82	1.60	0.34	1.05
356	クサビ	3.95	3.40	1.47	23.11	446	石鏃	1.92	1.59	0.29	0.76
357	クサビ割片?	4.36	2.11	0.65	5.90	447	石鏃	1.92	1.26	0.30	0.61
358	クサビ割片?	3.40	2.66	0.85	5.75	448	石鏃	2.60	1.25	0.32	0.76
359	クサビ割片?	4.24	2.67	1.12	13.49	449	石鏃	2.86	1.90	0.44	1.60
360	横長割片	4.82	5.68	0.87	26.10	450	石鏃	3.66	1.44	0.45	—
361	横長割片	3.37	4.65	0.56	9.60	451	石鏃	2.82	1.75	0.34	1.76
362	横長割片	2.99	5.08	1.49	17.80	452	クサビ	6.38	1.93	1.31	19.14
363	石核	5.56	4.15	1.74	34.37	453	クサビ	3.71	2.31	0.94	9.64
364	石核・クサビ?	5.53	4.42	2.79	57.35	454	クサビ	3.35	1.80	0.79	4.54
439	石鏃	1.64	0.93	0.33	0.51	455	クサビ	3.80	2.70	0.84	9.99
440	石鏃	2.37	1.79	0.26	0.67	456	石斧	13.80	6.45	2.08	338.03
441	石鏃	3.49	1.88	0.43	—	457	石核	3.80	6.57	2.20	53.56
442	石鏃	2.48	1.72	0.42	1.04	458	石核	5.21	5.54	2.94	59.30
443	石鏃	1.70	2.15	0.24	0.60	459	石核	2.76	4.10	3.90	44.61
444	石鏃	1.97	2.07	0.27	0.98						

別表3 平安時代土器の編年

A.D.	平安時代Ⅰ期
800	古
900	平安時代Ⅱ期 中
	新
1000	古
	平安時代Ⅲ期
	新
1100	古
	平安時代Ⅳ期 中
	新

別表4 瓦器碗の編年

A.D.	I
1100	1
	2
	3
1200	1
	2
	3
1300	1
	2
	3
	V

引用・参考文献

- 浅羽町教育委員会 1991、「古新田」浅羽町立浅羽小学校新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報
- 甘木市教育委員会 1979、「池の上墳墓群」
- 1982、「古寺墳墓群」
- 石井克巳 1994、「磐石噴火で埋ったムラを掘る」：大塚初重監修『黒井峯遺跡』日本の古代遺跡を掘る4 読売新聞社、pp.17-122
- 伊藤純 1984、「古代日本における障面系諸試験」：『ヒストリア』第104号 大阪歴史学会、pp.1-18
- 1987、「古墳時代の障面」：『季刊考古学』20号 雄山閣出版、pp.38-42
- 稲田孝司 1978、「忌の庭と王権」：『考古学研究』第25巻第1号 考古学研究会、pp.52-69
- 今津啓子 1989、「周堤をもつ堅穴住居」：大阪市文化財協会編『葦火』21号
- 植木久 1982、「長原遺跡に見る平安～鎌倉時代集落・民家の特質」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.317-320
- 1991、「高床式建築の変遷」：直木孝次郎・小笠原好彦編著『クラと古代王権』ミネルヴァ書房、pp.151-169
- 植木久 1992、「建築遺構に関する考察」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第9、pp.350-357
- 上野利明・中西克弘 1985、「大賀世2・3号墳の出土遺物について」：東大阪市文化財協会編『紀要』Ⅰ、pp.95-131
- 上原真人 1993、「解説」：『水器集成図録 近畿原始篇』奈良国立文化財研究所史料第36冊
- 江浦洋 1988、「中世土城墓をめぐる諸問題」：大阪府教育委員会・大阪文化財センター編『日置荘遺跡一調査の概要』(その3)
- 1992、「桑里型水田面をめぐる諸問題」：大阪文化財センター編『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』Ⅶ、pp.77-104
- 大阪府教育委員会・大阪市文化財協会 1985、『長原遺跡発掘調査 (NG84-25) 現地説明会資料』
- 大阪市文化財協会 1982、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ
- 1983、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ
- 1989、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅰ
- 1990、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ
- 1991、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ
- 1992a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ
- 1992b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ
- 1992c、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ
- 1992d、『難波宮址の研究』第九
- 1993、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ
- 大阪府教育委員会 1973、『陶器・深田』
- 1976、『大園遺跡発掘調査概要』Ⅲ
- 1981、『甲田南遺跡発掘調査概要』Ⅰ

1982,『大園遺跡発掘調査概要』Ⅶ

1987,『津堂遺跡-86-1区の調査』

大阪府教育委員会・大阪府埋蔵文化財協会1989,『池田寺遺跡発掘調査報告』

大阪府教育委員会・大阪文化財センター1988,『日置荘遺跡-調査の概要-』(その3)

大阪府埋蔵文化財協会1987,『三田遺跡』

1989,『陶邑・大庭寺遺跡』

1990,『陶邑・伏尾遺跡-A地区』

大阪文化財センター1978,『長原』

1986a,『城山』その1

1986b,『城山』その3

1987,『小阪遺跡』その3

1991,『大庭寺遺跡』Ⅰ

岡戸哲紀1993,『陶邑と大庭寺遺跡』:『古墳時代における朝鮮系文物の伝播』埋蔵文化財研究会・関西世話人会

岡村勝行1990,『長原古墳群の家形地輪』:大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ, pp.273-284

岡山県古代吉備文化財センター1993,『菅生小学校裏山遺跡』:『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』5, pp.53-420

小田木富慈美・大庭重信・細川富貴子・瀬尾真由美1993,『古墳時代のまつりのあと-長原遺跡の調査-』:大阪市文化財協会編『葦火』47号

尾張旭市教育委員会1978,『尾張旭市の古墳』

河上邦彦1983,『高安城跡調査概報2』:奈良県立橿原考古学研究所編『奈良県遺跡調査概報』1982年度, pp.277-284

木原克司1982,『長原遺跡の水田址をめぐる諸問題』:大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ

1989,『長原南口古墳の調査』:大阪市文化財協会編『葦火』23号

木村徳国1973,『トノ・オホトノ・ミアラカ-国風のトノの建築的イメージとその源流について-』:建築史研究会編『建築史研究』39号, pp.1-43

京嶋寛1986,『河内長原古墳群とその造営集団』:『第4回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会資料』

1990,『水田遺構と古代の長原』:大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ, pp.294-306

1991a,『群集土壌の性格と意義』:大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ, pp.135-149

1991b,『古墳時代の長原』:『第4回文化財講演会資料』

1992,『長原・瓜破遺跡の製塩土器』:大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ, pp.155-160

1993,『古墳時代後半期の土器の変遷』:大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ, pp.269-276

京嶋寛・伊藤純・金村浩一1989,『山之内遺跡の発掘調査-市営住宅第5期建設に伴う調査-』:『大阪府下埋蔵文化財研究会(第20回)資料』, pp.7-16

- 京都府教育委員会 1979、「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」：『埋蔵文化財発掘調査概報』、pp.64-226
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987、「石本遺跡」：『京都府遺跡調査報告書』第8冊
- 京都府立山城郷土資料館 1991、「京都府のはにわ」
- 久世康博 1990、「平安京の埋納遺構」：『考古学論集』第3集 考古学を学ぶ会、pp.409-432
- 國下多美樹 1988、「京都府下の紡錘車について」：『京都考古』第50号、pp.1-27
- 黒板勝美 1932、『訓読日本書紀』下巻 岩波文庫
- 神戸市教育委員会 1983、「松野遺跡発掘調査概報」
- 1987、「神楽遺跡」：『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』、pp.122-131
- 1989、「日暮遺跡発掘調査報告書」
- 1990、「住吉宮町遺跡第11次調査」
- 古代の土器研究会 1992、「古代の土器Ⅰ 都城の土器集成」
- 西藤清秀・林部均 1990、「四条遺跡発掘調査概報」：奈良県立橿原考古学研究所編『奈良遺跡調査概報』
- 1987年、pp.291-308
- 堺市教育委員会 1975、『土師遺跡49年度発掘調査概報』
- 佐久間貞士 1986、「畿内の中世村落と屋敷地」：『ヒストリア』第109号 大阪歴史学会、pp.1-18
- 板井秀雄 1992、「井戸から出土する牛馬遺存体について」：『考古学研究』第39巻第2号 考古学研究会、pp.125-138
- 佐藤隆 1989、「5世紀の建物を発掘－長原遺跡の調査－」：大阪市文化財協会編『葦火』22号
- 1992、「平安時代における長原遺跡の動向」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.102-114
- 佐原真 1968、「畿内地方」：『弥生土器集成』本編2 東京堂出版、pp.53-72
- 1985、「ヨーロッパ先史考古学における埋納の概念」：『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集
- 鈴木秀典 1982、「瓦器碗の編年」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.278-282
- 鈴木秀典・植木久 1983、「奈良時代から室町時代の遺構と遺物の検討」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ、pp.224-246
- 菅原正明 1983、「畿内における土釜の製作と流通」：奈良国立文化財研究所編『文化財論叢』、pp.725-758
- 横山洋 1992a、「水田遺構の分析」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.91-101
- 1992b、「長原古墳群と難波地域の円筒埴輪」：『古代文化』第44巻第9号 古代学協会、pp.36-42
- 高井健司 1986、「長原七ノ坪古墳とその馬具」：大阪市文化財協会編『葦火』創刊号
- 高槻市教育委員会 1981、『嶋上郡跡発掘調査概要』5
- 高橋れい子 1981、「乙訓地方出土の紡錘車について」：長岡京跡発掘調査研究所編『長岡京』第20号
- 辰巳和弘 1990、『高殿の考古学－豪族の居館と王権祭儀－』白水社
- 田辺昭三 1981、『須恵器大成』角川書店
- 田辺昭三・原口正三・田中琢・佐原真 1962、『船橋』Ⅱ
- 趙哲済・京嶋覚・高井健司 1992a、「長原遺跡の標準層序」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ、pp.19-32
- 1992b、「長原遺跡の地層をめぐる諸問題」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺

- 跡見調査報告Ⅲ、pp.177-186
- 寺沢薫1989、「平城京右京六条三坊三坪(薬師寺西)発掘調査報告書」：『奈良県道跡調査概報』1988年度 奈良県立橿原考古学研究所
- 土肥孝1983、「日本古代における犠牲馬」：『文化財論叢』奈良国立文化財研究所、pp.383-400
- 中井均1987、「中世城館の発生と展開」：『物質文化』第48号 物質文化研究会、pp.54-72
- 中谷雅治1976、「恭仁宮跡昭和50年度発掘調査概要」京都府教育委員会編：『埋蔵文化財発掘調査概報』1976、pp.36-50
- 中間研志1985、「紡錘車の研究—我国稲作農耕文化の一要因としての紡織技術の展開について—」：福岡県教育委員会編『石崎曲り田遺跡Ⅲ』、pp.105-160
- 中村勝1986、「福岡県朝倉郡八並塚群出土の祭祀遺物」：『九州考古学』第60号 九州考古学会、pp.81-92
- 長原道跡調査会1978、「長原道跡発掘調査報告」
- 奈良国立文化財研究所1976、『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所学報第26冊
- 1985、『飛鳥・藤原宮発掘調査概報Ⅱ』15
- 1986、『飛鳥・藤原宮発掘調査概報Ⅲ』16
- 1993、『木器集成図録 近畿原始篇』奈良国立文化財研究所史料第36冊
- 西弘海1986、「土器様式の成立とその背景」
- 1978、「土器の時期区分と型式変化」：奈良国立文化財研究所編『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』、pp.92-100
- 西尾宏1988、「中野道跡発掘調査概要Ⅴ」四條堰市教育委員会編 四條堰市埋蔵文化財包蔵地調査概報24
- 西口陽一1989、「讀良部系里道跡発掘調査概要Ⅰ」大阪府教育委員会編
- 西谷正1983、「加耶地域と北部九州」：『九州歴史資料館十周年記念太宰府古文化論叢』上巻 吉川弘文館、pp.35-71
- 橋口達也1982、「甘木・朝倉地方を中心としてみた陶質土器・初期須恵器資料」：甘木市教育委員会編『古寺墳墓群』、pp.48-56
- 林陵朗1986、『完訳注釈日本紀』（第一分冊）現代思想社
- 1988、『完訳注釈日本紀』（第六分冊）現代思想社
- 林田重幸1974、「日本在来馬の源流」：『日本古代文化の探求・馬』社会思想社、pp.217-262
- 林田重幸・山内忠平1957、「馬における骨長より体高の推定法」：『鹿児島大学農学部学術報告』6 鹿児島大学農学部、pp.146-156
- 原秀樹1991、「右京第339次調査略報」：長岡京市埋蔵文化財センター編『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成元年度
- 原口正三1982、「大阪府高槻市宮田遺跡再論」：『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会、pp.671-681
- 東大阪市文化財協会1993、『かまどのふしぎ 5世紀ころの東大阪』
- 兵庫県教育委員会1980、「三方古墳調査報告」：播但連絡有料自動車道建設にかかる埋蔵文化財調査報告書Ⅱ
- 広瀬和雄1983、「古代の開発」：『考古学研究』第30巻第2号 考古学研究会、pp.35-69

- 1988、「中世村落の形成と展開」：『物質文化』第50号 物質文化研究会、pp.7-27
- 福岡市教育委員会1989、「吉武遺跡群」Ⅳ
- 福岡澄男1985、「平安—江戸時代」：『国説発掘が語る日本史』4 新人物往来社、pp.233-284
- 釜山直轄市立博物館1983、「釜山徳川洞古墳」
- 松本敏三1982、「香川県出土の古式須恵器宮山窯址の須恵器」：『瀬戸内海歴史民俗資料館年報』第7号、pp.17-36
- 水野正好1985、「招福・除災—その考古学—」：『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集、pp.291-322
- 1992a、「古墳時代」：『交野市史』考古編 交野市教育委員会、pp.207-419
- 1992b、「『土』と地鎮」と：『長岡京古文化論叢』Ⅱ、pp.645-651
- 南秀雄1987、「瓜破遺跡で発見された7世紀の建物群」：大阪市文化財協会編『華火』8号
- 宮本長二郎1983、「古代の住居と集落」：『講座日本技術の社会史』第7巻 建築 日本評論社
- 村山修一1981、『日本陰陽道史総説』 塙書房
- 森部夫1984、「古代の地鎮・鎮壇」：『古代研究』28・29 元興寺文化財研究所、pp.1-17
- 森下浩行・宮崎正裕1992、「平城京左京三条二坊十六坪の調査第231次」：『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成3年度 奈良市教育委員会、pp.78-85
- 森田勉1983、「滑石製容器」：『仏教芸術』148号、pp.135-148
- 門田誠一1992、『海からみた日本の古代』 新人物往来社
- 八尾市文化財調査研究会1987、『八尾南遺跡(第8次調査)一般公開資料』
- 八尾南遺跡調査会1981、『八尾南遺跡』
- 横田賢次郎・森田勉1978、「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」：『九州歴史資料館研究論集』4、pp.1-26
- 米田敏幸1985、「八尾南遺跡の追加資料」：『八尾市文化財紀要』Ⅰ
- 渡辺誠1985、「ヨコヅチの考古民具的研究」：『考古学雑誌』第70巻第3号 日本考古学会、pp.52-93
- Goody, P. C. 1983 *Horse Anatomy*. J.A. Allen & Company Limited, pp.36-37

あ　と　が　き

ここに、長原瓜破地区の区画整理に伴う発掘調査報告の第六冊を上梓することができた。

本書のタイトルは『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』であるが、当年度は瓜破遺跡範囲内の調査は行っていない。この書名については以前にも記したことではあるが、同事業に関連する報告書のシリーズ名と理解いただきたい。本書では長原遺跡の西・中央・南・東南の各地区の調査成果を報告した。そのうちの西・南地区については、当年度までの調査をもってひと区切りとなる。一方、中央地区および東南地区北部は本年度から本格的に着手した区域である。これら中央・東南地区については、次年度以降、さらに引き続き調査を行っている。本書第Ⅲ章に古墳時代集落に関する考察を収録した。これは西地区の調査成果の一つのまとめとして、今後の調査・研究の土台となることと思う。

これからも使いやすい報告書の編集につとめ、さらに内容の充実を図って行きたいと考える。

(永島暉臣愼)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

B B 種ヨコハケ	174,184,192,198	凝灰岩切石	99
あ 朝顔形埴輪	168,182,192,196	鏝	152
足釜	225,230	く 草摺形埴輪	196
飛鳥Ⅰ	198,253,270,275,279	クサビ	20,32,72,118,120,121,160,
飛鳥Ⅱ	65,253,270,275,279		162
飛鳥Ⅲ	65,87,131,155,198,281	管玉	249
飛鳥Ⅳ	62,87,155,253,281	け 畦畔	14,56,59,89~91,107,108,
飛鳥Ⅴ	62		111,114,128,130,134,135,
当て具	46,49,58,246		139,141~143,147,149,198,
当て具痕	18,43,45,49,50,195		200,201,204,205,216,217,
い 家形埴輪	182,192,196,257		234,237
石鍋	230	下駄	155
井戸側	100,139,219,269,285	建築部材	246
う ウシ	156	原礫	30,34,74,118
白玉	55,183,249,262	こ 合子	150
ウマ	17,54~56,58,65,81,156,246,	洪水	15,87,89,114,130,131,133~
	249		135,141,273,279,281,282,
馬形埴輪	65,74,152,196		284,286
ウリ	281	瓶	17,41,62,85,246
か 灰釉陶器	105,221,286	木葉痕	88
火葬墓	104,111,209,282,283,284,	子持壺	194
	285,286	さ 機	98,243,245,250,252,257
刀形	249	サメ	105,106
甲冑形埴輪	116,171,235,236	山陰系	156,166
甕	42,242,250,255	し 島島	60,108,112,141,145,147,234
ガラス玉	52	主体部	122,128,260
唐津焼	114,150	縄蓑文	152,178,262
瀬流	56,111,114,122,128,130,133,	庄内式	157,166,169
	135,143,238	縄文土器	65
韓式系土器	76,195,196,260~264	桑里	56,90,111,130,135,136,139,
き 衣蓋形埴輪	7,116,192		144,216,220,221,237,238,

	275,276,278,279,285	付け底系	242
す 水田	14,15,56,60,62,87,90,91,107, 108,110,112,114,128,130, 134,135,141,143,149,198, 200,201,204,205,209,236, 237,275,279,284	筒形器台	17
		翼状剥片	20,22,23,26,30,32
		坪境溝	13,107,209
		て 手焙形土器	156
スクレイパー	118	提瓶	39,50
スラグ	45	底面をもつ剥片	32,73
せ 製塩土器	50,58,82,83,85,86,246,249, 263	鉄斧の柄	46,246
青花	114	鉄鏃	65
青磁	116,150,224,230,240	デボ	285
青白磁	150	と 礫石	102,230
石核	23,26,34,73,121,164	同安瀛系	150
石錐	30	刀子の柄	46
石鏃	20,30,72,118,158,160	東播系	226,240
石斧	162	動物遺体	54,56,156
瀬戸内技法	70,73	土器埋納遺構	106,107,111,212,268~286
線刻	7,116,152,171,182,183,194, 196,197,260	土壟墓	249,259,263,264,266,283~ 286
線刻画	152	土鍾	38,51
そ 染付	14,114	把手杯碗	38,50,65,84,262
総束柱構造	244	鳥形埴輪	194
た 大畦畔	90,111,216,237,238,275	な ナイフ形石器	20,22,23,30,32,70
高杯形器台	131,190	ぬ 布目	140,224
叩き板	46,49,58,246	ね 粘土探堀坑	66,110,247
壺穴住居	34~36,41,57,74,110,241, 243,250,252,254,255,256	は 羽釜	140,219,224,226,230,239, 240,285
縦長剥片	20,26,30,32,73,118	白磁	219,224,230,234,240
ち 柱根	209,210	針描き	176,214
沖積層下部層	15,17,60,62,114,147,149	ひ 庇	96,136,137,209,211
沖積層上部層	13,15,59,60,62,112,114,145, 147,149	平瓦	106
調整剥片	26,73	平底鉢	196,249
つ 束柱、通し柱構造	244	縄付朝顔形埴輪	166,168
		ふ 縄羽口	38,45,58,64,246,252
		武人埴輪	176,182,235,236
		船橋O-II	184

布留式	17,166,169,263	勾玉	249,262
へ 平安京	209,282,285	曲物	100,139,213,219
平城宮Ⅰ	62,89,155	丸瓦	100,224
平城宮Ⅱ	62,87,88,111,130	み 水口	56,88,90,201,205
平城宮Ⅴ	64,152	も 木鐺	46,230
平城京	280,281,286	や 焼台	45,78,79,99
平瓶	17	屋敷地	106,144,217,237,238,253,
ヘラ記号	50,54,77,79,116,128,176,192,		282,284
	196,263	山城E型	230
ほ 方形周溝墓	275,279	ゆ 有孔円板	40,54,55,249
紡錘車	18,42,152,259~267	床束	36,97
墨書	92,99,111,152,283	よ 横杵	46~49,58,246
掘立柱建物	36,41,42,57,74,92,95,96,97,	横碇	155
	110,114,136,143,144,149,	横長剥片	20,22,23,26,32,34,73,118,
	198,209,211,217,237,241,		120,121
	243,250,252,253,254,255,	り 竜泉窯系	224,230
	256,257,274,282,285	緑釉陶器	150
ま 埋葬施設	127,128		

〈地名・遺跡名など〉

あ 赤塚古墳	235,236	き 喜連東遺跡	285
い 池島・福万寺遺跡	279,281	く 黒井峯遺跡	253,256
池田寺遺跡	284	こ 甲田南遺跡	282
池の上・古寺墳墓群	259,261,263,265,266	小阪遺跡	254
石本遺跡	155	古新田遺跡	244,245
一ヶ塚古墳	121,142,143	し 四条古墳	279
う 「馬池谷」	13,56,246,252,253,256,257	七ノ坪古墳	74,89,110
お 大賀世3号墳	240	清水谷古墳群	280
大園遺跡	245,254,255	下茶屋遺跡	263,265
大庭寺遺跡	260,262,263,265,266	城山遺跡	189
鬼塚遺跡	260,262	城山古窯址	267
か 神楽遺跡	260,263,265	す 菅生小学校裏山	264
加美遺跡	243	住吉宮町遺跡	282

た 高廻り 1 号墳	74	ふ 深田遺跡	260,262,265
高廻り 2 号墳	74,275	釜山徳川洞古墳群	267
高安城	286	伏尾遺跡	245,254
丹北郡	135,221,238	藤原京	279,281
つ 塚ノ本古墳	121,142,143,164,166,168, 185,201,235,239,275	ま 松野遺跡	244,245,255,257
津堂遺跡	283	み 三方古墳	260,265
な 長岡京	285	美園遺跡	257
長原 45 号墳	235,236	三田遺跡	254
難波宮	254	南口古墳	74,79,110
難波宮下層遺跡	285	南住吉遺跡	104,282
ひ 日徹荘遺跡	283	宮田遺跡	283
東除川	130,134,143	宮山廃址	264
日暮遺跡	282	や 八尾南遺跡	246,249,250,260,261,267,275
日高山 1 号墳	279	薬師寺西遺跡	282
日高山横穴	279	山之内遺跡	244,254,285
		よ 吉武遺跡	264

**Archaeological Reports
of
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan**

Volume VI

**A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in 1986**

March 1993

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features in this text:

SA : Palisade or Fence	SB : Building	SD : Ditch	SE : Well
SK : Pit	SP : Posthole		

CONTENTS

Foreword

Introduction

Explanatory notes

Chapter I Progress and outline of research.....	1
1) Progress of research.....	1
1) Rezoning project and excavations.....	1
2) Progress of research.....	3
2) Outline of research work.....	10
1) Western sector of the Nagahara site.....	10
2) Central sector of the Nagahara site.....	11
3) Southern sector of the Nagahara site.....	11
4) South-eastern sector of the Nagahara site.....	12
Chapter II Results of research.....	13
1) Western sector of the Nagahara Site (Site code: NG85-80, NG86-8 and 41)..	13
1) Stratigraphy and associated finds.....	13
2) Features of the Kofun (tumulus) Period.....	34
3) Finds of the Kofun Period.....	41
4) Features of the Kamakura Period.....	56
5) Conclusion.....	57
2) Central sector of the Nagahara Site (NG86-36, 60①, 60② and 90).....	59
1) Stratigraphy and associated finds.....	59
2) Features and finds during and earlier than the Yayoi Period.....	66
3) Features and finds of the Kofun Period.....	74
4) Features and finds of the Asuka and Nara Periods.....	87
5) Features and finds of Heian Period.....	92
6) Features of the Kamakura and Muromachi Periods.....	107
7) Features of the Early Modern Period.....	108
8) Conclusion.....	110
3) Southern sector of the Nagahara Site (NG86-28, 43①, 43②, NG90-36).....	112
1) Stratigraphy and associated finds.....	112
2) Features and finds of the Kofun Period.....	121
3) Features of the Asuka and Nara Periods.....	128
4) Features and finds of the Heian Period.....	135
5) Features and finds of the Kamakura Period.....	139
6) Features and finds during and after the Muromachi Period.....	141
7) Conclusion.....	142

4) South-eastern sector of the Nagahara site (NG86-54①, 54②, 58①, 58② and 70).....	145
1) Stratigraphy and associated finds.....	145
2) Features and finds during and earlier than the Yayoi Period.....	156
3) Features and finds of the Kofun Period.....	164
4) Features and finds of the Asuka Period.....	198
5) Features of the Nara Period.....	204
6) Features and finds of the Heian Period.....	209
7) Features and finds of the Kamakura Period.....	217
8) Features and finds of the Muromachi Period.....	234
9) Conclusion.....	234
 Chapter III Investigation of features and finds.....	241
1) Reconstruction of the constitution of the Nagahara settlement during 5th and 6th centuries.....	241
1) Houses and associated features.....	241
2) Changes in the constitution of settlement patterns.....	249
3) Consideration of house features and their possible use.....	253
4) Character of the Nagahara settlement.....	255
2) Abacus-shaped loom weight of the Kofun Period.....	259
1) Former studies.....	259
2) Examples from the Kinki area.....	260
3) Examples from other areas.....	263
4) Consideration.....	264
5) Conclusion.....	267
3) Pits for burial of pottery at the Nagahara Site.....	268
1) Identifying pottery buried pits.....	268
2) Classification.....	270
3) Distribution of each type.....	274
4) Purpose of the burial.....	278
5) Conclusion.....	284
 Tables.....	287
 References.....	291
 Postscript	
 Index	
 English Summary	

ENGLISH SUMMARY

1) Introduction: development and excavation

This report details the achievements of the excavations carried out at the Nagahara site, situated in the south-eastern part of Osaka city, Osaka prefecture, Japan, in the fiscal year of 1986 (beginning April 1st).

The Nagayoshi-Uriwari area, in which the Nagahara and adjoining Uriwari site are situated, is one of the few remaining locations within Osaka city in which farmland can still be found. Improvement of the main road and subway from the City to this area has been followed by rapid residential growth. As a result of this growth, there has been an increasing demand for water and sewerage services. The Nagahara and Uriwari sites lie within the land being rezoned to accommodate the development of these services.

Though emergency research prior to the rezoning project has been conducted since 1981, many other excavations at these sites have been carried out, almost continuously, over the last twenty years, prior to public or private developments in the area. In particular, at the Nagahara site, three hundred excavations have been carried out so far and the total excavated area amounts to 140,000 square metres, covering 4% of the whole site. This large accumulation of fieldwork has clarified that both the Nagahara and Uriwari sites are large complex sites following a slope down to a plain, in which discoveries belonging to between the Upper Palaeolithic and the Early Modern eras, have yielded wide ranging information about settlements and cemeteries in each period.

The stratum of the Nagahara site for each period is preserved in good condition, and research works had been carried out on each stratum, though all excavation areas were characteristically long and thin as they lie beneath land designated for roads. The strata have been identified according to the stratigraphical standard of the Nagahara site (chart 1, p.288).

This excavation report is the sixth volume in the series and covers sixteen excavations. The total excavated area extends for 4,700 square metres. The dates of discoveries fall between the Upper Palaeolithic and the medieval periods (spanning the 12th to 16th century). The areas excavated were divided into five geographical sectors (fig. 1) and the results of research in four of these sectors (no research was undertaken in the south-western sector in 1986) are summarized as follows:

2) Results of the research

Western sector of the Nagahara site

Numerous archaeological features from the Middle to Late Kofun tumulus period, including a well (SE01) in which wooden implements (front piece) were found, pit dwellings (SB01 - 05) and posthole houses (SB06 - 09) (upper colour plate 1), were

excavated. Amongst the wooden implements found in SE01, were tools associated with the *Sue* ware industry (plates 42, 43). Abacus shaped loom weights (artefacts number 27, 120) were found, suggesting immigrants from the Korean Peninsula. A Kamakura period paddy field was also found.

Central sector of the Nagahara site

A cluster of pits dating to the late Yayoi period, which are thought to be clay mines (lower plate 3), was excavated. Kofuns and a ditch surrounding a village were excavated. Heian period posthole buildings, a cremation grave (SK27, upper plate 9) and Nara period paddy fields, covering a very large area, were found.

Southern sector of Nagahara site

Six Kofuns were investigated, amongst them, in Kofun No. 146, a burial structure was identified (lower plate 11). Asuka/Nara period drainage ditches (SD01, 02 and 07) were found. The positioning of the Heian period buildings and wells located in this sector, indicates the existence of a residential area of 1 *Cho* (former unit of length, approximately 110 m) square divided into two north and south sections.

South-eastern sector of Nagahara site

Middle Yayoi period ditches (SD01 and 02) were unearthed. Another ditch (SD03), built between the final Early Kofun and the initial Middle Kofun periods, was found overlapping the previous two. This ditch is contemporary to the Nagahara Kofun cluster.

Excavations also included 11 Middle Kofun period square burial mounds. Among these, a rare example of warrior Haniwa was found, equipped with armour and a helmet. The armour and face had been made separately and later joined, a technique not often found (Plate 72). An Asuka/Nara period paddy field and a Heian period settlement with associated fields were found. Kamakura period ditches (SD39 and 41) surrounding a residential area were unearthed. In addition to their function as fortifications, evidence also confirms them as being water reservoirs.

3) Investigations of Features and Artefacts.

Reconstruction of the Settlement Pattern of 5th - 6th century Villages.

Various kinds of features (i.e. pit dwelling, posthole houses and wells) previously excavated in the western sector of the Nagahara site have been typified according to their characteristics. As a result of this, Nagahara villages of the period have been classified into five stages. Substantial changes between settlements from stages 1 and 2 (late 5th century) and again between stages 4 and 5 (late 6th century) have been identified. Stage 2 and 3 settlements (late 5th - initial 6th century) were composed of several units of pit dwellings and posthole houses.

Abacus-shaped Loom Weight from the Kofun Period

This artefact suggests the existence of Korean Peninsula immigrants. It was thought that dense distribution of these weights was limited to northern Kyushu Island but at present there has been an equal number of weights found in the Kinki region. In particular there was a high distribution of these weights around the Nagahara area. This may indicate that the south shore of the Kawachi Lake (where the Nagahara site is located) was another nucleus for immigrants.

Pits for the burial of pottery at the Nagahara site

Reasons and purposes behind the burial of pottery was investigated using Asuka to Heian period examples. During the Asuka period, the destruction of Kofun, associated with paddy field development, commenced. It is presumed that a ritual of pottery burial was initiated to make amends for the destruction of the graves as the pits are closely associated with damaged Kofun.

In the Heian period there were several various forms of pottery burial. Amongst these were the use of containers for cremated bones and a pottery burial ritual for an earth-breaking ceremony. The buried pottery is commonly of similar size, indicating a possible formal manner in which the ritual was undertaken.

Further Reading

Aikens, C. M. and Higuchi T.

1982 Prehistory of Japan. Academic Press, New York.

Pearson, R. J., Barnes, G. L. and Hutterer, K. L. Editors

1986 Windows on the Japanese Past; Studies in Archaeology and Prehistory. Center for Japanese Studies, the University of Michigan, Ann Arbor.

Tsuiji K., Editor

1987 Recent Archaeological Discoveries in Japan. UNESCO, Paris and Centre for East Asian Culture Studies, Tokyo.

1992 Archaeological studies of Japan. *Acta Asiatica* 63. The Institute of Eastern Culture.

Tsude H.

1988 Land exploitation and stratification of society: a case study in ancient Japan, *Studies in Japanese Language and Culture*, Joint Research Report No. 4, pp. 107-30. Faculty of Letters, Osaka University, Japan

1990 Chiefly lineages in Kofun-period Japan: political relations between centre and region. *Antiquity* 64, pp. 923-31.

The Osaka City Cultural Properties Association

1989-1993 *Archaeological Reports of Nagahara and Uriwari sites* Vols. I-V, Osaka. (In Japanese except for English summary in Vol. IV)

The Osaka City Cultural Properties Association

1978-1992 *Archaeological Reports of Nagahara sites* Vols. I-V, Osaka. (In Japanese)

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながはら・うりわりいせきはつくつちょうさほうこく 6							
書名	長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅵ							
副書名	1986年度大阪市長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	櫻井久之・京嶋寛・横山洋・黒田慶一・松本百合子・田島富慈美・清水和明・久保和士・伊藤幸司・細川富貴子・永島輝臣							
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会							
所在地	〒540 大阪府大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL 06-943-6833							
発行年月日	西暦 1993年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 道路番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
ながはら 長原遺跡	ながはら 大阪府平野区 長吉長原	27126	—	34° 36° 00°	135° 34° 40°	8次 860419～860620	91㎡	土地区画整理事業(長吉瓜破地区)施行に伴う調査
						28次 860624～861004	737㎡	
						30次 860627～860728	51㎡	
						36次 860728～860901	123㎡	
						41次 860808～861114	528㎡	
						43次 860820～861030	167㎡	
						54次 861002～870210	691㎡	
						58次 861015～870316	925㎡	
						60次 861020～870228	824㎡	
						67次 861107～861108	6㎡	
						70次 861126～861225	138㎡	
						78次 861215～861223	12㎡	
						85次 870108～870113	77㎡	
						90次 870126～870307	147㎡	
105次 870219～870324	193㎡							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
長原遺跡	集落	弥生後期	土壇		甕		粘土採取を目的としたもの	
	古墳	古墳	古墳 18 基		土師器・須恵器		150 号墳に穴入埴輪	
	田畑	中～後期	掘立柱建物 4 棟 竪穴住居 5 軒 井戸・土壇		円筒埴輪・形象埴輪 木製当て具・叩き板 横杵・木鏝・ウマ骨		井戸から須恵器製作に係わる木製品出土 算盤瓦形埴輪等出土	
		飛鳥・奈良	畦畔・灌漑用水路		下駄・横礎			
		平安	掘立柱建物 12 棟 井戸・土器埋納遺構		土師器・黒色土器 灰輪・凝灰岩切石		火葬墓	
		鎌倉	区画溝・井戸・土壇		瓦器・瓦質土器・石炭		埋藏地を取囲む溝	

原色図版

長原西地区
古墳時代集落（南から）



原色図版一 長原西・東南地区の遺構



長原東南地区 150号墳（北から）



長原西地区 SE01 出土須恵器



152号墳出土埴輪

図 版



IIb区 古墳時代の遺構全景(北から)



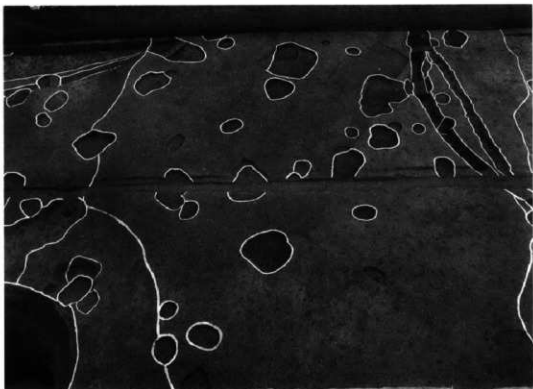
I区 古墳時代の遺構全景(南から)



I区 SE01(南から)



I区 SK04(西から)



I区 SB07・08周辺(西から)



I区 SB01～04周辺(西から)



I区 SK11~20 (東から)



III区 SK01~08, SD02 (北から)



III区 SK06 (西から)



153号墳（東から）



153号墳墳丘上遺物出土状況



153号墳墳丘東裾およびSD13断面（北から）

N区 SK21
(北から)



N区 SK23
(南から)



N区 西調査区の遺構 (南から)



Ⅱ区 南壁断面
東調査区西端から
東へ8m付近
(水深高8.9m)

Ⅱ区 SD09周辺 (東から)

Ⅱ区西調査区
長原 6Ai 層上面水田
(東から)



図版七 長原中央地区奈良時代の遺構



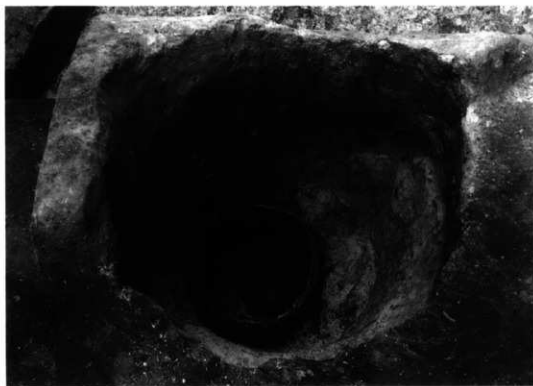
Ⅳ区西調査区 長原 6Ai 層上面検出遺構 (南から)



Ⅳ区 SB05周辺 (西から)

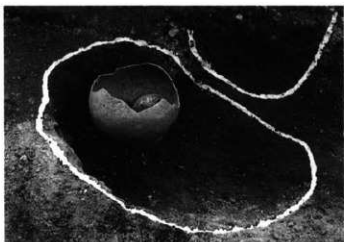


Ⅲ区 SB01周辺 (北から)

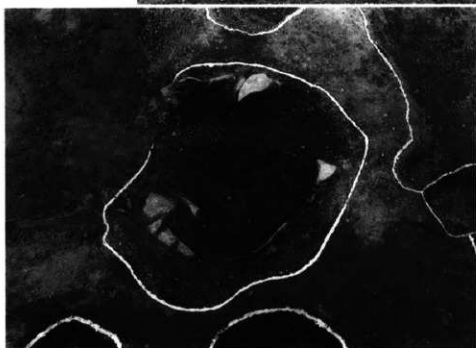


Ⅳ区 SE02 (西から)

N区 SK27
(北から)



Ⅲ区 土器埋納遺構 1・2
(西から)



N区 SE01 (南から)



143号墳南周溝とSD01・02
(東から)



143号墳墳丘(北から)



146号墳（南から）



145号墳（北から）



146号墳墳丘とSX01（東から）



Ⅲ区 SD03・04 (東から)



Ⅰ区 SD01 (南から)



Ⅳ区南半部 長原6Ai 層上面水田（北から）



Ⅲ区 長原6Ai 層上面水田（東から）



Ⅳ区 SD13 断面（東から）